

2025 年度日本語教育センター活動報告

CJLE Program & Activity Reports (2025)

目次

1. 各科目についての報告	2
2. 2025年度 Placement Test実施報告	164
3. 2025年度日本語相談室実施報告	168
4. 2025年度立教大学漢字検定試験実施報告	177
5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告	178
6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告	178
7. 日本語教育センターニュースレター発行報告	179
8. 短期日本語プログラム報告	179
9. センター員活動報告	186
10. 2025年度FD記録	191

[2025年度日本語教育センター運営体制](#)

[2025年度日本語教育センター会議開催記録](#)

1. 各科目についての報告

2025年度 J0 授業記録

コース概要

J0は、日本語の学習経験がなく、帰国後、継続して日本語を学習する予定がないものを対象としたサバイバル日本語のコースである。

担当者名：<春学期> aクラス：瀧澤あゆみ、高嶋幸太、末松史
bクラス：長谷川孝子、清水慶子、小松満帆
<秋学期> aクラス：藤田恵、武田聡子、末松史
bクラス：瀧澤あゆみ、森井あずさ、袁シュ
cクラス：泉大輔、山本由美子、保坂明香

授業コマ数：週3コマ

履修者数：春学期 aクラス：12名、bクラス：11名

秋学期 aクラス：15名、bクラス：12名、cクラス：12名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活に必要なサバイバル的日本語表現や語彙を身につける。また、ひらがな・カタカナの読み書きも身につける。

授業の方法

J0では、日常生活でよく出会う場面や、大学生活を送る上で必要となりそうな機能を取り上げ、そこで使用される表現や語彙を学習した。

毎回の授業では、まず、ひらがな・カタカナを10字ずつ学習した。かなの練習が終わると、その日に学習する場面を提示し、必要な語彙を導入した。そして、重要な文型や表現をキーセンテンスとして学習し、口頭練習を行った。最後に、その日の場面の全体の会話練習や、タスクを行った。J0で選定した場面・機能とそれぞれのキーセンテンスは以下の通りである。

場面	キーセンテンス
挨拶 自己紹介	おはようございます、こんにちは、こんばんは、ありがとうございます はじめまして/（私は）～です/～人です/専門は～です/どうぞよろしく/ ～さんは～ですか?/はい、いいえ/～さんは?/お仕事は?/お住まいは?/ お国は?/Nが好きです、好きじゃありません

場所を尋ねる	この辺に～、ありますか/～はどこですか/～に行きたいんですが...
買い物	～ありますかいくらですか/～円です/～ください
レストラン	～、お願いします/Nで
許可を得る	Nでいいですか/Vでもいいですか
依頼する	Vてください
予定・行動について話す	～に行きます/行きましょう/Vます・ました/何をしますか・何をしましたか/Vたいです
感想を言う	～はどうですか・どうでしたか/形容詞・形容詞の過去形

上記の内容以外に、数回の授業が終わるごとに、「Activity」の時間を設け、日本人学生をボランティアとして教室活動に参加してもらい、それまで学習した内容の復習と応用練習を行った。また、習字や暑中見舞い・年賀状を書くなどの日本文化を体験する時間も設けた。

学期の最後には、このコースで学習した文型や語彙を用いたスピーチを行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

全体として学習意欲の高い学生が多く、少人数であったこともあり授業は非常にスムーズに進んだ。授業には真面目かつ積極的に参加する学生が多く、ひらがな・カタカナの学習も着実に進み、最終的には全員が読み書きできるようになった。作文やスピーチでも多くの学生がひらがなのみで文章を書くことができ、ビジターセッションやロールプレイでも積極的に日本語でコミュニケーションを試みる姿が見られた。また、授業では日本の季節行事や文化的な話題を紹介し、日本社会への関心を高める工夫を行ったところ、実際に紹介した行事やイベントに参加する学生も見られ、授業外でも日本文化への理解を深める様子が見えられた。一方で、学習した日本語を日常生活の中で実際に使う機会が以前より少なくなっているという声もあり、社会状況の変化を踏まえながら、学習者が実際に日本語を活用できる場面を想定した授業内容や活動を検討していく必要がある。また、学期後半にはやや欠席が増える傾向も見られ、学習意欲をどのように維持していくかも今後の課題である。

(b クラス)

今学期は、明るくまとまりのある雰囲気の中で学習が進められた。学生は日本で日本語を学ぶことを楽しんでいる様子で、授業にも積極的に参加し、教科書にない語彙や表現も自ら覚えて使おうとする姿勢が見られた。会話活動やロールプレイにも意欲的に取り組み、日常生活で応用できそうな表現を自発的に使用するなど、学習内容を実際のコミュニケーションに結び付けようとする様子が見えられた。また、文字の読み書きや会話活動にも楽しみながら取り組み、学期を通して段階的な上達が見られた。一方で、学期

の終盤には文字の字形がやや乱れたり書き落としが見られる学生もおり、文字や語形の確認を継続的に行う必要性が感じられた。また、語彙や文型についても定着を確認する機会が十分とはいえず、忘れてしまう場面も見られたことから、今後は復習や定着を意識した授業設計を取り入れていくことが課題である。

<秋学期>

(a クラス)

今学期の J0 クラスでは、文字および基本的な表現の習得に意欲的に取り組む学生が多く、ひらがな・カタカナの定着も概ね良好であった。最終スピーチでは全員がひらがなで文章を書き、日本語のみで発表と質疑応答を行うことができ、文法・語彙の着実な積み上げが成果として表れた。欠席があった学生も自習を継続するなど、学習への主体性が見られた。一方、学期前半には文字学習への意欲が高まらず、授業活動に困難を感じる学生もいた。文字の習熟度は授業参加に大きく影響するため、学期初期からその重要性をより丁寧に伝える必要がある。また、習熟度の差によりペア・グループ活動の運営に工夫を要する場面も見られた。さらに、配慮申請はなかったものの、学習上の困難が推察される学生もおり、教員間で連携しながら対応を検討する場面もあった。ボランティア学生との活動は学習者にとって有意義であり、今後は参加時期の調整も課題である。

(b クラス)

本クラスでは、日本語や日本文化への関心が高く、全体として学習意欲の高い学生が多く見られた。初回授業ではコースの目標である「ひらがな・カタカナを読めるようになること」とともに、日本語や日本文化を楽しみながら学ぶ姿勢の大切さを共有した。クラスの雰囲気は明るく、ディクテーション後に学生同士で答え合わせをするなど、互いに学び合う様子が見られた。また、カタカナカルタなどの活動にも意欲的に取り組み、学習した語彙を自信を持って用いる姿が印象的であった。会話活動でも積極的に発話し、日本語でどのように表現するかを教師に尋ねながら、習った表現を用いてクラスメイトとやり取りする場面が多く見られた。最終プレゼンテーションでは、相手に伝わることを意識した発表が行われ、日本語によるコミュニケーション力の向上が感じられた。ひらがな・カタカナの書字も練習とクイズを重ねることで安定し、多くの学生が学期末にはきれいに書けるようになった。一方で、既に J0 レベルの内容を学習している学生もおり、新出内容の導入時に既習者の学習意欲をどのように維持するかが今後の課題として感じられた。

(c クラス)

日本語および日本文化に対する知的好奇心が高く、授業活動に積極的に参加する学生が多かった。授業中は明るく楽しそうに活動に取り組み、新しい語彙や文型の導入時にも熱心に学習する様子が見られた。ひらがな・カタカナの導入時には質問も多く、文字への関心の高さがうかがえた。最終的には全員が文字を読むことができるようになり、学習の成果が確認された。ビジターセッションでも可能な限り日本語を

使おうとする姿勢が見られ、日本語によるコミュニケーションへの意欲が感じられた。また、途中で欠席が多くなる学生もいたが、終盤には課題提出や活動準備に取り組み、最終的には全員がコースを修了した。一方で、語彙や文型の定着が十分でない様子も見られ、復習の機会の不足が影響している可能性がある。今後は生活日本語として必要とされる内容を整理し、それに基づいた活動や評価方法を検討するとともに、復習を授業設計に取り入れていく必要がある。また、活動準備の進め方についても改善の余地があると感じられた。

2025 年度 J1 授業記録

コース概要

J1 は、日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：<春学期> a クラス：富倉教子（文法 1）、小森由里（文法 2）、鹿目葉子（聴解会話）、高嶋幸太（読解・作文）、袁シュ（総合スキル）

b クラス：小森由里（文法 1）、鹿目葉子（文法 2）、山本由美子（聴解会話）、小松真帆（読解・作文）、富倉教子（総合スキル）

<秋学期> a クラス：袁シュ（文法 1）、末松史（文法 2）、高嶋幸太（聴解会話）、栃木亜寿香（読解・作文）、富倉教子（総合スキル）

b クラス：富岡洋輔（文法 1）、長谷川孝子（文法 2）、保坂明香（聴解会話）、小林友美（読解・作文）、泉大輔（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法 1、文法 2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期 a クラス：13 名、b クラス：11 名

秋学期 a クラス：11 名、b クラス：11 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ標記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することとし、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法 1：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

文法 2：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

聴解・会話：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400～600 字程度の作文を書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	<ul style="list-style-type: none"> • Exchanging greetings • Learning some survival expressions • Learning the writing system of Japanese language • Learning basic numbers • Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence) • Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none"> • Noun sentence ～は～です • Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど • Noun modification(kinking nouns) ～の • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’

	<ul style="list-style-type: none"> • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、 V て、 V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking
6	<ul style="list-style-type: none"> • ～は Object に V sentence • Topic は V(Intransitive verbs) • Particle に(Time marker) • ～から～まで • Duration on time ～間 • Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい • Time expressions まえに、あとで、てから • ～と思う • ～だろう／だろうと思う • Mimetic words ③ Condition of the body
7	<ul style="list-style-type: none"> • Sentence of existence and locatives いる、ある • Counter word ② ～人、枚、冊、本、匹、階 • だけ／しか • N1 か N2(or)／N1 も N2 も(both、 neither) • N1 は A、 N2 は B(Contrast は) • Noun と／や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり

	Adjective/verb し ・～かもしれない
8	・V-ている(Continuous action、state) ・Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・～中(during、 while、 through) ・もう／まだ ・～ませんか、～ましょう ・Questions word + か／も ・～んです ①
9	・Giving advice ～たほうがいい ・Particle に(amount of frequency per time unit) ・Adverbial usage of adjectives ・Noun になる ・Conditional ①：と ・Chang of state、 condition(adjective + なる) ・Mimetic words ④ Pain
10	・に(final destination)／を(point of departure) ・V-たことがある(experience) ・Adjectives indicating one's own emotion/feeling/desire/pain ・Third person's emotion/feeling/pain/desire ・Conditional ②：たら ・Even if ～ても

授業の方法

J1は週5日のコースであり、文法1、聴解会話、文法2、総合タスク、読解・作文の順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

文法2：文法1で習った語彙や文型について、書き練習を中心とした活動を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法1で習った文型が使われている文章を

読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には漢字クイズを実施した（希望制）

総合スキル: 文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

文法 1: 今年も昨年に続き J1 は 2 クラス体制となり、J1a は 13 名となった。学生達はいずれもモチベーションが高く、学期を通して日本語を学ぼうという姿勢が窺えた。今期はハンドアウトなども使用して、導入された文型のさらなる理解を深めつつ、口頭練習のほかに書く練習も少し取り入れ、少しでもそれらの定着につながるよう試みた。学生達は習った文型を使ってペアワークやクラスでインタビューをし合うといった活動に対して積極的に参加しつつ、一方で動詞や形容詞などの活用表の作成から文作など個人での活動にも熱心に取り組んでいた。大半の学生は導入された新しい文型の使い方、意味など比較的理解するのに大きな問題はなかったようであった。しかし、それらを正確に使用して産出するというのは難しかったようである。特に中間以降、さまざまな文型が導入されてくるので、それまでの基本的文型や助詞の使い方などが正しく理解、及び使用できていない学生にとっては、整理ができず混同している様子なども見受けられ、それらは期末試験にも現れた結果となった。一方学生達の授業に取り組む姿勢は一貫して変わらず、授業に活動にと熱心に参加していた。今後は新しい文法の使い方がより正確にかつ定着できるよう、学生個々がさらに主体的に学習に取り組めるようにするなどして、工夫していきたい。

文法 2: 総じて真面目な学生ばかりで出席率も宿題の提出率も高かった。本クラスの目的は文法 1 のクラスで導入された文法項目を書くことによって定着させることであり、授業ではワークシートで新しい文法項目を復習することが主になったが、学生たちはそれぞれに集中して取り組んでいた。しかしコース終盤になると、真夏日が続いたこともあり、授業中に疲れている様子が見受けられた。そのためか、全体的に高得点だった中間テストに比べ、期末テストの結果は芳しくなかった。文法項目が全く身につけていないわけではないが、正確性に欠けたため点数が伸び悩んだようである。コース後半まで集中して取り組めると、最終成績がさらに良いものになったのではないかと悔やまれる。今後は、授業中の集中力を維持するために個人作業ばかりではなくペアワークを取り入れるなど指導方法を工夫したい。

聴解・会話: 学生達は、毎回の授業に真摯に取り組んでいた。特に、会話の活動では積極的な姿勢が見られた。既習文法を使って、オリジナリティあふれる会話を作るだけでなく、より多くの学生たちとの会話を楽しんでいた。今学期の聴解は、前学期の課題をもとに、J1 レベルに見合う聴解教

材を選択し、また、教師同士で連携を図りシートを作成した。ab 両クラスでの合同授業を行った際は、さらに意見を活発に出しあい、各学生が持つ創造的思考を発揮した会話を作成していた。授業後の感想の一番目に挙げられたのは、「クラスメイトとの活動は楽しかった」という言葉である。協働を通して得たものが大きかったことが窺える。今後の課題として、日本語を使ってコミュニケーションをすることの楽しさをさらに実感できる活動を考えていきたい。

読解作文：読解では、お互いに理解確認をするピア・リーディングを取り入れるなどして進めていき、話し合いながら内容を確認することができていたと思われる。作文では、学んだ文法を積極的に取り入れようとする姿勢が見られ、さらにモデル文の構造をよく理解しつつ、執筆していた。今後の課題としては、学期の後半にかけて増える欠席者への対応だと感じた。どうしても1コマ分の授業を聞いていないと、どのような内容の読解や作文を学んだのか、把握しづらく、宿題などでも理解に差が出てきてしまうため、できるだけ授業に参加することの大切さを伝えていくことが重要だと思った。

総合スキル：このクラスは、日本語の運用能力の向上を目標とし、ロールプレイやインタビュー、ショートスピーチを中心に授業を行った。既習項目を実際に使えることを重視し、スクリプトの作成と練習を経た発表に加えて、即興的なやりとりや想像力を活かした会話練習も多く取り入れた。語彙や文法を楽しく活用できるよう、もの当てゲームや、自由にストーリーを考えて発表するサスペンスドラマ制作などの活動も導入した。また、授業内外でのインターアクション能力を高めるため、日本人学生とのビジターセッションを複数回実施した。セッションでは、聞き返しなどの意思疎通ストラテジーに意識を向け、相手に伝わる話し方を練習した。学期末には、自由トピックによるプレゼンテーションと質疑応答を行った。クラスの雰囲気は終始前向きで、学生同士が積極的に助け合いながら学びを深めていた。発表内容は常に創造的で、日本文化や日本語学習への関心の深さも伝わってきた。一方で、課題としては、モチベーションを維持しながら正確性を高めていくこと、また、英語に頼りすぎず、日本語で自然に話す機会を増やすことが挙げられる。今後は、文法の定着を意識した練習や、より多様な場面を想定した会話活動を取り入れていきたい。

(b クラス)

文法 1：10名の履修生のうち1名が学期の序盤に履修を断念したが、残りの9名は真面目な学生ばかりで、出席率も宿題の提出率も極めて高かった。毎回授業の冒頭で行った語彙クイズも総じて高得点だった。本クラスでは、PPTで新しい文法項目を導入したが、教員からの問いかけに対する反応がよく、学期を通して熱心に日本語を学習している様子が伝わってきた。9名の小さいクラスだったため、一人一人の質問にも対応しやすかった。クラスの中で特に優秀な学生たちがイニシアティブを取り、わからないところは学生同士で教え合っただけでクラス全体の学びを活性化し、日本語を楽しく学ぶ雰囲気作りにも貢献してくれた。

文法 2：文法 1 で学習した文法項目の復習をし、各課の項目に関連する文の作成を通して文法の定着を図った。各自で文を作成した後、ペアで確認し、その後、クラスで再度、文の作り方などを確認した。最終的に履修者が 9 名ということで、机間巡視をしながら質問に応じたり、各学生の理解度を見るにはちょうどよい人数であった。このクラスは全員が日本語の学習意欲が高く、最後までモチベーションが下がることはなかった。また、ペアでの確認作業の際、自分の持っている知識をおしみなくクラスメイトと分かち合っただけで学習をしている姿はすばらしいものだった。今後の課題として、使用する教材の見直しをしていきたい。

聴解・会話：期間全体を通していえることは、文法は難しくなっていくにもかかわらず、学生の日本語への興味や学習意欲はそれに反して高まっていったことである。特に、最終授業が近づくにつれてそれが顕著に表れていたように思う。教師の問いかけに素早く反応し、積極的に質問し、タスクには真剣に楽しく取り組んでいた。このことは、学期を通してクラスコミュニティが築かれていったことと関係があると思う。クラスメイト同士が仲がよいため、常に支援的な空気が流れており、理解が遅れ気味の仲間にはやさしくフォローする姿をよく見かけたことからいえる。改めて、言語学習は個人の能力よりも学習コミュニティにおける関係性が反映されることを実感した。今後の課題として、コミュニケーションを通して知識を実践できる授業を増やす必要があると思う。

読解作文：まず、学期開始当初はカタカナが苦手な学生が多く見られたため、授業開始時にカタカナのディクテーションを行った。また、読解・作文両授業において、音読を多く取り入れ、スムーズに読めるよう練習を行った。読解の授業では、問題なく読み進め、内容理解ができていた学生が多かった半面、後半になると、わからない語彙で躓き、全体の理解ができなくなったり、文構造を理解できない学生が出てきたため、個別に対応したり、クラスメイトとのピア活動を取り入れた。作文の授業では、課題に取り組むスピードに大きな差が見られ、語彙や文型を丁寧に確認しながら書くため、各スピードの上がない学生がいた反面、すぐに書き上げるが正確性を欠く学生もおり、それぞれに個別に対応する必要があった。学生同士が非常に仲が良く、助け合い、互いに成長する姿が見られ、協働による学びを実現できたクラスであった。出席率も高く、宿題も全員が提出した。希望制であった漢字テストでも、最後まで受験を続け、よい結果を残した学生も多く、学期を通して日本語学習に対する意欲の下がらない、理想的なクラスであったといえるだろう。課題点としては、学期開始時に文字で苦労していた学生が複数いたが、その手当が不十分であった点が挙げられる。学期前半できちんと基礎を固める授業活動をより取り入れる必要がある。

総合スキル：1b クラス「トータルスキル」は、今学期その開始から終了まで学生達の高い学習意欲と頑張りを絶えず感じた学期だった。元々学習者の自主性や自律性を重んじるカリキュラムや授業内容であったが、いずれの活動に関しても、学習者は熱心に取り組み、時には学習者同士で助け合いながら課題を完成させていた。またその助け合いの精神はクラスの至る所に溢れており、クラス全体が一体となって授業に活動に取り組んでいるのも同時に感じられた。日本語という意味においては、当初より学習者間のレベルに差がみられていたが、それでも上記のようにお互いに助け合いながら、

また学習者一人一人が個々の能力を其々のレベルで上達させようとしている姿も窺えた。授業では日本人学生ゲストやペアまたは個人での発表などを通して、日本語を積極的に使用することに重点を置き、それらに関して学習者は伸び伸びと自分の伝えたいことを日本語で表現していたようである。結果としてこれらの活動を通して、基本的な日本語をある程度は自由に使えるようになったのではないかと推測する。今後の課題としては、正確性を高めつつ、より複雑な語彙や文型を使用した表現といった内容的に精度を上げるために、どのような活動を行っていけばいいのか、また有効なフィードバックや振り返りなども合わせて検討していきたい。

<秋学期>

(a クラス)

文法 1：全体的に出席率が高く、真面目に授業に取り組む学生が多かったため、穏やかな雰囲気の中で授業を進めることができた。授業で扱う文法項目が多く、特に形容詞・動詞の活用が難しかったことから、学期前半には苦勞する学生も見られた。しかし、一部の学生は地道な努力を続けることで大きく成長し、その成果は期末テストにも表れた。一方、文法項目を比較的よく理解している学生については、助詞の使い方や文脈に応じた活用・テンスの選択といった正確さが成績に影響しており、細かなミスを減らすための指導が課題となった。また、文法理解のペースがやや遅い学生には、反復練習や個別指導が不可欠であったが、授業内で十分な時間を確保できなかった点も課題として残った。なお、学期後半には欠席が増える学生も見られ、ストレスを軽減するための工夫も必要であった。今後は、授業時間をより効率的に活用し、学生のニーズに応じた柔軟な指導を行うとともに、成長が見られた学生の効果的な学習方法を整理・共有し、他の学生にも活用可能な形で提示していきたい。

文法 2：学期開始当初は履修者数が多く、途中でクラス分けが行われたほか、履修を取りやめる学生も見られるなど、授業運営が安定しない状況が続いた。その影響もあり、授業への取り組み方には一定のばらつきが見られた。しかし、中盤以降は授業の進め方への理解が進み、授業内容の理解度も着実に向上した。最終的には、学習意欲や到達度の高い学生が多いクラスであったことが確認された。一方、今期の課題として、学習への取り組み方に悩む学生が複数名見られた点が挙げられる。日本語相談室の利用を複数回勧めたものの、実際の利用には至らず、学内の学習支援制度を十分に活用してもらえなかった。今後は、支援制度の利用を促すための働きかけの方法について検討が必要である。

聴解・会話：穏やかで、落ち着いた雰囲気のクラスだったため、学期の初めのころはやや物静かに授業は進行していた。クラス内では、文法や語彙が比較的定着している学習者もいれば、理解が追い付いていない様子の学生もおおり、大きくレベル差が見られた。そのため、ペアワークなどを行った際は学習者同士で教え合う場面なども見られ、結果的にピア・ラーニングでの形式で授業を進めることが効果的であったように思えた。今後の課題としては、学習者の積極的な発話を促すよう

な授業の工夫や取り組みを考えていきたい。

読解作文：読解では、各トピックの内容確認からディスカッションまで段階的な活動を通じて内容理解を促した。トピックの難易度が上がる後半にはピア活動を導入して理解を促進した。結果として、まとまった文章の読解能力の向上が多くの学生で見られた。今後の課題は、難解な文章に対する学習意欲の維持であり、トピックへの興味を喚起するようなプレタスクの工夫が求められる。作文では、アウトライン作成用のワークシートを活用して必要な語彙・表現を整理し、執筆プロセスの円滑化を図った。その結果、構成を意識し、適切な表現を用いて作文を書くことができた。課題として、学生間の習熟度差が見られ、個々のレベルに応じた指導に苦慮した。これに対し、読解および作文の各活動において、学生相互の学び合いを積極的に導入することで、クラス全体のボトムアップを図った。幸い、学生間の人間関係が良好であり、互いに教え合う環境が整っていた。今後は、多様な学生全員の学習満足度をいかに担保するか検討したい。

総合スキル：今学期は学期当初は比較的小となしめの学生達だったが、徐々にクラスの雰囲気にも馴染み、また日本語力も身につけてきたせいか、学期終盤では積極的に意見を述べるようになっていった。また静かながらも、それぞれが日本語学習について真面目にかつ熱意を持って臨んでいることがクラスの活動などを通して少しずつ伝わってくるようになった。学期前半の方はその週に習った文法や語彙を理解し、使いこなすのに時間がかかっている学生も少なくなかったが、後半に行くにつれそれも変わり、特に日本人学生との会話活動などでもそれらの文型を使ってより自然に質問をしたり、日本人学生からの質問に答えたりしている学生達も少なくなかった。そして何より日本語で話そうとしている学習者達の姿勢が毎回のセッションで伺えた。学期終盤で行われた発表でも学習者達は自由に自分の意見を上手に述べ、それぞれが選んだトピックについて上手に発表してくれていた。期末のインタビューでは、長めの会話を産出するのは難しいようだったが、個々の質問の内容を捉え、習った文型を使って回答している学生達が多く見受けられた。課題としては、学習者の習熟度に差が大きく見られたところもあったので、それぞれの個性と現時点での日本語力を生かしながら、それらをさらに伸ばしていけるような工夫も今まで以上に必要であったのかもしれない。一方で、多岐に渡ったより様々なスタイルの活動を取り入れることも、学習者がより其々の個性や能力が発揮することに繋がった可能性がある。学習者が自由に伸び伸びとそれらに参加することが結果として日本語学習にも良い影響を与えたのではないかと思われる。

(b クラス)

文法 1：学生たちは非常に熱心で、授業で扱う文法を使いこなそうと試行錯誤しながら積極的に発話する様子が見られ、教室は活気に満ちていた。しかしながら、今回は扱う文法項目の分量が過多であったため、授業時間内に全ての文型で定着のための練習を行うことは困難であった。学習効果をより高めるためにも、教師側の説明を極限まで簡潔化・効率化し、学生が実践する時間を十分に

確保できるよう授業構成を見直すことが今後の課題だ。

文法 2：学生たちは互いに協力しながら、全体として熱心に授業に取り組んでいた。語彙や文法のクイズで高得点を取る学生は、順調に力を伸ばしていった。また、動詞の活用についても、比較的真面目に取り組む学生が多く、少しずつ習得が進んでいる様子が見られた。さらに、日本語のみでコミュニケーションを取ろうとする学生が見られ、学習内容を実際のやり取りの中で活用しようとする姿勢がうかがえた。一方で、毎回多くの文法項目や表現を扱うため、一度理解した内容を忘れてしまう学生も見られた。期末テスト前の復習では、各文型において正しい活用形を用いることができない学生が、数名確認された。

今後の課題としては、限られた時間の中で多くの文型をどのように定着させていくかに加え、正しい活用形の定着をより意識した指導が必要である。また、学生が楽しさを感じながら意欲的に学習に取り組めるよう、さらなる工夫が求められる。加えて、教師間の連携を一層深めることで、より効果的な学習環境を整備する必要がある。

聴解・会話：このコースでは、毎週ディクテーション課題を実施した。その結果、音声聞き取り、文字として再現する力については、既習語彙や既習文型を含む音声を中心に、一定の向上がみられた。一方で、市販教材を用いた聴解練習では、語彙や表現が未知である場合に理解が難しくなる傾向があり、期末試験の聴解問題においては、学生間で理解度に大きな差がみられた。今後は、ディクテーションを中心とした正確さを重視する活動を継続しつつ、すべてを聞き取れなくても全体の意味を把握する力や、聞き取れた情報を手がかりに内容を推測する力を育成していきたい。口頭練習では、タスクシートに場面設定を取り入れ、実際の使用場面を意識した発話活動を行なった。この活動は、学習した内容と使用場面とのつながりを意識させるという点で、一定の効果があったと考えられる。ただし、これらの場面設定は、主として課題遂行を目的としたものであったため、学習者同士が日本語でやり取りをする必然性を十分に生み出すものとなっていなかった。その結果、理解可能な内容であっても、日本語ではなく英語で説明する場面がみられた。今後は、場面設定に加え、学習者同士のやり取りにおいても日本語を用いる必然性を生む活動や、教室内での学習が日常の場面での使用につながる練習を取り入れていきたい。

読解作文：クラス仲が良好であり、落ち着いた雰囲気の中で授業が進行できた。遅刻・欠席する学生はいなかったものの、読解、作文と宿題の提出率は高かった。読解は、日本文化を取り扱った読み物が多かったため、関心を持って活動に取り組めたようだ。学期前半は全員とも問題なく読み進めることができたが、学期後半になると、語彙、分量と難易度が高くなったため、理解に時間がかかる学生も出てきた。そのため、授業では動作主の確認やポイントとなる部分に重点を置いて読解を進めた。作文は、Q&A で内容を固め、構成、モデル文の確認、作文という流れで実施した。回を重ねるごとに新しい表現、語彙を用い、ある程度の分量の作文ができたことに十分な伸びを感じたが、助詞や活用の定着が難しい学生もいた。提出後は、添削後、フィードバックコメントを伝えたりしたが、個別に十分な時間を取ることが難しかった。そのため、引き続き、正確な文章作

成を目標とした練習や効果的なフィードバックの方法について考えていきたい。

総合スキル：本クラスでは、受講生が非常に積極的に授業へ参加しており、受講生同士の関係も良好で、互いに高め合い、尊重し合う雰囲気が形成されていた。授業中に分からない点があれば自発的に質問する姿が見られ、また、受講生同士で教え合う場面も多く、協働的な学習環境が整っていたと言える。ボランティア学生を招いたビジターセッションにおいても、必要に応じて英語を補助的に用いる場面はあったものの、できる限り日本語で伝えようとする姿勢が見られ、日本語運用能力の向上がうかがえた。今学期は、aクラスとbクラスの二つのセクションで授業を実施したため、活動内容を統一し、複数のトピックを扱うショートスピーチを中心に授業を展開した。さらに、その集大成として学期後半にプレゼンテーションを実施した。発表内容は、日本での経験や自国との比較をテーマとするものが多く、日本文化を相対的に捉えながら、限られた文法や語彙を用いて表現しようとする力が養われたと考えられる。一方で、母国において初級中盤まで日本語を学習していた学生の中には、J1 レベルでの学習において意欲を維持できず、学期途中で中だるみが見られる場合もあった。今後の課題として、学生のモチベーションを保つため、基礎的な内容に加え、学習レベルに応じた発展的な活動をより柔軟に組み合わせ、学習意欲を喚起できる授業設計を検討していきたい。

2025 年度 J1S 授業記録

コース概要

J1S は、日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない、あるいは文法項目が既習であっても、運用能力が不足していると思われる学生を対象とした、初級のコースである。週 3 日という少ない授業時間の中で、既習の文法項目も含め、運用能力を高めることを目的としており、週 5 日の J1 コースよりも、ややレベル的に上の学生を対象としている。

コースの詳細は、以下の通りである。

担当者名：＜春学期＞ 山口紀子、森井あずさ、鹿目葉子

＜秋学期＞ 鹿目葉子、長谷川孝子、末松史

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 17 名、秋学期 9 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音を含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるよう、運用能力を高めることを目標とした。また、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習し、4 技能を総合的に伸ばすことを目標とした。

文型リスト

J1S で扱った文法項目は J1 と同様であるので、省略する。

授業の方法

J1S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースで進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：隔週で読解と作文のクラスを行った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 400~600 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

学期始めは、各学生ともやる気が見られたが、途中から授業に参加しなくなった学生もいた。コースについていくために、コツコツと努力した学生たちは日本語力がかなり伸びたと思われる。また、授業中、疑問に思ったことは積極的に質問をしたり、教師とのコミュニケーションを図ることで、会話力をあげる努力をしている学生達やじっくり学習に取り組んで完璧に理解したいという学生も多くみられた。一方で、漢字に興味を持った学生は多かったものの、最後まで真面目に取り組んだ学生は数名であった。今学期、本コースを通して、4 つの課題が挙げられた。①学習した文法を使った聴解練習に十分な時間を確保することが困難であったこと、②クラスの人数が多かったため、どのレベルに焦点をあてるべきか難しかったこと、③応用的な練習に割く時間が不足したこと、④日本語学習者との交流が持てなかったこと、である。今後は、前述の課題について、ネット上の聴解教材の紹介や、効果的な授業作りについて考えていく必要がある。

<秋学期>

本学期の J1S クラスを受講した 9 名の履修者は、出席率や課題提出状況が良好で、授業内外を通して「日本語を学びたい」という学習意欲の高さがうかがえた。また、疑問点を積極的に質問したり、ノートを丁寧に取ったりするなど、自律的な学習態度も学期を通して定着していた。クラス全体としてはやや大人しい傾向にあったものの、ペアワークや日本人学生との活動には協力的かつ積極的に参加する姿勢が見られ、活動に参加していた日本人学生からも履修者の学習に取り組む姿勢に対して関心が寄せられた。一

方で、次学期に向けた主な課題としては、1. 文型定着時間の確保、2. 発話量（アウトプット）をさらに増やすための授業構成の工夫、3. 難易度の高い語彙や表現に対応するための読解ストラテジーの導入、4. 試験形式に即した聴解練習の拡充、の4点があげられる。

2025年度 J2 授業記録

コース概要

J2は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙500）を身につけているものを対象とする。週5日、毎日スキル別（文法1、文法2、聴解会話、読解作文、総合スキル）に授業が展開されているが、基本的には文法1で習う文法項目、語彙、表現を軸に他のスキルは展開されている。

担当者名：＜春学期＞ 富倉教子（文法1）、小森由里（文法2）、森井あずさ（聴解会話）、
泉大輔（読解・作文）、泉大輔（総合スキル）
＜秋学期＞ 袁シュ（文法1）、末松史（文法2）、森井あずさ（聴解会話）、
山口紀子（読解・作文）、末松史（総合スキル）

授業コマ数：週5コマ（文法1、文法2、聴解会話、読解・作文、総合スキル）

履修者数：春学期21名、秋学期8名

使用教材：独自教材

コースの目標

接続詞や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすることである。語彙数については1000を目標に増やす。

文法1：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることが目標である。初級文法の理解と口頭練習を行うことにより、アカデミック場面、日常生活場面で簡単な日本語によるコミュニケーションができるようになることを目指す。

文法2：さまざまな接続詞や接続助詞、文末表現、時間の表現などを理解し、それらを組み合わせて基本的な複文が正確に作れるようになることを目標とする。初級文法を使った短い文を作成することで、語彙の活用、接続、助詞等の定着を目指す。

聴解会話：文法1で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることが目標である。日本語を数多く聞いたり、話したりすることにより、アカデミック場面、日常生活場面での簡単なコミュニケーションができるようになることを目指す。

読解作文：文法2で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになること、及び、簡単な日本語の文章が読めるようになることを目標とする。

総合スキル：文法 2 で習った文型や語彙を正確に運用できるようになることと、未習の語彙や文型があっても対応が出来るスキルを身につけることを目標とする。また、実際のコミュニケーション場面で必要とされる瞬発力を身につけ、コミュニケーション能力を高めることを目指す。

文型リスト

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. V ながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、possession、own ~がある 4. Obligation: Must / Have to ~なくてはいけない/なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When~: ~とき~ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・~のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ~てみる 2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる

	<p>3. Noun modifiers 名詞修飾</p> <p>4. Mimetic words ⑧ Nature</p>
6	<p>1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞</p> <p>2. Vて ある</p> <p>3. Intransitive Vている vs Transitive Vである</p> <p>4. Mimetic words⑨ : Sleeping</p> <p>5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける</p>
7	<p>1. Vて おく</p> <p>2. ～が V みえる・きこえる・する</p> <p>3. Giving and Receiving (favours, some acts) ～てあげる・もらう・くれる</p> <p>4. Want someone to do some action: Vてほしい・もらいたい・いただきたい</p> <p>5. ～が・けど (けれども)</p> <p>6. Imitative words : Caught a Cold ?</p>
8	<p>1. あいだ VS あいだに</p> <p>2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る</p> <p>3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい</p> <p>4. Expressing Purpose: ために・ように</p> <p>5. Review: Various expressions for purpose</p> <p>6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける</p>
9	<p>1. 伝聞 Hearsay、 Conveying information getting from another person、 media ～そうだ・ということだ・とのことだ</p> <p>2. Vてしまう</p> <p>3. Review: Vている、Vである、Vてみる、Vおく、Vてしまう</p> <p>4. [Question words] か / ～かどうか</p> <p>5. V1 ないで V2 without doing V1、 do V2</p> <p>6. Imitative words : Hitting、 Breaking</p> <p>7. Compound Verbs ③Vなおす・Vかえす</p>
10	<p>1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess、 Conjecture ① そうだ</p> <p>2. Decisions: ～ことにする・～ことになる</p> <p>3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている</p> <p>4. 比喩の表現 Expressing Resemblance、 Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ</p> <p>5. V-て いく・くる do V and come/go</p> <p>6. Imitative words : Animals、 Birds</p>

授業の方法

読解作文（月）、文法 1（火）、聴解会話（水）、文法 2（木）、総合タスク（金）の順番に授業が行われた。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法 1：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした口頭練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を暗記しているかどうかを確認する「語彙クイズ I」を行った。また、新出語彙の理解度を確認するために「語彙シート I」を宿題にした。

文法 2：文法のテキストに沿いながら、短作文を書く練習を行った。毎回授業のはじめに、新出語彙を正しく活用、運用できるかどうかを確認する「語彙クイズ 2」を行った。また、新出文法の理解度を確認するために「文法シート」を宿題にした。

聴解会話：聴解では、文法で学習した文法項目を、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。また、毎回、各課の代表的な文型を使った文章のディクテーションを実施した。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。また、新出語彙の運用の正確さを確認するために「語彙シート II」を宿題にした。

読解作文：読解では、様々なジャンルの文章を読んでから、そのトピックについて簡単なディスカッションを行った。さらに、授業で扱ったものとは違うジャンルの読み物を宿題にした。作文では、文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、600～800 字程度の作文を書く練習を行った。また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル：既習文法、語彙を使って四技能を総合的に使用するタスク、ロールプレイ、スピーチ等を行った。また、日本人学生にボランティアとして参加してもらい復習と応用練習を行った。毎回授業のはじめには、新出文法を理解しているかどうかを確認する「文法クイズ」を行った。

結果と課題

<春学期>

文法 1：今学期は学習者の人数が 20 名を超えたクラスとなった。J2 文法は初級とはいえ複雑な文型が毎回少なくとも導入されており、また比較的大きなクラスの場合は、一人一人に時間を割いたり、個々のレベルに合わせたりといったことが難しいので、なかなか策を要するクラスであった。授業ではパワーポイントの他にハンドアウトを配布し、導入された新しい文型について学習者のさらなる理解を図りつつ、文型を使った練習を口頭だけでなく書面でも実施し、少しでも定着につながるよう試みた。実際にはその場では正しい産出が行えていても、それを認識し、保持していくのにはやはり時間とさらなる練習が必要なようであった。また初級の基本的な日本語文型がまだ不確かだった場合は、導入された文型の正しい理解と整理が追いかず、混乱と混同がみられる学生が少なくなかった。今後は毎回の授業で基本文型を振り返ったのち導入するようなことも必要かと考える。また

日本語文型のさらなる定着を図る意味で、学習者がより主体性を持って取り組めるような導入方法を工夫していく必要もあるだろう。それでも大半の学習者は最後まで授業に参加し、かつ熱心になんとか理解しよう、正確に使ってみようと努力している姿が毎回の授業で窺え、中には素晴らしい成果を収めた学生も幾人か見受けられた。今回は通年に比べて導入する文型が減り比較的余裕があるスケジュールであったが、全体的にもう少し余裕があると今回のような大人数のクラスの場合は、より個々に対応でき、また学習者も質問や意見が言いやすく、彼らの意見を吸い上げやすくなるように思える。と同時に、学習者が安心してかつ積極的に参加できる環境づくりは、人数に関わらず必要であると再確認した。

文法 2 : 21 名が履修したが、そのうち 5 名は遅刻や欠席の多さが目立った。残りの学生は総じて出席率も宿題の提出率も高かったが、文法の宿題は難しかったようで点数が伸び悩んだ。同様に、毎回授業の冒頭で実施した語彙クイズの結果も全体的に芳しくなかった。しかし、授業中は遅刻・欠席が目立つ学生も含め皆熱心に取り組んでいた。クラスの最後に新しい文型や表現を含む文のディクテーションを行ったが、毎回 90%以上の得点だったことから、真摯に授業に取り組んでいた様子が窺える。ただ、新しい文法項目がなかなか定着しなかった。本クラスの目的は、書く練習を通して文法 1 のクラスで導入された新しい文法項目の定着を図ることであるが、新しい文法が身につけていないため本クラスでも再度 PPT やハンドアウトを用いて導入が必要だった。文法項目が十分に習得できていないことは中間・期末テストの結果に如実に現れており、クラスの半数ほどがいずれのテストにおいても 60 点台以下の点数しか取れなかった。

大きいクラスだったため、個別に理解が不十分な点を把握し文法項目の定着を図る手助けができなかったことが悔やまれる。学生数が多くても、それぞれの学生の力が伸ばせるような授業方法を工夫することを今後の課題にしたい。

聴解会話 : 20 人以上と人数も多く、学期途中から欠席、遅刻が多い学生が増えてきて、全員がそろうことがなかなかなかった。会話ではさまざまなペアを作り、学生たちが打ち解けて話せるように努力をした。クラス内でレベル差が激しかったが、学生同士で教えあったりする場面が見られた。今後の課題としては、習った文法をきちんと定着させ、リスニングの練習量を増やして自信をもって日本語の会話ができるようにすることである。今後とも教材を工夫し、効果的な学習を目指したいと思う。

読解・作文 : 読解・作文ともに読むこと自体や書くこと自体には熱心に取り組んでいた。読解については文法・語彙がなかなか定着していない学生に分かれていたため、それに伴い、読むスピードにも差があり、わからない語を読み飛ばしたり、文脈から推測したりするといったストラテジーがない学生もいた。試験の結果を見る限り、自分なりの読解ストラテジーで読み進め、高得点をとれた学生もいれば、問題文すら読めていない学生もおり、レベル差が見られた。作文については、基本的にはモデル文に沿って書けている学生が多いが、構成を意識せずに思ったままに書いてしまう学生もいるため、文法・語彙や内容だけでなく構成にももう少し意識を向けられるよう指導していきたい。

総合スキル：文法・語彙がほとんど定着していない学生が多く、そのため学期初期は様々な活動を行っていたが、学期中盤からは文法の運用練習・応用練習をクラス内で多めに扱うようにした。練習問題に関しては机間巡視を重点的に行い、学生同士で教え合うということも行った。ビジターセッションに向けた準備などはそれぞれの学生が工夫を凝らし、実際にボランティア学生を迎え入れた際も積極的に学んだ語彙・文法を使って交流を試みる姿が見受けられた。普段の授業内では口数の少ない学生も、ボランティア学生とは饒舌に話していた。正確性について課題が残るクラスだったため、大人数のクラスで文法・語彙の定着が低い場合の総合スキルクラスの進め方については検討が必要である。

<秋学期>

文法 1：全体的に出席率がよく、学習意欲の高いクラスであった。一回の授業で扱う文法項目は多いが、ほとんどの学生が新しい内容を素早く理解し、的確な質問をしたり、クラスメイトの質問をきっかけに議論を深めたりするなど、良い雰囲気の中で授業を進めることができた。また、練習を完成させるだけでなく、その練習を設定した教師の意図まで読み取ろうとする姿勢が見られ、メタ分析能力の高さがうかがえた。一方で、文法の意味理解は十分であっても、助詞の使い分けや語彙、ひらがな・カタカナの表記などの正確さに課題が残る学生が見られた。個別に注意喚起を行ったが、十分な効果は得られず、今後はより効果的なフィードバックの方法を検討する必要がある。また、学期後半には欠席が増える学生も見られ、学習内容のキャッチアップが難しくなるという課題も生じた。そのため、今後は学生のモチベーションを高める方法についても工夫していきたい。

文法 2：今学期の当該クラスは、学生の学習意欲が非常に高く、全体として極めて充実した授業運営が行えた。宿題やクイズへの取り組み姿勢、授業中の集中度、参加度のいずれを取っても、総じて非常に優れていた。特に印象的だったのは、宿題で理解が不十分だった点や、クイズを通して生じた疑問点をそのままにせず、自ら掘り下げて理解しようとする姿勢が、個人にとどまらずクラス全体に共有されていたことである。学生同士が「学ぶことそのものの楽しさ」を共有しながら、毎回のクラス活動に主体的に取り組むことができた点は、本クラスの大きな特長であった。文法科目でありながら、授業内では活発な発言や相互のやり取りが自然に生まれ、互いに学び合う学習環境が形成されていた点も評価できる。一方で今後の課題として、文法理解については非常に高い水準に達していたものの、思考を深めることを得意とする学生が多い分、即興的に文を産出するアウトプット活動に難しさを感じる学生も見られた。今後、インプットとアウトプットのバランスをさらに意識した指導を行うことで、より完成度の高いクラス運営につながると考えられる。

聴解会話：学期当初からみんな積極的に熱心に取り組むクラスだった。新しい文法を使った会話などを練習し、また、聴解問題を解くことで、習った文法が定着できるように努力した。実際は、会話が楽しすぎて、聴解の時間が押してしまうことが多かった。今後の課題としては、会話と聴解をバランスよく、同じくらいの時間をかけて学習していくことである。今学期習ったことを忘れず、日常会

話に取り入れていってほしいと願っている。

読解・作文：非常に生真面目な学生が多く、常に真摯に課題に取り組んでいた。しかし細かい点まで完全に理解しないと先に進めない弱点があり、授業中は絶え間なく質問が寄せられてなかなか先へ進めないことが多かった。読解は、練習問題とメインの読解の導入までを授業で扱い、本文については宿題にした。そのため、読みのストラテジーを鍛える練習が不足していたのではないかと懸念される。課が進むにつれ内容が難しくなると、課題の提出率も下がった。今後は限られた授業時間の中でも、練習問題と本文読解のバランスを図り、読みのストラテジーをより意識した指導が必要だと考える。作文は、毎回各トピックについて、ペアまたはグループで経験談を共有したのち、モデル作文を読み、作文構成を考えるためのペア QA を行ってから、本文作成に取り掛かった。授業内で書きあげられる学生はおらず、作文の完成は授業外課題となったため、提出にこぎつけられない学生も数名いた。そのような学生をいかにサポートするかが今後の課題である。

総合スキル：総合スキルの授業では、日本語の運用能力向上を目的に、ロールプレイ、ゲーム、インタビューなど多様な活動を実施した。初回のビジターセッションから英語にほとんど頼らず、日本語のみで積極的にコミュニケーションを行い、授業を通して主体的な姿勢が一貫して見られた。文法の授業では英語使用が中心であったにもかかわらず、本授業では日本語のみで円滑にやり取りができていた点は大きな成果である。一方で、文法の運用能力水準は非常に高いものの、それに比して発話量や即時的な発話力が十分に引き出せていない場面も見られた。準備時間を与えれば完成度の高い発表が可能であることは確認できており、今後は、習得した文法知識を即興的な発話へと効果的に結び付け、日本語による自発的な発話をさらに促す指導方法の検討が課題である。

2025 年度 J2S 授業記録

コース概要

J2S は、J2 と同様に初級半ばの学生を対象としたコースである。但し、J2 が週 5 日で行う内容を週 3 日で進めるクラスのため、J2 よりは若干日本語能力が上のレベルの学生を対象としている。J2 のようにスキル別に授業が展開されるのではなく、文法項目を導入した日に口頭練習、短文作成、聴解会話といった四技能の練習もしていく。

担当者名：＜春学期＞ 瀧澤あゆみ、泉大輔、鹿目葉子

＜秋学期＞ 瀧澤あゆみ、山本由美子、袁シュ

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 8 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本的活用、語彙 500）を身につけている者を対象とする。J2S コース全体の目標は、接続語や接続助詞を用いた複文の作成を含む、J1 よりやや進んだ日本語能力を身につけ、日常生活に必要な簡単な会話や自分の意見伝達が日本語でできるようにすること、語彙数を 1,000 に増やすことである。

文型リスト

J2S で扱った文法項目は J2 と同様であるので、省略する。

授業の方法

週 3 コマを 14 週、計 42 コマで行った。語彙リストの語彙やテキストの文法の予習を前提とし、授業では、それらを日常生活で使えるようにするための練習を行った。具体的には、1 課～10 課まで、各課を 3～4 コマで学習するというペースで進め、文法を 2～3 コマ、読解と作文を隔週で 1 コマずつとした。読解と作文は、隔週で行い、毎週、読解または作文を一課ずつ進めた。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

本学期の日本語クラスでは、学生たちは日本語学習に対して真摯に取り組み、高い学習意欲を示していた。授業中には疑問点を積極的に質問し、自身の知識を他の学生と共有する場面も多く見られた。S クラスは人数のバランスが良く、学生一人ひとりに対して丁寧に対応することが可能であった。また、聴解練習に十分な時間をとるようにした。選択問題だけではなく、回答を書く問題も追加しながら、聞きながら必要な場合にはメモを取るよう伝えた。問題によってはメモを取る必要がないこともあるが、メモを取る重要性（質問に対する応答を 3 つの選択肢から選ぶ等、すべて覚えていられない時はメモをしたほうがいい）を伝え、答え合わせや FB の際に、教師のメモをスクリーンに移して、聞き取るべき、メモを取るべき部分を示すようにした。ただ学習者のスタイルで、目をつむって聞く学生もいるので、あまり強制はできなかった。様々な問題を扱い（多肢選択、穴埋め）練習を継続したこと、また学生の日本語レベルの高さもあり期末聴解テストでは、多くの学生が高い成績を収めていた。今後も、聴解練習の時間は十分に確保し、多様な問題に触れられるようにし、問題の選定も工夫していく必要があると感じた。問題によっては語彙が古いものもあり、新しい教材や生教材も加えられるよう、教材研究もしていく必要があると感じた。他にも、ペア練習をメインに会話練習を行った。ペアでの活動は、全体の活動よりも活発に行われていた印象で、活用が違うことやコロケーション、助詞の間違いを教え合う様子、また冗談も交えながら会話をする姿が見られた。ただいつも同じペアになることが多く、くじ等で変えることもできたが、学生の状況を見ながら無理をさせずに指示を出さなくてはいけなかったため、今後は異なるペアで活動できるよ

うな仕掛け作りを工夫していきたいと思った。読解・作文の授業においては、文法や語彙の定着度が高い学生が多く、授業は概ね円滑に進行した。教材をもとに自国の文化を紹介する場面も多く、単なる読解・作文にとどまらず、双方向的な議論が展開されるクラスとなった点もよかった。少し余裕のある学生が応用的な表現にチャレンジせず、できる範囲の産出にとどまっていたのが少々残念であったため、より発展的な内容に挑戦できるよう促していきたい。

<秋学期>

本学期のJ2Sクラスでは、クラス全体として学習意欲が高く、真面目に授業に取り組む学生が多かった。テキストの分量が多かったため、初回に予習を依頼したが、学期を通して最後まで継続して予習を行っていた学生は半数ほどであり、残りの学生は学期後半にややペースが落ちる様子も見られた。それでも、授業中の質問は毎回多く、学生が内容を理解しようと積極的に考えている姿勢がうかがえた。文法導入と例文紹介で授業時間が終わってしまうことも少なくなかったが、イラストを用いた文作りなどを取り入れることで、短いながらも学生同士、また教師とのやり取りが生まれる場面があった。

質問の際には、学生がまず日本語で話そうと努力しており、その姿勢は高く評価できる。途中で英語に切り替わることはあったものの、学期初めと比べると日本語で自分の考えを表現しようとする力は明らかに向上していたと感じた。クラス内にはレベル差があり、新しい文法を積極的に使用し、聴解の正答率も高く発言が活発な学生が数名いる一方で、文法の復習が必要な学生もいた。しかし、全員が真面目に授業に取り組んでいたため、それぞれのレベルに応じた成長が見られた。

授業では、毎週聴解練習と文法の復習を中心に行ったが、レベル差もあり、全ての学生のニーズを十分に満たすことは難しかった。特に、日常的な内容を大意で捉える聴解練習が不足していたと感じている。期末テスト終了後、今後の課題としてリスニング力のさらなる強化が必要であると強く感じた。リスニングは授業内だけでは伸びにくいいため、毎日少しずつでも取り組める自主学習の重要性を伝え、シャドーイングや会話練習用の教材を紹介することが有効だと考える。シャドーイングについては、授業内で方法と効果を説明し、その後は各自で継続できる形にするのも一案である。また、文法復習と聴解練習に時間をかけすぎた結果、会話練習やインタビューテスト対策が十分に行えなかった点は反省点であり、今後は会話の中で文法の定着を確認できるよう、活動内容を工夫していきたい。

作文授業においては、学期前半、講師からのフィードバックや添削を返却し、疑問点があれば質問してもらった形式を取っていたが、学生自身が振り返る時間が十分ではないのではないかと感じるようになった。そこで学期後半からは、授業時間の約3分の1をピア活動に充て、講師のフィードバック返却前に、ペアまたは3人グループで互いの作文を読み合い、コメントやフィードバックを加える活動を行った。活動中は話しやすい言語を使用するよう指示したが、初級レベルでありながら非常に活発に意見交換が行われていた。作文用紙の使い方、活用や助詞、文法の誤りだけでなく、「分かりやすい」「流れが良い」「意見がはっきりしている」などのポジティブなコメントも多く見られ、学生は友人からのコメントを自分の作文に丁寧に書き留めていた。ピア活動を通して、読み手を意識した文章を書くことの大切さを伝えることがで

きた一方で、今後は得られたフィードバックを踏まえて作文を書き直す時間を設ける授業設計も検討していきたい。

読解授業では、分からない語彙があってもすぐに辞書を引かず、まずは文脈から意味を推測しながら読むよう指示し、練習を重ねた。初めは一語一句確認しながら読みたいという学生もいたが、日常会話と同様に、読解においても文脈を頼りに読み進めることの重要性を伝え、徐々に慣れていってもらった。その結果、時間内に一読できる学生が増え、速い学生は解答まで書き終わられるようになった。ジグソーリーディングも取り入れ、初級レベルながら、一人ひとりが責任を持って自分のパートを読み、内容を共有しながら物語を再構成することができた。学生同士が支え合い、学生の質問に他の学生が答える場面も多く、学び合いが自然に生まれていた点は非常に良かった。一方で、毎回時間内に全ての内容を扱うことができず、扱う分量にばらつきがあったため、今後は学生のレベルに合わせて、できる限りテキスト全体をバランスよく扱えるよう工夫していきたい。

2025 年度 J3 授業記録

コース概要

J3 は日本語の基礎を習得している者(1,000 語程度の語彙及び初級前半の文法等)、日常生活の基本的活動(買い物や依頼など)が日本語でできる者を対象とした初級後半のコースである。週 5 日授業が展開され、スキル別(文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル)に学習を行う。

担当者名：＜春学期＞ 鹿目葉子（文法）、保坂明香（聴解会話）、末松史（読解）、
保坂明香（作文）、山口紀子（総合スキル）

＜秋学期＞ 富岡洋輔（文法）、保坂明香（作文）、高嶋幸太（聴解会話）、
沢野美由紀（読解）、栃木亜寿香（総合スキル）

授業コマ数：週 5 コマ（文法、聴解会話、読解、作文、総合スキル）

受講者数：春学期 14 名、秋学期 18 名

使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

聴解・会話：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解：未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識

を応用して文章の内容を理解する力を身につけること。

作文：文法で学習した文型や語彙を使って簡単な作文が書けるようになること。

総合スキル：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

文型リスト

J3 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、 Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review : Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review : Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようとする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようとしてもできない 4. Fraction 三分の一、五分の一 5. Review : 条件 Conditional
5	1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ 2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture 3. ～の多く 4. ～以外、以内、以上、以下 5. Compound Particles ① ～について、～にもとづいて

	6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに
6	1. 受身 Passive Verbs 2. Direct Passive Sentences 直接受身 3. Indirect Passive Sentences 間接受身 4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence 5. Compound Particle ② ～によって 6. Sentence ending particles 終助詞
7	1. Giving an Instruction ～なさい・ないてください・てはいけない 2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止 3. Indirect Imperative : ～ように 言う／伝える／頼む 4. Review : Expression for Cause、 Reason 5. Compound Particle ③ ～のかわりに、～にくらべて
8	1. 使役 : Causative Sentences 2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる 3. ～のは～です (emphasizing)
9	1. 使役受身 Causative Passive Sentences 2. Causative V-てもらう／くれる／あげる 3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる 4. ～ことに one's feeling、 emotion 5. Noun のこと VS Noun
10	1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる 2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)

授業の方法

J3は週5日のコースであり、文法、聴解会話、読解、作文、総合スキルの順番に授業を行った。各スキル別の授業の方法は以下の通りである。

文法：文法と語彙のテキストに沿いながら、パターンプラクティスを中心にした練習を行った。

聴解・会話：聴解では、文法で学習した文法項目に関し、市販の聴解教材を適宜使用しながら聴解練習を行った。会話では、当該文法項目を使用する実際の場面を設定し、日常生活で使えるようにするための会話練習を行った。

読解：様々な長さやジャンルの文章を読み、自分の意見を述べ合う練習を行った。

作文：文法で学習した文型を使ったモデル作文を読み、800～1000字程度の作文を書く練習を行った。

また、隔週で漢字クイズを実施した（希望制）。

総合スキル: 文法で学習した文法項目を使用する総合的なタスクやロールプレイ、スピーチなどを行った。

また、必要に応じて聴解や読解も組み込んだ活動を行った。

結果と課題

<春学期>

文法：授業に積極的に参加する学生達であった。疑問があれば質問をし、熱心にノートを取るなど主体的に授業に参加する態度がみられた。毎回の授業では、文法導入後に確認問題を提示した。問題に取り組む際、クラスメイトと協力し、お互いが理解するまで話し合う姿もみられた。その姿から、文法の知識を得ただけではなく、傾聴力や伝達力などのスキルも獲得したと思われる。今回、難易度の高い文法項目を教える際、自作シートを使用した。机間巡視をし、各学生の質問に答える中で、さらにシートの構成や工夫が必要であることがわかった。今後の課題である。また、好奇心のある学生達は、予想外の質問があった。日本人として当たり前だと思っていることも、留学生にとっては当たり前のことではない。この点を肝に銘じて、授業作りを行っていきたいと思う。

聴解・会話：学期開始当初から文法項目の不正確な産出が見られたため、授業前半では文法の復習と理解の確認に時間を充てた。また、新出の文型や語彙を含む聴解教材を使用し、学習した内容に注意を向けながら聴解練習を行ない、それに付随して会話練習も実施した。このように文法事項の定着を重視した授業構成により、学生は受け身・使役など J3 で扱う難度の高い文型を理解し、身につけていったように見受けられた。

一方で、期末試験の結果を見ると、学習が十分に成果へ結びつかなかった学生もおり、クラス全体として聴解力の向上が十分であったとは言い難い。また、口頭での意見叙述、まとまりのある談話、応答などの練習には、十分な時間を確保することができなかった点も課題である。文法授業の翌日に設定されているこのコースでは、文法事項の定着を図ることが重要であるが、同時に聴解会話コースとしての目標を達成できるよう、今後はより慎重に内容のバランスを整える必要がある。授業内容の調整とともに、初級後半の学生にとって必要な聴解会話力についても検討していきたい。

読解：今学期から入学してきた学生と、J2 から進級してきた学生の間には差があり、とくに J2 から進級してきた学生は語彙や漢字に苦戦していた。最初のころは、いつも決まった学生しか宿題を準備しておらず、宿題をやっていない学生は授業中に何がわからないのかさえわからないという状況になることもあった。しかし、宿題はその場で答え合わせを行うため、事前に準備しておくことの重要性を繰り返し伝えた結果、中間テスト以降はほとんどの学生がきちんと準備してくるようになった。そのおかげで授業中の質問や意見交換が活発になり、クラス全体がアクティブな雰囲気になった。そして、学生の主体性を感じることでできる授業を実現することができた。また授業中になんども意識するように伝えた読解問題を解くさいの注意点が期末テストにきちんと反映されていた。中間テストのときより答えの書き方が大きく改善されていた。

今後の課題としては、これまで漢字学習の経験がない学生や、漢字に興味がない学生に対して、読解問題の漢字部分にどのように取り組んでもらうか工夫する必要があると感じている。

作文：学期前半は、教科書の短文作成に時間をかけ、文法項目の定着を図った。一方、作文活動の授業では、文章を書く前段階として、背景知識の活性化、意欲づけ、ブレインストーミングを行なった。背景知識の活性化やブレインストーミングの際は、既有知識の説明や概念・用語の言い換えをグループで行なわせ、知識と語彙の拡充を図った。意欲づけにおいては、学生の現実に即した状況設定を行ない、書く理由や対象を明確にすることで、課題の目的を理解させるようにした。また、この課題に取り組むことによって身につく力も、到達目標として示した。

学期中盤以降は、短文作成を宿題とし、授業時間はフィードバックと書き直しに充てた。これまでJ3作文コースでは書面によるフィードバックを中心に行なってきたが、その効果には限界も見られたため、今学期は口頭フィードバックを充実させた。その際、語彙・表現の誤りだけでなく、内容面の興味深さ、さらに文章を豊かにするための提案なども伝えるようにした。口頭での指導を受け、もっとフィードバックを受けたいと感じた学生や、コメントによって自身の課題を把握し、書く意欲に繋がった学生もいたようである。

学期後半には、授業内で制限時間を設けて書く練習を取り入れ、期末テストに備えた。これは、限られた時間で書くことが苦手な学生への支援も兼ねている。

学期を通して様々な方法で作文指導に取り組んだが、期末テストの結果では、内容の充実が見られた一方で、文法・語彙の正確性に課題が残った。今後は個々の学生に適したフィードバック方法を検討し、学生が自分で修正し、自力で推敲できる力を育む指導を考えていきたい。

総合スキル：学習した文法項目の運用能力向上を目標とし、既習文法を用いたロールプレイ、スピーチ、日本人へのインタビューといった話す活動をメインに、聴解や読解、作文など総合的な活動を扱った。毎回、各課に設定されている課題遂行型の目標文をクラスで確認したのち、まず使用する文法を復習し、次にそれぞれの目標に合わせた活動に取り組んだ。ロールプレイ活動では、まずモデルのスキットを提示し、ペアまたはグループでの練習をしたあと、ロールカードを提示し、その状況に従って会話を作ってもらった。スピーチは2回、日本での良かった／良くなかった経験について複数文法を組み合わせで話す3分間スピーチと、子供時代の経験について話す1分間スピーチを課した。日本人ゲストを招いてのインタビューは1回で、前週にインタビューの練習を行った。各課、2-4種類の活動を行い、そのうちの1つを課のタスクとして評価の対象とし、翌週に発表させた。タスクは全9回実施した。学生は、はじめモデルスキットを1回読んだだけで「練習は終わった」、自作スクリプトをペアで1回読み合わせただけで「発表の準備ができた」という傾向があったため、スクリプトを見なくても話せるように、ロールを入れ替えたり、ペアを交換したりして何度も練習するよう促した。それでもタスクの発表時はスクリプトを手放せなかったり、スクリプトを見ないと指定文法の使用を忘れていたりする学生もいたが、9回のタスクを遂行していくうちに、スクリプトに頼りきるものが減り、教師が即興的な質問を間に挟んでも慌てずに対応できるようになっていっ

た。期末試験では、学生は十分に準備をしてインタビューに臨み、好成績を獲得することができた。今後の課題としては、早い段階からスクリプトなしで話すことに慣れさせること、また読解と会話、作文と会話などの複合的な活動を増やすことで、複数の文法を組み合わせる運用できるようになることを目指したい。

<秋学期>

文法：学期の初めは、できるだけ多く発話させたいと考え、文法説明を最小限にして練習時間を優先していた。しかし、説明しきれない項目が多かったため、途中から方針を変更し、まずは割り当てられた内容をしっかりと解説し、その後に練習を行う形にした。学生からは「分かりやすい」と好評で、授業も予定通りスムーズに進むようになった。ただ、スムーズに進むことと定着することは別問題である。特に敬語を含むJ3の内容は難易度が高く、使えるようになるには練習量が求められる。今のスタイルでは練習時間が十分に確保できているとは言えないため、今後は、説明をより効率的に行い、少しでも多く練習時間を生み出すための授業構成の工夫が不可欠である。

聴解・会話：今学期は、相性やコンビネーションなどの観点から、比較的仲の良い人同士で練習や活動をする機会を多く設けた。タスクリスニング、ロールプレイ、ペアワークなどのさまざまな活動を通じて、聴解会話の練習をしたのだが、比較的素早く対応できる学習者もいる一方で、課題が難しく、時間がかかる学習者も見られた。今後の課題としては、クラスにいる学習者内のレベル差である。発話や聴解が難しそうな学生に対してはレベル調整をしてタスクを提示する、レベルの高い学生にはさらに上の課題を提供するなど、学習者個々に合った練習を準備し、提供する必要があると思った。

読解：今期はどちらかというと静かな学生が多く、語彙力、読解力に差が見られるクラスであった。本文に関連したテーマについて話す作業も、既習の表現をきちんと用いて話す学生がいる一方、初級半ばレベルの語彙がわからないため日本語以外の言語になってしまう学生もいて、全体的にクラスのコントロールが難しく感じた。

そのため、クラスでは、テキストの語彙を調べることに加え、内容把握のワークシートを事前の課題とした。授業ではペア／グループで答え合わせをし、全体で共有、その後、前後のつながりや省略を考えながら読みを深めた。

今回はクラス内でのレベル差や日本語学習の目的の違いなどから来る、学習に対する取り組みの差が見られ、それが結果としても試験の点数にも表れていた。今後は、読むことの楽しさ、必要性を認識してもらうような授業を心掛けたい。

作文：授業では、クラスメイトに作文を説明する活動やピア・リーディングの時間を多く取り入れた。これらの活動は、作文を通じて互いの考えを知り他者への理解を深めるとともに、やり取りによって言語使用を促し、日本語の運用力を育成することを目的としたものである。また、説明の責任を伴う活動を組み込むことで、必要に応じて語彙や表現を調べ、自らの理解を深めたうえで説明をする

という学習行動を促すことも意図した。学生は活動に積極的に取り組み、クラスメイトの理解が得られるように説明を重ねたり、聞き手として相手の意図をくみ取ろうとしたりする様子がみられた。学期開始当初は人間関係にぎこちなさが見られたが、活動を重ねていくなかで相互理解が進み、後半にはまとまりのあるクラスの雰囲気が形成されていった。

一方、学習成果については、全体としては日本語力に課題が残る結果となったが、学期を通して改善に取り組んだ学生には、文や表現の正確性に一定の向上がみられた。しかし、作文活動に対する意欲が高まらず、書くことに負担を感じる学生も少なくなかった。書く動機づけや書く目的ならびに状況の具体的な提示、作成後・提出前の質問対応、提出後の内容面・言語面のフィードバックなど、複数の支援を行なったものの、それだけでは意欲を十分に引き起こせなかった。今後は、支援の充実に加え、学生の書く意欲を引き起こすテーマ設定や、書くことが実際の使用場面と結びつくような課題設計を、さらに検討していく必要がある。

総合スキル：「Total Skills」では、J3 既習文型・語彙を用いた発展的産出活動を通じ、日本語の総合的運用能力の向上を図った。具体的には、ロールプレイやスキット作成に加え、日本人学生を招いたビジターセッションを3回実施し、自国紹介のスピーチや Writing クラスと連動したスライド発表を行った。

また学習項目の定着不足を補うため授業前半に復習を強化し、まとまった発話が困難な学生に対しては基礎的なペアワークを継続的に課すことで、活動の円滑化を図った。その結果、後半は学生間の関係も良好になったこともあり、身近な文脈での運用能力に一定の向上が見られた。しかし、文型及び表現習得の正確性に課題を残す学生も多く、発展的活動が当初の目標水準に達しない場面も散見された。今後は学生の習熟度に応じ、より柔軟なタスクを展開することが求められる。

2025 年度 J3S 授業記録

コース概要

J3S は、日本語の基礎を習得し、1000 語程度の語彙力を持ち、初級文型が既習であるが、それらの運用能力が不足していると思われる学生を対象としている。週 3 日の授業の中で、既習の文法項目を確認し、その運用練習を行い、中級へとつなげていくためのコースである。

コースの詳細は、以下の通りである

担当者名： <春学期> 栃木亜寿香、清水慶子、小松満帆
<秋学期> 高嶋幸太、長島明子、鹿目葉子

授業コマ数：週 3 コマ（文法、読解・作文）

履修者数：春学期 9 名、秋学期 17 名

使用教材：独自教材

コースの目標

より複雑な初級文法の導入および既習の文型の運用能力向上を目指した。その中で、各スキルのクラスでは以下を目標にした。

文法：条件や仮定の表現、受身や使役などを含むやや複雑な初級文法を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになること。

運用練習：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

読解・作文：読解では、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して文章の内容を理解する力を身に着けること。作文では、文法で学習した文型や語彙を使って、きちんとした構成で作文が書けるようになること。

文型リスト

J3S で扱った文法項目は J3 と同様であるため、省略する。

授業の方法

J3S では、各課を 3 コマないし 4 コマで学習するというペースを進めた。各課の授業運営は以下の通りである。なお、3 コマで 1 課の場合は文法の時間を 2 コマ、4 コマで 1 課の場合は文法の時間を 3 コマに増やした。

文法、聴解・会話：文法と語彙のテキストに沿いながら、既習項目の確認とパターンプラクティスを行った。さらに、習った文型について、聴解、会話、短作文等の運用練習を行った。その際、文型の単独での使用だけでなく、複数の文型を組み合わせた練習にも重点を置いた。

読解・作文：毎課、読解と作文を 1 コマで扱った。読解では、文法で習った文型が使われている文章を読み、質問に答えたり、自分の意見を日本語で述べたりする練習を行った。作文では、習った文型や語彙を使って 800~1000 字程度の作文を書く練習を行った。また、作文の時間には、漢字クイズを実施した（希望制）。

結果と課題

<春学期>

学生は全体として学習意欲が高く、授業内でも積極的に発言や質問をする姿が多く見られた。クラスメイト同士の関係も良好で、レベル差がある中でも互いに助け合いながら学ぶ様子が見られ、協力的な学習環境が形成されていた。一方で、授業後半になるにつれて文法項目への取り組みにやや消極的な態度が見られる場面もあり、課題の多さや今後の日本語学習への不安を訴える学生もいた。また、1 限の授業であったため遅刻や欠席も見られ、初級後半の難しくなる文型や語彙に苦戦する様子も見られた。しかし、そのような状況の中でも多くの学生が最後まで粘り強く学習に取り組んでいた。学期を通して語彙や文型を

用いた表現力も徐々に向上し、日本語で自分の考えを伝えようとする姿勢が見られた。今後は、学習意欲を維持しながら学習内容の定着を図るための支援や授業運営の工夫が課題である。

<秋学期>

履修者は全体的に真面目に学習に取り組み、授業への参加意欲も高く、円滑に授業を進めることができた。課題や宿題の提出率も良好で、多くの学生が内容を理解したうえで丁寧に取り組んでおり、作文からはよく考えて書いている様子が窺えた。文法については、基本的な文型の理解は見られたものの、実際の運用に結びつける点では難しさが残り、特に後半に扱った受け身・使役・使役受け身・敬語ではテストにおいて誤用が多く見られた。クラス内の雰囲気は良好で、学習者同士が互いに助け合いながら活動に取り組む姿が印象的であった。また、日本人学生との交流においても、既習の日本語を活用し、積極的にコミュニケーションを図ろうとする姿勢が確認された。一方、履修者数が 17 名と多く、個々の学生に十分に向き合う時間の確保が課題として挙げられる。今後は、週 3 回の授業という特性を踏まえ、理解と定着を意識化する働きかけを授業中に継続的に行うとともに、すべての学生が学習成果を実感できるよう、活動内容や指導方法のさらなる工夫を行っていききたい。

2025 年度 J4 授業記録

コース概要

J4 は初級修了段階の学習者を対象とした、初級から中級への橋渡しを行うコースであり、文法・文型、聴解・会話、読解、作文の 4 クラスで構成されている。このコース全体の目標は、初級で学習した文型を確実に定着させることと、複数の文型を組み合わせ使用できるようになることである。さらに J4 では、語彙を増やし、流暢さを向上させることも併せて目標としている。

各スキルの詳細は以下の通りである。

<J4 文法・文型>

担当者名：<春学期> 小松満帆

<秋学期> 井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 16 名（PEACE7 名、大学生の日本語 2 名、その他 7 名）

秋学期 14 名（NEXUS 3 名、他 11 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高め

ることを目指す。

文型リスト

J4 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	Part1	Part2
1	<ul style="list-style-type: none"> ・受身 ・自発 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～つつある ・～は～（で／に）さえ～ ・Vさえすれば／Aさえあ（い）れば／Nさえ～ば～ ・～とすれば、～（こと）になる ・（たとえ／仮に／もし）～としても～
2	<ul style="list-style-type: none"> ・使役 ・使役受身 	<ul style="list-style-type: none"> ・～にもまして～ ・（たとえ／仮に）～にしても～ ・いくら～にしても～
3	<ul style="list-style-type: none"> ・尊敬語 	<ul style="list-style-type: none"> ・（Vた／A／Nの）まま、～ ・Vつつ～ ・～はVなり～
4	<ul style="list-style-type: none"> ・謙譲語 	<ul style="list-style-type: none"> ・Vことにしている／Vことになっている ・～は～ことから～ ・～は～こととなると～ ・～は～ことなく～
5	<ul style="list-style-type: none"> ・～ようにV ・～ようにする ・～ようになっている 	<ul style="list-style-type: none"> ・～して、（考えさ／思い知ら）せられた ・（無生物主語）が～を～させる ・～は～だけではなく、～の問題だ
6	<ul style="list-style-type: none"> ・Vたばかり／Vばかり／Vてばかりいる ・Nばかり／Aばかり ・Number ばかり 	<ul style="list-style-type: none"> ・～からといって、～が必ずしも～わけではない ・～ずに～ ・～のか（どうか）については～
7	<ul style="list-style-type: none"> ・～が限られている／～を～に限っている ・限りがある／ない ・V（ない）限り／Nの限り ・V（た）限りでは／Nの限りでは 	<ul style="list-style-type: none"> ・～原因は～ことにある／～のは～からだ ・～と～では～が異なるので～ ・～や～は～のだから、たとえ～ても～ことはない ・～や～は～のだから、もし～たら～
	<ul style="list-style-type: none"> ・Nに限って（はずがない） ・Nに限り ・V（ない）／Nに限る ・Nに限らず 	<ul style="list-style-type: none"> ・～は～ので、～ても、どうしても～てしまう ・～は～から、～のに、～と、どうしても～てしまう ・（無生物主語）が～に～を生じさせる ・～たり～たりするだけでは～ ・～は～が～であることを利用して～
8	<ul style="list-style-type: none"> ・Vよう（か） ・Vようと思う／Vようとする ・Vようがない ・Vようとしている ・Vようとしな 	<ul style="list-style-type: none"> ・～時に、～と／ても～ ・私は～て、～ことに気が付いた ・～（こと）は～（のだ）から、もし～なら～
9	<ul style="list-style-type: none"> ・N（clause）というN ・NというN／Number という 	<ul style="list-style-type: none"> ・～すると、～は～が～は～ ・～する時に重要なことは、～か（どうか）ということ

Number	(よりは／ことではなく)、～か(どうか)という(点／こと)である ・～ものとして(しまう)
--------	--

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、多くの例文の提示し、状況把握や使用場面の理解を促進するよう努めた。練習では、常に学生間を回り、個別に対応をした。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。また、中間テストと期末テストを実施した。

<秋学期>

毎回、翌週扱う課のテキストを授業までに読んできてもらった。授業では、テキストとパワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習問題を行った。そして、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を宿題にした。宿題は、翌週の授業で返却し、フィードバックは、新しい課の練習問題をしてもらっている間に、個別に行った。

結果と課題

<春学期>

学生の雰囲気は明るく、学期開始当初は雰囲気がよかったが、授業、課題に取り組む姿勢に学生間で差が見られた。そのため、欠席・遅刻が多い学生や、宿題を提出しない学生などが見られ、クラス全体の士気が徐々に下がってしまったが、中間テストの結果を受けて、奮起した学生もおり、学期後半になって、前向きに取り組む学生が増えた。教材は、次週に学習するものを事前に配付し、予習することを課したが、予習してきている学生とそうでない学生とで、授業内の理解度に大きな差が出た。

クラスメイト同士は仲がよく、助け合う姿も見られたが、一方で、私語が多く、授業に支障をきたす場面も見られた。初級文型の基礎が身に付いていない学生にとっては、学期前半の初級復習部分でも苦戦している様子が見られ、個別での対応が必要であった。

個々を見ると、礼儀正しく、教員ともきちんとコミュニケーションができる学生が多かったが、クラス全体で見たときに、所属が異なっていたり、日本語学習の目的、熱意の違いから、学生間に温度差が生まれ、それを埋められなかったことが課題である。少ない授業時間の中で、基礎を確認しつつ、新しい文型や表現を積み重ねられるクラス設計、学生同士が意欲を高め合えるようなクラス運営を考えていきたい。

<秋学期>

今学期は、特別外国人学生9名と、大学院生2名、NEXUSプログラムの学生3名が本コースを履修した。履修学生は、課で扱う文法・文型を予習して授業に参加し、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなし

ていた。

このクラスは文法・文型のクラスで、クラス活動は練習問題が主であったため、個人で問題を解く作業が多く、グループでの活動の時間をあまり取ることができなかったが、その中でも隣に座っている学生同士で話し合いながら、練習問題に取り組んでいた。また、学生が自由に発言や質問ができるように、机間巡視して個々の学生に声掛けするなどして、クラスの雰囲気作りを心掛けた。学生が理解できていない文法項目については、クラス内でフィードバックの時間を設けて説明するなどして、学生の理解度の把握に努めた。

また、中間テスト後に学生ボランティアに授業に参加してもらい、日本人学生との交流の機会を設けた。実際に敬語を使用して話す練習をしたり、どのような場面で敬語を使うのかを直接ボランティアに聞いたりすることによって、敬語への理解が少し深まったようである。

秋学期は12月の授業が終了すると、約2週間の冬休みを挟む。授業再開の1回目の授業が名詞修飾、2週目が復習で、最終週が期末試験というスケジュールであったが、12月の後半から欠席する学生が増え、クラスで扱った文法・文型項目は学生自身で勉強しなければならなかった。また、復習の日の授業を欠席した学生は、すべての課の復習が十分にできなかったようである。その結果、期末テストでは文法・文型の定着が十分ではなく、間違いが散見された。期末試験の範囲は、学期で扱った文法・文型項目全てと範囲が広く、短時間で網羅することは難しい。学期の最後までしっかり出席するように促す必要があったように思われる。学期の初期段階から試験までのスケジュールと復習の重要性を徹底したい。

<J4 読解>

担当者名：<春学期> 袁シュ

<秋学期> 武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 13 名（PEACE 6 名、大学生の日本語 3 名、他 4 名）

秋学期 13 名（PEACE 3 名、他 10 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

さまざまな分野の読解教材を数多く読み、徐々に長い文章にも対応できるようにしていく。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすとともに、初級文型や初級語彙が使用語彙にまで高まるような練習を行う。

授業の方法

<春学期>

オリジナル教材のプレレッスンから L11 まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞などを毎週 1 課のペースで進めた。授業の最初には、前週のテキストに出た語彙から 10 問のクイズを実施した。L9 と L11

を除く各課では、テーマに関連したグループディスカッションや同音異義語のなぞなぞクイズなどの導入活動を行った後、予習の設問の答え合わせと解説、テキストの音読、語彙の意味確認、筆者の意図や要点についての意見交換を行った。学期前半は主に全体でテキストの構成や内容を確認する形で授業を進め、後半は3～4名のグループに分かれ、タスクシートを用いて語彙や重要な文型、段落ごとの要約、筆者の意図や自分の意見について発表と質疑応答を行った。L9とL11では速読を行い、事前に語彙リストを調べた上で、授業中にテキストを配布し初見で読解した。すべての課でクロスリーディング活動を行い、例文の音読練習と穴埋め練習を通して、重要な語彙の意味と使い方を再確認した。毎回の宿題では、次週の予習に加え、授業で扱ったテキストから語彙を5つ選んで例文を作成し提出する課題を課した。テスト前の授業では、すべてのテキストの要点と語彙を復習し、テストのシミュレーションを行い、最終日に期末テストを実施した。

<秋学期>

オリジナル教材のプレッスンからL11まで、説明文、エッセイ、記事、物語、新聞の内容を毎週1課のペースで授業を進めた。今回教材を一部変更したり、差し替えたりすることにした。理由は、時代と共に内容が合わなくなっている部分があったからだ。そのため、現状に合うようリライトを試みた。L9とL11を除く課では、毎週、自習の読解の予習（ワークシート）と授業で扱った読解から語彙を5つ選んで例文を作成して提出するという課題を出し、授業では読解の音読、意味の確認、設問の答え合わせ、筆者の意図や要点について意見交換などを行った。L9とL11は速読を行い、授業中に配布し初見で読解を行った。前週に速読の読解内容の語彙を調べておくことが宿題になっていた。すべての課でクロスリーディング活動を実施し、語彙の確認だけではなく、主要な文型を確認し、適宜例文作成も行った。毎回授業の最初に、前週の授業で扱ったリーディングで練習した語彙から10問、正しい語彙を選ぶ小テストを実施した。最後に、総まとめとしてすべてのユニットで学んだ語彙の復習と読解の復習をし、最終日は期末テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

今学期の履修者は13名であったが、うち1名が初回から出席せず休学したため、実質的には12名のクラスとなった。全体として和やかな雰囲気であり、学生は終始真剣に課題に取り組んでいた。授業では、テーマによって参加度と理解度に差が見られた。エッセイ・物語に対しては関心が高く、ストーリーの理解と意見交換も活発に行われた。一方、説明文や記事・新聞などでは、筆者の抽象的な考えを読み取ることに苦勞する学生が多かった。また、学生の傾向として、漢字圏と非漢字圏で違いが顕著であった。漢字圏の学生は読解のスピードが速く、クイズや予習の設問の正答率も高かったが、音読や要約、自分の意見を分かりやすく伝えることに課題があった。一方、非漢字圏の学生は、語彙の意味理解に困難を抱えつつも積極的に発言し、努力を重ねて着実に進歩を遂げた。大多数の学生は積極的に授業に参加し、それぞれ

の能力を活かして互いに助け合っていた。しかし、グループワークにおいては少し消極的でスマホを使用している学生がおり、教員の助け舟や他の学生の働きかけが必要なこともあった。今後の課題としては、①授業中に理解が追いついていない学生への的確なサポート、②集中力が途切れがちな学生の関心を引き出し、主体的に授業に参加させる工夫、③グループワークへの参加を促す方法の検討、の3点が挙げられる。

<秋学期>

13人の履修登録者がいたが、実際は12人が出席した。漢字圏の学生が1名のみで他の学生は日本にルーツがある学生が数名、欧米からの学生がほとんどを占めていた。学生は非常に熱心かつ真摯に課題に取り組み、予習は全員が毎回実施しており、例文の宿題の提出率も高かった。欠席者が非常に少なく、長期休暇前に数名欠席者が出たものの、通常は欠席する学生はほぼおらず、欠席をした学生は、全体を通して、一人1回程度にとどまっている。語彙クイズはよく準備している学生と、あまり準備していない学生がいたが、できなかった学生は次のクイズでは頑張る傾向があり、平均点も高めだった。ペアやグループワークも協力的で、参加しない学生はいなかった。

期末テストの結果は平均点が7割程度にのぼり、非常によかった。今後の課題としては、知らない語彙や漢字が初見で出てきた際に前後から推測したり、想像力を働かせて意味を考える力がつけられるような読解練習が必要だと考える。

<J4 作文>

担当者名：<春学期> 袁シュ

<秋学期> 栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期5名、秋学期14名（PEACE3名、大学生の日本語1名、他10名）

使用教材：独自教材

コースの目標

初級文型、初級語彙の定着及び応用力の育成を目的とする。具体的には、初級文型や語彙を使って正しい文章（単文だけでなく、複文も含めて）が産出できるようになることを目指すと同時に、400字程度の短い文章が適切な構成で書けるようになることを目指す。

授業の方法

<春学期>

授業は独自教材を用い、毎週1課のペースで進めた。一学期を通して、200～300字のパラグラフ・ライティングをインクラスで6回実施し、600～800字の長い作文課題を3回出した。授業では、まずテーマ

を導入した後、グループに分かれてブレインストーミングを行い、思考メモを作成した。その後、ターゲット表現の意味・用法を全体で確認し、穴埋め練習や短文作成を実施した。また、モデル作文を読み、構成メモを整理した上で、作文の執筆に入った。長い作文については、完成の翌週にピア・エディティングを実施し、クラスメイトのコメントをもとに修正した作文を提出させた。その後、教師のフィードバックを受けて再度リライトを行うことで、完成度を高めていくことを目指した。学期前半は、頼りすぎない範囲で語彙を調べながら作文を書くことを許可していたが、後半は期末テストに備えて、執筆中のスマホや辞書の使用を控えるよう指示した。毎回の宿題では、その日に扱ったテキストから語彙を5つ選び、それぞれを使って短文を作成する課題を課した。

<秋学期>

教材は1コマ1課のペースで進め、各回の目標となるアカデミックライティングのための表現の習得とモデル作文の読解を軸に据えた。学習した文型を用いた文作成に加え、パラグラフライティングを毎回の課題とした。

また学期中には計3回、まとまった分量の長文作文課題を課し、作成後には学習者相互によるピア・エディティングを実施した。その後、リライトを経て講師へ提出し、さらにそのフィードバックを行った。一つの文章を推敲し、複数回見直す工程を繰り返すことで、作文の完成度と正確性の向上を目指した。

結果と課題

<春学期>

春学期の履修者は5名で、漢字圏と非漢字圏の学生が混在し、背景や個性も多様なクラスであった。授業の雰囲気は終始穏やかで、学生同士が協力し合いながら課題に取り組んでいた。学期の初めには、不慣れなため宿題を数回忘れる学生もいたが、授業が進むにつれて徐々に落ち着くようになった。授業中は、学生たちが積極的に作文のトピックを考え、ピア・エディティングでは互いに熱心に意見を交換し、作文執筆にも真面目に取り組んでいた。ペア活動では、最初発言が少ない学生もいたが、交流が進む中で徐々に打ち解け、学期の後半には参加度も高まった。

一方で、必要な語彙やターゲット表現の定着には個人差が大きく、クラス全体の進度を揃えることが難しいという課題もあった。そのため、文法の解説では学生とのやり取りを通して進め、学生の反応を見ながら確認にかかる時間を調整するなど、対応を心がけた。また、漢字語彙やJ4以前の既習項目の理解が不十分な学生には、穴埋め練習や構成メモの作成の時間を利用して個別に指導し、各自の弱点に応じたサポートを行った。課題としては、授業全体に対する参加姿勢がやや消極的な学生がいた点、また、語彙や文法が概ね身につけている一方で、構成への意識が弱く、思いつくままに書いてしまう学生もいた点が挙げられる。今後は、学生の興味を引き出し、主体的な参加を促す授業運営と、より論理的で分かりやすい構成を意識させるための指導法を工夫していきたい。

<秋学期>

初回からの欠席者や途中辞退者がいたため、実質 11 名で実施した。学生は非漢字圏が中心であり、モデル文の読解に多少困難が見られた。そこで語彙の事前提示や講師による補助を行いながら、グループ活動を通じた読解および構成分析を徹底した。

また、パラグラフライティングや作文執筆に先立ち、構成メモの作成とペアでのディスカッションを重視した結果、学習者は「定義」や「比較」といったアカデミックな思考機能を適切に運用し、論理的な文章を構築できるようになった。

一方で、初級文型の基礎的な誤りや文体（常体・敬体）の混同が固定化している学習者も散見され、セルフエディティングによる誤りの発見が困難な学生が多かった。今後は、学習者が自律的に誤りを修正できるよう、セルフチェックの習慣化を重点的に支援することが課題である。

<J4 聴解・会話>

担当者名：<春学期> 山内薫

<秋学期> 富岡洋輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 13 名（PEACE7 名、他 6 名）

秋学期 16 名（PEACE4 名、大学生の日本語 1 名、他 11 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活における様々な場面での聴解と会話能力の育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などを正しい日本語できちんと発表できるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

授業は、スピーチ・発表（20～25 分）、会話練習（40～50 分）、聴解（25～30 分）の 3 部構成で実施し、各活動は学生の日本語力や理解度に応じて時間を調整しながら行った。スピーチは 2 回（テーマ：最近の出来事、旅行の思い出）実施し、その後、インタビューのまとめに基づく発表へとつなげた。また、スピーチでは Forms を用いてコメントを記入し合うことで、相互フィードバックを行った。会話練習においては、テキスト（3 課分）に沿って進め、学生が会話の内容や展開を理解しつつ、相手の話に適切に反応できるよう練習を重ねた。さらに、聴解では、各週のトピックに関連する背景知識の確認を行った後、音声を複数回聞いて理解を深めた。その上で、毎週の宿題として音声を聞き直し、プリントの提出および穴埋めクイズの実施につなげた。そして、期末テストは、聴解とロールプレイを 2 週に分けて実施した。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。事前に宿題として用意された音源を繰り返し聞くことが日々の課題になっており、毎週のクイズでは、その音源からディクテーションを行った。その後は日本人の会話を聞いてからペアで再現する練習や、最終発表に向けての質問の準備や発表の練習を行った。

結果と課題

<春学期>

学生13名（PEACE7名、その他6名）で構成され、出席率・課題提出率ともに高く、協力的なクラスであった。学生たちはやる気が高く、ペア・グループ活動も円滑に行われた。授業内容や指示の理解に困る学生は少なく、理解が難しい場合も授業中や前後に積極的に質問があった。教員の問いかけにも率先して発言する学生が複数いた。日本語力には若干の個人差が見られたものの、全体的には差が小さく、教材やクイズの難易度と合致していた。学期を通じて難易度を段階的に上げたことで、多くの学生が聴解・会話力を向上させていた。期末テストでは、授業での取り組みの成果が発揮された。

一方で、活動や試験に心理的負担を強く感じる学生もおり、たとえば、ビジターセッション（アンケート調査）や期末テスト（筆記）の初見問題に対して苦手意識を持つ例があった。ビジターセッションでは、親しい学生とペアにすることで不安を軽減できた。筆記テストについては、学期中に類似形式の聴解練習を取り入れることが効果的と考えられる。今後は、心理的負担を抱える学生への配慮を含め、活動や聴解方法を全体的に検討していきたい。

<秋学期>

学生たちは終始高い集中力を保ち、非常に熱心に授業に参加していた。その意欲が高かっただけに、100分間の授業構成において詰め込む情報量が多すぎた点が悔やまれる。本来であれば、個々の発音メカニズムに関する音声学的な裏付けや、音の連結・脱落といった聞き取りのための具体的なストラテジーまで丁寧に踏み込んで指導したかったが、進行を優先せざるを得ず、表面的な解説に留まってしまった部分があった。学生の熱意に十分応えるためにも、次回以降は「量」よりも「深さ」を重視し、解説と演習のバランスを考慮した時間配分を再考したい。

2025年度 「J5～J7 文法・文型」授業記録

コース概要

J5～J7の文法・文型科目は、中級前半から中級後半あるいは上級前半レベルの文法や文型を習得しているように設計されている。それぞれのレベルとも週1回の授業であるため、学生が授業外にも学習できるように、宿題を課している。

J5のレベルにおいては、日本語能力試験N2レベルの文型に焦点をあて、初級の文型を応用しながら、進出の文型も着実に身につけていくことができるような教材、教室内活動を実施している。J6のレベルに

においては、日本語能力試験 N2、N1 レベルの文型に焦点をあて、論文作成や読解等に必要とされる高度な文型を習得していくための教材、教室内活動を実施している。そして、J7 のレベルにおいては、引き続き日本語能力試験 N1 レベルの文型を導入しながら、さらに、日本語の文章を文法的に分析していく力を身につけられるような教材、教室活動を実施している。

各レベルの詳細は以下の通りである。

<J5 文法・文型>

担当者名：<春学期> 黄慧

<秋学期> 山本由美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 20 名（PEACE2 名、異文化 9 名、その他 9 名）

秋学期 14 名（NEXUS1 名、その他 13 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

文型リスト

J5 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	助詞相当語	文型
1	～のかわりに、～について、～によって、 ～に比べて、～に基づいて	こ・そ・あ・ど Expressions
2	～に関して、～を問わず、～に応じて	と／ば／たら／なら Expressions
3	～に反して、～に対して、～において	こと Expression1
4	～に従って、～に沿って	こと Expression2
5	～に際して、～につれて	もの Expression1
6	～にとって、～に先立って	もの Expression2
7	～に渡って、～に代わって	Time Expressions
8	～にあたって、～に伴って	わけ Expressions

9	Adverbs used in daily conversations せめて、さすが (に)、やはり (やっぱり)、どうせ、つくづく
10	「量が多い」ことをあらわす表現、 「よく」の使い方

授業の方法

<春学期>

授業は、週に1課のペースで進めた。文型の導入では、スライドを活用しながら、絵や写真を用いた典型的な例文を示すことで、学生が文型の意味や使い方を直感的に理解できるよう配慮した。練習の場面では、活動が一方通行にならないよう工夫し、毎回ペアやグループによる対話形式の練習を取り入れた。加えて、その日の学習内容を定着させることを目的に、各回の宿題として文法・文型を使った短文作成を課した。宿題は翌週に返却し、個別にフィードバックを行うことで、学びの振り返りにもつなげた。

<秋学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業の最初に前の課の最後にある **Comprehension Check** をペアやグループで答え合わせをしてもらった。その後、スライドで答えを全体で共有した。次に、その日の課で学習する助詞相当語と文型をスライドを使いながら導入、練習した。文型の導入では、まずスライドで文型の説明をした後、イラストを見てどんな文が作れるか考えさせ、考えた文を言ってもらった。その後の練習でも同じようにイラスト見てどんな状況か理解し、文を作ってもらった。導入で2つぐらいのシチュエーションを提示した後、練習で3つぐらいのシチュエーションを用意し、文型の使い方がある程度理解できたところでテキストの例文をスライドを見ながら一人ずつ読んでもらった。黙読よりも声に出して例文を読むことで例文の意味を深く理解できると考えたからである。誰が読むかは挙手で決めた。読む回数は学生によって違うが、毎回全員が少なくとも2,3回は読めていたと思う。内容に興味のある例文があればそこで止めて関連あることを話したり問いかけたりしたが、そこから話題が広がることもあった。途中にある **Comprehension Check** は時間を与えて考えてもらってから答えを言ってもらった。答えが間違っていた場合はなぜ間違いなのかを説明し、間違えたことをきっかけに確認できてよかったと間違いを肯定的に捉えることを心掛けた。毎回、その課の最後の **Comprehension Check** の前で授業がちょうど終わりになるので、翌週も同じように進めていった。

結果と課題

<春学期>

本授業では、文法を中心とした日本語の運用力を育むことを目標に、文型の導入から練習、応用へと、自然な流れを意識して授業を進めてきた。学生たちは予習にも意欲的に取り組み、ペアワークやストーリー作成といった活動にも積極的に参加していた。授業全体を通して協力的で穏やかな雰囲気が保たれ、互

いに声をかけ合いながら学び合う姿が印象的であった。その結果、全員が無事に学期末試験を終え、学習を通して達成感を感じている様子がうかがえた。一方で、授業の中でいくつかの課題も明らかになった。まず、扱う内容がやや多めであったため、学生によっては予習に十分な時間を確保できず、授業中の応用練習にじっくり取り組む余裕がない場面もあった。今後は、学習負担とのバランスを見直し、要点を絞った内容構成や、予習をしやすくするためのサポートが求められる。また、学生によって理解の進み具合や習熟度に差が見られ、新しい文型の習得に時間を要するケースもあった。それぞれの学習背景やペースに応じた柔軟な支援の必要性を改めて感じた。さらに、グループ活動では、メンバーの組み合わせによってはコミュニケーションに戸惑う様子も見られ、グループワークを円滑に進めるためには、丁寧なサポートや関係づくりの工夫が有効であると考えられる。

<秋学期>

授業開始時に、学生には①毎回予習を行うこと（文法事項の量が多いため）、②できるだけ質問をすること（疑問を残さず、集中して授業に参加するため）の2点を伝えた。①については全員が継続できたかは不明だが、半数以上は予習を行っていたと思われる。②については期待どおりで、毎回多くの質問が出ており、非常に活発なクラスだった。質問内容は他の学生にも共有されるため、質問が多いことは授業への集中度の高さにもつながっていたと感じる。スライドやテキストの例文からさまざまなシチュエーションを想像し、そこから話が広がる場面も多かった。会話例文を読んでもらった際には笑いが起こるなど、文法の授業とは思えないほどインタラクションが活発であった。その背景には、学生同士の関係が良好で、すでにクラス内でのコミュニティが形成されていたことが大きいと思われる。一般的に文法クラスでは発言の多い学生と静かな学生が分かちがちなが、今回はその差があまり見られず、クラス全体がよく機能していた。こうした雰囲気は授業の進めやすさや参加度、さらには成績にも良い影響を与えていたように感じる。また、NEXUSの学生が一人いたが、前半は体調不良による欠席が続き心配していたものの、後半からはクラスの雰囲気に溶け込み、積極的に発言するようになった。一方で課題もある。宿題の提出が遅れる学生が数名おり、授業中の積極性とは対照的であった。宿題を負担に感じていた可能性もあるため、対策としては、毎週の宿題にもう少しバリエーションを持たせることで負担を軽減し、提出しやすくする工夫が必要だと感じた。

<J6 文法・文型>

担当者名： <春学期> 森山仁美
<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 18名（PEACE 3名、その他 15名）

秋学期 17名（NEXUS3名、その他 14名）

使用教材：独自教材

コースの目標

日常会話や小説などで用いられるやや高度な文法、文型を理解する。

文型リスト

J6 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	「理由・目的の表現」
2	「感情・心情・評価の文型」
3	「不快・非難・軽蔑の文型」
4	「判断・理性的評価を表す文型」
5	「推察・推量を表す文型」
6	「人や物の状態・性質を表す文型 1」
7	「人や物の状態・性質を表す文型 2」
8	「義務・当然を表す文型」
9	「その他の文型 1」
10	「その他の文型 2」

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業では、パワーポイントを使用しながら、文法・文型の説明と練習を行った。文型の導入においては、学生にとって身近な例文を用い、イラストなどを取り入れ、文型の意味や使い方をわかりやすく示すことを心がけた。また、練習も単調にならないよう、ペアワークなどを適宜行った。毎回の宿題では、その日に学習した文法・文型を使用した短文作成を行った。

<秋学期>

授業はパワーポイントを使いながら、テキストに沿って1回に1課のペースで進めた。授業では文型の意味、接続の形、使用場面、注意点、類似文型・表現との違いなどを説明したのち、例文を読んで意味を確認した。例文は類義表現が多く出てくる課では、テキストの例文以外にもその違いがわかるような例文も提示した。その後、学習した文型を使って簡単な文完成問題の練習をした。課の中の **Comprehension check** や **Review** はグループやペアで答え合わせをした後、全体で再度確認した。宿題は、学習した文型を使った短文作成や文完成問題を10文程度課し、フィードバックは主に個別で、共通の間違いは全体で行った。

結果と課題

<春学期>

全体的にまじめに授業に臨んでいたが、コース中盤から毎回予習をしてくるのは一部の学生にとどまった。授業では、学習項目の文型・表現の説明をしたあと、理解しているかどうか確認した。全体的に理解が早く、学習した表現をその場で使いこなし、自分で作成した文を発表する学生もいた。しかし、文型の定着が十分ではない学生もいたので、今後は予習の徹底に留意して授業を展開したい。

<秋学期>

履修者 16 名のうち、2 名が NEXUS だった。全体的にまじめに授業に臨んでいたが、コースの中盤から体調不良のため欠席や宿題の提出が遅れ気味の学生が数名いた。学習項目の各文型・表現の理解は全体的にできていた。着実に力をつけていった学生もいる一方で、類似文型・表現との区別があいまいだったり、その文型・表現に使える語彙を間違えたりして定着が十分でなかった学生もいた。今後は宿題の提出が遅れ気味の学生には早めに提出を促したり、授業で説明・練習を十分にできるよう授業を準備したい。

<J7 文法・文型>

担当者名：<春学期> 富岡洋輔

<秋学期> 長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 10 名（PEACE1 名、その他 9 名）、秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

文学作品や専門的な雑誌記事、さらには公式なスピーチなどで用いられる高度な文型や表現を理解し、自分の会話や作文で流暢に使えるようになることを目指す。

文型リスト

J7 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文型
1	Lesson 1 「ながら、まま、つつ」
2	Lesson 2 意向形を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
3	Lesson 3 「ところ」を使った表現／語彙とニュアンスの似ている表現
4	Lesson 4 「まで」を使った表現／とりたての助詞
5	Lesson 5 「時」を表す文型 1／似ている意味の使い分け
6	Lesson 6 「時」を表す文型 2／まとまりで覚えたほうが良い表現

7	Lesson 7 「時」を表す文型 3/覚えたほうが良い表現
8	Lesson 8 「時」を表す文型 4/覚えたほうが良い表現
9	Lesson 9 複合動詞/覚えたほうが良い表現
10	Lesson 10 副詞の呼応/覚えたほうが良い表現

授業の方法

<春学期>

毎週1課のペースで授業を進めた。授業の初めには学生たちが宿題で提出した作文の中から参考になりそうなものを取り上げて、解説を加えた。そして、新出の文型の接続や意味を確認したのちに、テキストの例文を使いながら使われ方を確認していった。例文は学生に音読してもらい、中上級に求められる語彙にも注意を向けさせていった。例文中には慣用句なども多数使われているため、それらも補助的に説明し、実際の使われ方に注目を当てた授業を心がけた。宿題は当日に学んだ文型を使って翌週までに作文を書いてくるというもので、時間に余裕がある場合は、学生が想像できそうな状況を一緒になって考え、作文に使えそうな前件を提示することで宿題の補助も行った。

<秋学期>

授業は1回に1課のペースで進めた。授業ではパワーポイントを使い、テキストに沿って、文型の意味、注意点、似ている文型・表現との違いなどをテキストの例文を使って説明した。5課～8課の「時を表す文型」には類似表現の文型が多く出ているので、違いを詳しく説明した。その後、学習した文型を使って、簡単な文完成の練習に進んだ。毎回、学習項目の文型を使った短文完成問題を宿題にし、翌週共通の誤りについては、全体でフィードバックし、個別でもフィードバックした。

結果と課題

<春学期>

出席率も概ね良く、欠席する学生はほとんど見られなかった。クラス内の雰囲気が良く、テキストの疑問点に関する質問も活発に飛び交っていた。こちらが文型理解のために用意した映像や音楽に対しても興味を示し、自身の体験とともにクラスメイトと共有するような場面も多く見られ授業の活性化に貢献してくれていた。また学生から提出された宿題の作文を基にして、「なぜ、この文は不自然な日本語か？」を考える時間では、中上級らしい日本語の核心に迫るような様々なアイデアが出され、学生たちがお互いに学びあう姿を目の当たりにした。

このように学生たちは大変熱心で、まじめに取り組んでいたが、テキストの分量から授業中に当該文法を使った練習に割ける時間があまりなかったことが悔やまれる。今後の課題としては、授業中の時間配分を見直してから授業に臨もうと思う。

<秋学期>

全員熱心に勉強に取り組み、出席率・宿題の提出率もほぼ 100%で、授業を円滑に行うことができた。宿題の短文作成では、接続の形やその文型・表現の注意点、場面等に注意を払いながらよく考えて文を作成していることが窺えた。その努力は中間・期末テストの結果に表れていた。テキストの後半は新しい学習項目や未習の語彙が多くなり、授業内にテキストの最後の部分が残ったり、十分な説明や練習ができないこともあった。この点を今後改善して授業を準備したいと考えている。

2025 年度 「J5～J7 読解」授業記録

コース概要

J5～J7 の読解は、様々な分野の読解教材や生教材を読み、内容を正確に理解し、用語や表現を増やすとともに読むスキルを意識化する活動を取り入れて授業を展開している。

具体的に、J5、J6 では説明文、エッセイ、新聞記事、小説など様々なスタイルの文章を取り上げ、読むスキルを獲得する。また、用語や表現を増やし、要約やディスカッションを行なう。J7 では、より長い文章を読み、内容理解をした上で要約したりレジюмеを作成したりすることを目指す。各科目の詳細は次に示す通りである。

<J5 読解>

担当者名：<春学期> 黄慧

<秋学期> 瀧澤あゆみ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名 (PEACE3 名、他 19 名)

秋学期 14 名、秋学期 21 名 (PEACE6 名、その他 15 名)

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した文法事項、文型を復習しながら、エッセイや会話などで頻繁に用いられる中級文型を紹介する。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

本授業では、一学期を通じて読解力の育成を目標に、NHK NEWS WEB EASY の記事や手紙文、小説など多様な教材を用い、段階的に読み方の理解と表現力の強化を図った。初回はオリエンテーションと自

己紹介を行い、読み方の基本的な考え方を共有した。以降は語彙クイズや宿題の確認、分担読解、ペア・グループワークを通じて、内容理解・要約・意見交換を重ねた。

<秋学期>

J5 レベルに合わせた説明文、エッセイ、新聞記事、小説、Web ニュース、新聞の投書などの生教材を用いた。様々なスタイルの文章の内容理解だけではなく、時事問題に関しても理解が深められるよう読解活動前後にクラス全体で、あるいはペアや小さなグループでの話し合いも含めた。また語彙力を高められるように、授業で扱った文章内の漢字語彙を対象に、漢字語彙クイズを実施した。そして学期末には 90 分間の期末テストを行った。

結果と課題

<春学期>

学生たちは全般的に前向きな姿勢で授業に取り組み、語彙の習得に加え、文章の要点をつかむ力や論理的に意見を述べる力など、複数の面で確かな成長が見られた。ペアやグループでの話し合いを通じて理解を深める場面も多く、主体的な学びが促進された。また、他者の意見を尊重しながら自分の考えを述べる力も養われ、こうした活動を通して、思考の柔軟性と表現力の向上も確認された。学生同士のコミュニケーションも活発で、和やかな雰囲気の中で授業を進めることができた。一方で、学生間の日本語レベルの差が顕著で、特に漢字圏出身者とそれ以外の学生との間に理解度の差が見られた。また、授業中の同じ国同士の私語が増え、発表中の集中を妨げる場面もあった。今後は、机の配置やグループ編成の見直しによって、授業環境の改善を図る必要がある。これらの課題の解決に努めつつ、より効果的かつ円滑な読解指導を目指していきたい。

<秋学期>

履修者は 21 名と比較的多く、ペア・グループ活動も多く取り入れながら進めた。授業では、内容理解にとどまらず、スタイルに応じた読解ストラテジーも紹介し実践してもらった。特に縦書きの手紙文を読んだ時は、時候の挨拶や非常に丁寧な文体の理解に苦戦しているようだった。時候の挨拶は手紙以外にも送付状やインボイス等にも使われることを伝えると、自分が使う可能性があるという場면을想像できた様子だった。課題としては、学期の中頃まで学生一人一人のレベルがつかめず、授業で扱う問題の数や文章レベルを調整することが難しかったことである。はじめのうちは読解問題数を多く準備したものの、残ってしまうことが多く、次の授業に回しても読解が得意な学生は回答済みで、その時間を持て余してしまう様子も見られた。問題数の調整や、早くできてしまった学生への対応（時間内で解ける追加の質問作成等）を考えていく必要がある。

<J6 読解>

担当者名：<春学期> 清水慶子

<秋学期> 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 14 名（PEACE4 名、他 10 名）、秋学期 17 名（PEACE 3 名、他 14 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説など様々な分野の読み物を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。読解を通して使用語彙、理解語彙を増やすと共に、様々な読むスキルを学ぶ。また、文章のポイントを押さえた要約ができるようになることも目標とする。

授業の方法

<春学期>

読解教材として調査報告、新聞記事、社説、説明文、小説、意見文、随想、およびショートショートを扱った。予習としては、漢字語彙の読み方と意味調べと設問への解答を課し、授業ではグループやペアで解答を確認した後、クラス全体で内容理解の時間を設けた。また、課題と同じトピックに関連する別の記事を初見で読解する活動や、分担読解、要約、トピックに関するディスカッションなども実施し、多角的な読みの力を養うことを目指した。さらにポストタスクとして、読み物を扱った翌週の授業冒頭に当該文章に関する漢字語彙クイズを 10 回実施し、語彙の定着を図った。

<秋学期>

調査報告、新聞記事、社説、説明文、小説、意見文および随想など、多様な文章を読解教材として扱った。次回扱う読解教材については、語彙の確認および本文の読解を予習とし、語彙については授業内でクイズを実施して、読みと意味理解の定着を確認した。

授業では、各文章ジャンルに応じた読解ストラテジーの学習を行うとともに、文章内容の理解にとどまらず、批判的思考の育成を見据えて自作のワークシートを用い、深く考えることを習慣づける工夫を行った。

また、分担読解を取り入れ、ペアまたはグループで読解文の内容説明や意見交換を行った。さらに、自分の好きな小説の紹介や、データベースを用いた情報収集および分析などの活動も実施した。期末テストとしては、紙媒体による読解テストを実施した。

結果と課題

<春学期>

履修登録は14名だったが、学期中盤に1名が休学し、別の1名の学生も欠席が多くなったため、最終的に継続して授業に出席していたのは12名であった。クラス内には日本語レベルの差が見られたため、「初見の文章を辞書なしで読む力をつける」ことを目的とした教材を除き、各自のペースで取り組めるよう、自宅での読解を基本とした。

開講当初は学生同士の交流があまり活発ではない印象を受けたが、ペアワークやグループワークを重ねる中で、次第に積極的にコミュニケーションをとる様子が見られるようになった。学期後半には、意見文のポストタスクとしてディスカッションを行う機会が増え、その際のトピックは学生自身が選択し、自主的に活動に臨んでいた。

本クラスで使用した教材は、学生にとって決して容易なものではなかったが、課題やクイズ、授業活動に熱心に取り組んでいた学生には、日本語力の向上が見られた。一方で、教材の内容が必ずしも学生の興味・関心と合致するとは限らず、学習姿勢が受け身になりがちな点は、今後の課題と考えられる。授業内で図書館データベースの利用方法を紹介したことも踏まえると、各自の関心に沿った記事や社説を用いた分担当読解を行うことも可能であったのではないかと振り返っている。授業外課題の負荷とのバランスを考慮しつつ、学生がより主体的な読み手として成長できるよう、今後もどのような支援や工夫ができるかを模索し、授業改善に努めていきたい。

<秋学期>

履修者は17名であったが、そのうち1名が休学となり、実質的な履修者は16名であった。履修者は授業内の活動に積極的に参加し、意見交換を通して互いの考えを共有していた。課題にも真摯に取り組む姿勢が見られ、ペアワークやグループワークにおける発言では、データに基づき、自身の意見を論理的に述べる様子が確認された。授業後の振り返りでは、読解ストラテジーの学習や読解文の内容理解にとどまらず、「読解とは何か」「意見の組み立て方」などについて理解が深まったほか、多くの知識を獲得できたという好意的な感想が寄せられた。

今後は、これからの時代を見据え、読解教材の選択や授業の構成についてさらに研究を重ね、その成果を授業実践に生かしていきたい。

<J7 読解>

担当者名：<春学期> 黄慧

<秋学期> 栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期6名、秋学期7名（PEACE2名、他5名）

使用教材：独自教材

コースの目標

新聞記事や小説などの長文を読み、内容理解する事ができるようになることを目標とする。長文の読解を行い、語彙を増やすと共に、様々なスタイルの文章に触れて、読みのスキルを伸ばす。また、新聞記事の要約ができるようにする。

授業の方法

<春学期>

本授業では、高度な日本語読解力の育成を目標に、一学期を通じて多様なテキストを活用した。授業は読解資料の背景知識の簡単な紹介から始まり、グループでの話し合いを経て読解・確認へと進む構成を基本とした。論文読解では、読み進める際の視点や注意点を確認しながら、自身の専門分野との比較を通じて理解を深めた。新聞記事に関しては、教材による構成や読み方の解説に加え、興味のある記事を選び要約する課題を通じて、情報の取捨選択と表現力を鍛えた。天声人語も要約練習に活用し、短い文章から要点を把握する力の向上を図った。後半では、随想や小説を対象にジグソーリーディングや再話などのアクティビティを取り入れ、ペアやグループでの協働的な学びを促進した。また、母国との比較を題材とした意見交換を通じて、自分の考えを簡潔かつ論理的に伝える力の育成にも取り組んだ。

<秋学期>

多様な文体への理解を目的とし、新聞記事、随筆、新書、短編小説といった多岐にわたるジャンルのテキストを教材として取り上げた。長文については事前に課題として提示し、語彙の意味調べや内容発表の準備を課すことで自律的な学習を促した。その一方で、授業内では限られた時間内にその場で正確に内容を読み解く活動を重視し、実践的な即時読解力の養成を図ることにより、文脈に応じた読解力の向上を目指した。

結果と課題

<春学期>

学生たちは全体的に真剣かつ積極的に授業に参加し、特にレジュメ作成や読解問題の作成では、内容や構成に工夫が見られた。ディスカッションでは、自国の事情を交えた深い議論が頻繁に行われ、互いの視点や考え方を共有する中で、主体的な学びが促進された。学習意欲が最後まで維持された点は、授業の大きな成果として評価できる。一方で、いくつかの課題も明らかになった。まず、扱う文章の分量や抽象度の高さから理解に時間を要する学生が多く、特に漢字語彙の読み違いや要約の難しさを指摘する声が聞かれた。予習に十分な時間を確保できるよう、事前に資料を共有することや、授業中の段落ごとの確認、語彙や表現の解説を一層充実させる必要がある。次に、体調不良や欠席が続いたことにより、授業の内容に十分に追いつけていない学生も一部見られた。今後は、それぞれの学生の学習状況に応じた支援や柔軟な対応を検討することが求められる。

<秋学期>

学習者同士の関係性が良好であり、かつ適切なクラス規模であった。それらを活かし、ペアによる活動にとどまらず、クラス全体で自由に意見を交換できる活発な学習環境を構築することができた。

非漢字圏の学生が多数を占めていたが、漢字に苦手意識を持つ学生が少なく、読解自体は円滑に進行した。一方で、慣用句や初見の表現については質問が生じたため、その都度全体で共有し理解の共有を図った。

今後の課題は、天声人語等の新聞記事を用いた要約活動である。文中の要旨を正確に抽出することに困難を示す学生が多かったため、今後は要約練習の頻度を高め、大意を捉えるスキルの定着を図る必要がある。

2025 年度 「J5～J7 作文」 授業記録

コース概要

作文は、J5 は中級、J6 は中上級、J7 は上級レベルの日本語能力を身につけているものを対象としたクラスである。J5、J6 では毎週、J7 では隔週に作文課題を完成させ、構成、資料の引用などアカデミックレベルで必要とされる作文スキルを身につける。

<J5 作文>

担当者名：<春学期> a クラス：長島明子、b クラス：任ジェヒ

<秋学期> a クラス：黄慧、b クラス：斉藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス：5 名、b クラス：6 名、

秋学期 a クラス：11 名 (PEACE5 名、大学生の日本語 5 名、他 1 名)、

b クラス：12 名

使用教材：独自教材

コースの目標

初中級で学習した語彙の定着、およびさらに語彙数を増やすこと、初中級で学習した文型や語彙を使ってレポートや作文を書く力をつけることを目標とする。

授業の方法

今学期の作文授業では、「私と日本語」「テレワークの活用」「教材の配付方法」「学生時代に力を注いだこと」などのテーマを扱い、800～1000 字程度の作文作成に取り組んだ。活動は、テーマ導入やクラスメイトとの意見交換を行った後、構成や表現について学び、構成メモを作成した上で作文を書くという流れ

で進めた。授業では、①モデル文の分析、②構成メモの作成、③語彙・表現の確認、④下書きの見直し、⑤ピア・エディティング、⑥自己評価を踏まえた再提出といった書くプロセスを繰り返し行い、段階的に文章作成力を高めることを目指した。作文は宿題として提出するものに加え、書くスピードの向上を目的として授業内での作文活動も取り入れた。また、新聞投書を読み取り、要約と自分の意見を組み合わせて書く課題も実施した。提出は初回を手書きの原稿用紙、再提出を電子ファイルとし、教員はループリックに基づき内容・構成・正確さ・文体の観点からフィードバックを行った。推敲を重ねながら作文を完成させるプロセスを通して、論理的に書く力の育成を図った。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

学生はまじめに学習に取り組んでおり、出席率、課題の提出率もよかった。作文は整った構成で、自分の意見を明確に述べることができた。要約も、与えられた文章の内容を理解し、ポイントを押さえて制限字数内にうまくまとめられた。授業時間内で書き上げる手書きの作文では、最初は制限時間内に規定の字数の半分程度までしか書けない学生もいたが、数回練習したのちには、時間内に規定以上の長さの作文を書き上げることができた。ただ、語彙・表現が適切に使用できない箇所が散見されたので、今後は文法等の復習の時間も設けられるよう、授業の進め方を工夫したい。

(b クラス)

今学期は6名の特外生が受講した。バックグラウンドは異なるものの、「書く」力の重要性を非常に強く意識している学生たちだったため、書く練習に加え、「書く」をめぐる種々の議論も行った。「良い書き手」になることを目標に、各回のテーマに合わせて、アカデミック文章と作文の違いは何か、良い文章とは何か、などについて意見交換を行った。その結果、学期後半には、受講生が自身の作文に対して、言語面、形式面、内容面から総合的に評価することができるようになり、常によりよい文章を目指すという姿勢が見受けられた。

一方で課題もみられた。学期後半に入ってから、書くだけでなく、新聞の投書を読む、書き手の意図を読み取る、要約するといった力も求められたが、受講生間に漢字の読み書きや既習語彙量に差が見られた。ルビを付けたり、個別にフォローをしたりしながら励ましたが、本来の目的である「書く」にたどり着くまで少々時間がかかり、落ち込む学生もいた。日本語の4技能が総合的に求められたとき、受講生が「分かりやすい良い文章を書く」という本クラスの主な目標にたどり着くまで、教師側にできるサポートは何かについて今後さらに工夫を重ねていきたい。

<秋学期>

(a クラス)

作文授業では、計7トピックの作文を通して、投書の要約→自国の状況→自分の意見→結論という型で文章を組み立てる力の育成を目指した。各回で構成メモ（導入・要点・具体例・まとめ）を作成させ、自己評価による再提出やピア・エディティング後の書き直しを複数回行った。その結果、書き言葉（だ・である体）への切り替え、段落分け、接続表現の使用が安定し、期末試験でも多くの学生が必要な要素を満たして書き切ることができた。一方で、漢字圏・非漢字圏の差により、語彙・表記・文法の正確さにはばらつきがあった。特に漢字の読み書き不足は、内容理解や推敲の質に影響していた。また、学期後半には提出遅延や分量不足が見られた。ピア活動の雰囲気自体は良好であったものの、コメント内容が「よい」「もっと〜するとよい」といった表層的なものにとどまる例もあり、相互コメントの質を確保するための工夫が必要であると考えられる。次学期は、提出の中間締切とチェックリストを導入して作業を分割するとともに、良いピア・コメント例や観点表を提示し、相互指摘の質を高めたい。機械翻訳や生成AIの利用についても、ルールを明確にし、学習目的に沿った形での活用へと誘導することが求められる。

(b クラス)

履修者は12名だったが、3回目から出席しなくなった学生が1名おり、授業は実質11名で進んだ。出席していた学生の多くは意欲的で、学ぼうという姿勢が感じられ、質問も多かった。また学生同士の仲もよかったので、クラスの雰囲気はよく、ピア評価などクラスメイトとの交流が必要な活動もスムーズに進んだ。ほとんどの学生は課題にも真摯に取り組み、提出遅れも少なかった。その結果、接続や助詞など、よく見られる間違いは一定程度改善され、要約や引用の技術も身についたと思う。ただ1名は提出物の不備や、課題の提出先に間違いがあることが多く、常にその提出状況を確認する必要があった。課題としては学生のレベルにあった支援と、文法の説明の方法である。レベルの低めの学生にとっては、800字の作文を書き上げることはかなりハードルが高かったと思う。そういった学生への対応として、どのように作文を組み立てれば、トピックを膨らませることができるかといった指導は課題と言える。文法については、各学生に細かなフィードバックを与えることは時間的に難しいと思うが、各自が今後も継続的かつ自律的に課題を改善していけるようなヒントが与えられると良かったと思う。

<J6 作文>

担当者名：<春学期> aクラス：袁シュ

<秋学期> aクラス：黄慧

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期7名、秋学期14名（PEACE3名、他11名）

使用教材：独自教材

コースの目標

中級前半終了レベルの学習者がこれまでに学習した文型を使って、レポートや作文を書く力をつけるこ

とを目的とする。

授業の方法

今学期の作文授業では、調査結果のグラフ説明や資料の引用を扱い、1200字程度の作文・レポート作成に取り組んだ。学期前半では、調査報告を読みながら調査の概要と結果を整理し、問題点や今後の予測、改善策について考察する作文を書いた。後半では、直接引用・間接引用や参考文献の書き方を学び、資料を引用しながら自分の意見を述べるレポート作成を行った。授業は、テーマ導入後にグループディスカッションを行い、構成や表現を学んだ上でアウトラインを作成し、学生同士でコメントを交換してから執筆する流れで進めた。活動は「読解→表現練習→構成メモ→下書き→自己評価→再提出→ピア・エディティング→最終提出」というプロセスを基本とし、ミニ講義とペア・グループ活動を組み合わせながら授業内で書く時間を確保した。作文は一学期で計5回執筆し、手書きとパソコン入力の両方の練習を取り入れた。教員は評価表に基づいて「良い点→改善点→次に意識する点」の順でコメントを行い、推敲を通して論理的に書く力の向上を図った。

結果と課題

<春学期>

今学期の履修者は7名で、全員が積極的に授業に参加し、向上心を持って取り組んでいた。毎回のグループディスカッションでは、学生が批判的思考力や分析力を発揮し、活発で前向きな意見交換が行われた。学生同士は、それぞれの個性や能力を活かしながら、協働的な雰囲気の中で学習を進めていた。特に、作文の構想段階やピア・エディティングでは、書き言葉と話し言葉の使い分けや、内容の明確化について助言し合う様子が見られた。また、内容は充実しているが論理が飛びがちな学生と、論理的だが内容が少し薄い学生が補い合うことなど、熱心に学び合う姿勢が見られた。

作文の完成度については、レポートの目的（問いなど）は概ね明確に書けていた。調査結果のまとめや引用の内容が冗長になったり、一つのパラグラフに複数のテーマが混在したりするなどの課題が見られたが、練習を重ねる中で徐々に改善が見られた。今後は、学生の個別の弱点への対応をさらに工夫し、ねじれ文を避けるなど表現の正確さに留意しつつ、客観性と論理性をさらに高め、アカデミック・ライティングへとつなげていけるよう指導していきたい。

<秋学期>

この授業では、書き言葉への言い換えやレポートの構成、図表の客観的な描写、引用・参考文献の扱い方について、五つのトピックを通して少しずつ学べるように進めた。授業では、表現リストやモデル段落を示しながら、構成メモから下書き、自己評価、再提出、ピア・エディティングを経て最終稿に仕上げる流れを繰り返し経験させた。その過程を通して、主張と根拠のつながりを意識して段落を組み立てられる学習者が増え、図表の説明においても、「全体→世代・分野別→注目点」という順で数値を比較する書き方

が安定してきた。

課題としては、以下のようなことが挙げられる。間接引用において原文の表現を残したまま要約してしまう例や、参考文献表記のばらつき、提出遅延や欠席により推敲の回数が十分に確保できないこともあった。また、考察では経験談に偏り、資料との結びつきが弱くなる段落も一部に残っている。これらの課題に対して、次年度は「要約→言い換え→根拠提示」を短文で反復する練習を早期に導入するとともに、書式確認用のテンプレートや中間の提出期限を設定し、推敲の機会を安定して確保したい。あわせて、「根拠→解釈→提案」の型を用いた段落練習を行い、資料に基づく考察の書き方を定着させることが求められる。また、生成 AI の使用については、何度も強調しているが、使用されてしまうことがあるため、出力をそのまま提出しないことを前提とし、自分の下書きと照らし合わせながら改善点を言語化させる運用をしていく必要があると思われる。

<J7 作文>

担当者名：<春学期> 長島明子

<秋学期> 清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名、秋学期 7 名（PEACE2 名、他 5 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

これまでに学習した語彙や文型を使って、「作文」ではなく、大学レベルで必要とされるレポートや報告書等の長文作成を行うことを目的とする。

授業の方法

授業はリアクションペーパーと、1500 字程度のレポートを 3 本書いた。また、時間内に 1000 字程度の作文を手書きで書く練習も行った。レポートについてはテーマに関連したテキストの課題文と新聞等の資料を読み、内容についてグループや全体で意見交換をし、テーマへの理解を深めた。その後、各自が資料を探し、論点や構成を考えて構成メモを作成し、レポート作成へと進んだ。ピア・エディティング、教師からのフィードバックの後、リライトを行った。フィードバックでは全体で共通の間違い等を確認し、個別では、その学生がよくしてしまう誤りを指摘し、意識化するよう促した。

結果と課題

<春学期>

学生は意欲的に課題に取り組み、課題の提出率もよかった。ピア・リーディングも円滑に行っていた。学生は文献を引用してレポートを書いた経験があり、資料の探し方にも慣れていた。コース前半では問い

がうまく立てられない、結論部分が足りない、引用のしかた、参考文献の書き方が不正確などの問題が見られたが、個別に説明したり、『Master of Writing』を参照したりしながら、練習をしながら重ねるにつれて、改善されていった。最終的には、文献を引用してレポートや報告書を書くというこの授業の目標は、概ね達成できたと思われる。ただ、直接引用が多く間接引用がうまくできない学生もいたので、この点を今後の課題としたい。

<秋学期>

学生は非常に熱心に授業に取り組み、全員が一度も欠席することなく学期を終えた。授業内外で積極的に課題に取り組み、提出率も良好であった。履修者の過半数は日本語でレポートを書くのが初めてであったが、授業で扱ったステップに沿って丁寧に執筆を進めていた。また、学生の多くが母語や英語での作文活動における自身の得意・不得意をよく自覚しており、日本語による文章執筆の際にもそれを意識して取り組んでいる様子が見られた。執筆前に行うピアでのプレタスクやピア・エディティングも活発に行われ、コメントは建設的で、その内容がその後の修正にも反映されていた。期末テストでは、文献を引用しながらレポートや報告書を書くというこの授業の目標を十分に達成できていた。一方で、直接引用が多くなりすぎる学生や、間接引用として内容をまとめることに苦戦する学生も見られたため、今後はこの点を中心に練習を重ねていきたい。

2025 年度 「J5～J7 聴解・会話」授業記録

コース概要

聴解・会話は、J5 は初中級、J6 は中級前半、J7 は中級修了レベルの学習者を対象としたクラスである。週 1 回のクラスで、グループディスカッションやプレゼンテーション、ロールプレイ、ディベートなどを学生が行うことが多い。そのため、履修者には積極的に授業に参加することが望まれる。

<J5 聴解会話>

担当者名：<春学期> 長谷川孝子

<秋学期> 清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス：7 名 (PEACE1 名、他 6 名)

秋学期 a クラス：22 名 (PEACE6 名、大学生の日本語 5 名、他 11 名)

使用教材：独自教材、梶本総子・宮谷敦美『聞いて覚える話し方 日本語生中継 中～上級編』

くろしお出版

コースの目標

初中級修了レベルの学生を対象としたコースであり、日常生活における様々な場面での聴解会話能力の

育成を目指す。相手の話すことを正確に把握し、それに対して自分の意見などをきちんと発表出来るようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

1 学期を通して、「勧誘」「許可」「提案」の 3 つのトピックに関連した聴解練習やロールプレイに取り組んだ。各トピックの学習後には、それぞれの内容を活かしたミニドラマを作成し、発表も行った。また、「グラフの説明」や「時事問題」をテーマに、2 回のショートスピーチにも挑戦した。さらに、授業の冒頭では、前週の内容を振り返るためのディクテーションを実施した。

<秋学期>

J5 聴解会話のクラスでは、ディクテーションクイズ、ショートスピーチ、上記教材を使用した聴解および会話練習を行なった。ショートスピーチは学期を通して 2 回実施した。履修者数が 22 名と大きなクラスであったことから、練習時間や発表そのものにかかる時間の確保を考慮し、初回の発表は小グループ内で行い、2 回目はクラス全員の前での発表とした。初回は 3 分間でグラフの説明、2 回目は 5 分間で時事問題について発表することを課した。発表後には当該テーマについてディスカッションを行った。聴解は、テキストの「勧誘」「許可」「提案」を扱った。各課の終了時にはロールプレイの会話を作成し、翌週以降のクラスで発表した。3 回のロールプレイ作成のうち、2 回の授業活動にはボランティアが参加し、自然な会話の流れや日本語表現について学生に提案を行った。期末試験は、聴解テストとロールプレイテストを別の日に実施した。

結果と課題

<春学期>

学生たちは真剣に授業に取り組み、学期当初と比べて聴解力・会話力の両面で着実に上達した。特に、聴解練習やロールプレイ、スピーチを繰り返すことで、表現の幅が広がった。また、発音やアクセントにも意識を向けながら練習する姿勢も見られた。フィードバックを重ねることで、自分の言葉で聞き手に分かりやすく伝えようとする姿勢も強まってきたように感じる。一方で、発表前の自宅での練習量は十分とは言えず、今後の課題となりそうだ。他の科目との両立もあり時間の確保は難しいと思うが、工夫しながら学習を継続する必要がある。学生が自信を持って話せるよう、今後も工夫しながらサポートしていくことが、教える側の課題であると考えている。

<秋学期>

発話活動を行うクラスとしては大人数であったが、熱心な学生が多く、活発で明るい雰囲気のあるクラスであった。開講当初は使用教材がクラスのレベルには難しいのではないかという懸念もあったが、語彙リス

トの配布などを行ったことで、聞き取りそのものは大きな問題にはならなかったと考えられる。ロールプレイは短時間で準備を行うことが多かったが、ペアやボランティアと協力しながら、学生は意欲的に取り組んでいた。開講当初に見られた学生間の属性の違いによる壁は、序盤のロールプレイやショートスピーチ準備におけるピア活動を通して徐々に解消された。それぞれの学生が持つ得意分野を生かした助け合いが、その後のロールプレイ活動やショートスピーチのディスカッションにおいても見られ、学生同士が互いに良い影響を与えていた。一方で、コースを進める中で、聴解練習やロールプレイに対するフィードバックに、より多くの時間を割くことができたのではないかという課題も残った。今後は、今回のような大人数クラスにおける聴解および会話練習の効率的な進め方やフィードバック方法について工夫を重ね、授業改善につなげていきたい。

<J6 聴解会話>

担当者名：<春学期> aクラス：高島幸太、bクラス：清水慶子

<秋学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス：8 名 (PEACE4 名、他 4 名)、b クラス：8 名

秋学期 21 名 (PEACE3 名、他 18 名)

使用教材：独自教材、瀬川由美・紙谷幸子・北村貞幸『ニュースの日本語聴解 50』スリーエーネットワーク、鎌田修他『中級から上級への日本語なりきりリスニング』the Japan Times

コースの目標

中級前半修了レベルの学習者を対象として、実質的な運用能力の育成を目指す。聴解では、時事問題をテーマに、正確に把握できるようになることを目標とする。会話では、相手や場面にふさわしい日本語が流暢に話せるようになることと、プレゼンテーションにおいては、アンケート調査を行い、その結果について比較しながら考察を行うことを目標とする。

授業の方法

<春学期>

(a クラス)

聴解では、隔週でニュース音声を聞きつつ、内容把握をし、最後にクラスで話し合いをするという形式で進めた。会話では、旅行やバイト、就職などに関して話している音声を聞き、それらを踏まえて、会話練習を行った。また、自身の会話を分析するという活動も取り入れた。ほかにも、毎週ディクテーション・クイズをしたり、課が終わるごとに扱ったテーマに関してミニ発表を実施したりもした。あわせて、賛否に分かれて討論を行うディベート活動を合計 3 度行った。

(b クラス)

14 週のうち、1 週目から 8 週目まではニュースを使用した聴解練習、会話練習、ディクテーションの宿題およびクイズを行い、9 週目以降はディベート活動を行った。ニュースを使用した聴解練習は全 5 回実施し、3 回は市販教材から抜粋し、2 回はインターネットでアクセス可能な生ニュースを扱った。会話練習では市販教材の中から旅行、アルバイト、仕事の 3 つのトピックに関する友達同士の会話を聞き、会話中のあいづち、聞き返しなどに注目して自分たちの会話を作成・練習し、ミニ発表を 3 回行った。教材の一部はディクテーション練習の宿題として課し、翌週に同じ内容で空白部分を変更したディクテーションクイズを実施した。8 週目と 10 週目には、日本語母語話者の大学生ボランティアに参加してもらいビジターセッションを行った。1 回目は自然会話を録音し、会話分析を課題とした。2 回目は生ニュースで取り上げた「防災訓練とペット」をテーマに、小グループでのディスカッションを実施した。後半のディベート活動のうち、9、10 週目はディベートを導入し、客観的なデータに基づいて論理的に主張を述べる練習をした。11 週目以降は a クラスと合同で、期末テストの一部である期末ディベートの実施に向けグループ毎に準備を進めた。期末テストは市販のニュース教材を聞く聴解テストとディベート実技を実施した。ディベートは、一つのテーマについて 3 回実施し、肯定、否定、ジャッジ（司会、タイムキーパー）の 3 つの立場から評価を行った。

<秋学期>

毎回授業の始めディクテーションを実施した。その後、それぞれの課題を遂行した。学期前半は聴解を中心に、ミニ発表や会話練習、後半は会話中心（ディベート）を行うというスケジュールだった。J6 聴解会話としては人数が予想より大きいクラスだったので、ペアやグループワークなどをできるだけ取り入れ、毎回の授業で必ず学生が発話をし、ペアやグループなどで話し会える時間を設けるよう工夫を行った。聞き取りでは、学生達と理解を確認しながら実施した。またそれについての感想などもグループで話し合ってもらい、クラスで共有してもらったりした。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

聴解では、さまざまな教材からニュースを聞き取ったのだが、「スマホアプリの銀行」「ペットの救急救命」などなじみのあるテーマということもあり、活発に話し合いをしている様子だった。また、会話練習では、今学期では新たに自身の会話を分析するという活動を行ったが、学生ボランティアとも積極的に会話を楽しんでいる様子が窺えた。

ディベートでは、実技①と実技②で合計 3 回討論を行った。特に実技②では同じ論題で肯定側・否定側の両方を経験する形式を取り入れたのだが、物事の利点と問題点を両面から論じるという練習ができた。また、ディベートでは主に合同授業で進めたのだが、さまざまな学生からさまざまな意見を聞いたので、

よい刺激になったと思う。合同授業はモチベーションという観点からも効果的に利用できると感じた。

(b クラス)

クラス内には日本語レベルの差があったが、学生たちは互いに協力しながら全員が熱心に取り組んでいた。今学期に使用した市販教材は、全体的に本クラスのレベルよりやや高め、特にニュース教材では、非漢字圏出身の学生にとって漢字語彙の不足が課題となり、内容理解のための別プリントを作成するなど進め方に工夫が必要だった。一方、カジュアルな会話の聞き取りには楽しんで取り組み、新しく学んだ表現を会話練習に取り入れる様子も見られた。ディベートでは、b クラスのみの練習時には客観的データの収集が不十分であったり、意見を日本語でうまくまとめられずもどかしそうな場面もあった。しかし、ab 合同で期末ディベートに向けた準備を進める中で、全員が自分の役割に自信を持ち、積極的に取り組む姿勢が見られた。

今回のように事前の想定よりやや低いレベルの学生が多いクラスにおいては、学生があきらめずに課題に取り組めるよう、教師はどのような支援や工夫ができるかを今後も模索し、授業の改善につなげていきたい。

<秋学期>

予想より大きなサイズのクラスであったが、学生達は当初より真面目にかつ集中して授業に活動に取り組んでいた。最初はおとなしい雰囲気クラスであったが、徐々に慣れてきたこともあってか、自分の意見を積極的に述べるようになっていった。聴解に至っては、生の動画ニュースなどは難しかったようだが、毎回行ったディクテーションは聞き取りも比較的によく、また内容的にも多岐に富んでいるため日本語だけでなく文化、社会の勉強にもつながったようである。最後のディベートは人数の関係もあり、あまり練習や討論自体に時間を割けないところもあったが、事前に準備説明を促したこともあってか、全体的によく準備をした印象がある。結果、練習時間が少なかったにもかかわらず、言語的にも、内容的にも深みのある良いディベートを行っていた。課題並びに今後の改善点として、ディベートのトピックを選ぶのに時間がかかったところもあったので、事前に告知はしていたが、ディベート関連は詳細も含め、学期初めの方で告知をし、トピック選択の時間をもっと与えた方が良かったと思われる。また急に会話に比重がかかってくるので、サンプルのディベートも早めに視聴し、学生達にイメージしてもらいながら日頃の授業を行い、徐々にディベートに持っていくという流れを作るとよりスムーズにディベートに移行していったかもしれない。また満遍なくペアやグループを変えて行なうよう工夫はしたが、与えられた授業の時間に対して絶対数が多かったせいか、クラス内で学生同士が触れ合え、話し合える機会を十分に確保するのが難しかった。一方、ペア、グループでの会話や活動が増え、ディベート活動あたりではだいたい個々の発話も増え、同時にチームワークや相手を尊重する姿勢なども育っていたようであった。

<J7 聴解・会話>

担当者名：<春学期> a クラス：山内薫、b クラス：小松満帆

<秋学期> 清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス：5 名（PEACE2 名、他 3 名）、b クラス：3 名、秋学期 11 名

使用教材：独自教材、生教材、荻原稚佳子・伊藤とく美・齊藤眞理子『日本語超級話者へのかけはし—きちんと伝える技術と表現—上級から超級へ』スリーエーネットワーク

コースの目標

中級修了レベルの学習者を対象とし、アカデミック場面での聴解能力および会話能力の育成と、場面にふさわしい日本語の習得を目指す。生の教材を用い、日常生活だけでなく、講義や講演などやや専門的な内容や社会問題、時事問題についても細部まで正確に把握し、流暢に意見が言えるようになることを目標とする。

授業の方法

<春学期>

授業は、聴解と会話の 2 部構成で進めた。まず聴解においては、社会問題に関する動画から、「新型コロナウイルスの影響を受け変革した冷凍食品開発業界」「産業再生機構」「カップラーメンの開発」「訪日外国人に対する新たな攻略」の 4 つのテーマを視聴した。DVD 視聴前には、配布した語彙リストを活用しながら内容の把握を行い、あわせて語彙や表現の確認も行った。また、視聴後には課題として、内容要約と意見文の提出、さらに全 6 回の語彙クイズ（ディクテーション、語彙の読み、語彙を用いた短文作成）を実施した。一方、会話においては、『日本語超級話者へのかけはし』の 3 課分を使用し、他者に伝わるような表現や展開を学んだ後、各課のテーマと構成に基づいたプレゼンテーションを行うことを課題とした。そして、期末テストは、プレゼンテーションと DVD の内容要約・意見文を 2 週に分けて実施した。加えて、ビジターセッション（ディスカッション活動）2 回および期末テスト 2 回は、ab クラス合同で授業を実施した。

<秋学期>

授業は聴解と会話の 2 部構成で進めた。聴解においては、社会問題に関する動画を用い、新型コロナウイルスの影響を受け変革した冷凍食品開発業界、リユース業界における「人財」を育成する経営術、人工鼻によるにおい転送技術の開発、Z 世代起業家と就労という 4 つのテーマを扱った。なお、動画は初回のテーマのみ DVD を視聴し、2 つ目以降はオンデマンドのビジネス番組を視聴した。視聴の順序は、テーマへの親密度の軽重及び内容の難易度を考慮した上で決定した。また、動画視聴前には、配布した語彙リストを活用しながら、内容把握と語彙や表現の確認を行った。視聴後は、課題として内容要約および意見

文の提出を課し、全 6 回の語彙クイズ(ディクテーション、語彙の読み、語彙を用いた短文作成)を実施した。一方、会話においては、他者に伝わるような表現や構成を学んだ上で、各課のテーマおよび構成に基づいたプレゼンテーションを行うことを課題とした。また、ビジターセッションを 2 回実施し、1 回目はプレゼンテーション前の練習時に行い、2 回目は 4 つ目の動画視聴後に「仕事」をテーマとしてグループでディスカッションを行った。期末テストは、プレゼンテーションおよび DVD の内容要約・意見文作成を 2 週に分けて実施した。

結果と課題

<春学期>

(a クラス)

5 名のクラス (PEACE2 名、他 3 名) であったが、率直に意見を出し合える学生たちであり、全体として雰囲気の良いクラスであった。また、遅刻や欠席が少なく出席率も非常に高かったため、毎週ほぼ全員が揃い、課題も期限通りに提出されていた。さらに、聴解と会話の難易度も各学生の日本語力に適しており、問題なく理解できている様子が見られた。加えて、要約課題や発表においては、自分の専門分野や関心と結び付けたオリジナリティのある内容を表現することができていた。一方で、特に PEACE の学生たちにとっては、聴解会話クラスで学ぶ必要性をあまり感じておらず、単位取得のために日本語授業に取り組んでいる様子が窺えた。そのため、出席や課題提出自体は行われていたものの、授業への参加態度が不十分な日があったり、作成された課題のクオリティが明らかに低いことも見受けられた。これらの学生に対しては、一学期を通じて声かけを続けてきたが、日本語学習の意味を見いだせないという訴えがあったことから、課題のやり直しや推敲を求めることは控えた。今後は、日本語学習に対する動機づけの高い学生と低い学生が混在するクラスにおいて、動機づけの高い学生には上級から超上級への日本語力向上を図る方法を検討するとともに、動機づけの違いに関わらず、教室全体で多様な背景を持つ学生同士が協働できる活動の在り方についても考えていきたい。

(b クラス)

3 名という小さいサイズの授業であったが、学期開始当初は、人数が少ないことでより話す機会があり、話す練習ができるという前向きな姿勢が見られた。しかし、学期途中から一部の学生の遅刻・欠席があり、全員が揃って活動を行うことができないことも多く、きちんと出席している学生も含め、徐々に士気が下がってしまった印象もあった。それでも出席した際には課題に熱心に取り組み、発言や質問も多かっただけに、クイズの未受験や宿題の未提出により、実力通りの結果とならなかったことが残念であった。DVD および発表のテーマについては、十分に理解した上で、高い関心を寄せ、発表や要約ではよく考えられた考察や意見が見られ、課題に真摯に取り組んでいる様子も見られた。与えられたテーマにういて、自国や世界の状況を鑑みて考察を行っており、その成果は非常に高いものであった。その一方で、クイズや宿題などについては準備が十分とは言えず、点数に繋がらない学生も見られた。少ない人数で、学生同士の関

係もよかったことから、高い意欲が継続できなかつたことが悔やまれる。小規模のクラスであっても、学生の意欲を保持していける活動の工夫が今後の課題である。

<秋学期>

明るく熱心な学生が多く、授業は終始和やかな雰囲気の中で進めることができた。学生は自分の意見を明確に述べるだけでなく、他者の意見にも真剣に耳を傾ける姿勢を見せており、毎回、意義のあるディスカッションが展開された。日本人学生ボランティアが参加した際も、積極的に意見を交わしながら相互理解を深める様子が見られた。一方で、課題も見られた。同一クラス内には、発話に自信のある学生と、十分に準備を行った上で発話したい学生が混在しており、クラス全体でのディスカッションにおいては、後者がやや発言を控える傾向があった。今後は、学生の様子を見ながら小グループでの意見交換を取り入れたり、コメントシートによる提出を認めたりするなど、臨機応変に対応し、すべての学生が安心して参加できる授業運営を工夫していきたい。

2025 年度 J8 授業記録

コース概要

J8 は、既に高度の文法・漢字・語彙を習得しており、大学における学習・研究が十分日本語で行える学生を対象としたコースであり、様々な目的に沿った科目を展開している。展開している科目は、大学や大学院での学習、研究生活のための日本語能力を伸ばす科目と、実社会の中で求められる日本語能力を伸ばす科目、日本語そのものについての知識を身につける科目など、多岐にわたっている。また、J8 で展開する科目は、短期留学生のみならず、学部や大学院の正規学生（日本語を母語としない学生）の履修も可能であり、様々な背景を持つ学生が、一緒に学ぶ機会も提供している。

各科目の詳細は次に示す通りである。

<日本の社会と文化 A>

担当者名：<春学期> 山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名

使用教材：独自教材

コースの目標

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

社会問題、芸能文化など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それに関する文献を読んだり、ビデオを見たりする。その後テーマについてのディスカッションやグループ・プレゼンテーションを行い、課題設定能力も高める。最後にまとめとして、日本文化をテーマとした個人プレゼンテーションを課す。

今学期は文化の側面に焦点をあて、①文学②食文化③映画④サブカルチャーの4つの分野に着目し、それぞれのトピックとして①友人に勧めたい文学作品、②日本の伝統食の現状と課題、③日本映画の1ジャンルとその代表作、④オタク・ヤンキー・ギャルのスタイル、を取り上げた。また、最後プレゼンテーションのテーマは「日本文化の継承」とした。なお、②～④については初回の授業で学生の希望を聞いて決定した。

結果と課題

各トピックは3週にわたって取り扱った。まず第1週目にトピックに関連するニュース映像の視聴とワークシートを用いた内容理解、グループディスカッションを行った。2週目にディスカッション内容をクラス内で共有したのち、グループに分かれ、各チームの発表準備に充てた。3週目はグループ・プレゼンテーションで、事前課題としてレジュメとスライドの提出を課した。少人数だったため、各活動に十分な時間が充てられた。

最終授業での振り返りによると、この授業を受講したことにより、ニュースを聞き取る力とプレゼンテーション力が向上したと感じている学生が多かったのが成果である。全員が「授業目標は達成した」と評価した。一方で、クラスメイトからの他者評価や発表録画を視聴しての自己評価は「あまり役に立たなかった」という回答が多かった。しかし発表ごとに作成する振り返りシートを見れば、前回発表から改善した点、次回の目標などが教師やクラスメイトの評価も踏まえて分析的に述べられており、やはり多角的視点による評価は有用であると思う。

グループワークの得意でない学生と、ほかのメンバーとの協働をいかに実現させるかは、今後も大きな課題の一つである。「チームメイトと協働できる」ことも授業目標の一つであることを折に触れ認識させると同時に、教師が「つなぐ」役割を果たすことが求められている。

<日本の社会と文化 B>

担当者名：<秋学期> 黄慧

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期6名

使用教材：独自教材

コースの目標

時事問題など日本の文化・社会に関する様々なトピックをとりあげ、それについて理解を深めながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

履修者 6 名の少人数クラスの特性を生かし、観光・食文化・ポップカルチャーの 3 テーマを設定して学期を運営した。各テーマを概ね 4 回で扱い、①導入（経験共有）②動画視聴・資料読解（語彙確認・要約）③ディスカッションと調査設計（質問作成、役割分担）④発表準備→発表→フィードバックのサイクルで進行した。計 3 回の発表に加え、最終回に個人発表を行った。課題（語彙リスト、感想文、ワークシート、スライド等）は Canvas で提出させ、ルーブリックに基づき評価・指導した。必要に応じて日本人学生ボランティアへのアンケート／インタビューも組み込んだ。

結果と課題

観光・食文化・ポップカルチャーの各テーマで、動画は通し視聴・再視聴により論点を抽出し、資料は分担読解→要約共有で背景知識と語彙を定着させた。少人数のため発話機会が確保され、異文化背景の差異を資源として議論が活性化した点は評価できる点である。さらに質疑・相互フィードバックを重ねる中で、原稿依存や小声での発表が減少し、聞き手を意識した説明へと改善した。発表は背景—根拠—結論の構成が明確化し、スライドも長文中心から要点化・図表化へ移行した。日本人ボランティアへの聞き取りは質問力（言い換え・聞き返し）を伸ばし、ポップカルチャー回では社会・経済的視点を含む考察も見られ、期末発表では全員が結論と課題を上手に提示できた。

授業中の発表では、調査の設計と根拠の示し方が十分ではない場面が見られた。たとえば、準備がスライド作成に偏りやすく、結果として事例紹介で終わってしまい、考察が浅くなる傾向が見られた。また、作業の進捗に個人差が出やすく、AI の利用についても適切さを十分に確認できないという課題が残った。今後は、調査計画書の作成と中間提出を必須にし、質問テンプレートを用意するとともに、考察を示すスライドを必ず入れるように指導することが求められる。加えて、簡易的な倫理チェックを行い、引用のルールと AI 利用のルールを明確にする必要がある。発表前にはリハーサルとレピア・ビューを取り入れ、授業内の時間配分も見える形で管理することも重要である。さらに、協力者の募集は複数のルートで実施し、オンラインフォームを併用することで、データ量の確保に加え、回答の偏りを抑えた調査の実施を目指したい。

<日本の社会と文化 C>

担当者名：<秋学期> 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 19 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の企業風土、日本的経営、日本式サービスなど日本での就職に関心がある学生にとって有用なトピックをとりあげ、それらの知識を獲得すると同時に、高度な文型や語彙を増やし、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

授業の方法 「日本の企業風土」「日本的経営」「日本式サービス」をトピックとして取り上げ、それぞれの専門家をゲストスピーカーとして招き、ゲストスピーカーの講義を軸として授業を進める。

結果と課題

今年度は 特別外国人留学生、正規院生、正規学部生が履修し、日本での就職に関心がある学生が多く、所属や専門分野が異なる履修者間で双方向の様々な学びがあった。自己都合で履修を取り消した学生が複数名いたことは残念であった。毎学期、課題の多さについて声が出るため、初回授業では、本科目と各課題の目的や意義を強調した。これにより、学期を通して、前向きに課題に取り組んでいたように感じる。

J6、J7 レベルの履修者も複数名いたため、レベル差対応として、ルビ付きの読解資料や語彙リストを配布し、漢字や表現を調べるオンラインツールも紹介した。また、レジュメやレポート作成の未経験者も多かったため、授業では、基本的な作成の仕方やポイントを学習した後、サンプルの教材で確認するなどした。そのため、回を重ねるごとにレジュメやレポート作成のコツを掴んでいたように感じる。しかしながら、課題の取り組みにおいて、毎回、時間を要するなど多少負担がかかってしまった学生もいたようだ。今後も学生の日本語レベルや学習スタイルに合わせた学習支援の在り方について検討していきたい。

<社会の中の日本語 A >

担当者名：<春学期> 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名

使用教材：独自教材

コースの目標

社会言語学的側面から日本語の多様性についての理解を深めるとともに、大学での学びに必要な日本語運用力を向上させる。

授業の方法

本コースの目標を達成するため、敬語、配慮表現、若者ことば、擬音語・擬態語という4つのテーマを取り上げ、教師による講義だけでなく、論文読解やディスカッション、プレゼンテーション、アンケート調査、言語日誌など多様な活動を取り入れた。また、本コースは学部留学生にとって初年次教育で身につけたアカデミックスキル（プレゼンテーションの手法や日本語文章の作成方法など）を振り返り、復習する場としても位置づけているため、各活動においてそれらの実践的な練習を組み込んだ。

結果と課題

今年度は特に、学生が自身の日常生活を振り返る力、すなわちメタ認知能力を通じた日本語の多様性の理解に重点を置いた。具体的には、教室外での活動を積極的に取り入れ、例えば、若者ことばのテーマでは1週間の言語日誌を作成させた。自身の周囲でどのような若者言葉が使われているかを観察・記録するプロセスを通し、自身の言語生活を振り返り、気づきを得られるように促した。さらに、その気づきを教室に持ち帰り、ペアやグループで共有することで、自身の考えを日本語で産出するアウトプットの練習につなげた。他者との対話を通して自身の知識を修正し、さらには更新していくという教室内外の循環を意識した授業設計とした。

教室内外の活動を循環させ、社会の中の生きた日本語を学ぶアプローチをとった結果、受講生の自主的な学びを引き出すことができた。その成果は学期末の最終レポートにも表れており、母語と日本語の違いや、世代による日本語使用の規範意識の違いなど、受講生一人ひとりが多様なトピックから日本語の多様性について深く考察しており、本コースの狙いが十分に達成されたことが確認できた。

一方で、新たな課題も浮き彫りになった。一部の受講生においては、言語日誌等の観察活動が自発的な気づきにつながるまでにやや時間がかかる傾向が見られた。社会言語学的なテーマにおいては、教師からの単一の正解を求めるのではなく、大学生として自ら探究することが求められる。受講生が主体的な日本語の学びのアクターとして授業に参画できるよう、教師がいかに適切な促しや介入を行っていくかについて、来年度以降さらに検討を重ねていく必要がある。

<社会の中の日本語 B >

担当者名：<秋学期> 斉藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期15名

使用教材：独自教材

コースの目標

役割語、インターネットの日本語など、社会言語学的側面から日本語についての理解を深めるとともに、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

今期は「若者言葉」、「SNS とメール」、「呼称」、「役割語」の4つのテーマを取り上げ、そのそれぞれが社会とどう関連し、使われているかを学習者の母語とも比べながら、考えることを目指した。各授業の前半では講義による導入を行った後、テーマに関わる投書や記事、論文を読むことで、テーマへの理解を深めた。若者言葉では教室外でも接する機会が多い若者言葉を集め、SNS とメールではショートメッセージやメールを適切に書く活動にも取り組んだ。呼称や役割語では小説や映画の中で、それらの言葉がどのように使われ、どのような機能を持っているかも観察した。授業の後半ではディスカッションを行い、考察を深め、リアクションペーパーを書くことを課した。8回目には日本人ボランティアを招き、前半の3つのテーマから一つを選んで興味のあることについてインタビューを行った。最終課題として、授業で取り上げた4つのテーマから一つを選び、具体例を挙げて意見を述べるレポートの提出を課し、その計画をスライドにまとめ、後半2回の授業で発表した。

結果と課題

受講者は正規学部生 14 名と特別外国人留学生 1 名で、出身は主に中国と韓国であった。いずれも日本語能力は高く、日本社会との接触も多かったため、ディスカッションでは自らの体験に基づいた意見が聞かれ、それを互いに共有することで新たな学びがあったのではないかと思う。人称表現や役割語の講義においては、言語規則や歴史的背景などにおける未習の内容にも興味を持ち、熱心に授業を聞いている様子が見られた。また8回目のインタビューセッションでは、同世代の日本人学生との交流から得られる学びもあったと思う。これらのことから、本授業の日本語の多様性についての理解を深めより高度な言語運用能力を身につけるという目標はある程度達成できたのではないかと思う。課題の提出状況も概ねよく、全体に自律的に学習ができる学生たちであったが、クラス内での発言やディスカッションにおいては、その積極性に差が見られた。また最終発表とレポートには指示した形式や内容の基準を満たしていないものもいくつかあった。受講者全員がディスカッションに積極的に参加するような動機づけや支援の方法、また最終課題に求められていることを明確に伝えることが今後の課題である。

<論文読解の技法>

担当者名：<春学期>（池袋）武田聡子、（新座）開講なし

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）2名

使用教材：独自教材

参考教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

コースの目標

様々な分野の学術論文を読み、日本語の学術論文の構成をつかむとともに、論文で用いられる様々な表現を理解することに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

既存のスケジュールに沿った形で、各回を実施していった。初回の導入では、論文の構成要素を確認し、論文の検索の方法を紹介した。第2回では、日本語教育における専門分野の学術論文をサンプル論文として紹介し、学生は自分たちが選んだいくつかの論文を持ち寄って、それぞれ、どのような論文かを説明した。次回までに担当論文を一つに絞るよう指示。テキストに沿って、序論、本論、結論の役割や要素、表現を導入・確認し、練習問題で理解を深めた。その後、サンプル論文と担当論文を分析した。各回で、「担当論文シート」をまとめ、Canvasを利用して提出を促した。今学期はすべての提出物をCanvasに提出、教材も同じくCanvasに投稿し、紙の配布物は極力渡さないようにした（学生の希望もふまえ）。最終課題として、担当論文についての詳細なレジюмеを作成し、口頭発表と質疑応答を行った。最後に、コース全体の振り返りを行った。

結果と課題

二人だけのクラスではあったが、社会学部と法学部の学生であったため、異なる専門分野の論文を選んだことがお互いの学びにもつながった。途中、一人の学生の無断欠席が続いて心配したが、コーディネーターの声掛けにより、再び出席するようになり、無事に最終課題までこなすことができた。それ以外は二人とも理解力が高く、自身の分析力も優れていたため、論文読解の技法を学ぶという本クラスの目的を達成できた。今後の課題としては、専門が異なるため、教員にとって、専門的な分野の論文を理解することは困難であるが、そこを学生からの説明でカバーできればと考える。

<論文作成の技法>

担当者名：<秋学期>（池袋）黄慧、（新座）開講なし

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期（池袋）6名

使用教材：浜田麻里他『大学生と留学生のための論文ワークブック』くろしお出版、1997

北原保雄監修（独）日本学生支援機構・東京日本語教育センター『実践研究計画作成法』凡人社、2009

コースの目標

卒業論文や学術論文など、レポートよりも長く学術的な論文の書き方について学ぶことに重点を置きながら、日本語による受発信力をつける。

授業の方法

この授業は、論文の構造理解を土台に、研究計画書を完成させることを到達目標とした。第1～5回では、論文検索の方法、論文とレポートの差異、論文の基本構成（序論・本論・結論）を導入した上で、モデル論文および各自の担当論文を用い、構成要素と頻用表現を分析した。ペアワークで構成図を作成し、担当論文の序論分析を口頭で発表させ、要約・説明の精度を高めた。第6回以降は、研究計画書のモデルを参照しつつ、「研究課題文→研究目的→先行研究→研究方法→参考文献」の順にタスクを設定し、授業内作業と段階課題を組み合わせて執筆を進めた。発表は、担当論文の分析発表、研究課題文の発表、研究計画書の最終発表会の計3回行った。発表後は質疑応答と相互コメントを行った。

結果と課題

この授業では、前半5回の授業を通して、学生たちは論文の基本構造（序論・本論・結論）を意識しながら文章を読み、主張・根拠・補足の関係を整理して説明できるようになった。研究計画書では、研究課題を一文で明確に示し、「何を明らかにしたいのか」という研究目的をはっきり書いたうえで、先行研究の不足点や検討すべき点を踏まえ、研究方法（対象・手順・データ）まで筋道立てて記述できるようになってきた。引用や参考文献の書き方についても理解が進み、形式的な誤りは減少し、学術的な書き方への意識も高まった。最終発表では、資料の構成が改善され、質疑応答においても、自身の計画の妥当性や限界を言葉で説明できるようになっていた。

一方で、いくつかの課題も残っている。欠席や体調不良、課題提出の遅れにより学習の進み具合に差が生じ、改稿の回数やピア・レビューの助言をどの程度活用できているかに個人差が見られた。今後は、課題を細かく分けて中間の締め切りを設け、授業内で最低限の提出を確保することが必要である。また、提出が遅れた学生には、教員からのフィードバックと再提出を短い周期で行い、補助的な課題を通して学習に戻れるよう支援することが望ましい。さらに、ピア・レビューについても助言の内容や活用の仕方に差があるため、チェックリストやコメント例を示し、助言作成、共有、改稿方針の決定までを授業内で行うことで、相互に学び合う活動を安定させていく必要がある。

<キャリアの日本語 A>

担当者名：<春学期>（池袋）沢野美由紀、（新座）和田晃子

<秋学期>（池袋）栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）3名、（新座）5名、秋学期（池袋）6名

使用教材：『立教就職ガイド 2026』

『外国人留学生のための就活ガイド』

（参考資料『外国人留学生のための日本就職オールガイド』）

コースの目標

日本の就職活動の全体の流れや要点を理解するとともに、エントリーシートの書き方（効果的な構成、適切な文体や語彙等）、面接で求められる日本語（適切な応対、マナー）など、実質的な日本語スキルの獲得を目指す。

授業の方法

<春学期>

（池袋）

日本での就職を希望する学生を対象に、就職活動の流れを説明したうえで、自己分析や業界・企業分析の方法、履歴書やエントリーシート、志望動機の書き方、ビジネスマナー、面接のポイントの順で実践的なスキルを中心に学んでいった。受講者はこれらに関する課題を毎回行い、教師のコメントとフィードバックを受けて書き直す作業にも取り組んだ。それらに加え、就活に関する新聞記事も紹介し、年々変化している就活の現状を知る一助とした。また、現在の就活や企業の状況について、ゲストスピーカーによる講義をお願いした。

（新座）

日本で就職を希望する学生に、日本ならではの就職活動の流れを伝え、自己分析、業界分析、エントリーシート、志望動機などのトピックで学習し、さらに面接練習を実施した。毎回授業内容を課題にし、時間をかけて再び取り組めるようにした。また、事前に学生からの質問内容をお伝えした上でゲストスピーカーをお招きし、現在の就職活動の状況や留意点を教えていただいた。

<秋学期>

日本での就職を希望する学生を対象に、採用選考の全体像を概説した上で、自己分析、業界・企業研究、エントリーシートおよび履歴書の作成、さらには面接対策に至るまで、各段階で求められる実践的なスキルの養成を図った。具体的な課題を段階的に課し、添削や学生同士のフィードバックを経て、内容をブラッシュアップした。また、面接での時事質問に対応するため、日頃からニュースへの関心を促すとともに、授業冒頭に意見交換の時間を設け、自らの考えを述べる活動を行った。

さらに、外部からゲストスピーカーを招聘し、現在の採用市場の動向や企業が求める人材像について直接講義を受ける機会を設けた。これにより、より多角的かつ実戦的な視点から、学生のキャリア形成を支援した。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

履修登録したのは3名で、2名が継続して受講した。2名とも3年生であり、ちょうど就活に取り組み始めた時期で、1名は就活と同時並行の形でクラスに臨んでいた。日本流の就活の全体像を14回のクラスで学生に提示し、それぞれの課題を仕上げるのは時間的にも非常に難しいものがあるが、受講生はきちんと課題に取り組み、就活についての理解を深めていった。特に、ゲストスピーカーの講義を聞き、自分たちが置かれた状況を認識して以降は、就活に対してより一層の熱意を持ったように思えた。今期はいろいろな理由で受講者同士の情報の交換があまりできず、お互いの課題に対しコメントするという作業もできないことが多かったのは残念であった。受講者の就活に対する熱意をうまく把握、コントロールできない部分もあったので、次回以降はその点をどうすれば良いか考えたい。

(新座)

今学期の履修者は、正規学生2年生3名、特外生2名の、計5名であった。当初は、2年生は気にはなっているが、まだ自分には関係のないことだと思いつつの履修であったように思う。特に日本語能力の高い学生たちは、自分なりに研究してエントリーシートを作成してきていたので、教員からのフィードバックも細かくなった。学習を進めるうちに、全員が希望する業種が固まってきて、将来の展望も含んだ志望動機を書けるようになっていた。必要な資料の書き方についての指導ポイントが非常に大切なので、教員もさらに自分の学びを続けていきたい。

<秋学期>

2年生3名、3年生1名、4年生2名が履修したが、日本の就活事情の早期化の実態を知り戸惑う姿が一部の学生で見られた。ESの活動では、企業分析や自己分析は順調な一方、志望動機や自己PRにおいて具体性に欠ける学生が多かったため、フィードバックを重ねた。その結果、期末試験では課題は見られるものの具体的なエピソードを交えた説得力のある記述や面接が可能となった。

課題は、就職活動の遅れを自覚し意欲を低下させた学生へのフォローである。今後は最新の採用動向をより深く研究し、通年採用や時期を問わない選考事例などの多様な情報を共有することで、学生が前向きに活動を継続できるよう支援したい。

<キャリアの日本語B>

担当者名：<春学期> (池袋) 任ジェヒ

<秋学期> (池袋) 小林友美、(新座) 和田晃子

授業コマ数：週1コマ

受講者数：春学期(池袋)9名、秋学期(池袋)4名、(新座)2名

使用教材：独自教材

コースの目標

就職試験で出題される日本語関連項目について学びながら、日本で行われる就職試験を理解する。また、数多くの問題に触れることによって日本語や日本文化・社会についての知識を増やす。

授業の方法

<春学期>

オリエンテーションにて日本の就職活動のスケジュールや特徴について説明を行い、本コースで扱う就職試験の重要性について理解した上で、授業に参加できるようにした。非言語分野と性格検査についても部分的に取り上げたが、授業では主に SPI の言語分野に焦点を当てて練習を進めた。毎週、事前に試験問題を宿題として課し、授業内でその答え合わせと解説を行った。また、理解の定着を図るため、次回の授業冒頭では必ず小テストを実施した。さらに、学期末には、学習内容の総まとめとして模擬テストとその解説を行い、各自が復習すべき分野を明確にさせた上で、期末テストを実施した。

<秋学期>

(池袋)

就職試験の国語分野、常識分野の試験問題を数多く解き、日本の就職試験の傾向を知ると同時に、対応スキルを身につけさせた。授業冒頭には前回の授業内容に関わる小テストを行った。また、学期末には学習範囲を網羅した模擬テストを行い、答え合わせを通して不十分な点を各学生に認識させ復習を促したうえで、その翌週に期末テストを実施した。

(新座)

就職試験 (SPI) の言語能力の分野において、実際の問題に接することで読解のストラテジーを培った。出題範囲は、同義語・反意語・同音異義語、二語の関係、ことわざ・慣用句・故事成語、難読漢字・間違えやすい漢字、部首・カタカナ語・複数の意味、四字熟語、敬語・文法、文学作品、文章並び替え、読解問題 (短文・中文・長文) である。毎回、宿題として次週の学習内容に取り組んでくるようにし、授業では、答え合わせと共に説明を行った。授業の最初には、理解の定着を見るために、前回の授業内容を小テストとして行った。最後の二回は、模擬試験と期末試験を行い、模擬試験で理解が未熟な項目を認識させて、翌週の期末試験で実力を測った。

結果と課題

<春学期>

春学期は学部生 4 名、将来日本語環境での就労を希望する特別外国人留学生 5 名が受講した。非漢字圏

出身者を含む全員が極めて勤勉であり、毎回の小テストで常に高得点を維持していた。就職活動本番を迎えている学生の存在も相まって、クラス全体に良好な相互刺激が生まれていた。本コースは採用実績の最も多いSPIを主軸としているが、外資系企業志望者も多く、SPI以外の試験形式に関する質問が多数寄せられた。このニーズに対応するため、今年度の新たな試みとして玉手箱等の異なる試験形式を紹介し、問題体験の機会を設けた。結果として、日本の就職試験の多様性に対する学生の実践的な理解を深めることができた。本授業を通して学習意欲の向上と基礎知識の定着という成果が得られた半面、受講生の志望業界や興味関心の多様化にいかに応えていくかが次なる課題として浮き彫りとなった。最も汎用性の高いSPI対策を軸としながらも、学生の多様なニーズにより一層寄り添った授業展開ができるよう、来年度以降さらなる検討と工夫を行いたい。

<秋学期>

(池袋)

秋学期は、正規学部生、正規院生、GLAP所属の学生が履修した。すでに日本での就職活動をしている学生が2名いたため、本科目で扱った就職問題の重要性を認識しており、熱心に授業に参加していた。遅刻や欠席する履修者もいたが、宿題の実施率は良好であった。

授業では、宿題で実施してきたワークシートの答え合わせを解説しながら進めたが、単調な流れを避けるため、自身の知識や自国の類似表現、文化を紹介し合いながら進めるなどの工夫をした。また、時折、就職活動の経験談を聞いたり、情報交換をしてもらった。しかしながら、個別にコツコツ学ぶタイプの履修者たちであったため、消極的な雰囲気ではなかなか活性化に繋がらなかったのは残念であった。また、試験の出題範囲が広いのか、復習が十分にできておらず、点数に結びつかなかった履修者もいた。履修者にとって難しいと感じる項目については、スケジュールに余裕がある回に復習の時間を設けるなど、テスト対策に向けた工夫をしていきたい。

(新座)

今学期の履修者は、4年生1名であった。当該学生はまさに就職活動中で、自身の就活でのSPI受験の難しさを話してくれた。学生1名ということで、学生にもやりにくさがあったと思うし、学生同士の交流や情報共有もできなかったことは残念である。本人の話を知ると、他科目の課題に熱心に取り組んだり、サークル活動も活発に行ったりしていた一方、本科目の予習や復習の力の入れ方が不十分だったように思う。就職活動をしている学生であるのに、SPI問題への意識づけをうまくできなかったことが課題であった。今後は、SPIは就職活動の重要な柱の一つであることをさらに伝え、学生が授業に全力で臨めるように工夫したい。

<ビジネスのための口頭運用力 A>

担当者名：<春学期> (池袋) 井上玲子、(新座) 和田晃子

<秋学期> (池袋) 泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 (池袋) 16 名、(新座) 1 名、秋学期 (池袋) 7 名

使用教材：独自教材

参考：

(池袋・新座)

『人を動かす！実践ビジネス日本語会話上級』、『BJT 模試と対策』

(新座)

『新装版商談のための日本語』、『新装版ビジネスのための日本語』

『改訂版留学生のための就職内定ワークブック』

『上級レベルロールプレイで学ぶビジネス日本語』

コースの目標

日本語の談話の特徴について理解を深めるとともに、敬語や待遇表現など、日本企業で働く際に必要となる口頭運用力を身につける。

授業の方法

<春学期>

(池袋)

授業では、ビジネスシーンの「会議」「電話」「商談」という 3 つの場面を取り上げ、そこで必要とされる会話力、対応力を養成するよう進めた。各回の進め方は、まずその回で扱う表現を確認し、ペアやグループで基本の会話練習を行った。そして、そのモデル会話を使って口頭練習を行った後、まとめとしてロールプレイを行った。各場면을学習した後は、ロールプレイテストを行い、テスト終了後にフィードバックを行った。さらに、並行してビジネス場面での聴解力をつけるため、「使用教材」の欄にある教材を用いた聴解練習も毎回取り入れるようにした。

(新座)

ビジネス場面における会話について、「会議」、「電話対応」、「商談」という場面に分けて、学んでいった。それぞれにいくつかのテーマが存在する。毎回の授業は、①ビジネス場面の聴解練習、②会話練習というように進めた。会話練習の該当トピックが終わった後に、ロールプレイテスト (計 3 回) を行った。このテストの新座キャンパスでの実施方法は、事前課題により自分で会話の流れを考えておき、教員を相手にロールプレイを行った。

<秋学期>

本授業では、1回の授業で①ビジネス場面の聴解練習、②会議、商談、電話対応などのビジネス場面における会話練習を行った。また、学習者の理解度に応じて、日本企業の商習慣の説明、敬語の復習、ビジネスや冠婚葬祭におけるマナーの指導についても適宜扱った。①は教材を用いた聴解練習の中で、営業、人事、総務、経理、決算に関する専門的な用語や日本企業特有の仕組みについても解説を行った。②では、ビジネスによくある場面にに基づき、必要な表現を導入しつつ、ロールプレイを通して実践練習を重ねた。また、新たな試みとして生成AIの使用を部分的に取り入れ、ビジネス場面においてどのようにAIを活用していくのがよいのか議論を行った。

結果と課題

<春学期>

(池袋)

今学期は、正規学部生13名と特別外国人学生3名の16名の学生が履修した。履修者数が比較的多いクラスであったため、学期前半のロールプレイ活動では、教員が履修学生全員のロールプレイの発表を確認し、その場でフィードバックをすることができず、次回に持ち越しということも度々あった。学期の後半で、ビジネス表現の確認で時間を使ってしまった回があった。ロールプレイの練習が十分にできず、全員のロールプレイの発表が次回に持ち越しとなってしまったが、翌週の授業では、前週の復習を兼ねてのロールプレイの時間を十分に設けることができた。また、ロールプレイが終わった学生には、新しいユニットの内容を確認し、会話の練習を指示することで、時間を有効に使うことができるようになった。履修者の人数に限らず、教員にとっても履修学生にとっても時間を有効に活用できるように、今後とも柔軟に対応したい。

どの学生も敬語の知識はあるものの、授業で扱ったビジネス場面に慣れておらず、敬語や扱った表現をスムーズに使用できない場面が見受けられたが、ロールプレイの練習やテストでは意識して使おうとする様子が見られた。最終週の授業で、「敬語やビジネス用語など、実際のビジネスシーンで使える表現や会話の流れを勉強したので、今後の就職活動やインターンシップで役立てたい」、「ロールプレイを通して、敬語が『知っている』ことから、『使える』ものになった」、「今回の授業で学んだ表現を、授業外で実際に使ってみた」等、大変有意義な学びとなったとの感想があった。今後も、単にロールプレイの練習に留まらず、履修学生が授業外でも実際に使えるように、授業内容や進め方を工夫していきたい。

(新座)

学生は、日本語能力の高い1名であった。大学は遊ぶ場ではなく学ぶ場だと割り切り、熱心に授業に取り組んでいたようである。3年生であるが、秋からイギリスへ1年留学するので、先行して就職活動もしており、社会人としてのビジネス日本語を身につけることに貪欲であった。日本語能力が高くても細かいところまで知らないこともあり、今後も日本語能力上級者にとって気が付きにくい学習ポイントを増やしていきたいと思う。1名であるため、授業が早く進んだ場合、日本の企業で外国人が遭遇して支障が生じ

るケースを取りあげて、教員と二人でなぜそのようなことになるのか話し合うこともあった。学生数が少ない場合もあるので、練習量を増やして効果的な運営になるように、工夫をしていきたい。

<秋学期>

今学期は、アルバイト経験の有無にかかわらず、ビジネス日本語に不慣れな学生が多かった。しかし、学生はいずれも授業に真剣に取り組み、新しく学んだ表現を理解し、積極的に使おうとする姿勢が見られた。そこで、日本のビジネスにおける考え方や背景にも触れながら、単なる知識としてではなく、場面に応じて適切に表現を選べるよう、具体例を交えて指導を行った。また、表現自体は知っていても、日本企業特有の文化や相手への配慮といった背景を十分に理解していない学生が多かったため、ケース学習などを通して理解を深める工夫を行った。その結果、日本企業の一般的な慣習への理解が進み、実際のビジネス場面で適切な表現を用いられるようになったという声が寄せられた。さらに、アルバイトやインターンシップの場で、学んだ内容を実践している学生も見られた。

今後の課題としては、AIを「正解を与える存在」として扱うのではなく、複数案を比較・検討するための補助的なツールとして位置づけ、表現の適切さやニュアンスを人が判断する力を育成することが挙げられる。また、個人情報や機密情報の取り扱いに対する配慮、適切なプロンプトを設計する力の育成も重要である。AIの特性や限界を理解したうえで活用する姿勢を身につけさせることが、今後の授業設計における課題である。

<ビジネスのための口頭運用力 B>

担当者名：<春学期> 富岡洋輔

<秋学期> (池袋) 長谷川孝子、(新座) 開講なし

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名、秋学期 9 名

使用教材：独自教材

コースの目標

ビジネスで必要とされる談話レベルの日本語力を、ソリューション・デザイン型活動を通して身につけ、より高度なビジネス日本語運用能力の獲得を目指すとともに、日本でのビジネスの進め方への理解を深める。

授業の方法

<春学期>

2 つの大きなテーマ（サントリーの新商品開発とエーピーカンパニー内の人材育成案）に関してアイデアを出し、最後のプレゼンテーションに向けて準備を進める形で、ビジネス日本語の実践トレーニングを

行っていった。毎回の授業では発表への進捗状況を実際の会社の会議を模して学生に発表してもらい、学生に向けてのフィードバックを行う形で展開した。

<秋学期>

初回の授業では「ソリューション・デザイン (SD) 型活動」の狙いや意義、進め方について説明した。2 週目以降は、学期を前半後半に分け、前半は「商品開発」、後半は「問題解決」をテーマとしたタスクを提示し、グループごとに SD 型活動を進めた。各回の SD 型活動と並行して、「会議とは何か」「会議の進め方」「会議で使われる表現や敬語」「議事録とは何か」「議事録の書き方」「目標とするスライド例」「グループ作業の進め方」など、本授業で必要となる基礎知識を確認する時間を設けた。また、グループ作業においては、互いの意見を尊重することの重要性を意識させた。これにより、学生が最終的なゴールを明確に理解し、グループメンバーと協力しながら作業を進められるようにした。SD 型活動中は、教師が各グループを巡回しながら活動の様子を確認した。授業の最後には、グループごとに会議内容の報告を行わせるとともに、クラス全体に対して内容面に関するフィードバックを行った。案が固まった段階で、1 回目のグループ発表を実施した。その後、グループ同士でコメントをし合うコンサル活動を行い、あわせて教師からもフィードバックを行った。それらの内容を踏まえて発表を修正し、最終発表につなげた。最終発表後には、教師から全体へのフィードバックに加え、個別フィードバックも行った。また、これらの活動とは別に、「商品開発」および「問題解決」に関する語彙リストを配布し、語彙定着を目的としたクイズも実施した。

結果と課題

<春学期>

正規学部生が 2 名、特外生が 1 名履修した。学生自体は大変協力的でいずれの活動にも積極的に参加してくれた。学生から出るアイデアも若者の目線を反映した新鮮のものであった。また、実際に使いながら日本語を学ぶということに新鮮さも感じているようであった。今回の授業では「商品開発」や「問題解決」が大きなテーマとしてあったが、実際に「どんな事が出来て、どうすべきなのか？」といったアプローチは個々の企業の歴史や理念、規模によって大きく異なる。例えば、「飲料の新商品開発」を考えたときに日本で大きなシェアを持つサントリーと比較的シェアの小さいポッカサッポロではやるべきことはまるで異なる。そこで、今後の課題としては授業の前段階として、二つの課題を講師がより具体的に設定し、学生にはアイデアを出してもらうことに専念してもらうことが望ましいと考える。「飲料の商品開発」ではなく「(日本一シェアのある) サントリーにおける夏の新商品開発」とするだけで具体性が増し、社会人経験のない学生もアイデアが出しやすくなると思われる。

<秋学期>

本コースの学習者は全員、ビジネスに関する知識や経験がほとんどなかった。しかし、この授業で求められる発表内容のゴールを明確に示すことで、何を行えばよいかを具体的にイメージできるようになり、グループ内での役割分担もスムーズに行われていた。SD型活動では、互いの意見を尊重しながら話し合い、意見をまとめようとする姿勢が見られた。日本語運用力にレベル差のあるクラスではあったが、全員が積極的に話し合いに参加していた。グループで意見交換を重ねる中で、伝えたい内容を明確にし、一貫性のある構成にまとめることの難しさを学ぶことができた。また、発表の場面では、ただ原稿を読み上げるのではなく、一貫性を意識し、伝えたいことに沿って効果的に話すことの重要性に気づくことができた。

本コースでは、SD型活動を軸に、商品開発や問題解決に関する語彙や知識に加え、会議の進め方、会議で用いられる表現、議事録の書き方、報告の仕方、グループ作業の進め方など、幅広い内容を扱った。今後も、限られた時間と学習者の既存の知識量を考慮し、扱う内容や支援の方法を整理しながら、より効果的に学生を導いていく必要があると考える。

<ビジネスメールと文書>

担当者名：<春学期>（池袋）泉大輔

<秋学期>（池袋）小森由里、（新座）開講なし

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期（池袋）25名、秋学期（池袋）11名

参考教材：村野節子、山辺真理子、向山陽子（2015）『タスクで学ぶ日本語ビジネスメール・ビジネス文書 適切にメッセージを伝える力の養成をめざして』スリーエーネットワーク
川島冽（2008）『5分で送信 ビジネスメール速書き文例集』すばる舎

コースの目標

日本語の書き言葉によるコミュニケーションについての理解を深めながら、ビジネスメール、報告書、依頼状などの様々なビジネス文書の読み方、書き方について学び、使えるようになる。

授業の方法

<春学期>

本授業では、①前回の課題へのフィードバック、②教科書におけるビジネス表現の導入および練習、③次回の課題の説明を行った。①では、学生が作成したメールの文面に個別にフィードバックを入れて返却し、クラス全体でもメールの文面の良い点と改善点を説明した。②では、教科書に掲載されているビジネス表現を取り上げて説明しつつ、関連する表現にも派生させながら指導を行った。③では、課題であるメールを書く上で設定されているビジネスシーンについてクラス全体で理解を深めるとともに、①～③の指導の際、文法・語彙的な言語面の助言だけではなく、担当教員の企業経験に基づき、ビジネスマナー、日

本企業における商習慣、就職活動で使える表現についても適宜説明を行った。

<秋学期>

教材にそって、コース前半はお知らせ、依頼、照会などのビジネスメールを、後半は議事録、稟議書、報告書などのビジネス文書を扱った。クラスでは、メールや文書の作成に役に立つ言葉や表現を導入し、それらを用いてメール文や文書を作成するという実践的な練習を行った。作成したメール文や文書は毎回提出させ、赤を入れて翌週のクラスで返却しフィードバックを行った。模範解答を示し、学生の間違ひが多かった箇所を指摘した。期末テストでは、学生が記録係という設定で会議の動画を視聴させ、議事録を作成させた。さらに、会議の出席者に議事録を送るメール文を作成させた。

結果と課題

<春学期>

教科書にある表現だけではなく、実際のビジネスで用いられる表現も扱ったが、就職や就職活動を控えている学生が多いこともあり、熱心に取り組む学生が多かった。また、今学期はキャリアセンターのイベントに参加する学生も数名おり、その学生から提出されたレポートも充実した内容であった。一方、受講者数が 25 名と大きいクラスサイズであったため、一人一人へのフィードバックは提出された課題に書き込む形が中心となり、個人との双方向的なコミュニケーションを実現するのは難しかった。そのため、なるべく一人一人を指名する、机間巡視の際に個別に質問を受け付けるといった工夫は行った。机間巡視の際には質問がよく出たため、そこで学生個人の疑問点の解決に努めた。クラスサイズが大きい場合のクラス内でのディスカッションの時間などをどのように捻出するかは今後の課題である。

<秋学期>

11 名が履修した。1 名は一度も出席しなかったが、残りの 10 名は大変真面目に取り組んでいた。授業中は教員に指摘された間違いや新しい表現の使い方などについて積極的に質問し、熱心にメールや文書を作成していた。大半の学生はメールや文書が求められる状況を容易に理解し正確な日本語で作成することができたが、1 名だけやる気はあるものの日本語力が十分ではなくクラスの内容理解が難しい学生がいた。しかし、コーディネーターが授業前に予習復習をサポートしてくれたお蔭で、当該学生はクラスについてくることができた。学生たちはこれまでビジネスメールも文書も書いたことがないということであったが、メール文の件名や挨拶表現、構成、ビジネス文書の書式など練習を重ねることで習得している様子が窺えた。文書の作成練習では、インデントがきれいに揃っていなかったり不必要にスペースが取られていたりしたが、期末テストの議事録はレイアウトがきれいに整えられていた。授業内でのメールや文書の作成練習にはピア・ワークを取り入れたかったが、時間がなくほとんどできなかった。互いの作成物をチェックできる時間が確保できるように授業運営することを今後の課題としたい。

2025 年度 Japanese Language and Japanese Culture A、B 授業記録

コース概要

J0 から J3 レベルまでの特別外国人学生を履修対象とし、日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学ぶ。

<Japanese Language and Japanese Culture A>

担当者名:<春学期> a クラス : 任ジェヒ、b クラス : 保坂明香

授業コマ数 : 週 1 コマ

履修者数 : 春学期 a クラス : 15 名 (GLAP6 名、PEACE2 名、他 7 名)、b クラス : 26 名

使用教材 : 独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

日本の伝統文化から現代文化に至るさまざまなトピックに触れることができるように、今学期は 1) 地理と観光、2) 県民性、3) アニメとマンガ、4) お祭り、5) 年中行事、6) お笑い、の 6 つのテーマを取り上げた。今年度より J0 から J3/J3S レベルまでのゼロ初級・初級クラスの学生のみ履修が可能となったため、授業は主に英語で行った。教師による講義だけでなく、日本人学生とのディスカッション、インタビュー調査、Kahoot や Slido を用いたクイズ、ゲーム、短冊作りなどの教室活動を行い、受講生の積極的な参加を促した。また、日本のグローバル企業に長年勤めているゲストスピーカーを招き、日本のビジネス文化や日系企業のグローバル化についてお話を聞き、ディスカッションする時間も設けた。学期末には学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

結果と課題

(a クラス)

「受講生の人数が 50 名近くと多いため、授業活動への参加がやや難しい」という昨年度の受講生からのコメントをもとに、その改善を図るべく、今学期は 2 クラスに分けて運営した。a クラスは、受講生の中でも日本語レベルが高い J3 および J3S の特別外国人留学生、ならびに正規学部生のみを対象とした。そのため、「やさしい日本語」で書かれた読み物や報道などの視聴覚資料を活用し、日本語を通じた日本文化・社会への総合的な理解を試みた。インプットの言語をやさしい日本語に変更しただけでなく、授業中

に行うミニプレゼンテーションも希望者には日本語で実施するなど、アウトプットの面でも英語のみからの移行を図った。英語と日本語が混在する環境となり、アクセスできるリソースも多様化したことで、ディスカッションではより豊かな意見が交わされた。一方で、今学期の課題としては、日本語での活動が増加したことに伴う学習サポートのバランスが挙げられる。今学期はグループ活動を多めに取り入れつつ、1 学期を通して学んだことを発表するプレゼンテーションは個人で実施した。やさしい日本語を用いた教材の最適な難易度設定や、留学生と正規学部生の協働のあり方、そして最終発表の形態（個人かグループか）について、どの方法が学習成果を最も可視化し、受講生のさらなる学習意欲向上に役立つか、次年度に向けてさらに検討を重ねていきたい。

(b クラス)

このコースには指定された教材や教科書がなく、授業担当者作成の資料、視聴覚教材を主教材として扱っている。加えて特徴的なのは、調べ学習やクラスメイトとのディスカッション、招待講師による講義、立教生とのビジターセッション、体験活動等の多様な学びを提供している点にある。学生達はこのような種々の学びを通して、日本文化についての知識や異なる価値観、自文化への気づきを得たようであった。最終課題でも興味を持ったテーマを掘り下げて論じるレポートが多く見られた。

学期を通じて、日本の言語や文化の入り口まで学生達を案内することを目標に教材を選択してきたが、こうした学生のフィードバックを概観すると、一定程度の効果があったと言えるだろう。今後も教材選び、授業活動に工夫をしていきたい。また、入り口をどこに設定するかもさらなる検討が求められる。最終課題にはレポートがあったが、学期を通してレポートを課したのはこの1回のみで、授業内での指導もほぼなかった。レポートの成績には構成や文章表現、引用が含まれるため、このような点を評価するのであれば、事前の指導や説明が必要である。評価の見直しに加え、最終課題としてレポートを課すことについても検討が求められる。

<Japanese Language and Japanese Culture B>

担当者名：<秋学期> 任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 27 名（GLAP5 名、他 22 名）

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

コースの目標を達成するために、今学期は1) 冠婚葬祭、2) 日本の教育、3) 日本の伝統的な遊び、4) 日本の歴史、5) 日本の労働（ビジネス文化と就職活動）、6) 日本のジェンダー問題、7) 日本のスポーツ、8) 日本のお正月、の8つのテーマを取り上げた。春学期と同様に、J0 から J3/J3S レベルの特別外国人留学生のみに履修資格があり、オリエンテーションにて主な使用言語は英語だと伝えていたため、授業は主に英語で行った。授業の前半では主に講義を行い、後半では理解の深まりにつながるさまざまな活動を実施した。たとえば、日本の伝統遊びの体験、受講生同士のディスカッション、日本人学生ボランティアへのインタビュー調査、Kahoot や Slido を用いたクイズ、ゲームなどである。また、昨年度と同様に、箏曲家を招き、日本の伝統音楽や伝統楽器についてお話を聞いた後、お琴の体験をする時間も設けた。学期末には、学期中に扱ったトピックを受講生独自の視点から考察した内容でプレゼンテーションを行い、その振り返りに基づき、最終レポートを作成してもらった。

結果と課題

今年度の最も大きな成果は、大幅に増やしたグループ活動や、日本人学生ボランティアとの教室外での交流活動を通して、受講生が多文化共生への意識を強く持てたことである。「日本」という共通のテーマを入り口としながらも、グループ内での活発なディスカッションを通じて、受講生自身の母国や他国の文化や社会についても頻繁に意見が交わされた。これにより、日本に対する理解にとどまらず、文化や社会の多様性を互いに学び合う非常に有意義な場となった。また、昨年度と同様に、日本の文化を日本語でどのように説明するかについて強い関心を持つ受講生も多かった。本クラスは文法や語彙の学習そのものを目的としたものではないが、言語と文化は不可分であるため、ワークシート等を用いて関連語彙を学べる工夫を継続したところ、最終プレゼンテーションで重要な表現を日本語で発表する姿が多く見られた。今後の課題としては、受講生の興味関心や多様なバックグラウンドに合わせ、教室活動やそこで用いる教材を継続的かつ柔軟にアップデートしていくことが挙げられる。なお、春学期から課題として挙げているプレゼンテーションの形態（個人発表かグループ発表か、どちらが学習成果をより可視化できるか）については継続課題とし、来年度も引き続き検討を重ねていく必要がある。

<Japanese Language and Japanese Society A>

担当者名：<春学期> aクラス：小森由里、bクラス：小松満帆

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期 aクラス：23名（PEACE11名、GLAP6名、他6名）、bクラス：24名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語お

よび日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

地域方言、社会方言、名前の変遷、ボディランゲージ、日本語の表記体系、日本の教育制度など日本語および日本社会に関するテーマを毎回1つずつ取り上げた。授業は、冒頭にそれぞれのテーマについて5問ほどの質問を学生に投げかけて考えさせた後、講義を行いながら質問の答えを示すという形式で進めた。授業後半には各テーマについて日本と学生の国を比較させ、類似点および相違点についてグループでディスカッションさせ発表させるなどして、学生の積極的な参加を促した。また、ビジターセッションを3回設けて日本人学生と交流する機会を取り入れた。3回のセッションでは、授業で扱った「地域方言」「若者言葉」「男言葉・女言葉」「名前(ファーストネーム)」「教育制度」について日本人学生にインタビューさせ、その結果をインタビューシートにまとめて提出させた。さらに、ゲストスピーカーとして神職を招き、神道や神社について講義をお願いした。その翌週の授業では、ゲストスピーカー宛てに礼状を書く活動も行った。期末レポートと最終発表は、クラスで扱ったものの中から1つテーマを選ばせ、リサーチクエスチョンを考えてインタビューなどの調査を行い、日本と学生の国を比較して考察させた。

結果と課題

(a クラス)

履修者数は23名で、その7割が本コースを必修科目として履修している正規学部生、3割が選択科目として履修している特外生であった。正規学部生の中には一度も出席しなかった学生が1名、4回しか出席しなかった学生が1名おり、結局最後まで出席したのは23名中21名だった。本コースではさまざまなテーマを取り上げたが、特に日本の教育と宗教に興味を持った学生が多く、期末レポートには教育を取り上げた学生が目立った。ゲストスピーカーの神職による講義とビジターセッションにおける日本人学生との交流も学生達は貴重な機会として捉えていたようである。

正規学部生と特外生が隔たりなく活発にやり取りできるように、毎回教員が異なるメンバー4~5名のグループを作って、グループディスカッションを頻繁に取り入れた。また、授業の理解度を測るために、クラスの最後に授業内容に関するクイズを実施した。特外生は自らの意思で履修しているため出席率が高く、いずれのテーマであってもディスカッションに熱心に取り組んでいた。その真摯な取り組み方はクイズの結果に現れており、特外生は常に高得点で、クイズの実施を授業に臨む動機づけになると前向きに捉えていた。一方、正規学部生の中には授業態度に問題のある学生が目立った。授業中に断りもなく退室してなかなか戻って来なかったり他の授業の資料を読んでいたりと、居眠りをしてディスカッションに参加しない学生もいた。今後は、すべての学生が前向きに取り組むよう、授業内容などを工夫したい。

(b クラス)

学期開始後3回目から2セッションに分かれ、bセッションは全員が特別外国人学生であったが、うち

3名が学期途中で履修を断念した。授業で扱ったいずれのテーマについても高い関心を示し、質問や発言が活発に行われる、意欲の高いクラスであった。最終発表およびレポートを見ると、地方方言、若者言葉、教育システム、名付けについて調査している学生が多く、自国の文化と日本とを比較し、日本のユニークさについて論じているものも多く見られた。短期留学生として来日し、日本語に囲まれ、リアルな日本を日々体感している学生だからこそその興味深い考察が多く見られた。

授業活動やビジターセッションでも、積極的に発言する学生が多く見られ、非常に活気のあるクラスであった。人数が多いクラスではあったが、臆することなくクラスメイトと交流を持ち、学生同士がよい関係を築いていたように見受けられる。ビジターセッションでは、クラス人数に対して非常に少ないビジターしか集まらなかったが、それでも日本語母語学生と話す機会を最大限に活かし、熱心に活動に参加していた。

一方で、クラスサイズの大きさから、なかなか発言ができない学生もいた。また、最終発表では、2コマの時間を確保したが、それでも一人の発表時間は非常に短く、不完全燃焼に終わったり、焦って発表するような場面も見られた。今後は、様々なクラスサイズに対応できるよう、発言の場面や発表時間など、配慮が必要になるだろう。

<Japanese Language and Japanese Society B>

担当者名：<秋学期> aクラス：小森由里、bクラス：任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期 aクラス：26名（PEACE 11名、GLAP 5名、他 10名）、bクラス：17名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する社会的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、日本語および日本社会への理解を深めることを目的とする。

授業の方法

授業では、日本語と日本社会に関するテーマを毎回1つずつ取り上げた。テーマは、日本の祝祭日、人稱詞、家族と家族間呼称、敬語、色・動物のイメージ、日本の住居と食生活、日本の社会問題と日本人の気質などである。毎回テーマについて講義をしたうえで、ディスカッションや発表をさせて学生の積極的な参加を促した。授業の最後には内容に関する復習クイズを実施した。日本人学生にも2回参加してもらい、色・動物のイメージ、呼称や敬語についてインタビューする活動を行った。また、短歌・俳句を作るという体験学習も行ったりした。さらに、ゲストスピーカーとしてビジネパーソンを招き、日本のビジネスについての講義をお願いした。期末レポートではコースで扱った中から1つトピックを選択させ、日本人を対象に調査を行ったり学生の国と日本との比較をさせたりしてまとめさせた。日本語でレポートを

作成する場合には初稿を提出させ、レポートに適した日本語や書式、引用の仕方などについて指導した。

結果と課題

(a クラス)

一度も出席しない学生が1名、また欠席が多く課題や期末レポートを提出せず最終発表もしなかった学生が1名いたが、大半は真面目に授業に出席し、質問や発表に積極的であった。授業で扱った日本語や日本社会に関するさまざまなテーマに関しては、毎回のクイズの結果から、学生がどのテーマにも前向きに取り組んでいたことが読み取れた。また、コース終盤で提出させた振り返りシートから、短歌・俳句や日本の社会問題、日本のビジネスに学生たちがとりわけ関心を持ったことがわかった。短歌・俳句に関しては、日本語がJ3レベル以上の学生がほとんどのため、知っている日本語を5-7-5や5-7-5-7-7の型に組み込んで自分の作品を作成し、色紙に筆ペンで清書するというのは楽しい活動だったようである。期末レポートでは、クラスの3分の1の学生が敬語を取り上げ、リサーチクエスチョンを考えて日本人にインタビューして結果を分析していた。短歌・俳句や敬語のように、学生が興味を持って取り組める授業内容を今後も工夫していきたい。

(b クラス)

bクラスの受講生は日本での生活が初めての交換留学生在が大半であったが、全員が極めて協力的かつ主体的に授業活動に参加していた。日本語や日本社会への関心のみならず、受講生同士の多様な文化的背景の違いに対しても強い知的好奇心を示す学生が多く、毎回の授業において活発な意見交換がなされた。とりわけ、各自が設定したRQに基づいて日本人ボランティアにインタビュー調査を行う時間では、多くの受講生が日本人学生の生の声を独自の視点から考察・分析し、深みのある議論を展開することができた。本クラスを通じて学生の知的好奇心を満たす多様な活動を実現できた一方で、こうした興味関心を一過性のものにせず、長期的な学習意欲へとつなげるための工夫が求められている。今後は、より長期的な視野に立った教室活動の設計を課題として検討していきたい。

2025年度 日本語演習 授業記録

コース概要

演習科目は、初級、初中級レベルの日本語を用いて、内容を学ぶ科目であり、演習1はJ2レベル、演習2はJ3レベル、演習3はJ4及びJ5レベルの学生を対象とするものである。演習科目は、いわゆる語学の科目ではなく、学生が身につけているレベルの日本語を「道具」として用いながら、演習1では「アニメ／日本の歌」、演習2では「映画／まんが」、演習3では「小説／詩」について内容理解を目指す科目である。

演習1～3の詳細は以下の通りである。

<日本語演習 1>

担当者名：<春学期> 小松満帆

<秋学期> 小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 18 名、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語という言語に関連する文化的・歴史的背景や事例を日本語の言葉や表現とともに学び、さまざまな日本文化の体験を通して、日本語という言語に対する興味を深め、日本語という言語を知ることが目的とする。

授業の方法

毎回の授業で、アニメを軸にテーマを設定し、教師による講義を行い、テーマについてディスカッションを行った。扱ったテーマは、アニメと歴史（日本社会とアニメ史の関連、アニメに見る女性像の変化）、アニメと社会（アニメに見る社会問題）、アニメと音楽（アニメソングの変遷）、アニメと経済（アニメリズム、推し活）、アニメと言語（役割語）、アニメと文化（アニメに見る食文化）である。毎回の授業では、テーマについてのブレインストーミング、教師による講義、ディスカッションの流れで進め、授業後にリアクションペーパーを提出することを課題とした。また、自国で人気のアニソンについて書くミニ作文のほか、中間プレゼンテーション（アニメの聖地巡礼地の紹介）、期末プレゼンテーション（自国で人気のアニメについての紹介とその理由の分析）をそれぞれペアで発表させ、期末レポート（授業で扱ったテーマを1つ選び、1つ以上の参考文献を用い、掘り下げることを課した。また、学期中2回、日本語母語話者学生ボランティアに参加してもらい、ビジターセッションを行った。

結果と課題

<春学期>

登録数は18名であったが、全く出席しない学生、途中から出席を取りやめた学生も出たため、最終的には16名というクラスであった。このコースは、日本語をできる限り使って、講義を聞く、ディスカッションを行う、ということを目指していたが、日本語で話したがらない学生が複数おり、それにより、日本語で話そうという熱意を持つ学生の意欲が削がれてしまう場面も多々見られた。しかし、中間および期末プレゼンテーションは日本語での発表であったが、中間プレゼンテーションの後に自信をつけ、徐々に日本語で話そうとする学生が増えた。それにより、最終的には、非常に高い達成感を持った学生が多く、よい雰囲気ですべてを終えることができた。

テーマについては、どれに対しても高い関心を持ち、最終レポートでは、よく調べ、練られた考察が多

く見られた。プレゼンテーションにおいても、興味のあるアニメという題材がテーマであったことから、質問やコメントも活発に行われた。自分の好きなことを日本語で説明できるという達成感が、今後の日本語学習の一助となることを願ってやまない。

課題としては、一部、アニメをほとんど見ない、という学生もおり、そういった学生には授業内で扱う例を完全には理解できない場合もあり、より配慮が必要であった点である。また、理解を助けるために語彙の英語訳を提示したり、一部英語にて説明する部分もあったが、それが逆に日本語使用の意欲を下げてしまった可能性も考えられる。今後も、学生の日本語力や興味を注意深く観察し、より効果的に活動を実施できるよう、工夫していきたい。

<秋学期>

6名という少人数のクラスであったが、履修者同士が非常によい関係を築き、積極的にコミュニケーションやディスカッションをする、とてもよい雰囲気のクラスであった。自分の持つ日本語を最大限に活用する、という目的に高い意欲を持つ学生ばかりで、積極的に日本語で話そうとする姿勢が見られた。中間発表や最終発表でも、日本語のみを用いて、アカデミックレベルの高い内容を自分の日本語で的確に話せた学生が多かった。

履修者全員が普段からアニメに親しみ、強い関心を持っている学生だったため、意見交換も活発に行われた。また、アニメだけにフォーカスするのではなく、経済や社会問題等、日本の時事にも関心を持ち、深い質問や考察をする場面も多く見られた。最終レポートでも、それぞれの選んだテーマについてより詳細に調べ、練られた考察が多く見られ、テーマに真剣に向き合っている様子が伝わってきた。

小さいクラスだったため、ボランティアを招いてのゲストセッションを数回企画したが、なかなかボランティアが集まらず、日本語母語話者と話す機会があまり取れなかったことが悔やまれる。自分が興味を持っている事柄について、初級レベルの日本語でも話すことができる、という達成感を自信に繋げ、今後も積極的に日本語を活用していってもらいたい。

<日本語演習 2>

担当者名：<春学期> 泉大輔

<秋学期> 泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名、秋学期 18 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本の映画、マンガ、ドラマをテーマとして授業を行う。毎学期、いくつかの作品を取り上げ、それらの作品を通して、現代日本の社会や文化、そして日本人の考え方などについての理解を深める。また、こ

のクラスは「日本語」の授業ではなく、これまで参加者が勉強してきた日本語を「道具」として使って日本文化や日本社会を学ぶことを目標としている。

授業の方法

<春学期>

授業は、日本の文化社会に関するテーマごとに、事前活動、本活動、事後活動の3つを2~3週にわたり実施するという構成で行った。

事前活動では、テーマに関するマンガを部分的に読み、背景知識の活性化を行った上で、このテーマについて学習・議論するために必要な語彙・表現を確認する。また、このテーマに関して知っていること、自文化ではどうであるのかについてクラス内で共有をする。必要に応じてテーマに関する文章を読んだり動画を視聴したりしながら、日本の社会文化に関する知識と理解を深めていく。さらに、翌週の本活動に向け、テーマに関する調査・準備を行う。その際、教員は適宜必要な日本語の表現などについてフォローを行う。本活動ではボランティア学生を招き、各学生がテーマに関して、日本と自文化を比較し、そこからわかったことをPowerPoint資料にまとめて発表を行う。クラスメイトやボランティア学生からの質疑を通して内省を促す。その後、少人数のグループに分かれて発表内容について議論したり、テーマによってはボランティア学生とともに協働タスクに取り組んだりしてもらった。事後活動では、本活動を各々振り返り、教員から個別にフィードバックを行った。

<秋学期>

基本的な進め方は春学期と同様であるが、扱うテーマが異なる。

結果と課題

<春学期>

授業は全体を通して安定した雰囲気の中で進み、学生同士、また外部の参加者とも安心してやり取りができるクラスであった。特にビジターセッションでは、発言に積極的な学生が多く、日本人ボランティアとの交流を通して実践的な日本語使用の機会を十分に確保することができた。留学生一人に対し複数のボランティアが関わる場面も多く、日本語を使って自分の考えを伝えようと試行錯誤する姿が随所に見られた。

学期当初は、人前で話すことや、日本語使用量の多い活動に対して不安を感じる学生もいたが、回を重ねるごとに自信をつけ、学期後半には自分の意見や考えを自然な日本語でまとめて話せるようになっていた点は大きな成果である。一方、授業内容に関する課題としては、マンガやドラマを扱った活動への対応が挙げられる。アニメを通じて日本語に触れている学生は多いものの、マンガの構成やドラマの会話の流れに慣れていない学生が多く、内容理解に時間を要する場面が見られた。今後は、こうした教材を導入する際の事前説明や活動の段階設定を工夫し、より効果的に活用できるよう検討していきたい。

<秋学期>

事前課題や準備にしっかり取り組み、本活動では調査内容を踏まえて自分なりに整理・考察した発表を行う学生が多く見られた。その過程で、日本の社会文化への理解が深まっただけでなく、自文化を改めて見つめ直す契機になったという声も聞かれた。また、ボランティア学生とのやり取りを通して、同じ日本人学生であっても社会文化に対する関心や捉え方が異なることに気づいた学生もおり、文化を一面的ではなく多様な視点から捉えようとする姿勢が育まれていたと感じる。

一方で、準備や分析が十分とは言えず、比較が表面的にとどまってしまった発表も一部見受けられた。しかし、そのような場合でも、既習の文法や語彙を用いながら、最後まで発表をやり遂げようとする前向きな態度が見られた点は評価できる。今後は、発表内容そのものに加え、構成の立て方や資料の示し方など、伝え方の工夫についても指導を行うことで、学生がより自分の意図を表現しやすい発表活動につなげていきたい。

<日本語演習 3>

担当者名：<春学期> 任ジェヒ

<秋学期> 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 32 名 (PEACE9 名、他 23 名)、
秋学期 25 名 (PEACE8 名、他 17 名)

使用教材：『レベル別日本語多読ライブラリー にほんご よむよむ文庫』アスク出版、
『日本語多読ボックス』大修館書店、『きまぐれロボット』角川つばさ文庫 など

コースの目標

プレイスメントテストで J4、J5 レベルにプレイスされた学生を対象とする。これまでに習った日本語の語彙や文型を用いて、できる限り日本語で授業を進める。参加者が「道具」として日本語を用いることによって、授業を理解し、日本の小説や詩についての理解を深めることを目指す。

授業の方法

<春学期>

演習 3A では短歌、俳句、短編小説を扱った。多読用の読み物「かぐやひめ」、「時そば」、「風呂敷包み」、「海幸山幸 日本の神話」、「注文の多い料理店」、「蜘蛛の糸」、「杜子春」、「吉備津の釜～雨月物語より～」、「走れメロス」のほか、星新一のショートショートなどを扱った。指定した読み物を読んだあとで、内容把握のためのワークシートの質問に答えて、印象に残った場面や感想を書かせたあと、グループと全体で確認した。J5 の学生と早く終わった J4 には、手書きであらすじも書かせた。全員で同じ読み物を読んだ

回もあったが、2つの読み物から自分に合ったレベルの読み物を選んで読み、同じ読み物を読んだ者同士で内容確認をしたあとで、別の読み物を読んだクラスメイトにあらすじを説明する活動をした回もある。学期末には各自が読みたい本を選んで読み、その読み物について紹介した。

<秋学期>

演習 3B では多読用の読み物「鶴の恩返し」、「まんじゅうこわい」、「馬小屋の火事」、「むじな」、「耳なし芳一」、「鼻」、「蜘蛛の糸」、「杜子春」、「日本の神話」、「クリスマスキャロル」「高瀬舟」のほか、星新一のショートショートを読んで、内容を確認したり、ディスカッションをしたりした。全員で同じ読み物を読んだ回もあったが、レベルに合った読み物が読めるよう、J4とJ5で異なる読み物を読ませた回もある。別の読み物を読んだクラスメイトにあらすじを説明する活動では、読み物を読んでいない相手や日本語力が低めの学生にも理解してもらえるよう、4コママンガを描かせ、それを見せながら話をさせた。また、J5の学生と早く終わったJ4には、手書きであらすじも書かせた。

演習 3B では、3Aの短歌、俳句のかわりに川柳と谷川俊太郎の詩を扱い、川柳や短い詩を書いて発表する活動を行った。学期末の最終発表では春学期同様、各自が選んだおススメの読み物を紹介した。

結果と課題

<春学期>

今年度も昨年度に引き続き受講者数が30名を超える、比較的規模の大きなクラスであった。毎週異なるテーマを設定し、多様な形態の授業活動を取り入れることで、受講生の知的好奇心を刺激するよう試みた。具体的には、グループ単位での4コマ漫画作成とそれを用いたあらすじの発表や、Kahootを活用した内容理解度の確認クイズなどを実施した。このような活動の多様化が、学生の積極的な授業参加を促したと評価できる。その反面、学生の読解力にレベル差があったため、グループワークにおいて作業進度にばらつきが生じ、一部の学生に長時間の待機が発生する事態が見受けられた。待機中は予習・復習等の個人作業の時間としていたが、日本の小説や詩への理解をより深めるための発展的な課題を別途用意するなどの工夫が必要であったと考えている。読解力の差に応じた柔軟な活動の提供を、次年度に向けた課題としたい。

<秋学期>

多数の履修者がいたが、熱心に取り組む履修者が多く、よい雰囲気の中で授業が展開された。今学期は、J4の履修者、非漢字間の履修者も多く、読解力や読むスピードの差が大きかった。そのため、J5の履修者やJ4で読むのが速い履修者には、あらすじを書かせたり、追加の読み物を読ませたりして対応した。また、担当の読み物を口頭要約し、レベルが異なる履修者同士に説明する活動も実施した。今後も履修者数の多さやレベル差の対応について検討が必要となるだろう。

クラスには、日本の文学作品が好きな履修者もおり、意見交換のペア・グループ活動や最終発表のディ

スカッション活動は活発に行われた。しかしながら、一部大人しい履修者もいたため、活動での積極性に欠けたことは残念であった。学生間で活発なやりとりをするためには、どのような工夫ができるのかは引き続き課題としたい。

2025 年度 総合日本語 4-6 授業記録

コース概要

J4～J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

<総合日本語 4-6A>

担当者名：保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

今学期は、これまで扱ってきた「地域の特徴、文化」に加えて「人々」という新たなテーマを導入した。これらのテーマを通し、学生が言語を運用しながら日本語能力を向上できるよう構成した。

読解では、まずワークシートに取り組んだ後、全体で内容確認を行ない、文章構成や表現、語彙にも注意を促した。分担読解も取り入れたが、読解はディスカッションや説明活動への前段階として位置付け、読後にはクラスメイトとの相互的な活動へ繋げた。各テーマの最後には、発表やレポートによる自己表現の活動を行ない、学習内容が定着するようにした。

今学期はまた、課題内容と授業活動をいくつか調整した。一つは、作文の書き直しではなく、発表原稿をレポートに替える課題を導入した点である。学期後半には、レポート内容を発表原稿へと替える活動も取り入れ、学生の現実に即した課題に変更しつつ、過度に負担がかからないよう配慮した。

加えて、授業時間内に個別学習の時間を設け、学生が自身の学習課題に取り組みながら、必要に応じて教師のサポートを受けられるようにした。学生はレポートのアイデアや構成、語彙・表現の適切さの相談などにこの時間を活用した。教師側も質問を待つだけでなく、準備段階に積極的に介入し、適宜問いかけることで学生の思考を深めることを試みた。このように教師の支援を前提とした課題であるため、課題の難易度は従来よりやや高く設定した。

結果と課題

本コースではこれまで、課題量が多いことや、学期後半に他科目の課題と重なり、発表準備不足や AI への依存が見られることが問題であった。そのため、課題意義を保ちながら適切な内容に精査する必要があった。今学期に行なった課題内容・授業活動の調整は、こうした問題への対応である。

学期中の学生の取り組みと学期末のパフォーマンスを振り返ると、複数の学生が変更の意図を理解し、提供された機会を活用し、最終的には自身の実力や努力をより発揮できたように思われる。AI に依存した発表・レポートも以前より減少し、授業評価アンケートでもコースや自身の学習に対する肯定的な評価が見られた。

一方で、時間を有効に使えない学生や、AI を用いたと推測されるパフォーマンスも一部に見られた。より多くの学生が課題意図を理解し、学習意欲に繋がるよう、引き続き課題内容と授業活動を見直していく必要がある。

なお、授業評価アンケートには「このコースでチャレンジができた」という声が複数見られた。異なるレベルの学生が科目の枠を超えて共に学ぶ「総合日本語」は、時に難しさも伴うが、挑戦の機会を提供するコースであることを改めて認識した。今後も本コースの意義や責任について継続して検討していきたい。

<総合日本語 4-6B>

担当者名：山本由美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

本授業では 視聴覚教材 を素材とし、3 つのテーマから現代日本社会や文化について、特に若者にみられる傾向や問題に関して様々な視点に触れ、学生が自国の状況と比較し、深く考察できるよう授業を進めた。3 つのテーマは、①「若者の消費行動と価値観」、②「イクメン」、③「若者と伝統」である。③のテーマは今回初めて取り組んだテーマであり、学生から希望を聴取し決定した。視聴覚教材を選ぶ際はコーディネーターに相談しながら進めていった。授業スケジュールとしては、1 つのテーマに 3 週かけ、3 テーマの終了後に最終発表の準備と最終発表を行った。1 テーマにつき、1 週目はテーマの導入・ウォーミングアップ→語彙リストの言葉の意味を確認（語彙リスト 1 は、1 週目の授業中に行い、語彙リスト 2 は 1

週目の宿題にして2週目に確認)→視聴覚教材を視聴→内容確認を行った。視聴覚教材は前半と後半に分けられているため、2週目は1週目と同様の流れを繰り返した。3週目はテーマについてディスカッションを行いクラスで意見を共有し、さらに発展的な活動としてテーマによって作文を書いたり、グループ発表を行ったりした。各テーマの終わりには学習した語彙や表現を復習するためのプリントを配布した。最終課題のプレゼンテーションは、授業で扱った3つのテーマの中から関連するトピックを学生自身が決め、プレゼンテーションを行った。

結果と課題

当初、履修は12名だったが、学期の始めから欠席が続いた学生がいたため、コーディネーターに確認してもらったところ履修を取りやめるとのことで、最終的には11名になった。この授業では、学生がテーマに関心を持つことでより積極的に活動に取り組めるのではないかという思いから、各テーマの導入に少し時間をかけ、授業中の問いかけやペアワーク、グループワークを多めに取り入れ、インターアクションの活性化を目指した。結果、ほとんどの学生はワークに積極的に参加し、課題にも真剣に取り組んでいた。中には、ワークにはほとんど参加せずマイペースな学生もおり、クラスのまとまりという点では少し気になったが、教師とのやりとりの際は問題なく応えていたので、学生なりの取り組み方があるのだと思い見守ることにした。最終プレゼンテーションの発表は5名と6名とに分かれ2週に分けて行った。それぞれの学生のプレゼン内容は、テーマや動画に触発された文化の捉え直しや個人の経験に引き付けて考えたものであり、非常に興味深かった。質問も多かったので、今後、可能なら発表後の質問の時間をもう少し長めに取ってもいいかもしれない。そうすることで、聞く側もテーマを自分事として捉えることにつながり、より理解が深まることになるのではないだろうか。ただし、学生にもよるので検討が必要である。作文課題は2回行い、個別にコメントをメールで返し、授業中は作文を書く時の形式面と内容面の注意点をフィードバックした。1回目のFBが2回目に反映された学生が多かった。今後の課題として、インターアクションやディスカッションをより活発に行い、対話を深めるにはどのような工夫が必要か考えていきたい。レベル差に配慮することも必要である。また、作文課題におけるAIの使用について、学生と話し合う機会があってもいいのではないかと考えている。

<総合日本語 4-6C>

担当者名：保坂明香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期10名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、

大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

コースでは、「ステレオタイプ」「日本に暮らす外国人」を主題とし、読解・ディスカッション・作文・発表活動を相互に関連づけながら、日本語の運用力の向上を図った。

テーマ 1「ステレオタイプ」では、新聞投書や社説を教材として使用し、ステレオタイプやエイジズムといった現代社会に関する課題について考察した。読解では、精読を中心に据え、表現や語彙、文構造を確認しながら内容理解を深めた。その後、要約や作文を通して考えを整理し、発表活動へとつなげた。発表準備では、インターネット調査、スライド作成、スクリプト作成を段階的に実施した。

テーマ 2「日本に暮らす外国人」では、在留資格や外国人労働者に関する統計資料のグラフ読解や、新聞記事の読解活動を実施した。グラフ説明の作文では、複数資料の比較や追加調査を課し、分析的に説明する力を養うことを目指した。

また、分担読解で扱った内容については、ポスター発表形式で説明させた。話し手は複数回説明を行なうこととし、相手や相手の理解に応じた説明を意識させた。さらに、説明の際は、作文を参照する段階と、要点を整理して参照せずに口頭で説明する段階を設け、要点から内容を構築して説明する力の育成を試みた。

最終発表のテーマはテーマ 1「若者」、またはテーマ 2「日本に暮らす外国人」から選択させた。授業内にスライドおよび原稿作成の時間を設け、語彙や内容理解に関する個別支援を行なった。

結果と課題

コース履修者は概ね高い学習意欲を示し、難易度の高い新聞記事や社説についても、語彙や表現を確認しながら読み進め、自身の意見形成へとつなげることができた。また、作文や発表では複雑な内容に挑戦する姿勢が見られ、AI ツールに過度に依存したと思われる成果物は少なかった。振り返りからは、日本語力の向上に加え、社会的知識の広がりも確認された。特に社会的テーマについては、議論を通して関心や理解が深まったことがうかがえた。さらに、ディスカッションや説明、発表等の経験を通して、日本語で意見を述べることへの自信の向上や自己課題の認識の高まりも見られた。

一方で、学習姿勢は真摯であるものの、授業への遅刻が多く見られた。また、活動難易度が高い場面では、口頭説明に苦戦する様子や原稿への依存が見られ、時間配分や質疑応答への対応など、発表スキルに関する課題も明らかになった。さらに、ディスカッションや説明活動においては、発言量や参加の仕方に個人差が見られ、全ての学生が十分に活動に関与できる授業運営について再考する必要性が示唆された。加えて、教材難易度と学習負担のバランスについても継続的な検討が求められる。これらを本コースにおける今後の課題としたい。

<総合日本語 4-6D>

担当者名：山本由美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 18 名

使用教材：独自教材

コースの目標

J4 から J6 の学生を対象とする。学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高めることを目指す。

授業の方法

本クラスでは、生活の中で昔から日本人が大切にしてきた習慣や行事などが季節ごとに紹介されている視聴覚教材 DVD 「しばわんこ和の心」を軸として授業を進めていった。初めにその季節にかかわる語彙の意味や使い方について担当を決めて発表し、語彙がイメージできたところで DVD を視聴した。視聴後は、日本の伝統的な行事やそれにまつわる日本人のものの見方や捉え方を理解し、同時に自国の文化と比較することで、互いの共通点や相違点を見出し、ディスカッションや発表などの活動を通じて言語化した。さらに、活動で得た気づきを作文として書くことで掘り下げた。授業は 1 課「冬」、2 課「春」、3 課「夏」、4 課「秋」の順で進め、日本語の総合的な運用力の向上を目指した。学期末には最終プレゼンテーションとして、それぞれの関心のあるテーマについてスライドを作成し発表した。

結果と課題

当初の履修者は 18 名であったが、学生から受講取りやめの申し出があり、コーディネーターの許可を得て承認したため、最終的な受講者は 17 名となった。この授業では、しばわんこ家族の生活を舞台に、四季折々の行事や習慣が描かれた DVD を中心に学習を進め、そこからさまざまな活動へと発展させていった。取り上げられる内容には、学生だけでなく日本人にとっても近年あまり見かけなくなった懐かしいものが多く、教師自身もあらためて「和の心」について考える機会となった。

学生にとっては初めて知る事柄が多く、良い意味での軽いカルチャーショックを受けた場面もあったようだ。しかし、その経験を通して日本文化をより深く理解するきっかけになったように思う。四季を通じて学びを重ねる中で、学生は日本の行事や習慣を知るほどに、自国の文化との共通点や違いに目を向け、捉え直す姿が見られた。また、日本文化だけでなく、クラスメイトの出身地についてもディスカッションや発表を通して知ることができ、一つのクラスの中で多文化的な学びが自然に生まれていたように感じる。日本にいるからこそ、自文化を客観的に見つめ直す機会にもなっていたのではないだろうか。教師自身も、日本文化を一方向的に肯定するのではなく、できるだけ客観的な視点を保つよう心がけた。学期を通して、学生はグループディスカッションや発表後の質疑応答で積極的に発言していた。また、教材や活動を通し

て、よりメタ的に考えを深めようとする学生も見られ、この科目が持つ可能性を感じた。

一方で、課題もある。第一に、課題の提出が遅れたり未提出となった学生が数名いたことである。未提出の多くは作文であり、書くことに苦手意識がある可能性が考えられる。作文へのハードルを下げ、楽しみながら取り組めるような活動をどのように組み込むか、今後検討したい。第二に、異文化理解を「共通点や違いの認識」にとどめず、さらにメタ的に捉えるための仕掛けや工夫が必要である。多様性豊かなクラスだからこそ生まれる多文化的な学びを、より発展させていける余地があると感じている。

2025 年度 漢字 授業記録

コース概要

J4以上の学生が履修することができるクラスである。学生は自分で漢字のレベルを選択し、学期中2回ある立教漢字検定に向けて、その範囲の漢字語彙を学習する。

担当者名：＜春学期＞ 山本由美子

＜秋学期＞ 山本由美子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 22 名 秋学期 22 名

使用教材：独自教材、立教漢字検定テキスト

授業の方法

＜春学期＞

授業は立教漢字検定のテキストを用いて、各履修者が決めたレベルのテキストに沿って学習を行った。テキストは初級 B1～B6、中級 I-A～I-G、上級 A-A～A-G の全レベルを対象とした。授業は、(1)漢字発見（協働学習）→(2)クイズ→(3)個別学習（ワークシート）→(4)個人化作文の順に進めた。

クイズは毎回のミニクイズに加えて、テキストが終了した後に実施するまとめクイズがあった。また、前半の最後と後半の最後にアクティビティとして、「漢字学習方法と漢字アプリの情報交換」（前半）、「はがきに好きな漢字を書く」（後半）を行った。協働学習の「漢字発見」では、履修者は宿題として次回練習する範囲の漢字を教室外で見つけて来て、漢字発見シートに書き、授業内で 2～3 名のペア・グループになって読み方、意味、用例などを発表した。個別学習は、テキストに対応したワークシートを使用して学習を進めた。授業内に終わらなかった分は宿題にし、次週に前の週のワークシートを提出してもらい、教師が時間内に添削して返却した。クイズは毎週行い、授業中に採点して返却した。授業時間の最後に 10 分ぐらい、練習した漢字の定着を図ることを目的に個人化作文を書いてもらった。これは成績には反映せず作文を書くことも学生の任意にしたが、ほとんどの学生が自分の文脈で書いていた。

＜秋学期＞

授業では立教漢字検定のテキストを使用し、各履修者が選択したレベルに沿って学習を進めた。テキストは初級（B1～B6）、中級（I-A～I-G）、上級（A-A～A-G）まで全レベルを対象としている。授業の流れは、①クイズ、②漢字発見（協働学習）、③個別学習（ワークシート）、④漢字を使った活動、の順で行った。

クイズ・漢字発見・個別学習は従来どおりの方法を踏襲したが、今学期はテキストの配布方法、ワークシートの提出方法、そして漢字を使った活動の導入において新しい試みを行った。これらは、学生がより漢字に親しみ、クラス内でのやりとりを増やすことで協働的な学びを促すことを目的としたものである。

具体的には、共有ドライブに学生のレベル別テキストをまとめたフォルダーを作成し、さらに個人フォルダーを設けて次回授業用のワークシートを入れた。学生は自分のフォルダーからワークシートを印刷して授業で取り組み、完成後は紙で提出せず個人フォルダーにアップロードする。教師は授業外でそれを確認するという方法を採用した。

④の漢字を使った活動については、学期初めに漢字学習に関するアンケートを実施し、学生の目標や希望を踏まえて内容を検討した。漢字マップの作成、読み方のバリエーションに注目する活動、ゲームなどを取り入れたほか、前半の最後には「筆ペンで好きな漢字をはがきを書く」、後半の最後には「四字・二字熟語を用いて座右の銘や今年の目標を書く」というアクティビティを行った。

結果と課題

<春学期>

この授業は学生によって学ぶレベルが異なり、ワークシートの個人作業の時間が長い。授業の始めに漢字発見を行いグループでの協働学習の時間にすることで、リラックスした状態でワークに取り組めるようにした。その後、クイズを行い、前週のワークシートを提出してもらう。教師はそれらをチェックして時間内に返却するのだが、学生は最初の方は割と静かに取り組んでいても、授業の終わり近くなると疲れてくるのか隣の学生との会話が多くなっていた。そのため、漢字と個人の文脈を繋げる個人化作文を書いてもらう活動を取り入れたところ、中には覚えたい漢字をいくつも入れてオリジナルの文を作り、絵も描き、一つのストーリーが生まれているものもあり、その想像力に驚くこともあった。漢字発見のグループワークと個別学習が授業時間のほとんどを占めるクラスだが、最後の数分間、書いた作文について話すことで漢字をツールに用いてコミュニケーションを取ることができた。最後の授業では、はがきに好きな漢字を書くというアクティビティを行ったが、ここでも学生は漢字だけではなく、諺や俳句を書いたり絵を描いたりして、1枚のはがき絵を完成させており、学生の創造力を実感した。今後の課題としては、授業内で行うタスクの再考である。この授業の目標の一つは立教漢字検定試験に合格することであり、授業内のクイズやワークシートが重要なタスクであることは間違いない。しかし、漢字検定合格という目標達成のためだけでなく、漢字の学習をより楽しく、興味深いものにするには、どのような工夫が必要なのかを検討する必要もあると考える。具体的には、多様な学習スタイルへの対応、ゲーム性を取り入れた学習方法の導入などを検討し、より効果的で魅力的な授業づくりを目指していきたい。

<秋学期>

まず、良かった点として、教師と学生、学生同士の距離が近くなったことが挙げられる。漢字発見の活動では、教師が各グループを回りながら学生の発表を共有でき、学生が選んだ漢字や発見場所から、それぞれの視点のユニークさや日常の中にある漢字への気づきを再確認する機会となった。ワークシートの取り組み方も、デバイスへの直接入力、印刷したシートへの記入、ノートへの書き込みなど多様であり、学生が自分に合った方法を選んでいた点はプラスに捉えられる。漢字を使った活動は、漢字検定直前を除き毎週実施した。日本人の名前や国名、生活の中の漢字の読み方をクイズ形式で扱ったり、テーマ別の漢字マップを作成したりと、どの活動にも学生は積極的に参加していた。前半・後半の最後に行った筆ペンによる作品制作では、完成後に作品共有の時間を設けたことで、互いの作品を作成者と作品を見比べて驚いたり納得したり首をかしげたりして楽しそうに鑑賞し合い、クラスに一体感が生まれた。一方で、今後検討が必要な点もある。第一に、ワークシートを提出しない学生が数名いたことである。提出方法が複雑とは考えにくく、レベルが難しいと感じたことが取り組みの消極化につながった可能性がある。第二に、レベル決めの際に高いレベルを選んでしまう学生がいた点である。友達と同じレベルで学びたいという理由も考えられるが、その結果、学習意欲が低下し、検定に出席しなかった学生もいた。レベル決めが学習に与える影響の大きさを改めて実感した。

今後の課題としては、レベル決めをこれまで以上に慎重に行い、授業内で丁寧にサポートすること、そして漢字活動のさらなる工夫である。今学期はコーディネーターの協力で複数の文献を参照できたものの、実施できた活動はその一部にとどまった。学生のモチベーションを高め、「漢字はおもしろい」と感じてもらうために、引き続き試行錯誤を重ねていきたい。

2025 年度 Business Japanese I/Business Japanese A 授業記録

コース概要

Business Japanese I/A は、経営学研究科国際経営学専攻の留学生を主な対象とするクラスで、文法を適宜導入しながら、ビジネス場面での日本語を実践的に学習し、運用力をつけることを目標とする。Business Japanese I は J4, J5 レベル、Business Japanese A は J6, J7 レベルの学生を対象とする。

<Business Japanese I>

担当者名：小松満帆、富倉教子、井上玲子、小森由里、清水慶子

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 1 名

使用教材：独自教材

コースの目標

限られたビジネス場面で日本語で適切にコミュニケーションを行うことができるようになること。

授業の方法

将来幹部候補となるビジネスパーソンを育成することを目的としたコースであり、ビジネス場面で使用される日本語力を向上させるべく、ビジネスにまつわる様々な場面で使用される洗練された表現の運用を目指す練習および活動、談話レベルでの運用力を高めるためのプロジェクト活動を行った。また、プロジェクトの発表場面として、セカンドステージ大学からの協力を得てのゲストセッションを6回実施した。

各回の授業では、①朝のロールプレイ、②オリジナル教材を用いたのキーフレーズの導入ならびに会話練習／ゲストセッション準備、③帰りのロールプレイを行った。①および③では、出勤と退勤人に同僚や上司と交わされることが想定される場面を提示し、日常会話をより自然に行えるようロールプレイを行った。②では、商談、会議、電話対応等のビジネス場面で適切に対応できるよう、表現や語彙の導入・練習を行った上で、総まとめとなるゲストセッションでのやり取りを想定した応用練習を行った。また、敬語を含め、対人関係に応じた基本的な言語表現の使い分けや、日常的なビジネス文書、メールの書き方などの基本も学び、ビジネス日本語能力テストに向けた聴解練習も取り入れた。

全6回のゲストセッションでは、コース前半では顧客から依頼されたポスターの作成、後半は新商品の提案を行った。セッションは毎回録画をし、後日フィードバックを行った。

結果と課題

履修学生は1名であったが、非常に出席率が高く、熱心に授業に取り組んでいた。毎日のクラスだったが、中弛みすることなく。高い意欲を保ったまま、一学期を終えることができた。学期開始当初は、初級が終わったばかりのレベルということで、語彙や表現が不足し、難しいと感じることも多かったようであるが、積極的に質問をし、学んだ表現や語彙をしっかりと身につけ、飛躍的な向上が見られた。毎日のロールプレイでも、初めは自然な日常会話に苦戦することもあったが、楽しみながら練習を重ね、会話力も伸びた。新しく学んだ表現や文型を使ってゲストセッションで実践を繰り返すことで、ビジネス場面で使用する日本語力を徐々に身につけ、学生自身の自信にも繋がったと思われる。

ゲストセッションでは、緊張感を持ちつつも、毎回明るく笑顔で課題をこなし、ゲストや教員のコメントにも熱心に耳を傾け、自主的に改善を目指す姿勢が見られた。1名ということでプレッシャーもあったであろうが、実際にビジネスの現場を経験されたゲストの方々との交流を楽しんでいる様子が見られ、多くの経験を積むことができた。

コース内では、スクリプトやスライドなどのセッションで使用する資料の作成をできるだけ早め、授業内でリハーサルを行う時間を多く取れるよう工夫した。セッションによって確保できた練習時間は異なるが、複数回練習を重ねたセッションでは成果が高かったため、今後も練習時間をできるだけ確保できるよう、スケジュールを検討する必要がある。また、忙しいビジネスコースに通う学生に負担がかかりすぎない

いよう配慮しながら、学生にとって学びの大きい授業内容・セッション運営を心掛けていきたい。

<Business Japanese A>

担当者名：保坂明香、長谷川孝子、小森由里、泉大輔

授業コマ数：週 5 コマ

履修者数：秋学期 開講なし

使用教材：独自教材

2025 年度 大学生の日本語 6-8 / 総合日本語 6-8 授業記録

コース概要

「大学生の日本語」は正規学部生の1年生が大学における学習を日本語で行えるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。「総合日本語 6-8」として特別外国人学生、正規大学院生、NEXUS、PEACE の学生も履修可能であり、様々な背景をもつ学生が、共に学ぶ機会を提供している。各科目の詳細は次に示す通りである。

<大学生の日本語 A6、7、8> <総合日本語 A6、7、8>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーション能力を高めることを目標とした。学期を通して、「ニュースの紹介と用語の定義（引用）」、「グラフの説明」、「調査の引用」、「アンケート調査」という4つのテーマを取り上げ、それぞれに必要な機能表現を導入・練習した上で、スライドを用いた5分間のプレゼンテーションを行った。スライドの最終ページには、各回の目標となる機能表現を取り入れたスクリプトも入れ、提出させた。プレゼンテーションの際には、ディスカッションのための質問も用意させ、質疑応答のあとでディスカッションも行った。テーマ1と3は個人発表とし、まずはグループに分かれて発表とディスカッションを行い、そこで得た自己評価と学生間評価をさせ、さらに教員によるスライドの添削をもとに修正後、改めてクラス内で発表を行った。テーマ2と4はグループ発表とし、Google スライドを用いてグループで一つのスライドを作成し、クラスの前で発表した。上記の発表のほか、即興で短いスピーチをする練習も取り入れ、その場で与えられたトピックについて短時間で準備し、スライドを使わずにスピーチし合うという活動も実施した。また、キャリアセンターと連携し、留学生のための就職ガイドの動画を視聴し、リアクションペーパーを書く活動も行った。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 15 名

結果と課題

本授業では、個人・グループ発表や即興スピーチなど、多様な発話活動を一学期を通じて行った。各ユニットでは、テーマに沿ってニュース紹介からデータ分析、アンケート調査へと段階的に発展させ、あわせて資料検索の方法や引用マナーについても指導した。学生たちは準備段階から意欲的に取り組み、グループ内での意見交換を重ねながら、発表に向けて自信を深めていった。互いの意見を尊重し合いながら学び合う前向きな関係性が築かれたことは、このクラスの学習成果に良い影響を与えたと言える。一方で、いくつかの課題も見受けられた。まず、日本への入国が叶わずオンラインで参加していた学生が複数いたことから、対面とのハイブリッド授業において調整の難しさが生じた。特にグループ発表の場面では、教室内の学生とオンライン学生との間で円滑な意思疎通が難しく、役割分担や意見の整理に支障をきたす場面もあった。また、グループ内でのコミュニケーションの取り方についても、試行錯誤する様子が見られた。今後は、グループ構成の工夫や事前打ち合わせの支援、さらに共同作業ツールの活用を通じて、より一体感のある協働を促す工夫が求められる。加えて、一部の学生において課題提出の遅れや提出ミスが確認された点については、提出管理の体制を見直すとともに、早めのリマインドや個別フォローの強化が有効だと考えられる。全体として、学生たちは学習に前向きに取り組み、発表を通じて達成感を得ることができた。今後は発表技術のさらなる向上を図りつつ、すべての学生が安心して取り組める学習環境づくりに努めていきたい。

[社会・経営]

担当者名：清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名（総合日本語 6-8A 2 名、他 5 名）

結果と課題

履修者 7 名のうち、1 名は開講当初から欠席が続き、別の 1 名も学期末直前に欠席しがちとなり、最終発表まで行ったのは 5 名であった。学生の中で日本語レベルや熱意に差があったが、14 回の授業を通じて課題に熱心に取り組んだ学生は日本語の運用能力に大きな伸長があった。意欲的な学生は、教師側が準備

したサンプルをそのまま使うのではなく自らが関心を持つ社会的なテーマを選び、先行研究や新聞記事を検索する過程でもこれまでに学習したスキルを積極的に活用する姿勢が見られた。課題としては、聞き手とのコミュニケーションを意識した発表を心がけることが挙げられる。最終発表までに複数回の発表を行い、クラスメイトからのコメントシートに書かれた内容（声の大きさ、話すスピードなど）は改善されたが、アイコンタクトやディスカッション時にクラスメイトの反応を見てから進めることなどは、今後も教師の働きかけが必要であることがわかった。

[経済・理学]

担当者名：長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 19 名

結果と課題

日本語運用能力が高くなく、発表や機器の操作にも不慣れな学習者が多かったため、教える情報を整理しながら、理解度を確認しつつ授業を進めていく必要があった。様々な工夫を重ねた結果、学習者は発表の基本を身に付けることができた。しかし、クラスメイトとの話し合いがうまくいかず、不満を抱く学習者も一部見られた。今後は、話し合いをどのように進めればよいかを考えさせるとともに、日本語で交流する楽しさに気付いてもらえるような活動の時間も、可能な範囲で設けていきたい。学習内容が豊富で学びの多い授業だが、学生がじっくり考える時間がやや不足している印象があり、今後はその確保の仕方も検討すべき課題である。

[法学・異文化]

担当者名：＜春学期＞ a クラス：清水慶子、b クラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 17 名（PEACE 6 名、他 11 名）、b クラス 16 名

結果と課題

(a クラス)

本クラスは、「大学生の日本語 A」の履修者 11 名、「PEACE6-8D」の履修者 6 名が受講した。他学部のクラスと比べると履修者の背景が多様であり、授業内で行われるグループ活動時に学生同士がその多様性を楽しみながら活発なやり取りを行う様子が見られた。出席率、課題提出率が高く、授業活動にも熱心に取り組む学生が多かった。開講当初は 1 学期目の学生が 2 学期目の学生の積極性にやや臆するような様子が窺えたが、2 学期目の学生が良い刺激となり、クラス全体が良い話し手、良い聞き手として発表に参加するようになったことも良かった点である。今後は、内向的な学生をどのようにグループ活動に導くか、

また、そのような学生が含まれるグループに対して教師はどのような働きかけが必要なのかについて考察を深め、全員が安心して参加できる教室作りに取り組んで行きたい。

(b クラス)

今学期、「法学・異文化」b クラスは、漢字系と非漢字系の学生 16 名が受講した。日本語を「聞く」力、「話す」力に差がみられたため、今学期の主な課題はレベル差の対応であった。特に、受講生同士の活発な意見交換が求められるグループ発表のとき、発表準備のプロセスそのものを楽しみながら、しっかりアカデミックジャパニーズが学べるようにするためには、受講生にどのような働きかけが必要なのかについて工夫を重ねてきた。たとえば受講生の興味関心や学習スタイルを十分に考慮したうえでグループを編成したり、グループ活動があった日は活動から得た気づきや感想を共有する時間を設けたりした。

その結果、教師からの指示がなくても、自ら学習上の悩みや課題を共有する受講生が増え、グループ活動に欠かせないチームワークの構築にポジティブな影響があった。また、教師への質問にも積極的な態度が多く見受けられ、発表に必要な日本語の表現だけでなく、非言語行動やスライド作成時に必要な PC スキルなど、多岐にわたる話題がトピックとしてあがった。

大学生に求められるスキルに対して理解を深めながら、多くの学生が課題に一生懸命に取り組んでいたため、最終発表では全グループが 1 回目の時よりも完成度の高いプレゼンテーションを行った。しかし、どのグループに参加をしても消極的な態度をとる学生がいたため、常にリーダーシップを発揮する受講生には大きな負担があったのではないかと思われる。レベル差の対応とともに、受講生一人ひとりが大学での学びに積極的に、かつ自主的に参加できるようにするためには、どのような働きかけが必要なのかについて、今後さらに工夫を重ねていきたい。

[観光]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名

結果と課題

5 名の登録であったが、1 名が休学となったため実質 4 名のクラスであった。学生の取り組み態度は 4 名のうち 3 名は非常に真面目で、単独での発表もペアでの発表も課題の目標をきちんと確認し、4 つのテーマ全てに真摯に取り組んだ。その結果、授業が進むにつれ、目に見えて発表の能力が伸びていった。1 名は遅刻が多く懸念したが、課題には取り組み、ペア発表においても相手に大きな迷惑をかけることはなかった。ただ、遅刻してくることで聞き逃すことも多く、特に単独の発表では、求められていることからずれた形で課題が提出されていることもあった。他の学生の真面目さからも学び、授業の参加度が上がることで、学習成果にもつながることを学んでほしいと感じた。全体としては本授業の目標である基本のプレ

ゼンテーションのしかたは身についたと思うので、今後は考察を深め、また聞き手として良い質問ができるようにすることも課題としたい。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名

結果と課題

7 名中 3 名の学生がビザの発給の遅れによる移動があり、5 月に入って全員が対面で参加できるようになるまでは少し落ち着かないスタートであった。その中でも多くの学生は真摯に課題に取り組み、スライドの形式、発表の表現など本授業で目標とする基本的なスキルを身につけることができたと思う。最終発表ではアンケートの作成と実施、結果のまとめと図表の作成、結果の分析などにおいて、それぞれの得意な能力を活かして、グループで力を合わせて取り組んでいる様子が観察された。ただ 1 名は遅刻、欠席が非常に多く、課題の提出も遅れがちで、グループワークでの貢献度も低かった。今後は他者と責任を持って協働できる能力や時間管理の大切さについても、授業の早い段階から伝えていきたい。

[心理・福祉]

担当者名：齊藤紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 6 名

本クラスの課題の一つはレベル差への対応であった。1 名極端にレベルの低い学生がいたため、その理解確認とフィードバックにはかなりの時間を要した。また欠席と遅刻の多い学生も 1 名おり、テーマ 2 と最終発表 2 回のグループ発表において、その 2 名と組むことで他の学生の負担がかなり大きくなることが懸念された。ただ、グループの他のメンバーは状況を受け入れ、グループとしての自覚を持って発表をまとめたことは評価できると思う。またレベルの低い学生も最終発表では自分の能力の範囲で課題に真摯に取り組み、その結果、最終発表はテーマ 1、2 と比べると、かなり良くなっていた。全ての学生が発表の基本的なスキルは身につけることができたと思うが、発表の際の聞き手を意識した話し方についてはさらに練習が必要である。また本クラスでは、学生が指示をきちんと理解していないことも何度かあり、そのため後半のアンケート調査の進捗も遅れがちであった。今後はクラス全体に向け予定を伝えるだけでなく、各自が確実に課題の内容や予定を理解しているかを確認しながらクラスを進めることもクラス運営上の課題と言える。

[GLAP]

「大学生の日本語 A」は「Japanese Language and Japanese Society A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 B6、7、8><総合日本語 B6、7、8>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レジュメ、レポート、論文を書く際に必要な技能を身につけることを目標とした活動を行った。教材の『上級日本語教科書 文化へのまなざし』のうち「国際共通語」と「フリーターと仕事」を取り上げ、それに関する2つのテーマを扱った。資料1は共通読解として全員が同じ教材を読み、内容の理解を行った。資料2では分担読解の形式を取り、AとBから各自読み物を選択肢、その内容について発表できるようにレジュメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方を学び、リアクションペーパーを書いた後で、複数の資料を引用して「国際共通語」についてのレポートを作成、リライトも行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会

[文学]

担当者名：栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期14名

結果と課題

受講者は14名であった。遅刻・欠席を繰り返し、課題の提出が滞る学生もおり、毎回の声掛けを心掛けた。授業ではペア・グループでのディスカッションを多く取り入れ、協力して課題に取り組む姿や、熱心な議論が頻繁に見られた。特にテーマ②では、多くの学生が高い関心を示し、現代社会における自国の若者の雇用問題について、他国の学生と情報交換しながら問題解決に向けた議論を重ねていた。

課題としては、レポートについては引用を基に自身の意見を展開する書き方がほぼ全員に定着した一方で、レジュメ作成では箇条書きではなく要約形式にするなど、フォーマット面に未定着が見られたことである。今後は、定着を促すための指導法の工夫が求められる。

[社会・経営]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 7 名

結果と課題

今学期は、大学生の日本語 B クラスの学生が 5 名、総合日本語 D6-8 クラスの学生が 2 名の合計 7 名がこのクラスを履修した。履修学生は、真面目に活動に取り組み、一つ一つの課題をしっかりとこなしていた。また、授業運営に非常に協力的であったので、一学期間を通して順調に授業を進めることができた。

レジュメに関しては、「テキストの文章をそのまま抜き出して書いている」、「資料の必要な情報が抽出されていない」「不必要な箇所を入れている」等、まだ課題も見られるが、箇条書きや記号などを用いて、構成や視覚的な工夫が見られた。一方で、テキストの見出しをそのまま使用するよう指示したが、自分で見出しを作ってレジュメを作成していたり、レジュメではなく、要約文を書いて提出したりする等、教員の指示通りに提出しなかった学生もいた。授業内でのフィードバックで詳しく説明をしたつもりであったが、次のテーマのレジュメでも一部改善は見られたものの、すべての改善点を克服することはできなかった。口頭でのフィードバックだけでなく、視覚的にも理解できるようなフィードバックを行ったが、学生に理解を促す更なる工夫が必要である。

レポート作成では、引用の仕方、根拠の提示、参考文献の書き方、引用文と自分の意見との関連性等、まだ改善しなければならないことはあるが、基本的なレポートの作成スキルを身につけるといふ今学期の目標は概ね達成したように思われる。

秋学期のクラスでも、今学期学んだことをさらに発展させると共に、各々のレジュメやレポート作成の課題点を学生自身で把握し、克服していってほしい。

[経済・理学]

担当者名：長島明子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 19 名

結果と課題

履修登録者は 19 名だったが、最後まで出席したのは 17 名だった。学生ははじめに課題に取り組んだ。ほとんどの学生がレジュメ、レポート、リアクションペーパーの作成の経験がなかったため、リアクションペーパーは 1 回目は 200 字書くのがやっとという学生もいた。レジュメ、レポート作成では何をどう書いていいのかわからない学生もいた。しかし、繰り返し説明し、練習を重ねていった結果、多くの学

生がレジュメは資料の内容のポイントを押さえ、箇条書きにしてまとめられるようになった。レポート作成でもしっかりした構成で自分の意見が述べられるようになった。学生も確かな手ごたえを感じたと思われる。ただ、何人かの学生のレジュメには短い文を羅列しただけのものも見られたので、読解資料の内容を過不足なくまとめて箇条書きができるように授業を工夫したい。

[法学・異文化]

担当者名：＜春学期＞ a クラス：嶋原耕一、b クラス：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 a クラス 15 名（PEACE 5 名、他 10 名）、b クラス 16 名

結果と課題

(a クラス)

真面目な学生がほとんどであり、遅刻や欠席も少なく、提出物も期日までに出していた。そのような取り組みの中で、アカデミックライティングの基礎は十分に身についたのではないかと考えている。課題として、秋入学の学生の学習動機を維持させることに、ときに困難を感じた。春入学の学生らと同じ熱量で取り組んでもらうことで、ピア活動も活発になり、学習効果も高くなると考えている。秋学期に比べて難易度が低くなったと感じてしまう学生もいる中で、どのように学習動機を維持させる工夫ができるかが、今後の教師としての課題である。

(b クラス)

16名の登録者のうち、途中から1名出席しなくなった。うち、2名～3名の学生が、提出が遅れることがあったが、1名をのぞき、基本的にはすべて提出された。レジュメの書き方、レポートの書き方、リアクションペーパーの書き方など、学習者にとってはじめてのことばかりであったため、最初の提出物にはいろいろと指導することがあったが、2回目以降は改善されており、レジュメもリアクションペーパーもテーマ2の際には初回の提出でかなり改善されていた。しかし、レポートにおける引用の方法についてはまだ課題が残っている。本文の中で引用した部分における書き方が不完全であったり、レポートの中で自分の意見と参考文献の内容を混在させるような書き方が散見された。今後の課題としては、直接引用のみならず間接引用をした場合の意見の書き分けなどについてもしっかりと指導していく必要がある。

[観光]

担当者名：栃木亜寿香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 5 名

結果と課題

5名登録のうち1名休学で、実際は4名と少人数ではあった。学生同士の関係は良好で、互いに協力しながら授業に取り組む様子が見られた。国際語や若者の雇用といった現代社会における課題については、鋭い洞察に基づく高度なディスカッションが展開され、自国との比較を通じて解決策を模索する真剣な議論が頻繁に行われた。学生からは、「リアクションペーパーやレポートの基礎的な書き方を一から学ぶ貴重な機会となった」とのフィードバックが得られた。

課題としては、引用資料を基に自身の意見や論を展開する基礎的な文章構成の未定着が挙げられる。引用自体は行われていたものの、筆者名漏れや引用形式の運用に課題が見られた。今後は、授業内で繰り返し到達目標を明示するとともに、適切な引用方法の復習や定着を図るための指導法の工夫をしていきたい。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名：森山仁美

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期7名

結果と課題

学生たちは大変真面目で、出席率も良好で、課題も全員期日を守って提出した。また、指示されたことをすぐに行動に移してくれたため、大変指導しやすいクラスであった。受講生が7人だったため、レジュメやレポートのフィードバックには個別指導を取り入れた。これまで日本語でレジュメもレポートも書いたことのない学生が大半であったが、レジュメに関しては、コースを通して2種類の資料を読み、それぞれの資料に対してレジュメを書く練習ができたため、2回目のレジュメは1回目のものより体裁も整い内容を簡潔にまとめることができるようになった。リアクションペーパーも同様に2回練習したため、2回目には書き方のコツが掴めたようで、書くスピードが上がった。レポートは、まずアウトラインを作成させ、次に原稿の作成をさせるなど段階を経て指導した。見出しの書き方、表記ミス、引用の書き方のミスもあったが、概ねフィードバックを活かしよく書けていた。コースの振り返りでは、学生達から、大学で必要な日本語能力を向上させることができた、レポートの書き方が理解できて良かったという声が聞かれた。今後でもできるだけ個別指導を取り入れ、丁寧なフィードバックを心掛けたい。

[心理・福祉]

担当者名：栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期6名

結果と課題

登録者は6名であったが、1名の出席が初回から滞った。また遅刻・欠席しがちな2名に関しては頻繁に声掛けをおこなった。学生同士が励まし合いながら課題やディスカッションに取り組む様子が見られ、リアクションペーパーやレポート作成が初めての学生が多かったこともあり、「この講座での学びは役立った」との声が寄せられた。

課題としてはレポートやレジユメの基礎的な書き方の定着が挙げられる。学んだことを適切に運用できるようより練習する場が必要である。また、口頭での産出に課題がある学生は、グループ活動が困難な場面も見られ、学期を通じて大きな改善には至らなかったものの、学期当初と比べると日本語での発話に一定の向上が認められた。今後は、日本語能力に差がある学生同士の活動や、学生への個別支援の工夫が必要である。

[GLAP]

「大学生の日本語 B」は「Japanese Language and Japanese Culture A」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture A」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 C6、7、8><総合日本語 C6、7、8>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、聴く・話す活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、プレゼンテーションのしかたを身につけることを目標とした活動を行った。春学期に学んだ機能表現を復習しつつ、比較対象、有識者の見解への同意、部分的な同意と反論のための機能表現をあらたに導入し、スライドを用いた5分間のプレゼンテーションを計4回行った。発表スライドにはディスカッションの質問の含めるよう指示し、質疑応答の後でディスカッションをさせた。テーマ1は個人発表とし、それぞれが作成したスライドを用いてグループ内で発表、そこで得られた自己評価および学生間評価、教師によるスライドの添削をもとに修正後、再度グループ内で発表した。テーマ2と3はグループ発表とし、Google スライドを活用してスライドを作成、クラスの前でグループごとに発表を行った、最終課題は個人発表とし、授業で扱った「比較」「同意」「反論」からテーマを決め、自分で探したデータあるいは有識者の見解を引用した上で、意見を述べる内容とした。発表はクラスの前で行った。また、上記のプレゼンテーションのほか、将来の就職活動を視野に入れ、「高校時代に力を入れたこと」というテーマで自己分析を行い、グループで共有した後、文章にまとめて1分スピーチを行う活動も実施した。

使用教材

独自教材

[文学]

担当者名：小松満帆

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 14 名

結果と課題

登録は 14 名であったが、1 名が一度も出席しなかったため、実質 13 名での授業となった。全員が春学期からの継続生であった。学生は概ねまじめで、熱心に授業に取り組んでおり、1 名を除き、出席率、課題提出率も非常に高かった。教員による説明やフィードバック、注意点をきちんと受け止め、それを課題に反映させる学生が多く、スライド、発表とも、実力がつき、その質が向上していった。グループ活動においても協力的な学生ほとんどで、グループ内で話し合いを重ねながら、着実に準備を進める姿が見られた。また、クラスメイト同士の仲が良く、明るく笑いもある、よい雰囲気での授業を進めることができた。

課題としては、引用や考察については、正しく方式を守り、考えを深めた学生が多く見られた一方で、質疑応答やディスカッションでは積極的なインターアクションが少なく、発言をする学生が限定的になってしまった点が挙げられる。個別に話すとき積極的に発言するが、クラス全体の前になると緊張したり遠慮したりすることで発言が少なくなってしまうのが残念である。今後は、より積極的に意見が述べられる発表での雰囲気づくりと、自分の考えを端的かつ正確に伝えられる練習ができるとういだろう。

[社会・経営]

担当者名：高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 4 名

結果と課題

出席していた学生は毎回の課題、および最終課題もきちんとこなしていた。発表する回数が増えるにつれて、発表時に大切な聞き手を意識することやわかりやすく伝えることなどに気を配れるようになっていったと思われる。今後の課題としては、積極的な取り組みを促すような工夫である。本クラスの履修者はオリジナルのテーマで発表するというよりは、練習用のスライドを用いて発表するといったような場面が多くあったため、独自性のあるプレゼンを意識するよう授業で適宜伝えていけたらと思った。

[経済・理学]

担当者名：武田聡子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 19 名

結果と課題

本授業の履修者は、中国と韓国の学生がおおむね半々のクラスで、母語が共通の者同士が近くに座り絶えず母語での私語が多く、騒がしいクラス運営になっていた。教室が狭いこともあり、学生を動かす余裕がないため、席替えはままならなかった。しかし、クイズの際は、机を並び替えてスクール形式で実施するなど、慣れ合った雰囲気にならざることを無いうようにメリハリをつけることを心掛けた。グループ活動での協力関係が良くなく、グループであっても個々に自分の担当スライドを作り、一連の流れが一貫していなかったり、自分が担当していないスライドについては全く無関心であったり、グループで発表をする意味があるのだろうかという疑問に感じるものがしばしばあった。一方、スライドの内容、特に最終発表スライドは個人個人が個性豊かなトピックを選び、充実した内容になっており感心した。発表の仕方は最後まで改善できない人もいたが、スライドの内容はこのクラスで学んだことが十分生かされていると感じた。今後の課題は、グループ活動でいかに協力関係を築き、全体でまとまった発表が実施できるかである。

[法学・異文化]

担当者名：<秋学期> a クラス：長谷川孝子、b クラス：高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 a クラス 19 名(PEACE5 名、他 14 名)、b クラス 21 名

結果と課題

(a クラス)

教師の話にきちんと耳を傾ける学習者が多く、互いに協力しながら学ぶことができるクラスであった。発表内容に関しては、スライドの見やすさや構成、出典・参考文献の書き方、正確な語彙や表現、発表の仕方など、様々な課題が見られたが、ポイントを絞ってフィードバックを行ったことで、少しずつ改善がみられるようになった。今後も、分かりやすい発表とするためには、授業で指摘してきた点について、学習者自身が重要性を意識しながら丁寧に準備を行っていく必要がある。一方、クラスメイトとの話し合いや発表後のディスカッションに関しては、全体として活発なやりとりが行われた。しかし、思うように話ができない学習者も数名見られたことは、今後の課題として挙げられる。

今後は、正確な語彙や表現を確認するだけでなく、話し合いの中でどのように発言すればよいか、また相手の意見をどのように受け止めればよいかについても意識化できるような機会を設けたい。その上で、日本語を用いてやり取りを行うことへの不安を軽減し、交流する楽しさに気づいてもらえるような時間を、

可能な限り確保していきたい。

(b クラス)

アカデミックプレゼンテーションを4回実施する機会があったため、どのような発表が望ましいかを回数を重ねるにつれて理解が深まっているように感じた。論理構成やスライドのデザインだけでなく、モニターや原稿を見過ぎずに、聞き手を意識した発表ができるようになっていった。

今後の課題としては、欠席しがちな学生への対応である。特にグループで発表をする場合、欠席が出てしまうと、ほかのメンバーに負担がかかることになるため、そのような事態に備え、メンバー間で密に連絡などを取っておくことをあらかじめ伝えておく必要があると感じた。

[観光]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期6名(総合日本語6-8C1名、他5名)

結果と課題

登録は6名であったが、1度も授業に参加せず休学となった学生がいたため、実質5名での授業となった。春学期からの継続生に加え、1名総合日本語の履修者が加わったが、その学生も既に口頭発表の基礎はできていたので、特別な手当は必要なかった。学生は概ね真面目で、1名を除いては出席率、課題提出率とも高く、その結果、回を重ねるごとに着実にスライド、発表ともにその質が向上していった。テーマ2と3のグループ発表においても、協力的かつ真摯に課題に取り組む様子が見られた。課題としては、考察が深められる学生ではあったものの、それを簡潔に言語化することがまだ十分ではなかったことで、今後、発表だけでなく、質疑応答やコメントなどにおいても、端的に意見が述べられるような練習もできると良いと思う。遅刻欠席の多かった学生に対しては、大学生活における自己管理の大切さについて、もう少し厳しく伝えるべきだったと反省している。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

結果と課題

数名に遅刻や欠席、課題の提出遅れがあり、最終発表が終わるまで、気の抜けないクラスであった。中でも出席率が非常に低い学生が1名と前半はきちんと出席できていたものの、後半に入って欠席が増えた

学生が1名いた。いずれも、こちらから連絡をとり、様子を聞くことも多く、グループ発表でもこれらの学生が入っているグループでは、必ずしも負担が平等ではなかったのではと思う。その中でも、全体として見ると、全員が本授業で目指す基本的な口頭発表の技術は身につけられており、最終発表では、ほとんどの学生が原稿を読むことなく発表することができていた。課題としては、発表後に質問が出ることがほとんどなかったことである。今後は聴衆として他者の発表をよく聞き、質問したり、ディスカッションにも参加できるようなスキルの育成についても考えていきたい。

[心理・福祉]

担当者名：斉藤紀子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名（総合日本語6-8C1名、他6名）

結果と課題

1名が初回しか出席しなかったため、実質6名のクラスであった。今期から入った総合日本語の学生が、明るく、また能力も高かったので、どちらかというと静かで個性的な学生揃いのクラスをいい形で牽引してくれた。レベルの低い学生が1名いたが、他の学生がグループ活動などで当該学生と組むことを嫌がったりすることもなく受け入れ、活動に取り組んでくれたことは良かったと思う。出席率は全体によかったため、それを反映する形で、それぞれの学生が確実に自分のもとしたレベルより高いプレゼンテーションの能力を身につけることができたと思う。課題としては、独自の発想を持った学生が多かったためか、時に求められた枠に収まっていない発表になったことである。今後、どのような発表においても、まず課題で求められていることを確認し、定められた形式や内容の中で独自性を発揮できるような指導を工夫していきたい。

[GLAP]

「大学生の日本語 C」は「Japanese Language and Japanese Society B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Society B」部分を参照のこと。

<大学生の日本語 D6、7、8><総合日本語 D6、7、8>

コースの目標

大学における学習、生活に必要な日本語の基本的スキルの獲得を目指す。

授業の方法

各学生の日本語力に配慮した形で、読む・書く活動を中心に据えた内容重視型の授業を行い、読解力を高めるとともに、レポートや論文を書く際に必要な力を身につけることを目標とした活動を行った。学期

の前半には『上級日本語教科書 文化へのまなざし』の「個性と学び」、後半は生教材の「AI」に関する読み物を扱った。それぞれのテーマについて、資料1は共通読解として全員が同じものを読み、内容の理解を行ったが、資料2では分担読解とし、AとBの読み物を分担して読み、その内容について発表できるようレジユメの作成を行った。さらに、リアクションペーパーとレポートの書き方について指導し、リアクションペーパーが書いた後で、複数の資料を用いて、書くテーマについてのレポートを作成した。春学期の大学生の日本語B科目では直接引用を中心に学んだが、秋学期の大学生の日本語Dでは直接引用の復習と共に間接引用も行い、総合的に引用の練習を行った。

使用教材

近藤安月子・丸山千歌、2005、『上級日本語教科書 文化へのまなざし』、東京大学出版会
新井紀子、2018、『AI vs. 教科書が読めない子どもたち』、東洋経済新報社
井上智洋、2018、『人工知能と経済の未来——2030年雇用大崩壊』、文春新書
小林雅一、2017、『AIの衝撃——人工知能は人類の敵か』、講談社

[文学]

担当者名：栃木亜寿香

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期15名

結果と課題

初回から2名が欠席したため、最後まで出席したのは13名であった。13名全員が春学期からの継続生であり、通年で資料読解およびレジユメ・レポート作成能力の向上が見られた。特に、資料を読み解きレジユメ形式にまとめるスピードや、複数の資料から課題を見つけ論じるための形式・方法（直接・間接引用）が多くの学生に定着した。

一方で、レジユメとレポートの形式混同、参考文献リストにない情報の本文記載といった初歩的なミスが、講師によるフィードバック後も改善されない学生が散見された。チェックシートを用いた自己修正も特にミスの多い学生には機能しておらず、今後はより効果的なフィードバック手法や、確実な修正を促す方法が課題である。また、欠席・遅刻が多い学生への対応を含め、大学生活の基本マナーについても指導が必要である。

[社会・経営]

担当者名：長島明子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期5名

結果と課題

今学期は全員が春学期からの継続生だった。5名のうち1名は初回から欠席し、もう1名は休学したので、最後まで出席したのは3名だった。この3名ははじめに課題やクラス内での活動に取り組んだ。レジュメは2つ書いたが、全員2回目のほうが内容の要点を押さえてうまくまとめられていた。ただ、箇条書きがうまくできない学生もいた。レポートは内容、構成、論の進め方などはよくできており、レポートの基本的な書き方は身についたが、引用のしかたや参考文献の書き方には細かいミスがあった。リアクションペーパーについては2回目のほうが資料の内容をよく理解して、自分の意見が述べられていた。ただ、今一步踏み込んだ意見を述べるのは難しいようであった。今後は箇条書きの練習に時間をかけられるよう、リアクションペーパーは資料を深く読み込めるよう、授業を工夫したいと考えている。

[経済・理学]

担当者名：井上玲子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期19名

結果と課題

履修学生は、春学期に「大学生の日本語B」を履修しており、授業の進め方、課題の流れについては把握していたものの、長期の夏季休業期間を挟んでいたため、春学期に扱った学習項目を忘れていた学生も多かった。そこで、新しいテーマに入る際には、春学期に学習した項目について学生に確認しながら、授業を進めていった。テーマごとの課題については、各々の学生は、一つ一つの課題を毎回しっかりとこなしていったが、締め切りまでに提出できなかった学生も数名いた。提出を促す声掛けを何度も行った効果もあり、宿題提出率は高かった。

今学期残念だった点は、学期の初回から遅刻が多かったことである。授業開始時にクラスにいたのが数名で、その後遅れて学生が教室に入ってくるが多々あった。このクラスだけでなく他の授業の課題を夜遅くまで取り組んでいる学生にとって、1限からのクラスに参加する大変さは理解できなくもない。しかしながら、授業の始めに実施するクイズや、リアクションペーパーを作成して提出するなど、成績に影響する活動もあることから、大学生活を送る上で、今後は時間管理の意識を持った授業参加が必要になるであろう。

秋学期も春学期と同様に、レジュメやレポートの書き方を学んだ。レジュメに関しては、正確な日本語でのまとめ方(要約)、箇条書きにしておらず文章で作成、学生自身で内容を解釈して作成、必要な情報の整理が不十分などの課題が多く見られたが、構成や視覚的な工夫がなされていて、これまでに学んだことを活かして作成できている学生もいた。レポート作成では、引用の仕方や参考文献の書き方、事実なのか自分の意見なのかがわかりにくい、引用した内容と自分の意見との関連性が見られないなどの課題があっ

た。レジュメとレポートに関しては、一対一の個別フィードバックを毎回行い、一人一人の課題点を説明する時間を設けた。フィードバックをしっかりと聞いている学生は、修正版ではきちんとフィードバックの内容が反映されていたが、一部フィードバックの内容を反映できていない学生もいたのが残念である。

このクラスの目標は概ね達成した学生もいたが、目標を一部達成できず、課題を残した学生も数名いる。今後は自分の課題点を常に意識して、履修課題に自主的に取り組んでいってほしい。

[法学・異文化]

担当者名：<秋学期> aクラス：武田聡子、bクラス：清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 aクラス 20名 (PEACE5名、他 15名)、bクラス 21名

結果と課題

(a クラス)

当該クラスは、先学期から引き続き大学生の日本語を履修している学生と、今学期から加わった学生がいた。先学期から継続している学生は比較的指示を理解しておおむね課題をこなすことができていたが、新規の学生たちへの指示がうまく通っていないことが徐々にわかり、個別に対応するようにした。テーマ 1 でできなかったことをテーマ 2 では改善できたものもいたが、なかなか改善できないものもあり、今学期が終わる直前に添削したレポートやレジュメをみて、指導が足りなかったことを残念に思った。今後の課題としては、日本語力に差がある学生への指導方法を工夫する必要があると考える。

(b クラス)

履修者 21 名のうち、2 名のみが秋学期からの履修者で、19 名は春学期に「大学生の日本語 B」を履修した学生であった。総勢 21 名の比較的大きなクラスであったが、春学期から履修している学生達の間には人間関係が形成されていたこともあり、小レポートやレジュメの発表、ピア・チェックなどのペアワーク、グループワークは概ね順調に行われていた。一方で、クラスメイトとの活動になじめない学生数名については、遅刻・欠席が目立ち、課題提出も滞りがちであった。履修者数が多いため個別フィードバックの多くは、紙媒体やデータによる返却となったが、課題に主体的に取り組む学生が多く、教員からのフィードバックの意図をよく理解していた。今後の課題としては、春学期に学習した内容を秋学期からの履修者にどのようにフォローしていくか、また、協働に苦手意識を持つ学生への働きかけが挙げられる。今後も、全員が安心して参加できる教室づくりに取り組んでいきたい。

[観光]

担当者名：山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 6 名（総合日本語 6-8D1 名、他 5 名）

結果と課題

休学者を除く実質 5 名の出席者は、授業の参加態度が極めて熱心で、課題の提出率も高かった。欠席がらの学生もいたが、学期が終わる前には反省して未提出課題を全て提出した。院生 1 名を除く学部生 4 名が春学期からの継続履修であり、レジュメやレポートなどの書き方、グループワークの進め方などがある程度身につけており、スケジュールは順調に進められた。またクラス内は友好的な雰囲気、毎回組み合わせを変えてのディスカッションやピア・レスポンスも、活発に意見交換して進められていた。提出課題の内容も十分に目標を達成していた。コースの振り返りでは、授業で「役に立った」と感じた内容に、「グループでの話し合い」と「教師からのフィードバック」を挙げる学生が最も多く、「授業は役に立った」「授業目標を達成した」と感じていた。一方で「リライト」についてはあまり評価されなかった。リライト課題は評価対象だがフィードバックがないので、その効果を実感しにくいかもしれない。

[スポーツウエルネス・政策]

担当者名：森山仁美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 9 名（総合日本語 6-8D 2 名、他 7 名）

結果と課題

秋学期から 2 名の学生が加わり、クラスの活動に真面目に参加する姿勢が見られた。課題の提出に関しても、全員が期日を守り、熱心に取り組んでいた。その結果、レジュメ作成においては、グラフの説明や一文の長さを工夫し、読み手にとって分かりやすい資料を意識して作成できるようになった。また、レポート作成では春学期の学習を活かしつつ、間接引用や要約にも取り組んだ。

引用表現の書き方には、まだ細かな誤りが見受けられるものの、自身の意見を論理的に述べる日本語力は概ね身につけてきたと考えられる。今後の課題としては、引用表現の正確性の向上が挙げられ、この点については練習を重ねながら段階的に定着を図っていききたい。

クラス内の雰囲気については、ほとんどの学生が協調的に活動に取り組んでいたが、活動内容に応じて参加方法を工夫しながら進めた。今後は、授業内の活動において、クラス全体の相互交流が促されるよう引き続き留意していききたい。

[心理・福祉]

担当者名：山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

結果と課題

履修登録者は7名であったが、そのうち1名は一度も出席せず、毎回6名の出席であった。1限の授業であったため、遅刻がちの学生もいたが、どの学生も授業中はまじめで、熱心に課題に取り組み、課題の提出率も高かった。大学院生1名以外は全員が春学期からの継続履修であり、レジュメやレポートなどの書き方、グループワークの進め方などがある程度身につけており、スケジュールは順調に進められた。グループワークはあまり得意でなく、活発に意見を交換するということにはなかったが、決められた活動には参加し、課題にも黙々と取り組んだ。コースの振り返りでは、授業で「役に立った」と感じた内容に、「レポートのアウトライン作成」と「レポートの本文作成」「教師からのフィードバック」を挙げる学生が最も多く、「授業は役に立った」「授業目標を達成した」と感じている学生が多かった。一方で、リライトやグループワークへの評価は低かった。実質レベルが3という学生も在籍していたため、特に母語の異なる学生とのグループワークは、お互いに大変だったと思う。1回の授業内でも何度かグループを組み替える工夫はしたものの、グループワークが苦手な学生への配慮は今後の課題である。

[GLAP]

「大学生の日本語 D」は「Japanese Language and Japanese Culture B」と併置のため、「Japanese Language and Japanese Culture B」部分を参照のこと。

2025年度 NEXUS プログラム 日本語科目 授業記録

コース概要

本学では2022年9月より新しい外国人留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」を開始し、より多くの外国人留学生を受け入れ、本学内に一層の国際交流を図ることになった。このうちNEXUSプログラムは、入試時点では日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる日本語能力（日本語能力試験N3程度）を目安として求めている。NEXUS日本語科目は、9月に入学した正規学部生が4月から既存の学部カリキュラム（日本語による授業）で学べるよう、アカデミックジャパニーズを学ぶためのコースである。各科目の詳細は次に示す通りである。

<NEXUS 日本語 A>

担当者名：<秋学期> 長谷川孝子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

読解教材を軸に、ディスカッション、リアクションペーパー作成、要約、分担読解、レジюме作成、プレゼンテーション、小レポートの作成など、様々な練習を行った。読解教材としては、「若者」、「観光」、「創造性」に関する記事を使用した。授業では、まず記事を読む前に関連するトピックについて話し合い、その後、必要に応じてキーワードの確認を行ったうえで、各自が読解に取り組む流れで進めた。読解後は、内容確認に加え、前述した各種練習を通して理解を深め、意見を述べる力の育成に繋げた。最終テーマである「創造性」の回では、「創造性を育むためにはどのような教育が必要か」というテーマで小レポートを作成させた。

結果と課題

読解に関しては、7名中4名の学習者にとって、授業で取り扱った読解教材は難易度が高かった。非漢字圏出身の学習者は、未習の語彙が多い中で内容を理解する必要があり、読解に苦勞する様子が見られた。また、漢字圏の学習者についても、日本語の語彙や文型を十分使いこなせない場合には、自分の意見をわかりやすく説明することに苦戦していた。しかし、レベル差に配慮した教材や活動を取り入れることで、徐々に読解に取り組む意欲が見られるようになり、読む力も着実に向上していった。

レポートに関しては、引用時の表記誤り、不要な箇所まで引用してしまう点、筆者の意見に対する解釈のずれ、一部根拠が不十分な意見展開、構成上の課題などが見られた。しかし、フィードバックと修正を重ねる過程を通して、各自が自分に不足している点に気づいた様子うかがえた。複数回のフィードバックと文章例を用いた確認を行った結果、最終的なレポートは、各学生の学習段階から判断すると、十分な達成状況にあった。授業で扱った新聞記事を引用し、意見の補強を行いながらレポートを書くという基本は、概ね理解できるようになった。今後も、各学生の習熟度や背景に配慮した、継続的な指導が求められる。

<NEXUS 日本語 B>

担当者名：<秋学期> 長谷川孝子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んだり、調査をしたりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期

から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

近年の消費者行動をテーマとし、分担読解、ディスカッション、プレゼンテーション、小レポートの作成を行った。連載記事の読解後には、理解の確認と意見整理を目的として、定期的にリアクションペーパーを作成させた。また、同一の記事、あるいは担当箇所を各自で読解した後、ペアやグループで内容理解を深め、要点をスライドに整理して発表する活動も取り入れた。これらの活動に加え、学期中盤にはアンケート調査活動を実施した。近年の消費者行動に関するテーマと問いを各自で設定し、アンケート調査を行ったうえで、スライドを作成し、10分程度のプレゼンテーションおよび質疑応答を行った。最後に、同じ内容を基に小レポートを作成させた。

結果と課題

読解に関しては、レベル差に配慮した教材や活動を取り入れたことで、学習者は読む意欲を失うことなく学習を継続することができた。ディスカッションにおいても、積極的に自分の意見を伝えようとする姿勢が見られた。また、アンケート調査では、各自が関心のあるテーマを設定して取り組んでおり、主体的な学習態度がうかがえた。発表についても、回を重ねるごとに、スライド見やすさや話し方を工夫し、聞き手を意識した発表へと繋がっていった。

一方で、アンケート内容の発表に関しては準備時間が十分に確保できなかった点が課題として挙げられる。今後は、練習およびフィードバックの時間をより多く確保し、十分な準備期間のもとで、フィードバックと修正を複数回行ったうえで発表させることも、一つの方法として考えられる。そのような指導を行うことで、発表への理解が深まり、学習者の自信に繋がる可能性がある。

<NEXUS 日本語 C>

担当者名：<秋学期> 小森由里

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

視聴覚教材を視聴してその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

10分ほどのテレビ番組を視聴覚教材とし、番組内容に関する練習問題をさせて内容の理解を確認したう

えで、ディスカッションしてリアクションペーパーを作成させた。コースを通して、「市役所の仕事」「高度経済成長」「SDGs」「男女平等」「少子高齢化」と5つのテーマを取り上げた。「市役所の仕事」に関連するビジターセッションを設け、日本人学生と将来の仕事についてディスカッションを行った。「男女平等」では、日本のこれまでの男女平等への歩みを踏まえ、学生の国における男女の在り方についてPPTを用いたプレゼンテーションを行い、小レポートを作成させた。小レポートはフィードバックをして修正稿を提出させた。

結果と課題

履修学生は7名と小さいクラスではあるが、中級、中上級、上級と日本語レベルがさまざまな学生が混在していた。そのため、それぞれの日本語力が向上するように授業を運営するのが大きな課題だった。

中級の学生にとっては、中上級、上級レベルの学生の存在は、自分の日本語力が十分ではないことが認識でき、日本語学習の大きな動機づけになったとみられる。実際にディスカッションでの司会の仕方や意見の述べ方を彼らから学ぶことができたようであった。コース開始当初は司会をさせてもたどたどしかったが、終盤には参加者の意見をまとめたりコメントをしたりしながら話し合いが進められるようになった。

一方、中上級、上級の学生は、視聴覚教材の内容を十分に聞き取り意見を述べるができるため、PPTの作成方法やプレゼンテーションの仕方、小レポートの書き方を学んでもらいたかったが、それらが十分に身についたとは言えない。小レポートを書く前にはアウトラインを提出させたが、論理展開に問題があったり、引用をせずに自分の考えを主張したりするレポートがあった。最後のクラスでは個別にレポートのフィードバックを行ったが、アウトラインの必要性を含め、教員の指摘を真摯に受けとめ今後活かしてもらいたい。

<NEXUS 日本語 D>

担当者名：<秋学期> 小森由里

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

視聴覚教材を視聴したり、資料を読んだりして、その内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。

授業の方法

「都市問題」と「メディア・リテラシー」という2つのテーマを取り上げた。「都市問題」については、20分ほどのテレビ番組3本を視聴覚教材とし、聞き取った内容をメモさせたり内容に関する練習問題を

させて番組の理解を確認したうえで、ディスカッションを行いリアクションペーパーを作成させた。また、日本人学生をオーディエンスとして招き、学生の国の都市問題について PPT を用いたプレゼンテーションを行った。同じテーマで小レポートも作成させた。「メディア・リテラシー」に関しても同様に、20 分のテレビ番組を教材として聞き取り練習、ディスカッションを行った。さらに、メディア・リテラシーについての資料を分担読解し、担当箇所の内容を PPT にまとめて発表させた。

結果と課題

履修学生は中級、中上級、上級と日本語レベルがさまざまではあったが、総じて真面目に授業に臨んでいた。そのため、コースが進むにつれてさまざまな力が身に着いていく様子が見て取れた。コースはじめは 20 分のテレビ番組の内容をメモするのが容易ではなかった学生が、練習を重ねて概要をまとめられるようになった。また、PPT を用いた発表は 2 回行ったが、1 回目の「都市問題」の発表では、ほとんどの学生が PPT の 1 枚のスライドに情報を詰め込み過ぎて文字が小さく読めなかったりスライドの作成にばかり時間をかけてしまい発表の練習ができていなかったりと問題が多かった。しかし 2 回目の「メディア・リテラシー」の発表では、スライドを簡潔にまとめ、内容もわかりやすく説明することができた。小レポートも初稿に対する教員のコメントを受けて、修正稿では十分に書き直されていた。一方で、コース後半にはレポートの修正稿の提出が遅れたり授業態度に問題のある学生もいた。必要に応じて学生に動機づけを行い、日本語学習への意欲を持続させるよう工夫することを今後の課題としたい。

<NEXUS 日本語 E>

担当者名：<秋学期> 小林友美

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

学部の学修のために必要な日本語力、姿勢、行動について理解し、実践することができる。また、所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

授業の方法

この科目は NEUS 日本語 I クラスと連動する形で進めた。各学部学科が指定する図書を読み進めていくために、学期開始時は、漢字語彙リストの使い方、オンラインツールの利用方法、図書館のデータベースの利用方法、読解ストラテジーなどを指導した。さらに、論理的かつ批判的に考える力が求められること、資料を調べた場合には出典を示す必要があることなど、大学で期待されることを伝えた。

また、自身の日本語学習の課題を明確にし、自律的に学んでいくために、学期開始時に目標と課題を考える時間を設け、学期中盤と最終日にはこれまでにできるようになったことを振り返って、今後の目標と課題を考え、それをクラスで共有させた。

さらに、専門分野の内容について説明したり、意見を述べたりする力を養うために、Iクラスの課題図書で学んだことのうち、他の学部の学生に紹介したい内容を発表してディスカッションをするという活動を行った。

冬休みの課題としては、次学期からの講義に備えるために、各学部に関連のある動画を視聴してノートを取り、リアクションペーパーを書かせた。

結果と課題

今学期は、中級、中上級、上級の7名の履修者が参加した。過去最多の履修者数であったため、発表を円滑に進められるよう、教師と履修者全員でスライドを共有するなどして、発表時間の管理を徹底した。これにより、毎回、授業時間内に全員の発表が実施でき、履修者は、指定された発表時間を意識して準備を進めることができたようである。レベル差対応としては、日本語学習のためのオンラインツール（漢字の読み方、意味を調べるツール、ウェブサイト上の漢字にふりがなをふるツール等）の紹介と実践をしたり、発表に関して、履修者に合わせた個別の口頭フィードバックを実施したりした。発表の回を重ねるごとにスライドの構成や話し方が改善されたが、学術的表現を意識した発表については定着が難しかったように感じる。また、発表内容に、自分の考えを盛り込むことはできるが、情報を整理してキーワードを絞って分かりやすく伝える点についても練習が必要だと感じた。そこで、学部に着地するための意識づけや活動の動機づけを強調していきたいと考えている。また、今後も履修者数が増える見込みであるため、引き続き、授業運営についても検討していきたい。

<NEXUS 日本語 F>

併置科目の J4、5、6 文法、J6-8 日本の社会と文化 C を参照

<NEXUS 日本語 G>

担当者名：<秋学期> 清水慶子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつける。

授業の方法

今学期は以下の4つの内容について漢字指導を行った。

- (1) (入学前課題) 漢字クイズの実施 (1、2週目)
 - (2) 漢字に関する基本的な情報 (2週目)
 - (3) NEXUS 日本語科目の漢字語彙 (3週目以降)
 - (4) 専門図書の漢字語彙 (3週目以降)
-
- (1) 全員が同一のクイズを受験し、全体へのフィードバックおよび個別フィードバックを行った。
 - (2) 履修者7名のうち5名が漢字圏出身の学生であったため、2週目に漢字に関する基本的な情報 (部首や音訓の区別など) について説明した。その後は、(4)専門図書の音読の際に、非漢字圏出身の学習者を対象として、必要に応じた補足説明を行った。
 - (3) NEXUS の C、D、H クラスで扱った、または扱う予定の漢字語彙について、読みのクイズを実施した。履修者7名の漢字力に差が見られたことから、コーディネーターより各クラスの語彙リストを事前に提供していただき、JLPT N1 および超級相当、N2 相当、N3・4 相当の3種の読みクイズ (10問) を作成し、毎週実施した。最終回の授業では「総まとめクイズ」として、誤答が多く見られた漢字語彙を中心に、10題の短文作成クイズを実施した。
 - (4) 学部指定の専門図書に含まれる漢字語彙を一つ選び、その語彙の意味および例文を紹介する活動を、学生一人につき2回ずつ行った。毎週、各自の専門図書を1、2ページ音読してもらい、漢字語彙の読みや意味を確認した。

結果と課題

漢字学習に対して意欲的な学生は、自分より上位の漢字クイズに挑戦し、着実に力を伸ばした。また、漢字語彙の読み方は正確である一方、音読が速く、図書の内容が伝わりにくい学生に対しては、相手に伝える工夫を意識させる指導を行った。その結果、聞きやすさは大きく向上した。一方で、正確さへの意識が十分ではないように感じられる学生もあり、特に漢字圏出身者の学生に対して、漢字の読みの正確さへの意欲をどのように維持・向上させられるかが、学期を通じた課題となった。今回のように、履修者数が従来より多く、かつレベル差がある漢字クラスの運営については、今後もさらなる工夫が必要である。

<NEXUS 日本語 H>

担当者名：<秋学期> 沢野美由紀

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

日常生活と大学生活における聞く力、話す力、書く力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す。適切な待遇表現を用いたコミュニケーションをすること、プレゼンテーションをして小レポートを書くことができるようになることを目指す。

授業の方法

Hクラスではさまざまな聴解教材を用いて依頼、説明、誘い、許可を求めるなどの場面の聞きとりとそのロールプレイ、ディスカッションを行い、後半は日本の高校生のための長めのインタビュー教材を使用し聞き取りの練習を行った。

また、インタビュープロジェクトとして「コミュニケーション」をテーマに各自が質問を設定し、日本の学生にインタビューをした内容をまとめてスライドを作成して口頭発表を行った。発表の内容はレポートにまとめた。

結果と課題

このクラスは7名が受講した。季節的に体調を壊しやすく全員揃わないこともあり、また、日本語のレベル差が感じられるクラスであったが、7名ともできる限りの努力を重ねていた。

今回、日本語を使用する環境で過ごしたことのある学生も複数いたが、当初ロールプレイをすると、尊敬語、謙譲語の使い分けや、恩恵の授受表現の間違いなどが目立っていた。知識としては持っているものの、きちんと整理されていないようだったので、ポイントを確認しながら練習を重ねることで、その場に相応しいやり取りができるようになっていった。

インタビュープロジェクトでは、相手が答えに迷うような質問や、あいまいな質問も見られたが、一つ一つ説明し、それらを良くない例として全員で共有することで、必要とするデータはどのように聞けばられるのかを学んでいった。

レポートの構成などは理解できている学生が多かったので、きちんとした形式で書くことができていたが、考察部分の書き方については時間を取って説明し、何度か書き直してもらった。

今回の課題はいくつかあるが、発表の際に用いられる書き言葉やスライドでの表現が難しく、それらが書けない学生がいたこと、また、発表の最後に、内容に関連したディスカッションのテーマを提示してもらったが、抽象的すぎて聞き手が答えられないようなテーマが目立っていたことなどである。前者は、話し言葉と書き言葉の違いや、ある語句を漢語の名詞にする練習を少し行なったが、十分ではなかったように思われる。ディスカッションのテーマについては、どのような意図で問題を設定し、どのような意見を求めているのか、聞いていてわかりにくかった。具体例が挙げられている場合もあったが、説明が不足していて、ディスカッションが全く違う方向に進むことも少なくなかった。日本語ができることと、聞き手が理解できるように表現することは別であり、その点を学生が認識できるような活動が必要だと思われるので、

今後はその点を考えたい。

<NEXUS 日本語 I>

担当者名：<秋学期> a クラス：小林友美、b クラス：任ジェヒ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 a クラス 7 名、b クラス 開講なし

使用教材：独自教材

コースの目標

所属学部が扱う専門書を活用して日本語学習を行い、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付ける。

授業の方法

この科目は、各学生の所属学科指定の図書を 1～6 冊扱い、学部ごとにチュートリアル形式で進めた。教員とのチュートリアルを行わない時間は、その週に学んだことや考えたことをリアクションペーパーに書いてもらった。

授業の前に、履修者は漢字語彙リストを活用しながら課題図書を読んでワークシートの質問に答え、学部のチューターの日本人学生 1 名に 100 分間の学習支援を受けた。チューターとの活動では、読んでわからない部分を確認したり、ワークシートの確認をしたり、図書の内容や学生生活に関するディスカッションをしたりさせた。授業では、前の週に提出したリアクションペーパーのフィードバックを行ったうえで、主に、1) わからない部分はないか、2) 何が書いてあったか、3) 最も印象に残った内容は何か、4) チューターとの活動でどのようなディスカッションをしてどのような気づきを得たかを話してもらい、その週の目標が達成できたかを確認した。また、次回までの準備や活動意図についても確認をして、より積極的に取り組むように促した。なお、最終週はチュートリアル形式ではなく、最終発表を実施した。発表では、課題図書で学んだことのうち他の学科の学生に紹介したい内容を紹介して、考察を述べたあと、ディスカッションをリードさせた。

学期末には授業内で大学のキャリアセンターによる NEXUS プログラム生向けのキャリアガイダンスがあり、日本での就職活動の流れや基礎知識を学んだ。

結果と課題

今学期は、中級、中上級、上級の 7 名の履修者が参加した。過去最多の履修者数であったため、ワークシートの確認の活動は 4 つの学部別にチュートリアル形式で進行した。また、チューターとの学習支援活動の報告は、授業内で扱えない回もあったため、チューターと履修者には、できるだけ詳細に活動内容を記述するように指示し、活動報告から活動や履修者の様子を把握した。また、何か相談事があれば、活動

foam に記述してもらい、適宜対応した。レベル差対応としては、履修者のレベルや様子に合わせて、ワークシートの設問数や難易度を調整したり、漢字語彙リストや音読教材を作成したりした。ワークシートの読解では、非漢字圏の一部の履修者が、予習の段階で時間をかけすぎてしまう傾向があったため、図書の情報を抜き出す設問に関しては、ワークシートに記述せず、図書に線を引く形式で解答するように指示し、負担を軽減するようにした。以上のことにより、履修者がそれぞれのペースで課題図書を読解し、チューターと円滑に学習支援活動ができている様子が感じられた。しかしながら、表面的な理解に留まることもあったため、単に情報を抜き出すだけでは答えることができない質問を増やしたり、批判的な読解ができるような指導も取り入れていきたい。また、学部別の活動で個別対応の機会が難しい回もあった。今後も履修者数や所属学部も増える見込みのため、課題図書の内容確認の進め方はさらなる工夫が必要となるだろう。

<NEXUS 日本語 J>

担当者名：<秋学期> 黄慧

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 7 名

使用教材：独自教材

コースの目標

資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようにすることを目指す。

授業の方法

毎回の授業は、導入（前回の振り返り・スキーマ活性化）から語彙確認、精読、協働活動、ディスカッション、リアクションペーパー作成の順で構成し、読解活動約 70 分、リアクションペーパー約 20 分とした。精読では接続表現・指示語・評価語に着目し、段落ごとに要点・根拠・筆者の立場を整理させた。資料の種類に応じて、グラフ読解では数量情報の言語化、投書文では主張と理由の対応、文学作品では場面転換や人物描写の把握を指導した。賛否が分かれるテーマの回では、根拠を明示した発話や比較文化的視点を促した。N3～N1 混在への対応として設問を三段階化し、進度に応じて追加課題で学習負荷を調整した。リアクションペーパーでは型を共有し、表現の統一や理由の具体化を段階的に指導し、全体共有と個別コメントを組み合わせて次回につなげた。

結果と課題

精読・分担読解・ディスカッションを反復した結果、要点抽出、段落要約、根拠を示した意見表明が授業内において定着した。読解の設問をレベル分けし、「早く終わったら」課題と発話役割を組み合わせたこ

とで、読解速度に差があっても活動が停滞せず、受講者間の参加バランスが保たれた。リアクションペーパーは型（要約→評価→自分の経験）を提示し、コメントは改善点を一つに絞って返す運用を継続した結果、助詞・表記を中心とする誤りが減少し、分量と構成も安定した。

課題としては三点挙げられる。①語彙が授業内での理解にとどまり、翌週以降の読解・討論・リアクションペーパーで再使用されにくい点。②資料量が多い回では全体把握に時間を要し、精読や討論が浅くなる点。③ディスカッションにおいて発話量の偏りが生じる点である。今後は、語彙を各回5～8語に絞り、個人用語彙帳に意味・品詞・共起語・自作例文を蓄積させるとともに、ディスカッションやリアクションペーパーで「必須語を2語以上使用する」ことを課すことで、語彙の定着を図ることができると思われる。資料の精読は必読部分と任意部分に分け、授業内では必読部分の段落構造把握と根拠確認、分担読解による共有に集中し、ディスカッションの時間を確保することができる。さらに、ディスカッションでは機能別カードなどの補助道具を用いた役割分担や短いロールプレイを導入し、発話記録を簡易に取ることで、発話の偏りを可視化し、バランスを常に確認することができると思われる。

2025年度 NEXUS プログラム 学びの精神科目 授業記録

コース概要

NEXUS プログラムの学生向けに2022年度秋学期に立ち上げた科目である。NEXUS プログラムの学生が、大学で学び始めるにあたり、大学で学ぶこと、また立教大学という場で学ぶことの意味を理解することを目標とする。

<多文化共生社会と大学 —やさしい日本語でともに学び、ともに生きる—>

担当者名：任ジェヒ

授業コマ数：週1コマ

履修者数：秋学期7名

使用教材：独自教材

コースの目標

多文化共生社会とはどのような社会かを自分の言葉で説明することができる。また、日本が目指している多文化共生の形や実現のための方法をヨーロッパやアメリカ、アジアの国々と比較し、それぞれの特徴を知ることによって、日本に暮らす多様な人々が真の意味で共生していくことを可能にするためには、日本に暮らす一人ひとりがどのような態度を持ち、どのように行動していくべきかについて考え、自分の言葉で表現することができる。そして、そのような日本の多文化社会の実現のために、日本の大学は何をすべきかについて考え、自分の言葉で提案することができる。

授業の方法

授業は全学共通科目（多彩な学び）「多文化共生社会と日本—やさしい日本語でともに学び、ともに生きる—」（以下、「多文化共生社会と日本」）と一体的に運営した。「多文化共生社会と日本」の受講生、NEXUSプログラムの学生、教員（「多文化共生社会と日本」の担当者と「多文化共生社会と大学」の担当者）2名で、週2回、やさしい日本語による講義、協同学習（ディスカッション）、個人及びグループ発表などの活動を行った。また、学期末には本コースの目標が達成できているかを確認するために、日本が目指していくべき多文化共生社会とそのための課題についてレポートを作成することを最終課題として課した。

結果と課題

今年度は昨年度と異なり、受講生の多くを漢字圏出身者が占めるという特徴があった。漢字の既習知識があるため、配布資料や文献の読解面では大きな支障は見られなかった。一方で、インプットした知識を自分の言葉で表現する口頭での産出力や、他者の発言を理解する聴解力に課題を残す傾向が見受けられた。本コースは対話を通じた協同学習を重視しているが、学期当初においては、グループディスカッションで相手の発言を正確に捉えられず議論から孤立してしまう学生や、教員の説明に対する理解が追いつかず、学習への参加に困難を抱える学生が散見された。

この課題に対応するため、本学の「日本語相談室」の利用を推奨し、授業外での学習サポートを積極的に活用するよう促した。具体的には、「読解内容の口頭説明」や「プレゼンテーションの事前リハーサル」など、アウトプットに特化した具体的な活用方法を提示し、実践を促した。その結果、一部の学生はこれらのリソースを主体的に活用することで発言に対する心理的ハードルを乗り越え、学期末には自らディスカッションを牽引するほどの顕著な成長を遂げた。その一方で、リソースの有用性を認識しつつも実際の利用行動に結びつかない学生も存在し、取り組み姿勢や学期中の変化に二極化が見られた。

今後の課題としては、大きく二点が挙げられる。第一に、読解力と産出力・聴解力のギャップに対するアプローチである。グループディスカッションにおいて、相手の発言を正確に理解し、自身の意見をスムーズに産出するための段階的なサポートのあり方や、発言に対する心理的・スキルの負担を軽減する働きかけについて、来年度以降さらに検討を重ねる必要がある。第二に、留學生の自律的な学習態度の育成である。本コースは、留学初期段階にある学生に対し、今後の大学生活に不可欠な知識と自律的な態度を身につけさせることも重要な到達目標の一つと位置づけている。学内外の支援リソースを有効に活用し、自らの課題解決に向けて主体的に動く姿勢は、留學生生活を成功させる上で極めて重要である。今後は、支援リソースの重要性をいかに深く理解させ、ためらいなく自発的な利用へと導くことができるか、導入時の説明の工夫や継続的な働きかけについて検討を深め、より包括的な支援体制を構築していきたい。

2025年度 国際的協働のためのキャリア実践 授業記録

コース概要

教室での学びと就業体験を通して、自分と社会とのつながりを意識する。

<国際的協働のためのキャリア実践>

担当者名：丸山千歌

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：秋学期 3 名

使用教材：独自教材

コースの目標

就業体験を通して、大学 4 年間の学びの先にあるキャリアプランを考えるとともに全学での学び、また所属学部での学びがどう社会と結びついているのかを知る。教室での学びだけではなく、教室外での経験を通して、自分と社会とのつながりを意識するようになる。

授業の方法

事前学習、インターンシップ、事後学習の 3 部により構成する。具体的には春学期中に履修者の選考及び事前研修を経て、夏季休暇中に各企業にインターンとして派遣する。外国人入試による入学者は日本での就業体験、それ以外の学生は日本語非母語話者との協働体験が可能な日本での就業体験を予定している。派遣期間は 10 日～14 日で、秋学期に事後研修を実施する。

結果と課題

2 年次生 3 名が履修し、3 名がインターンシップを行った（計 3 社）。留学生の就職支援を専門とする方をゲストスピーカーとしてお招きしたゲストセッションを、事前学習と事後学習に各 1 回行った。本科目を通じて身に付くことへの期待としては、社会人基礎力、責任感、協調性、敬語使用への慣れ、ビジネスマナーといったものが挙げられ、また気づきへの期待としては、就職活動の方向性、インターンシップの重要性、学び続けることの重要性があった。3 名とも日本での就職を将来の選択肢に入れており、日本で働くことを楽しみにしている一方で、実際に希望する企業に就職できるかについて漠然とした不安がある、職場環境にうまく対応できるか不安がある、「ブラック企業」「残業」といった就業環境への不安も持っていた。インターンシップの実施に至るまでの過程では、日程が決まるのが遅く、夏休みの帰省をあきらめたというケースがあった。インターンシップを通じて、職場の雰囲気づくりの重要性、資料を見る側にたった資料作成、データの取り扱い等について学ぶ機会となっていた。インターンシップ受け入れ担当の方の忙しさの中で、いかにしっかりと関わっていくかといったことに課題を感じたという感想については、ゲスト講師との対話を通じて、自身がどのように動けばいいのかといったことについて考えを深めることができていた。今後の授業に盛り込んでいきたい。

<PEACE1 授業記録>

コース概要

日本語を学習したことはないが、ひらがな・カタカナは既習である学生、及び日本語学習の経験はあっても、ごく限られた知識しか持たない学生を対象とし、週 5 日の授業を通して、日本語での基礎的な表現を学習する初級のコースである。なお、J1 のコースに準拠する。

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、文法 1 クラスの目標は、名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、および基本的な助詞、動詞や形容詞の基本的な活用を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることである。

PEACE 本語 1A：名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、及び助詞、動詞、形容詞の基本的な活用について理解し、それらを日常生活の場面で使えるようになること。

PEACE 日本語 1B：文法 1 で習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになること。

PEACE 日本語 1C：文法 1 で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになること。

PEACE 日本語 1D：文法クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること。未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけること。

PEACE 日本語 1E：文法 1 で習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになること。

文型リスト

PEACE1 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
プレレッスン	<ul style="list-style-type: none">• Exchanging greetings• Learning some survival expressions• Learning the writing system of Japanese language• Learning basic numbers• Learning basic Japanese sentence pattern(Noun sentence)• Learning basic words(Date、 Time expressions)
1	<ul style="list-style-type: none">• Noun sentence ～は～です• Demonstrative pronoun こ・そ・あ・ど• Noun modification (kinking nouns) ～の

	<ul style="list-style-type: none"> • Particle “also、 too” ～も • Particle(question marker) ～か • Interrogatives なに・だれ・どこ • Pronominal “one” ～の • ”please give me ---“ ～をください • Counterword ① ～円、個、才、ひとつ • Sentence ending particles ～よ、ね
2	<ul style="list-style-type: none"> • Polite speech and casual speech • い／な Adjectives as predicate ～は Adj.です。 • Use 2 or 3 adjectives to describe topic て-form of adjective and sentence connectives ～が、それに、でも • い／な Adjectives as noun modifiers • Interrogatives どんな、どう
3	<ul style="list-style-type: none"> • Topic-subject construction with adjective predicates ～は～が Adj.です。 • Adverbs indicating ‘degree’ • Explaining reasons ので、から
4	<ul style="list-style-type: none"> • Verb groups、 dictionary form of verbs • Polite and casual verb sentences • Particle を(Object marker) • ～は～を V sentences • Particle で(Location marker) • Particle で(Instrument marker) • Particle に／で(Destination/direction marker) • Mimetic words ① Eating、 drinking
5	<ul style="list-style-type: none"> • Giving and receiving something ① • ～は Space/area/pass を V(motion verbs) • て form of verbs • Making requests ～てください／～ないてください • の : Noun equivalent marker • V て、V て、V。 • Asking permission/Giving permission/prohibition ～でもいい／～てはいけない • Mimetic words ② Watching、 seeing、 speaking

6	<ul style="list-style-type: none"> ・ ~は Object に V sentence ・ Topic は V(Intransitive verbs) ・ Particle に(Time marker) ・ ~から~まで ・ Duration on time ~間 ・ Approximate time/approximate quantity ごろ、ぐらい ・ Time expressions まえに、あとで、てから ・ ~と思う ・ ~だろう/だろうと思う ・ Mimetic words ③ Condition of the body
7	<ul style="list-style-type: none"> ・ Sentence of existence and locatives いる、ある ・ Counter word ② ~人、枚、冊、本、匹、階 ・ だけ/しか ・ N1 か N2(or)/N1 も N2 も(both、 neither) ・ N1 は A、 N2 は B(Contrast は) ・ Noun と/や、 Noun/adjective/verb て form、 V-たり V-たり Adjective/verb し ・ ~かもしれない
8	<ul style="list-style-type: none"> ・ V-ている(Continuous action、 state) ・ Verb with clothing 着る、はく、ぬぐ、かぶる、かける、する ・ が used to describe a condition、 scene before one's eyes ・ ~中(during、 while、 through) ・ もう/まだ ・ ~ませんか、 ~ましょう ・ Questions word + か/も ・ ~んです ①
9	<ul style="list-style-type: none"> ・ Giving advice ~たほうがいい ・ Particle に(amount of frequency per time unit) ・ Adverbial usage of adjectives ・ Noun になる ・ Conditional ① : と ・ Chang of state、 condition (adjective + なる) ・ Mimetic words ④ Pain

<PEACE 日本語 1A>

担当者名：<春学期> 小松真帆

<秋学期> 高嶋幸太

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、1A クラスの目標は、名詞文、形容詞文、動詞文それぞれの最も基本的な文型、および基本的な助詞、動詞や形容詞の基本的な活用を理解し、それらを日常生活の中で使えるようになることである。

授業の方法

進め方としては、毎回語彙の宿題確認とクイズを実施後、テキストに沿って文法事項を確認していった。例文で導入を行い、その後フラッシュカードや絵カードを用いた口頭練習をし、最後に短文作成などの産出練習を行った。

結果と課題

<春学期>

開講なし

<秋学期>

クラスメイト同士みな仲良く、温かい雰囲気です授業を進めることができた。積極的に課題や活動などにも取り組んでいたため、ペアワークやグループワークなどを通して使用できる文法や単語が増え、表現にも幅が出たと感じられる。今後の課題として挙げられるのは、欠席した学習者のフォローをうまくしていくことだと感じた。時折欠席者が出ることもあり、1 回分の授業を休んでしまうと、ほかの学習者と比べてビハインドを取ってしまうので、その際は自律的な学習をするよう適宜授業でも伝えていったほうがよいのではないかと感じた。

<PEACE 日本語 1B>

担当者名：<春学期> 小森由里

<秋学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 6名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、1B クラスの目標は、1A クラスで習った文型や語彙を使って、正確な短作文ができるようになることである。

授業の方法

このクラスは教科書に従い各ユニットの文型を導入、かつそれを使った口頭練習を中心に実施。また毎回授業で語彙クイズを実施し、さらに宿題として用意してきた新しい語彙を使用した文作を教室で確認した。各自行ってきた文作はまずはピア・リーディングで間違いやコメントなどを作成者にフィードバックを行い、最終的に教師が確認という流れをとった。学期後半は前の週に導入された新しい文型を使ってクラスで1分間ほどの短いスピーチや教師のインタビューに回答するなどの課題も行いさらなる文法項目の定着を図った。導入はターゲット文法を使用した例や使い方を提示し、それら文型を使用してお互いに質問しあったり、考えや意見を述べたりするといった練習が主であった。必要に応じて活用表やハンドアウトを配布し、口頭だけでなく、書いて確認するという作業も行った。

結果と課題

<春学期>

開講なし

<秋学期>

多少日本語の学習経験があるという学習者がほとんどであったせいも、学期当初の滑り出しは、教科書の単元がスムーズに進み、復習や補足が中心の授業であった。中盤あたりで形容詞や動詞の活用が始まる頃から躓く学生も見られたが、それもまた学期がさらに進むにつれ、正しく産出できるようになっていった。新しい文型に関しても、理解をするのにそれほど難しい様子はなく、またそれを使用した口頭練習なども比較的問題なく行っていた。文作も事前に準備ができるとはいえ、細かい助詞などの間違いはあるものの、単語の意味や使い方は概ね捉えられていた。教室での課題（口頭）も同様に、前の週に導入された文型の使い方を復習しつつ、トピックにあった内容を発表したり、ランダムに質問された内容に適切に回答したりしていた。課題としては新しい文型の定着が学習者によって少し差があるようなので、今回のような学習者達であった場合、学期最初の部分をまとめて短くし、中間以降もう少しゆっくり丁寧に進んで練習の時間を多めに取るなどしても良かったように感じる。また導入の授業はどうしても教師主導になりがちであるが、このような主体性のある学習者達の場合は、より学習者が中心となって取り組めるような授業や

活動にし、学習効果をさらに上げていけるよう今後、授業方法を検討していきたい。今学期は授業の初日から最後まで学習者の日本語学習や授業に対する前向きな姿勢や取り組み方、そしてモチベーションが一貫して伺えた。また学生達が常に互いに協力し合いながら、授業にそして活動に参加しているクラスであった。

<PEACE 日本語 1C>

担当者名：<春学期> 井上玲子

<秋学期> 袁シュ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、1C クラスの目標は、1A クラスで習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようになることである。

授業の方法

授業では、まずひらがな・カタカナおよび既習の文法項目を復習し、基礎の定着を図った。その際に、当該週の文法宿題と類似した形式で活用及び短文作成の口頭練習を取り入れた。会話練習では、ロールプレイやクラスメイトへのインタビューなど、実際の使用場面を想定した活動を実施した。聴解では市販教材に基づき、文法項目の聞き取りや、既習文法を用いた日常会話の理解を目標として練習を行なった。期末テスト向けの復習では、JLPT N4・N5 レベルの問題集を使用し、模擬試験を実施した。

結果と課題

<春学期>

開講なし

<秋学期>

少人数のクラスであったが、穏やかな雰囲気の中で、全員が真面目に授業に参加していた。ひらがな・カタカナはほぼ定着しており、文法項目については助詞や活用の面で繰り返し練習が必要な部分も見られたが、内容の理解はよくできていたのではないかと考えている。聴解にも積極的に取り組み、練習問題だけでなく、授業中の教師の日本語に対しても質問するなど、新しい語彙や文法を意欲的に吸収していた。期末試験の結果も概ね良かった。また、グループ活動にはいつも楽しそうに参加しており、文法練習をゲ

ーム形式で行うと、オリジナリティのあるアウトプットが多く見られた。今後の課題としては、①学生一人ひとりのニーズに配慮しながらグループ活動をさらに充実させること、②ビジターセッションなどを通じて、より実践的な聴解・会話練習の機会を増やすことが挙げられる。

<PEACE 日本語 1D>

担当者名：<春学期> 鹿目葉子

<秋学期> 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 6 名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、1D クラスの目標は、1A クラスで習った文型や語彙を正確に運用できるようになること、また、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身につけることである。

授業の方法

各回の授業では、その週に導入された新しい文型の復習を行った後、当該文型や語彙を用いた実践的な練習を実施した。具体的には、導入した文型や語彙、フレーズを使用した会話活動や、日本人学生へのインタビューを行った。

また、各自が自由なテーマを選択してアンケート調査を行い、その結果を発表したほか、グループ活動として新聞を作成し、発表を行った。さらに、毎回の授業で文法クイズを実施し、導入された文型の定着度を確認した。

結果と課題

<春学期>

開講なし

<秋学期>

履修者の日本語力には差が見られたものの、学生同士の関係は良好で、クラスの雰囲気は明るかった。授業中は互いに助け合いながら活発に意見交換を行うなど、授業に積極的に参加する姿が見られ、日本語学習に対する高い意欲が感じられた。また、日本人学生との交流においては、日本語のみでコミュニケーションを取ろうと努力する姿勢が確認された。

学期末に今学期の授業を振り返ってもらったところ、グループで取り組んだ新聞作成および発表が良かったという意見が多く寄せられ、グループワークを増やしてほしいという要望があった。これらの意見を踏まえ、グループワークの利点に加え、今後の専門科目におけるディスカッションやプレゼンテーションへの対応も考慮し、今後はグループ活動をより多く取り入れていきたいと考える。

<PEACE 日本語 1E>

担当者名：<春学期> 富倉教子

<秋学期> 富倉教子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 開講なし、秋学期 6名

使用教材：独自教材

コースの目標

日本語の表記や発音などを含む、基礎的な能力を身につけ、買い物や道の聞き方など、日常生活の基本的な活動で日本語が使えるようにすること、ひらがな、カタカナ表記、基本的な動詞や形容詞の活用、約 500 語の単語を学習することである。その中で、1E クラスの目標は、1A クラスで習った文型が使われている文章を読み、習った文型や語彙を使って 400 字程度の作文を書けるようになることである。

授業の方法

この授業では読解、作文、其々教科書を中心に実施。読解に関しては読点や文節を意識した練習や基本的な漢字の練習も含まれた。漢字は漢字圏と非漢字圏の学習者がおり、漢字圏の学習者に対しては母語との違いなどを意識してもらいながら、それらの比較を通して双方の学習者にさらなる漢字に対する理解を促しながら行った。本文に関しては宿題になることが多く、家で読んできたものをクラスで共有し、内容の理解を深めた。また読解で扱ったトピックについて各自意見や感想を述べ、クラスで話し合いを行った。作文に関しては原稿用紙の使い方に始まり、日本語で作文を書く時のルールに着目しながら、徐々に段落書きから、構成を意識した短い作文が書けるところまで実施。作文も宿題で書いてきたものをクラスで共有。ピア・リーディングを行い、その場でフィードバックを行い、時にはクラスで音読して紹介し、質疑応答やクラス全体でフィードバックを行うなどして、作文で書いた内容、トピックを広げながら、さらなる日本語の定着を図った。

結果と課題

<春学期>

開講なし

<秋学期>

読解に関しては、読解前の練習問題（文節読みや漢字など）はよく行えており、学習者の日本語の習熟度が伺えた。実際の読み物では、概ねほとんどの学習者が問題なく正解を導いていたが、詳細に触れていくと正確に捉えきれていないところが所々出てきていた。しかし問題の回答で意見が割れた時など、其々の学生にどうしてそのように思うのか、理由を説明するよう促すと、学習者同士で意見を交換しながら、最終的にお互いが理解を深め正解に辿り着いていた。作文においては中間や期末試験で 300-400 字を要求しているところ、通常の作文の課題でその倍は書いてくる学習者であった。日本語も助詞や一部言葉の使い方が不自然であったり、文字の細かいミスなどは見受けられたりしても、内容の理解を妨げるものは少なく、構成も一度注意を施すと次回からは修正を行い、内容的にも表面的な話題にとどまることなく、読んでいて興味深いものが多かった。特に期末試験の作文に至っては、事前準備ができないにも関わらず、今まで一番内容的にも充実したものを書いた学習者も少なくなった。課題としては、読解に関してはやはりより深くかつ正確に内容を捉えることであったが、それは日本語力を上げていながら、より多くの内容のものを読み、同時に作文で同じようなトピックについて書く、などしていくことも効果があるのかもしれない。作文に関しては構成がまだ一部徹底されていない学習者もいたので、その修正とまた内容的にも具体例を入れたり、説明を施したりなど、内容を広げ、より深みのある、説得力のある作文にしていける指導ができればさらに良かったように感じる。

<PEACE 日本語 2>

コース概要

PEACE 日本語 2 は、非常に基本的な日本語（動詞や形容詞の基本活用、語彙 500）を身につけているものを対象とする。2024 年度春学期より PEACE 日本語 2 は Task-based 型にコースデザインを変更し、コースを運営している。

コースの目標

PEACE 日本語 2 では、言語知識やストラテジーの習得を目標とする「言語目標」と、日本に関わる知識や社会文化的な知識、さらには複眼的な視点の習得を目標とする「教養目標」を以下のように設定している。

①言語目標：日本社会において日本語で円滑なコミュニケーションを行うための言語的な目標

・簡単な日本語のコミュニケーションによって、日本で生活する上で最低限必要なことを達成できるようになる。

・わからないことや困ったことに直面した際に類推したり対処したりするためのストラテジーを身に着ける。

②教養目標：日本の社会文化（＝その週のトピック）に関する理解を深めるための教養的な目標

・日本と自国（あるいはクラスメイトの国）を比較し、自国の文化を相対的・客観的・複眼的に捉えられ

る。

・その上で、日本と各国の社会文化的な共通点・相違点を（当該レベル相応の）日本語で説明できるようになる。

文型リスト

PEACE 日本語 2 で扱った文法項目は以下の通りである。文法項目の提出は J2 に準拠している。

J2 で扱った文法項目は以下の通りである。

課	文法項目
1	1. Review (J1 sentence patterns) 2. Speaker's Volition: I think I will ~ Volitional form と思う 3. Speaker's Intention : I intend to ~ ~つもりだ 4. ~んです② 5. Mimetic words ⑤ Laughing、Crying、Anger
2	1. Can; indicating one's ability ~ことができる・可能形 2. Verb/Adjective すぎる : Overdo~/Too~ 3. て form for indicating reason why one cannot do V 理由の「~て」 4. Anything、Anyone、Anytime、Anywhere、Any Noun 何でも・誰でも・いつでも・どこでも・どんな N 5. Particle で: indicating required cost、required time 値段・時間内の「で」 6. のに: Although、Even though *Review のに、が/けど、ても 7. Mimetic words ⑥ Feelings
3	1. V-方 How to V 2. Vながら V : Doing two things simultaneously 3. Have something with/on、possession、own ~がある 4. Obligation: Must / Have to ~なくてはいけない/なくてはならない 5. Concession: Not have to / It is all right if it's not ~ ~なくてもいい 6. By (time) : までに / Until (time) まで 7. Mimetic words ⑦ Weather
4	1. When~: ~とき~ 2. Noun が要る・役に立つ 3. Comparative constructions 比較 AはBより・Aのほうが・Aほど・~のなかで一番 4. Adverbs often used in a daily conversation せっかく ちゃんと 一応
5	1. Try doing something and see: ~てみる

	<p>2. Giving and Receiving Something さしあげる・いただく・くださる</p> <p>3. Noun modifiers 名詞修飾</p> <p>4. Mimetic words ⑧ Nature</p>
6	<p>1. Intransitive Verbs and Transitive Verbs 自動詞・他動詞</p> <p>2. Vである</p> <p>3. Intransitive V ている vs Transitive V である</p> <p>4. Mimetic words⑨ : Sleeping</p> <p>5. Compound Verbs ① Vはじめる・Vおわる・Vやむ・Vつづける</p>
7	<p>1. V て おく</p> <p>2. ～が V みえる・きこえる・する</p> <p>3. Giving and Receiving (favours, some acts) ～てあげる・もらう・くれる</p> <p>4. Want someone to do some action: V てほしい・もらいたい・いただきたい</p> <p>5. ～が・けど (けれども)</p> <p>6. Imitative words : Caught a Cold ?</p>
8	<p>1. あいだ VS あいだに</p> <p>2. Purpose in coming and going ～に行く・来る・帰る</p> <p>3. い-adjectives derived from verbs Vにくい/Vやすい</p> <p>4. Expressing Purpose: ために・ように</p> <p>5. Review: Various expressions for purpose</p> <p>6. Compound Verbs ② Vあう・Vかける</p>
9	<p>1. 伝聞 Hearsay, Conveying information getting from another person, media ～そうだ・ということだ・とのことだ</p> <p>2. V てしまう</p> <p>3. Review: V ている、V である、V してみる、V おく、V てしまう</p> <p>4. [Question words] か / ～かどうか</p> <p>5. V1 ないで V2 without doing V1, do V2</p> <p>6. Imitative words : Hitting, Breaking</p> <p>7. Compound Verbs ③ Vなおす・Vかえす</p>
10	<p>1. 推量の表現 ① Expressing Speaker's Guess, Conjecture ① そうだ</p> <p>2. Decisions: ～ことにする・～ことになる</p> <p>3. Rules: ～ことにしている / Customs: ～ことになっている</p> <p>4. 比喩の表現 Expressing Resemblance, Figurative expressions ～ようだ・ みたいだ</p> <p>5. V-て いく・くる do V and come/go</p>

6. Imitative words : Animals、Birds

<PEACE 日本語 2A>

担当者名：<春学期> 栃木亜寿香

<秋学期> 山口紀子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

授業内で各課のトピックに関連したポートフォリオを作成した。ポートフォリオはプレタスク・ポストタスクの 2 種を作成した。プレタスクでは、当該週のトピックについての背景知識の活性化や個人ごとの目標を設定した。プレタスクと同時に「ことばリスト」を作成し、当該トピックで使用される語彙・表現を調べて作成した。翌週のポストタスクではプレタスクで設定した目標や活動に対する振り返りや到達達成確認を行った。また、語彙や表現の定着を図るためことばリストから抽出したことばクイズを実施した。

<秋学期>

文法教科書の 1-10 課から毎週 1 課ずつ文法項目・文型を抜粋し、日本語 2B クラスと連携して導入・練習を行った。PPT を用いて文法や文型を導入後、基本練習（口頭練習や短文作成練習）、インタラクティブな運用練習などを行った。文型の定着を図るため、練習問題プリント（20 問程度・30 点）を作成して翌週までの宿題として課し、翌週の授業のはじめに答え合わせを行った後、宿題の内容・形式に則った文法クイズ（15 問程度・20 点）を実施して定着度を測った。

結果と課題

<春学期>

初めはポートフォリオ作成の意図や手順が分からず、作業が進まない学生も見られたが、クラスメイトとトピックについて自身の背景知識を活かしながら日本語でディスカッションを重ねるうちに、ポートフォリオに記入すべきアイデアが活性化されていった。課題としては、「ことばリスト」にあらかじめ用意された語彙・表現への取り組みは効果的だった一方で、当該トピックに関連する語彙や表現を学生自身で広げていくことが難しかった点が挙げられる。また、学生がトピックと同時に提示される文型の連動をイメージしづらく、実際の運用に至らない学生もいたことも課題であった。各トピックで使用可能な文型の提

示方法や順序、運用の工夫が今後必要である。

<秋学期>

非常にまじめで熱心な学生たちで、欠席や宿題の未提出もほとんどなかった。結果として全員が高いレベルの成績を獲得することができた。ただし、学生によって既習内容がまちまちであり、特に品詞の活用についての知識に大きな差があったため、授業が難しいと感じた学生もいた。定期試験の結果をみても、活用や接続などの形式面の定着が弱い。今後は運用を重視しつつ、形式の定着を図るための工夫が求められる。

<PEACE 日本語 2B>

担当者名：<春学期> 泉大輔

<秋学期> 泉大輔

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

文法教科書の 1 つの課の文法項目・文型を日本語 2A クラスと連携して導入し、毎週 1 課ずつのペースで進めた。PPT を用いて文法や文型を説明し口頭練習を行ってから、Comprehension check sheet を使用し文法・文型の理解を促した。各課の新しい文型の定着を図るために、毎回 Canvas 上で文法クイズを実施した。

<秋学期>

授業内では、各課のトピックに関連したポートフォリオ作成を行った。ポートフォリオはプレタスクとポストタスクの 2 種類で構成し、プレタスクでは当該週のトピックに関する背景知識を活性化するとともに、学生一人ひとりが学習目標を設定することを目的とした。また、プレタスクと並行して「ことばリスト」を作成し、該当トピックで使用される語彙や表現を調べて整理した。このリストには、J2 レベル相当に必要と思われる語彙も含まれる。翌週に行ったポストタスクでは、プレタスクで設定した目標や活動内容について振り返りを行い、学習の到達度を確認した。さらに、語彙・表現の定着を図るため、「ことばリスト」から抽出した語彙を用いたクイズを実施した。

結果と課題

<春学期>

4名全員が熱心に取り組んでいた。一名は文型をしっかりと積み上げており、J2相当の文型も理解が早く、最終的にはJ2以上の文法に着いても正確な運用ができていた。他3名は文法が苦手な学生で、PEACE日本語1からの継続生であったが、J1相当の文法が十分に積みあがっていなかった。動詞のグループ分けや各種活用形の練習も何度も繰り返し行ったが、最後までしっかりと定着されずに終わった。授業態度自体は非常に素晴らしく、教師に質問を積極的に行い、学んだ内容を率先して使おうとする姿勢も見られた。文法の復習も適宜扱ったが、本コースの授業設計上、J2コースに比して文法の復習の時間を十分に捻出できないため、定着のための取り組みを今後の課題としたい。また、PEACE日本語コースの趣旨をふまえて、よりインタラクティブな文法授業の設計を検討したい。

<秋学期>

本授業には4名全員が真面目に取り組んでおり、少人数ならではの落ち着いた学習環境の中で、継続的に学習を進めることができた。特に語彙学習においては、学生それぞれが日常生活の中で見聞きした言葉を積極的に持ち寄り、共有しながら語彙リストを作成する姿が見られた。既習語彙の知識量も比較的多く、語彙クイズでは全体的に高い達成度を示していた。一方で、新たに学んだ語彙を用いた短文作成では、文法的な誤りや不自然なコロケーションが目立つ場面もあった。語彙としては理解できていても、文脈の中で適切に使いこなす段階には、さらなる練習が必要であると感じられた。

ポートフォリオ活動については、比較的簡潔な文章にとどまる学生が多く、思考や振り返りが十分に言語化されていない印象を受けた。今後は、学習者の考えをより深め、発話や内省を引き出すことができるような問いの設定や活動内容を工夫し、より充実したポートフォリオ作成につなげていくことが課題である。

<PEACE 日本語 2C>

担当者名：<春学期> 高嶋幸太

<秋学期> 泉大輔

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期4名、秋学期4名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

おおよその授業の流れは、最初に前週の理解度チェックとしてディクテーション・クイズを行い、前々日と前日に学んだ文法事項について簡単に復習をしていった。その後、聴解練習で学習事項の理解確認を行い、その後ロールプレイやミニスピーチなどの発表・やり取りの練習を行った。基本的にはインプットからアウトプットへつなげる流れで授業を構成するよう意識した。

<秋学期>

本授業では、聴解力および会話力の向上を目的とし、まずディクテーション活動を取り入れ、音声を正確に聞き取る力の強化を図った。その後、YouTubeなどの動画や視聴覚教材を活用し、実際の「生の日本語」に触れる機会を重視した。また、当該週に扱った新規文法の復習を行いながら、モデル会話を基にした会話練習を実施し、ロールプレイ活動も取り入れたことで、文法を実際のやり取りの中で使う機会を設けた。さらに、ビジターセッションでは、日本語母語話者のボランティア学生と直接会話を行い、自由会話や簡単なプレゼンテーションに取り組んだ。

結果と課題

<春学期>

履修者4名の雰囲気は明るく、クラスメイトと楽しそうに活動に取り組んでいた。また、理解の早い学生がほかの学生にとって参考になるようなモデル文を提示してくれたりして、チームワークはよかったように感じた。一方で、1限という開始時間からなのか、遅刻や欠席が目立ち、また既習事項が定着していないなどの状況も見られたので、いかに学生のモチベーションに結び付けられるような指導や授業ができるか、練っていく必要があると感じた。もちろんモチベーションを上げるのは学習者自身なのだが、それを支援するようなアドバイスやサポートができると、よりよい日本語学習になると思った。

<秋学期>

使用した生教材は、J2相当の学生にとってやや難易度の高い内容であったものの、全体の話題や大意については比較的的確に把握できていた。実際のやり取りを通して、日本語を用いて自分の考えを伝える経験を積むことができ、学習内容を実践的な場面につなげる良い機会となった。一方、会話活動においては、新たに学習した文法や語彙を積極的に用いるというよりも、各自がすでに使い慣れている表現を中心に会話を進める傾向が見られた。このようなストラテジー自体は、円滑なコミュニケーションを図る上で有効であるが、今後は新しく習った文法や語彙を意識的に取り入れられるような働きかけができれば、より学習効果が高まると考えられる。また、本クラスは聴解・会話に重点を置いているものの、学生は日常的な会話には大きな支障がなく、むしろ文法の定着が課題であると感じられた。今後は、聴解・会話の授業の中でも、文法項目を実際に運用する練習をどのように組み込んでいくかを検討し、文法の定着につながる授業設計を行っていきたい。

<PEACE 日本語 2D>

担当者名：<春学期> 末松史

<秋学期> 栃木亜寿香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

- ・メインタスク

その週のトピックに関連する文章を読み、話し合いを通して理解を深める活動を行った。

- ・漢字学習タスク

毎週の学習でわからなかった語彙をリストアップし、自分の「ことばリスト」を作成。翌週にはそのリストから漢字クイズを実施した。・メインタスク：その週のトピックに関連する文章を読み、話し合いを通して理解を深める活動を行った。

<秋学期>

「メインタスク」として、読解と作文を連動させた形式で実施した。読解では、当該週のトピックに関連する多様な形式のテキストを採用した。具体的には、日本語のブログや日本滞在における実用的な Tips などの生教材をリーディングチュウ太等のツールを活用して読解した。様々なタイプの文章の読解やクラス内でのディスカッションを通じ、文章全体の大意を把握する力の養成を目指した。

作文では、読解活動と連携させたタスクを導入した。既読のテキストについて意見交換を行い、思考を整理した上で、関連する表現を確認してから作文に取り組んだ。また、各トピックに応じた独立した作文活動も行い、自国・地域と日本との文化的な相違についての洞察を深める機会を設けた。

漢字学習においては、毎週の学習過程で生じた語彙を「ことばリスト」として各自で体系化させ、翌週にそのリストに基づく漢字クイズを実施した。このサイクルを継続することで、語彙・漢字の定着と自律的な学習態度の育成を図った。

結果と課題

<春学期>

授業では、レアリアを使った実践的な活動や、ニュースやエッセイを読んで行うディスカッションなど、多様なアプローチを試みた。今期は実践的な内容だけでなく、アカデミックな意見も言えるようになるような内容も取り入れた。その結果、学生の能力を引き出し、充実したクラス活動になった。一方、今期の課題としては、「ことばのリスト」を有効活用できていなかったことである。語彙の定着を図るための工夫や、リストの活用方法についてのさらなる指導が今後の課題であると感じている。

<秋学期>

学生が 4 名と少人数であったため、きめ細やかな個別指導や添削を実施することができた。一方で、読

解活動に不可欠な意見交換においては、全体として消極的な傾向があり、自発的な発言が少ないことが課題となった。また、日本語による指示の理解が不十分な学生も一部見受けられたが、活動前のブレインストーミングや活動後の対話活動を根気強く継続した。こうした働きかけの結果、次第にクラス内での意見共有が円滑になり、最終的には当初の目的であった対話による理解の深化において一定の効果を得ることができた。

読解や作文といった個別学習が中心となる科目においても、意見交換や発表を通じたアウトプットの活動が不可欠であることを、いかに学生に認識させるかが今後の課題である。

<PEACE 日本語 2E>

担当者名：<春学期> 末松史

<秋学期> 末松史

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 3 名、秋学期 4 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

今期は、プロジェクトをメイン活動とし、集中的に時間をかけて発表準備を行った。その代わり、単なる文化の違いに関する紹介ではなく、アカデミックな問題意識を持ってプロジェクトに取り組む形式とし、大学生らしいプロジェクトワークに挑戦した。また、作文を扱わない代わりに、基礎的な文法を復習するタスクを設けた。

<秋学期>

春学期と同様である。

結果と課題

<春学期>

プロジェクトのテーマ決定や仮説、調査を進める過程では、多くの意見交換や話し合いが行われた。また、発表内容の構成にも意識を向け、アカデミックなプロジェクト発表を目指した。準備段階では、非常に完成度の高いプロジェクトが仕上がった。一方、今後の課題として、発表内容に日本語力が追いついていない場面があり、自分が日本語で何を言っているのかわからなくなることが多々見られた。もう少し発表練習に時間をかけられれば、さらに素晴らしい発表になったと思われる。自分の興味のあるトピックについて日本語で話したり、誰かと意見交換ができるようになることは、今後、大きな自信につながるはずである。

<秋学期>

プロジェクトのテーマ決定、調査を進める過程では、教師との対話を重ね、発表内容や構成にも意識を向け、アカデミックなプロジェクト発表を目指した。また、発表内容と日本語レベルが過度に乖離しないよう、毎回スクリプトを学生が使用可能な日本語レベルに調整しながら、発表やインタビュー準備を行った。その結果、初級レベルの日本語であっても、大学生らしいプロジェクト発表が実現することができた。

特に良かった点は、プロジェクトに十分な時間を確保できたことで、教師が学生一人ひとりを丁寧にフォローする時間を持てたことである。また今回のプロジェクトの経験を次回、PEACE 日本語 3 で活かすことができる流れが作れたことである。

一方、今後の課題としては、スクリプトを書き始める前の段階で、「何を調べたいのか」「何を知りたいのか」「何を伝えたいのか」をより明確にする必要があると考える。なぜその点に着目したのか、インタビューによって何を明らかにしたいのか、結論となる仮説は何かといった点を十分に熟考するプロセスを、今後はさらに大切にしていきたい。

<PEACE 日本語 3>

コース概要

PEACE 日本語 3 は、日本語の基礎動詞・形容詞の活用などを習得している者（1,000 語程度の語彙、初級前半の文法等、日常生活の基本的活動（買い物や依頼など）が日本語のできる者を対象とする。2024 年度春学期より PEACE 日本語 3 は Task-based 型にコースデザインを変更し、コースを運営している。

コースの目標

PEACE 日本語 3 では、言語知識やストラテジーの習得を目標とする「言語目標」と、日本に関わる知識や社会文化的な知識、さらには複眼的な視点の習得を目標とする「教養目標」を以下のように設定している。

- ①言語目標：日本社会において日本語で円滑なコミュニケーションを行うための言語的な目標
 - ・簡単な日本語のコミュニケーションによって、日本で生活する上で最低限必要なことを達成できるようになる。
 - ・わからないことや困ったことに直面した際に類推したり対処したりするためのストラテジーを身に着ける。
- ②教養目標：日本の社会文化（=その週のトピック）に関する理解を深めるための教養的な目標
 - ・日本と自国（あるいはクラスメイトの国）を比較し、自国の文化を相対的・客観的・複眼的に捉えられる。
 - ・その上で、日本と各国の社会文化的な共通点・相違点を（当該レベル相応の）日本語で説明できるようになる。

以下、それぞれのコースにおけるコース目標である。

PEACE 日本語 3A：やや複雑な初級文型などを理解し、それらを日常生活の中で使えるようになる。

PEACE 日本語 3B：文法で習った文型や語彙を使って、簡単な作文が書けるようになる。

PEACE 日本語 3C：文法で習った文型や語彙を実際の日常生活の場面で使えるようにし、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身に着ける。

PEACE 日本語 3D：実践的な読解力を身に着ける。具体的には、未習語彙や未習文型が一定程度含まれている文章であっても、これまで学習した語彙や文型の知識を応用して、文章の内容を理解できる力を身に着ける。

PEACE 日本語 3E：文法で習った文型や語彙を正確に運用できるようにし、未習の語彙や文型があっても、対応できるスキルを身に着ける。

文型リスト

PEACE 日本語 3 で扱った文法項目は以下の通りである。文法項目の提出は J3 に準拠している。

課	文法項目
1	Sentence patterns you should know for this level
2	1. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、Conjecture ② ようだ・みたいだ 2. 推量の表現 Expressing a Speaker's Guess、Conjecture ③ らしい 3. Time Expression ところ 4. Time Expression ばかり 5. ～がえり 6. Review：Time Expressions 7. そうだ、ようだ、みたいだ expressions often used in a daily conversation
3	1. 条件 Conditional ③ ば 2. ～ずつ 3. V-ていく／くる Change 4. Change of one's behavior 5. Change of one's ability 6. Review：Expressions for talking about some change 7. Adverbs indicating various changes 8. Adverbs often used in daily conversations ③ やっぱり・実は
4	1. 条件 Conditional ④ なら 2. V-ようと思う／V-ようとする 3. V-ようとしたができなかった、V-ようとしてもできない

	<p>4. Fraction 三分の一、五分之一</p> <p>5. Review : 条件 Conditional</p>
5	<p>1. 推量の表現 Expressing Speaker's Guesses、 Conjecture ④ はずだ</p> <p>2. Review : Various expression for Speaker's Guess、 Conjecture</p> <p>3. ~の多く</p> <p>4. ~以外、以内、以上、以下</p> <p>5. Compound Particles ① ~について、~にもとづいて</p> <p>6. Adverbs often used in daily conversation ④ 確か・とくに</p>
6	<p>1. 受身 Passive Verbs</p> <p>2. Direct Passive Sentences 直接受身</p> <p>3. Indirect Passive Sentences 間接受身</p> <p>4. 受身形 (Passive Sentences) and てもらう Sentence</p> <p>5. Compound Particle ② ~によって</p> <p>6. Sentence ending particles 終助詞</p>
7	<p>1. Giving an Instruction ~なさい・ないでください・てはいけない</p> <p>2. Imperative form Command、 Prohibition 命令形、命令、禁止</p> <p>3. Indirect Imperative : ~ように 言う／伝える／頼む</p> <p>4. Review : Expression for Cause、 Reason</p> <p>5. Compound Particle ③ ~のかわりに、~にくらべて</p>
8	<p>1. 使役 : Causative Sentences</p> <p>2. Causative Verbs VS V-てもらう／くれる</p> <p>3. ~のは~です (emphasizing)</p>
9	<p>1. 使役受身 Causative Passive Sentences</p> <p>2. Causative V-てもらう／くれる／あげる</p> <p>3. 使役受身 VS 使役-て もらう／くれる／あげる</p> <p>4. ~ことに one's feeling、 emotion</p> <p>5. Noun のこと VS Noun</p>
10	<p>1. Review : 受身、使役、使役受身、V-てもらう／くれる／あげる 使役-てもらう／くれる／あげる</p> <p>2. Introduction to 敬語 (Honorific、 humble expressions)</p>

<PEACE 日本語 3A>

担当者名 : <春学期> 保坂明香
<秋学期> 保坂明香

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

Task-Based 型デザインである PEACE 日本語 3 において、3A コースはプレタスクの段階に位置づけられる。そのため、まずトピックに関する背景知識の活性化、タスク達成に必要なだと考えられる語彙の学習、そして学生個々の目標設定を行なった。

背景知識の活性化の際には、質疑応答によって既有知識を確認したうえで、語彙や知識を得られるようウェブサイトの視聴や簡単な読み物の読解を取り入れた。

語彙学習については、これまではタスク達成に必要なだと学生自身が考える語彙を蓄積させてきたが、今学期は「トピックごとの基本語彙」を 30～40 語程度を提示し、読み方と使用方法を指導した（全 10 トピック）。漢字クイズと語彙クイズはこの基本語彙から出題し、漢字クイズでは読みを、語彙クイズでは語彙の運用力を測った。学期中盤にはことばリストの整理を行ない、グルーピングや共起語の確認などを通じて、語彙の定着と拡張を促した。さらに学期末には、学期を通して習得した語彙を振り返り、今後の語彙学習について考える機会を設けた。

個人目標はポートフォリオのプレタスク欄に記述させ、学習者自身が目標や到達状況を可視化できるようにした。なお、ポートフォリオは定期的に見直しを図り、テーマの変更や文言の修正を行なっている。

A クラスはプレタスクの段階にあるが、タスクの到達確認も実施している。前週に設定した目標と一週間の活動を振り返り、ポートフォリオのポストタスク欄に到達度の自己評価を記入させた。

<秋学期>

PEACE 日本語は Task-Based 型デザインを取り入れた科目であり、A コースはプレタスクの段階にある。PEACE 日本語 3A では、タスクに取り組む前の準備として、①トピックに関する背景知識の確認、②タスクに必要な語彙の学習、③学習者自身による目標設定を中心に授業を行なった。

背景知識の確認では、質疑応答を通して学習者の既有知識を確かめたうえで、関連するウェブサイトの視聴や簡単な読み物の読解を取り入れ、トピックへの理解を深めた。

語彙学習については、今学期も「トピックごとの基本語彙」を設定し、各トピックにつき 30～40 語程度（全 10 トピック）を提示した。読み方や使い方を指導し、3D の漢字クイズでは語の読みを、3A の語彙クイズでは運用力を測った。学期中盤には語彙リストの整理を行ない、学期末には学習した語彙の振り返りと今後の語彙学習について考える機会を設けた。

個人目標はポートフォリオのプレタスク欄に記入させ、学習者が自分の目標や学習の進み具合を意識できるようにした。また、前週の目標と一週間の活動を振り返り、ポートフォリオのポストタスク欄に自己評価を記入させることで、学習の到達状況を確認した。

さらに今学期は、中間・期末に作文課題を実施した。この課題は、学習した内容を統合的に用いて日本語で表現する機会として設定し、PEACE 日本語 3 全体における運用力を測る課題として位置づけた。

結果と課題

<春学期>

今学期導入した「トピックごとの基本語彙」による語彙指導により、学生はこのレベルでタスク達成に必要なとされる語彙を一定程度習得できたように思う。だが一方で、基本語彙の学習に学生の意識が向き、学生自身が必要性を感じて語彙を追加していく「私のことばリスト」の活用が進まなかった点は課題である。今後は両面での蓄積を促し、文脈や場面の中で正確に語彙を使用できるよう教材と授業内容を調整したい。

A クラスでは、教師からの発問を通じてテーマについて考えさせ、興味や問題意識を喚起し、そのトピックの学習意欲に繋げることを目指している。しかし過去には、テーマに興味を持ってない、学習意欲が湧かない学生も見られた。そのため今学期はトピックの選定を見直し、ポートフォリオの質問文言も修正したところ、以前よりも知的好奇心を引き出せたように思う。今後もテーマの検討を続けるとともに、教師の発問やファシリテーションにも工夫を重ねていきたい。

PEACE 日本語コースは、開始当初から立教大学の情報誌作成をミニプロジェクトとして実施しているが、今回は目的をより明確に伝えたいと、内容検討やレイアウト案の作成を学生主体で進めさせた。比較的物静かな学生が多いクラスではあったが、この活動では積極性を発揮し、主体的に取り組む姿が見られた。今後も学生の意欲を引き出せる活動を検討し、コースに取り入れていきたい。

<秋学期>

コース終了時の振り返りから、学生は日本語を単なる道具としてではなく、日常生活や社会参加の中で用いる言語として捉えるようになったことがうかがえた。また、生活場面で自分の意図を伝えられるようになったことによって自信を獲得したことや、社会活動への参加を通して以前より心理的な充足感や幸福感を感じている様子が述べられていた。加えて、自身の課題や今後の学習計画についても具体的に言語化していた。これらの記述から、日本語の習得が学習者の日常生活への関与や学習意欲の変化と結びついていること、また言語学習が、学習者の生活の質に関わっていることがうかがえた。さらに、学生同士が教え合い学び合う良好な協働関係を築いていたことも印象的であった。学習者同士の関係性を含む学習環境が、学びを支える重要な要素であることを再認識した。

一方で、コース終了時においても文法の不正確さは残っており、その点は学習者自身も今後の課題として認識していた。A コースにおいては、語彙学習の自律を促す支援に加え、タスクを中心としつつも、文

法について向き合える授業設計が求められる。今後は、日本語ノートの活用、トピックやプレタスクの再検討を通して、コース改善を行なっていきたい。

<PEACE 日本語 3B>

担当者名：<春学期> 富岡洋輔

<秋学期> 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

毎回言葉遊び（早口言葉やしりとりなど）をウォームアップとし、その後は復習のテストを行う。復習後にはテキストを見ながら **comprehension check** を解き、新出事項の内容の確認を行った。時間に余裕がある場合には簡単なモデル会話を提示してから、新出事項を会話で使う練習も行った。

<秋学期>

教材としては、J3 のテキストおよび自作シートを用いて文法学習を進めた。各課の文法項目については、形式や意味の説明にとどまらず、実際の使用場面を意識した用例を提示し、その後、自作シートを用いて文法の表現練習を行うことで、文法項目の運用力の育成を図った。

また、各課終了後には宿題として **Comprehension Check Sheet** を課し、授業内ではクイズを実施することで、文法の理解度および実際の使用に関する定着度を確認した。

結果と課題

<春学期>

学生たちは熱心でまじめに取り組んでいた。新出事項はテキストを「読み」、問題を「解く」という形で確認されているため「文字」に依るところが大きいように感じた。そこで、会話練習の際には状況設定を文字ではなく写真やイラストによって提示し、（それによって学生には状況を日本語で把握する必要が生じる）学生の応答にも答えが一つとは限らず複数の返答がありうるような練習に努めた。これは実際の会話に即したもので、こうした練習は初級において集中的になされるべきものだが、現クラスは初中級段階で敬語にも初めて触れるということから、こうした練習がまだまだ効果的だと判断し、実践した。学生の反応は良好で、会話が実際に「出来た」という学生の実感を伴う授業形態の有効性を講師側としても感じられた。

<秋学期>

履修者は2名と少人数であったが、学生同士の関係は良好で、互いに助け合いながら授業に参加していた。授業中の態度も良く、シートの問題にも真摯に取り組む姿が見られ、日本語学習に対する高い意欲がうかがえた。また、不明点については納得するまで積極的に質問を行い、学習項目を確実に身につけようとする姿勢が確認された。

さらに、文法項目にとどまらず、文化の違いや日常生活の中で疑問に感じた事柄などについて話題を広げる場面もあり、語学学習そのものを楽しんでいる様子が見られた。授業後の振り返りでは、文法項目の難しさに触れつつも、語学学習における文法の重要性を理解し、今後の日本語学習に一層意欲的に取り組みたいという前向きな感想が寄せられた。

一方、今後の日本語学習を見据え、J3のテキストを使用したことから、多くの文法項目を扱うこととなり、内容を詰め込みすぎた面もあったと考えられる。今後は、履修者の学習意欲を損なうことのないよう、重要な文法項目に焦点を当てた授業構成を心掛けたい。

<PEACE 日本語 3C>

担当者名：<春学期> 武田聡子

<秋学期> 武田聡子

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期4名、秋学期2名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

授業では、まず、その週のテーマになっている文法・文型を使ったディクテーションクイズから始め、その週のトピックの Can-do を達成できるようにするための聴解練習と会話練習を行った。具体的には、聴解では、いくつかの既存の教材やインターネットのサイトなどを利用した。会話は基本的に聴解練習で行ったものを元に会話練習につなげた。なめらかな日本語の発話につながるよう、音読（オーバーラッピング、シャドーイング）も適宜取り入れた。ロールプレイや独話（ある程度まとまったことを1人で話す）活動も行った。

<秋学期>

本授業では、前の週に扱った聴解または会話の内容から文を5つ読み上げるディクテーションクイズを実施した。その週のトピックの Can-do を達成するための聴解練習と会話練習を行った。具体的には、聴解では、いくつかの既存の教材やインターネットのサイト、特に NEWS WEB EASY は後半の授業での Warming Up として雑談に活用した。会話は聴解練習で行ったものを元に実践的な会話練習につなげた。

なめらかな日本語の発話につながるよう、音読（オーバーラッピング、シャドーイング）も適宜取り入れた。ロールプレイや独話（ある程度まとまったことを1人で話す）活動も行った。Padletを活用し、画像を選んで、それについて表現する活動も行った。

結果と課題

<春学期>

頭で文法を理解していても、実際に使えるかどうかはかなり異なる。特に、受け身、使役、使役受け身、敬語の尊敬語、謙譲語を会話に取り入れる際、誰が、誰に、誰の行動なのか、などを瞬時に判別しないと適切な語彙が選べないという問題が散見された。また問題を解く際はある程度できて、本当に理解しているか、彼らに説明してもらおうとしたところ、ほとんど説明ができないということもわかり、様々な角度で定着させる必要があることを実感した。本授業は1限目ということもあり、遅刻や欠席が他の曜日のクラスと比べて多かった。さらに、エンジンがかかるまでに時間がかかる学生がおり、瞬発力や集中力に欠けていたことも、本授業の効果を最大限発揮させるためには、検討の余地があると考えた。

<秋学期>

NEWS WEB EASYを取り入れてから、授業の最初のWarming Upとして雑談に活用することで、学生の関心を引き出すことができた。表面的な文型を使用することにとらわれず、学習者の力で表現できることを心掛けたが、学習者によっては自分の知っている範囲に留まった表現で終始し、学んだことをもっと意識的に取り入れられる指導ができなかったことは今後の課題である。文型の中では、特に受け身、使役、使役受け身、敬語の尊敬語、謙譲語を会話に取り入れる際、誰が、誰に、誰の行動なのかで混乱をきたし、誤用が見られることもあった。本授業は1限目ということもあり、特定の学生の遅刻が常態化していた。

<PEACE 日本語 3D>

担当者名：<春学期> 沢野美由紀

<秋学期> 黄慧

授業コマ数：週1コマ

履修者数：春学期4名、秋学期2名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

クラスでは、週ごとに決められたトピックに関連した文章の読解と、その内容に関するディスカッションを中心に授業を行った。文章は毎回複数用意し、内容理解の問題と、内容に関する意見を述べたり説明し

たりする練習を行った。教材にはこのレベルでは未習の語彙も多々あったため、「リーディングチュウ太」などを使用して語彙を調べる方法も学んだ。授業では、トピックに関連する漢字のリストを用いたクイズも行った。

<秋学期>

授業は、漢字学習（約 30 分）と読解（約 60 分）を基本枠組みとして進めた。漢字語彙の読みを中心とする漢字クイズを実施したあと、各自が生活の中で見つけた漢字や授業中に新しく出会った漢字を共有し、漢字リストを更新した。この段階では漢字圏出身の学習者であっても基礎漢字の読みで誤りが生じる点を踏まえ、読みの確認を丁寧に行った。

読解では、読む前の問いや簡単なディスカッションを行い、内容予測を行ったうえで精読に入った。精読後に語彙確認、設問解答、答え合わせを通して根拠の取り方を確認した。さらに、本文を相手に説明する活動、本文の論点を自国や自分の経験に引きつけて述べる活動を加え、理解の定着を図った。学期中には中間テストと期末テストを実施し、読解に加えて要約と意見発表を含む形で理解と発話の両面について評価を行った。

結果と課題

<春学期>

このクラスでは、PEACE の言語・教養目標のうち、特に「わからないことや困ったことに直面した際に類推したり対処したりするためのストラテジーを身に着ける」、「日本と自国を比較し、自国の文化を相対的・客観的・複眼的に捉えられる。その上で、日本と各国の社会文化的な共通点・相違点を（簡単な）日本語で説明できるようになる」という項目の達成を念頭に読みを深めていった。最初は文の一部しか読めず、全体の意味を把握することができなかったが、文脈や漢字、他の語彙から類推する習慣が徐々についていった。また、来日したばかりの学生にとって、ものごとを「客観的、複眼的に捉える」ことは、非常に難しかったようである。が、文化的な意味の違いを考え、また、自分の国の文化ではどうなのかということを経験を繰り返すことによって、客観的な視点を養うことの重要性も理解できたと思われる。

課題としては、ディスカッションなどで各自意見は述べられても、そこから議論が発展していくという展開にはあまりならなかった点が挙げられる。自分の意見だけでなく、ディベート形式で賛成、反対など役割を与えてディスカッションを行っていただければ発展につながったかもしれず、次回以降はその点を考えたい。

<秋学期>

学期を通して、2 名とも読解課題に継続して取り組み、文章の大意把握や設問への対応は概ね自力で行えるようになった。毎回実施した漢字クイズでは、復習時間を取り入れて以降、得点が安定するようになった。期末試験では、要約力や意見を述べる際の流れが中間試験時よりも向上していた。

一方で、漢字圏出身の学習者に多い助詞や複合動詞の見落としが一部に見られた。また、訓読みや初級漢字の読み間違いがあり、カタカナ語の処理に時間がかかることも課題の一つである。さらに漢字学習においては、語彙の難易度を考慮せず、使用頻度が低い漢字語彙などもリストアップするなど十分に整理されていない点などが課題として残っている。今後は、読解後に根拠文の文法確認や言い換え・例文化を行い、理解の定着を図るとともに、読解前に「訓読み・基礎漢字読み・カタカナ」を扱う短い基礎練習を毎回実施することが有効であると思われる。あわせて、漢字リストの難易度基準を共有し、生活場面で用いられる語と学習上必要な語を区別して復習させることが必要である。

<PEACE 日本語 3E>

担当者名：<春学期> 沢野美由紀

<秋学期> 袁シュ

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 4 名、秋学期 2 名

使用教材：独自教材

授業の方法

<春学期>

3E クラスでは、メインタスクとして作文及び発展的活動とプロジェクト活動を実施した。作文では、週ごとのトピックに基づき調査内容や自身の考えを文章化した。プロジェクトは、学生が選んだテーマについて日本と自国の社会・文化を比較し、共通点や相違点、その理由をまとめたうえで日本人の大学生へインタビュー調査を行い、発表した。

<秋学期>

授業では、作文とプロジェクトの活動を行い、それぞれの進行状況や内容に応じて時間配分を調整した。作文では、まずトピックに関する自由会話を行い、学生の意見や経験を引き出した上で、既習文法との関連付けを行った。その後、モデル文の構成や内容の分析、アウトラインの作成、作文の執筆という流れで授業を進め、論理的かつ正確に書く力の育成を図った。プロジェクトでは、日本と自国の共通点・相違点について、学生が自らの興味・関心に基づいてテーマを決め、インタビューを企画・実施し、その結果を整理して期末に発表した。このプロセスを通して、日常生活での気づきを批判的に捉え、仮説の設定と検証へと発展させるアカデミックな考え方の育成を目指した。また、インタビューに向けた準備として市販教材を使用し、聞き手としてのリアクションを中心に、インタビューの参加者とのやり取りの方法を指導した。インタビューにはビジター4名に参加してもらい、期末の発表会ではビジター2名を招いて、質疑応答を行った。

結果と課題

<春学期>

プロジェクトでは自分の興味に応じたトピックを選び進めることができたため、興味を持続させながら取り組むことができた。また、日本人の大学生とのインタビューを通じて日本語でより深いコミュニケーションが実現し、学生の日本語運用力の向上につながった。また、作文活動では週ごとの共通トピックを扱っているため、他クラス（特に3Dクラス）との連携があり、3Dクラスで読んだ内容や、そこで考えた意見を作文で表現できるというメリットがあった。

一方で、プロジェクトや作文活動に真摯に取り組む姿勢は見られたものの、学生側からの積極的な産出が少なかった点は課題であった。今後は、学生の自発的な産出を促す工夫が必要である。

<秋学期>

履修者が2名で少人数のクラスだったため、各学生の強みと課題を把握しやすく、丁寧なフィードバックを行うことができた。また、2名は互いに助け合いながら授業に参加しており、協働的な学習環境が形成されていた。作文では、日常生活で活用できそうな内容が多く、学生は関心をもって積極的にアイデアを出し、真面目に取り組んでいた。特に、文章構成に対する意識は大きな進歩が見られた。さらに、プロジェクトでは、インタビューや発表時の質疑応答を通してコミュニケーション能力が高まり、以前よりも自信を持ってやり取りできるようになった。初回の授業で漠然としていた考えも、ディスカッションを重ねることで徐々に具体化し、相手にわかりやすく説明する力へと成長が見られた。

一方で、作文においては正確さに課題が残り、特に動詞・形容詞の活用の誤りと助詞の誤用が繰り返し見られた。フィードバックが十分に修正に反映されないこともあり、今後はより効果的なフィードバックの方法を検討する必要がある。また、プロジェクトでは授業内の時間が不足し、発表原稿やスライドの作成・修正は授業で行う必要があったため、学生の負担がやや大きくなった。今後はより効率的に進められるよう、授業の進め方を改善していきたい。

2025年度 法政日本語 授業記録

<法政リーディング&ライティング>

コース概要

法学部での学びに関連した内容の文章を読み、その内容を自分の言葉で説明する。また、理解した内容を基礎として、自分なりの意見をまとめて書くことにつなげる。「書く」ことに関しては、①読んだ内容をふまえ、さらに文献などを調べて、レポートにまとめる、②読んだ内容を理解し、出された問に文章で制限時間内に回答する、という2つのスキルに焦点をあてて扱う。さらに、日本語で書くために必要な語彙や文型についても扱う。授業後半には、専門科目でのレポートや試験を想定した筆記テストを行い、法学部での学びに十分な日本語力が身に着いたかを各自が確認する。

担当者名：＜春学期＞ 鹿目葉子

＜秋学期＞ 鹿目葉子

授業コマ数：週 1 コマ

履修者数：春学期 12 名、秋学期 4 名

使用教材：参考図書ならびに独自教材

コースの目標

法学部の学生が、法学部における講義の理解に必要な日本語のリーディングスキルを身に着ける。また、法学部におけるレポート作成、試験問題への回答などのために必要なライティングスキルを身に着ける。

授業の方法

授業は「日本語で書くために必要な語彙や文型」練習と「読んで書く」練習の 2 部構成で進めた。前者においては、アカデミックライティング用のフレーズ練習を用い、後者においては、法学部での学びに関連した内容の文章を読ませ、その内容について、①説明する、②論じる、③意見を述べる、に分けて、「書き方」を身に付けさせた。また、毎回、「書く」課題を提示した。さらに、後半ではレポートの書き方と試験を想定した筆記テストを行い、最終日はテストのフィードバックを行った。

結果と課題

＜春学期＞

休学者を含む 12 名のうち、最後まで授業に参加したのは 1 名であった。学生は本コースの趣旨を理解し、授業中の活動や課題に真摯に取り組み、学部での授業に向けた日本語力の向上を目指していた。今学期は、前年度までの授業に対する課題を踏まえて授業を組み立て実施した。学生からは、アカデミックライティングに必要なスキルや、考える力が身についたという肯定的な意見が聞かれた。その一方で、書くだけでなく、話すスキルも向上したいという声も挙げられた。今後の課題としては、読む・書く力と話す・聞くという力も同時に身につけられるような授業作りを考えてみたい。

＜秋学期＞

休学者を含む 4 名の履修者のうち、当初は 2 名が授業に参加していたが、履修状況の変化等により、最終的には継続的な参加者はいなかった。次年度からコース内容が一新されることを踏まえ、今後は法学部の試験等にも生かせる、より実用的な授業内容への改善が必要であると考えられる。

2. 2025 年度 Placement Test 実施報告

【春学期】

2025 年度春学期 日本語プレACEMENTテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
3月26日 特別外国人学生 正規院生対象	-	-	148	4	7	10	1
3月27日 正規学部生対象	82	0	-	-	-	-	-
4月2日 (特別措置)	11	0	0	0	0	0	0
全受験者数 263 名							

春学期プレACEMENTテスト対象者 レベル判定結果 (特別外国人学生・正規大学院生)

J0	51			
J1	31			
J1S	11			
J2	14			
J2S	7			
J3	10			
J3S	5			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	8	8	8	8
J5	6	6	6	6
J6	8	8	8	8
J7	12	12	12	12
J8	6			

<春学期総評>

全体的に順調に運営ができ、結果により全員のレベルを適切に配置することができた。「大学生の日本語」については適正なレベル配置ができていたが、学生の声にもとづき、秋学期より、レベル複合型で展開していることについて説明を加えることとした。

【秋学期】

2025 年度秋学期 日本語プレイスメントテスト受験者数

	正規学部生		特別外国人学生		正規大学院生		研究者
	新入生	在学生	新入生	在学生	新入生	在学生	
9月3日 9月入学者 正規学部生 特別外国人学生 継続正規院生対象	32	4	162	2	0	11	0
9月11日 新規正規院生 特別措置	1	0	0	0	20	0	1
全受験者数 233名（実人数）							

※特別外国人学生・正規大学院生のうち、J0クラス（日本語未修者を主な対象としたクラス）の履修希望者はGoogleフォームのみでの回答とし、本プレイスメントテストの受験は不要としている。

秋学期プレイスメントテスト受験者レベル判定結果（特別外国人学生・正規大学院生）

J0	66			
J1	29			
J1S	7			
J2	6			
J2S	7			
J3	16			
J3S	19			
	文法・文型	読解	作文	聴解・会話
J4	13	13	13	13
J5	17	17	17	17
J6	25	25	25	25
J7	21	21	21	21
J8	8			

<秋学期総評>

池袋内キャンパスの工事の関係から、初めて新座キャンパスで実施することとなった。これまでは日本語学習を希望する学生全員がプレイスメントテスト会場に足を運ぶ仕組みとしていたが、新座キャンパスでの実施を契機として、J0希望者のキャンパスでの受験不要とする形をとった。こういった運営方針の変

更により、留学生からレベルに関する問い合わせが増える可能性があることから、FAQを作成した。具体的には国際センターで作成している特外生用の Web サイトからアクセスできるチャットボットに、日本語科目のレベルに関する項目を追加し、特外アンケートや特外生・正規院生向けポータルサイトからチャットボットにアクセスできるようにした。

当日は、web テストで複数の学生がログインができない状況が続き、運営に課題が生じた。秋学期中に関係部署の助言を得ながら業者に修正作業を依頼し、次回に備えている。

2025 年度の日本語科目履修者の内訳は以下の通りである。

(履修者数は、継続生も含む。ここでいう「継続生」とは、前学期に日本語科目を履修した者。継続生は日本語プレイスメントテスト対象者には含まない。)

	【2025 年度春学期】		【2025 年度秋学期】	
	国 籍	人 数	国 籍	人 数
特別外国人学生	アイルランド	2	アメリカ合衆国	17
	アメリカ合衆国	31	イタリア	1
	イタリア	3	オーストラリア	12
	インド	1	オーストリア	1
	インドネシア	3	オランダ	10
	オーストラリア	9	カナダ	8
	オランダ	4	ギリシャ	1
	カナダ	5	コロンビア	1
	クロアチア	1	シンガポール	1
	コートジボアール	1	スイス	3
	コロンビア	1	スペイン	6
	シンガポール	2	スロバキア	1
	スペイン	5	タイ	1
	スロバキア	1	チェコ	2
	スロベニア	1	デンマーク	1
	タイ	2	ドイツ	25
	チェコ	1	ニュージーランド	2
	ドイツ	10	フィンランド	4
	ニュージーランド	1	フランス	11
	ノルウェー	1	ブルネイ	1
フィンランド	5	ベルギー	1	

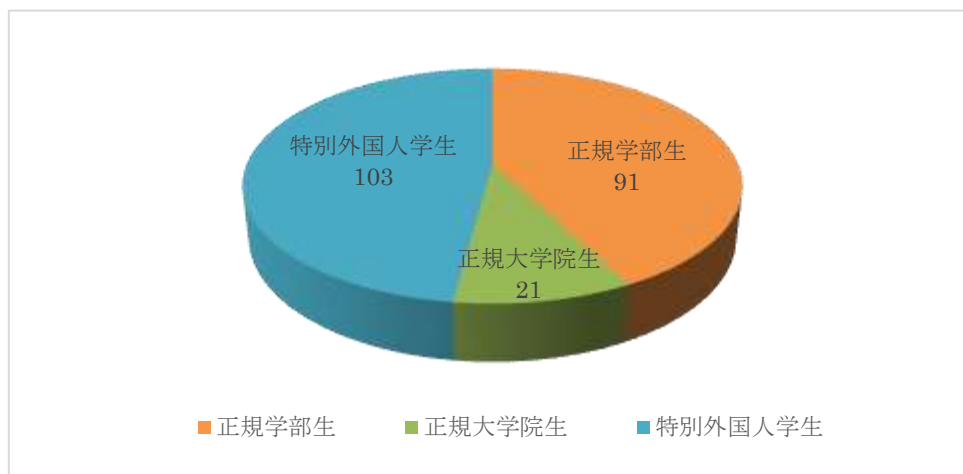
	フランス	10	ポーランド	2
	ブルガリア	1	ポルトガル	1
	ベトナム	3	マレーシア	3
	ベルギー	1	メキシコ	1
	ポーランド	3	ロシア	1
	メキシコ	2	イギリス	12
	ルーマニア	1	韓国	16
	イギリス	15	台湾	11
	韓国	10	中国	9
	台湾	11	中国（香港）	5
	中国	6	日本	4
	中国（マカオ）	1		
	中国（香港）	5		
	日本	6		
特別外国人学生合計		165		175
正規留学生 （大学院）	ウクライナ	2	アメリカ合衆国	3
	カナダ	1	ウクライナ	1
	ザンビア	1	エジプト	1
	ドイツ	1	ジンバブエ共和国	1
	フィリピン	1	スイス連邦	1
	フランス	2	チュニジア共和国	1
	台湾	1	ドイツ	1
	中国	6	フィリピン	1
			フランス	5
			ミャンマー	2
			ロシア	1
			台湾	1
			中国	10
正規留学生（大学院）合計		15		29
日本語履修者 合計	2025 年度春学期	180	2025 年度秋学期	204

* 本学では正規留学生は在留資格「留学」を有している者としているが、日本語教育センター科目は、正規大学院生は、特に日本語学習の必要性が認められれば履修を認めているため、上表に記載する。

3. 2025年度日本語相談室実施報告

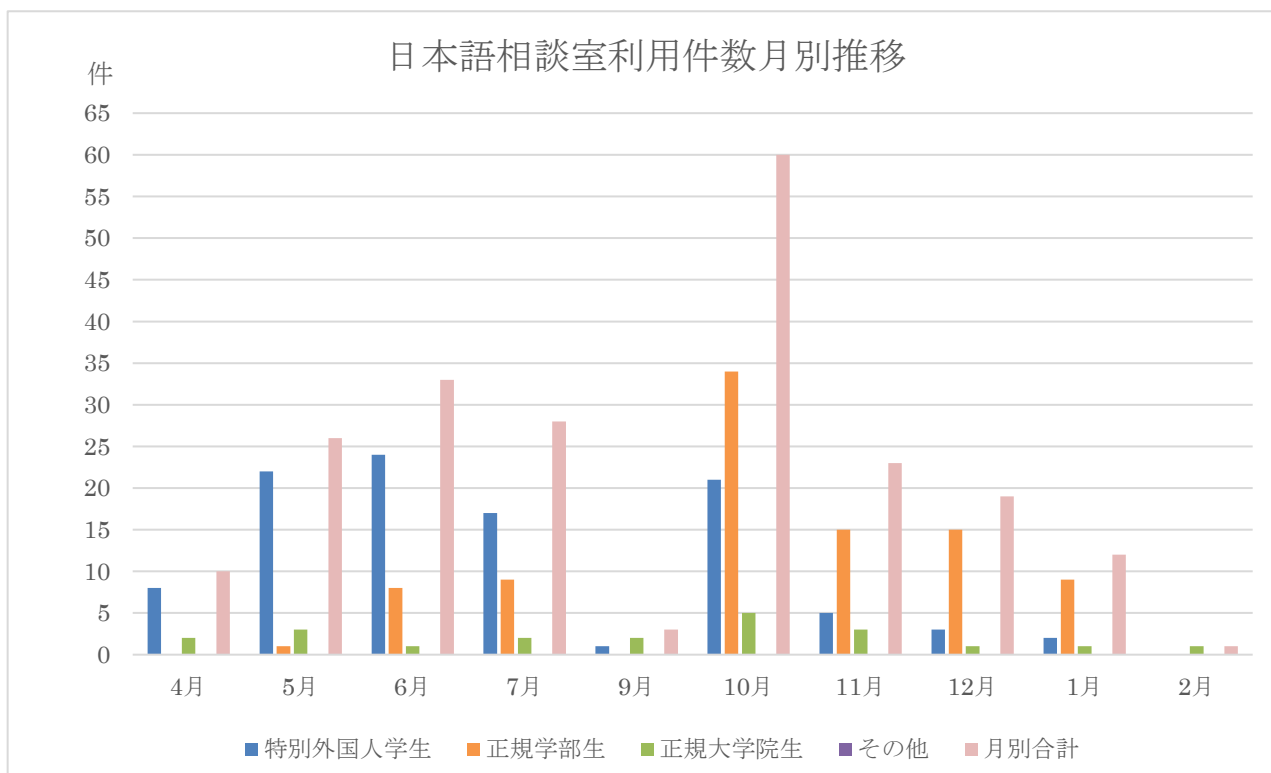
2025年度 日本語相談室利用状況（2025年4月10日～2026年2月3日）

【相談者所属別利用件数】



【月別推移】

相談者属性	予約枠	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	合計
特外	教員	8	22	24	17	1	20	5	3	2	0	102
	学生 アドバイザー	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1
	小計	8	22	24	17	1	21	5	3	2	0	103
学部	教員	0	1	8	9	0	20	9	10	6	0	63
	学生 アドバイザー	0	0	0	0	0	14	6	5	3	0	28
	小計	0	1	8	9	0	34	15	15	9	0	91
大学院	教員	2	3	1	2	2	5	3	1	1	1	21
その他	教員	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
月別合計		10	26	33	28	3	60	23	19	12	1	215



【所属別利用件数】

				キャンパス (対面)		オンライン	
		実質 利用人数	合計 利用回数	池袋	新座	教員	学生アド バイザー
特別外国人学生		15	103	98	1	3	1
正規 学部生	文学部	1	3	2	0	1	0
	異文化コミュニケーション学部	7	26	10	0	12	4
	経済学部	2	2	2	0	0	0
	経営学部	6	21	6	0	9	6
	理学部	0	0	0	0	0	0
	社会学部	3	20	7	0	0	13
	法学部	4	14	12	0	0	2
	観光学部	0	0	0	0	0	0
	コミュニティ福祉学部	2	3	0	1	1	1
	現代心理学部	1	2	0	0	0	2
	スポーツウェルネス学部	0	0	0	0	0	0
GLAP	0	0	0	0	0	0	

正規 大学院生	キリスト教学研究科	0	0	0	0	0	対象外
	文学研究科	0	0	0	0	0	
	異文化コミュニケーション研究科	2	5	5	0	0	
	経済学研究科	0	0	0	0	0	
	経営学研究科	4	6	4	0	2	
	理学研究科	0	0	0	0	0	
	社会学研究科	1	1	0	0	1	
	法学研究科	0	0	0	0	0	
	観光学研究科	0	0	0	0	0	
	コミュニティ福祉学研究科	0	0	0	0	0	
	現代心理学研究科	1	1	0	1	0	
	スポーツウェルネス研究科	0	0	0	0	0	
	ビジネスデザイン研究科	0	0	0	0	0	
	人工知能科学研究科	1	2	2	0	0	
	社会デザイン研究科	3	6	2	0	4	
特別外国人学生 計	15	103	98	1	3	1	
正規学部生 計	26	91	39	1	23	28	
正規大学院生 計	12	21	13	1	7	対象外	
その他 計	0	0	0	0	0	0	
合計	53	215	150	3	33	29	

【2025年度春学期】

●教員/曜日・時限別 利用件数・平均稼働率

	月			火			水			木			金		
		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率
1限	池袋			池袋			池袋			池袋			池袋		
	新座			新座			新座			新座			新座		
	オンライン			オンライン			オンライン			オンライン			オンライン		
2限	池袋	14	41.5%	池袋	13	40.8%	池袋	1	3.1%	池袋			池袋	11	35.4%
	新座			新座			新座			新座			新座		
	オンライン	0		オンライン	0		オンライン	0		オンライン			オンライン	0	
3限	池袋	6	23.8%	池袋		3.1%	池袋	15	49.0%	池袋	3	8.1%	池袋	3	20.8%
	新座			新座	0		新座			新座			新座		
	オンライン	2		オンライン	1		オンライン	1		オンライン	0		オンライン	3	
4限	池袋			池袋		2.5%	池袋	2	8.8%	池袋	20	59.8%	池袋		
	新座		新座	1	新座			新座			新座				
	オンライン		オンライン	0	オンライン		1	オンライン		0	オンライン				

●学生アドバイザー/曜日・時限別 利用件数

※春学期は学生アドバイザー枠なし

	月	火	水	木	金
1限-1					
1限-2					
2限-1					
2限-2					
3限-1					
4限-1					
4限-2					

【2025年度秋学期】

●教員/曜日・時限別 利用件数・平均稼働率

	月			火			水			木			金				
		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		件数	平均稼働率		
1限	池袋			池袋			池袋			池袋			池袋				
	新座			新座			新座			新座			新座				
	オンライン			オンライン			オンライン			オンライン			オンライン				
2限	池袋	6	15.3%	池袋	10	37.5%	池袋	1	25.0%	池袋	6	25.3%	池袋	1	25.0%		
	新座			新座			新座			新座			新座			新座	
	オンライン	1		オンライン	3		オンライン	0		オンライン	4		オンライン	0			
3限	池袋	2	11.1%	池袋		10.4%	池袋	4	12.3%	池袋	4	11.3%	池袋	9	33.0%		
	新座			新座	2		新座			新座			新座				
	オンライン	2		オンライン	1		オンライン	0		オンライン	1		オンライン	3			
4限	池袋	2	9.2%	池袋		2.8%	池袋	7	31.5%	池袋			池袋	10	45.8%		
	新座			新座	0		新座			新座			新座				
	オンライン	1		オンライン	1		オンライン	5		オンライン			オンライン	3			

●学生アドバイザー/曜日・時限別 利用件数

	月	火	水	木	金
1限-1			6		
1限-2	2		3		
2限-1					
2限-2					
3限-1					
3限-2		6			5
4限-1				1	
4限-2		3		3	

【2011年度—2025年度 利用件数推移】

	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度	2019 年度	2020 年度
特別外国人学生	26	45	62	46	29	88	67	42	63	5
正規学部生	29	18	33	52	76	98	70	92	126	153
正規大学院生	89	90	86	138	311	242	268	304	205	167
その他	0	0	0	1	8	0	2	0	0	2
合 計	144	153	181	237	424	428	407	438	394	327
増 減	100	106.3	125.7	164.6	294.4	297.2	282.6	304.2	273.6	227.1

	2021 年度	2022 年度	2023 年度	2024 年度	2025 年度
特別外国人学生	2	38	57	69	103
正規学部生	180	175	132	93	91
正規大学院生	177	179	88	59	21
その他	0	0	0	0	0
合 計	359	392	277	221	215
増 減	249.3	272.2	192.4	153.5	149.3

日本語相談室担当者コメント

今年度の日本語相談室は、前年度と同様に教員枠と学生アドバイザー枠を設けて開室した。学生アドバイザー枠は、本学の大学院生および学部生の学生アドバイザーが担当し、日本語を母語としない学部生のみを対象としている。相談できる内容には、正規科目のレポートと発表、リアクションペーパー、日本語資料の内容確認、日本語クラスの宿題、話す練習がある。一方、教員枠は、基本的に日本語を母語としない学部生および大学院生を対象とし、話す練習以外のさまざまな相談を受け付けている。なお、スピーチコンテストの準備については、教員枠、アドバイザー枠のいずれも利用可能とした。開室形態については、教員枠はオンラインと対面の双方で実施し、学生が選択できる形とした。学生アドバイザー枠は、オンライン相談室として開室した。

また、多くの学生に日本語相談室を利用してもらうため、昨年度と同様に、図書館のラーニングアドバイザーのカウンターにおいて、日本語相談室のチラシを配布していただいた。

以下、教員枠および学生アドバイザー枠の利用について、順に述べる。

<教員枠>

【相談内容内訳】

相談内容	件数
卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）	24
就職活動（エントリーシート等）	3
レポート（授業、ゼミ等）	29
奨学金関係（申請書類、面接練習等）	5
学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）	85
スピーチコンテスト	27
発表指導（授業、ゼミ等）	3
学会発表・予稿集・投稿論文	2
その他	8
合計	186

【稼働率】

春学期

	4月	5月	6月	7月	計
相談件数	10	26	33	28	97
相談枠	72	96	100	112	380
稼働率（%）	13.9	27.1	33.0	25.0	25.5

秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
相談件数	3	45	17	14	9	1	89
相談枠	34	110	62	84	80	12	380
稼働率（%）	8.8	40.9	27.4	16.7	11.3	8.3	23.4

全体の利用件数は186件であり、前年度の182件と比較して大きな増減は見られなかった。相談内容の内訳を見ると、最も多かったのは「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」で85件、次いで「レポート（授業、ゼミ等）」29件、「スピーチコンテスト」27件、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」24件であった。

前年度との比較では、「学習方法指導（練習、日本語能力試験対策指導も含む）」は37件から85件へと大幅に増加し、「レポート（授業、ゼミ等）」に関する相談も14件から29件へと増加した。一方、「卒業・修士・博士論文（研究計画書、中間発表を含む）」に関する相談は、56件から24件へと大きく減少

した点が特徴的である。

学習方法指導に関する相談が増加した背景には、予習・復習の過程で生じた疑問を解消し、授業理解を確実なものにしようとする学習者の主体的な姿勢があるとうかがえる。実際の相談内容からも、継続的な自律学習を支援する場として相談室が機能している様子が確認された。また、レポート相談については、同一学生による複数回の利用や、学期を通じた継続的な利用が目立ち、課題遂行のプロセスの中に相談室の利用が組み込まれている状況が見られた。

一方、論文関連の相談が減少した原因としては、近年の生成 AI の普及の影響が大きいと推察される。また、奨学金関連の相談も減少しており、相談内容の中心が学習支援へと移行している傾向が確認された。あわせて、対面での支援を通して理解を深めたいというニーズも認められ、相談室の直接的支援の意義が示された。

今後は、このような利用ニーズの変化を踏まえ、学習支援機能のさらなる充実を図るとともに、相談室の認知度向上に向けた取り組みを強化していくことが望まれる。具体的には、新学期開始時の周知に加え、課題が提示される時期や授業内で課題内容の説明が行われるタイミングにあわせて広報を行うことなどが考えられる。こうした取り組みを通じて、新規利用者の拡大につなげていくことが期待される。

なお、日本語相談室を利用する際のルールは概ね守られてきているが、引き続き事前資料の提出期日や利用方法についても周知する必要がある。

<学生アドバイザー枠>

【相談内容内訳】

相談内容	件数
リアクションペーパー	15
レポート	3
発表の準備*	8
スピーチコンテスト	4
日本語資料の内容確認	0
合計	30

*発表の準備の詳細（「話す練習」を含む）

例 1) 会話の練習（相談者が準備したトピックについての会話）

例 2) 法学部のゼミで扱う裁判関連の研究事例についてのゼミ発表

例 3) NEXUS 生による「多文化共生」の発表

【稼働率】

秋学期

	9月	10月	11月	12月	1月	2月	計
相談件数	1	10	5	5	0	0	21
相談枠	10	33	26	24	27	1	121
稼働率 (%)	10.0	30.3	19.2	20.8	0.0	0.0	17.4

2022年度に開始した学生アドバイザーによるオンラインの日本語相談室は4年目となった。学生アドバイザーは毎学期、事前研修を受けたうえで日本語相談室を担当し、学期中の中間報告会2回、学期終了後の事後研修にも参加し、振り返りを行っている。

2025年度は、春学期は閉室し、秋学期のみ開室した。2023年度に続き、2025年度も4名体制で週8枠対応し、全員新規の学部生が担当した。

相談件数は、2024年度秋学期の21件から30件に増加し、稼働率も17.4%から25.4%に増加した。これは、2025年度のNEXUS生の入学者が増え、リアクションペーパーの相談が増加したためと考えられる。来年度も今年度同様、学生アドバイザーが入れる時間帯をNEXUSの授業の時間帯と重ならないように調整する必要がある。NEXUS生以外の利用者数は、2024年度秋学期に比べ、減少したため、引き続き、利用者獲得に向けて周知していきたい。尚、2026年度のアドバイザーは、2024年度の経験者が含まれるため、空き時間研修資料の開発等、研修内容を充実させることも今後の課題としたい。

4. 2025 年度立教大学漢字検定試験実施報告

2025 年度 立教漢字検定データ

	試験日	申込締切日	申 込		受 験		合 格	
第1回	5月30日(金)	4月30日(水)	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	21名	特別外国人学生	15名
			上級	9名	上級	9名	上級	5名
			中級	13名	中級	12名	中級	10名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名			
上級	0名	上級	0名	上級	0名			
中級	0名	中級	0名	中級	0名			
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
申込合計			22名	受験合計	21名	合格合計	15名	
第2回	7月11日(金)	6月20日(金)	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	14名	特別外国人学生	12名
			上級	5名	上級	4名	上級	4名
			中級	17名	中級	10名	中級	8名
			初級	0名	初級	0名	初級	0名
			正規学部生	0名	正規学部生	0名	正規学部生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	0名	中級	0名	中級	0名
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
正規大学院生	0名	正規大学院生	0名	正規大学院生	0名			
上級	0名	上級	0名	上級	0名			
中級	0名	中級	0名	中級	0名			
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
申込合計			22名	受験合計	14名	合格合計	12名	
第3回	11月17日(月)	10月24日(金)	特別外国人学生	23名	特別外国人学生	20名	特別外国人学生	11名
			上級	1名	上級	1名	上級	1名
			中級	14名	中級	13名	中級	8名
			初級	8名	初級	6名	初級	2名
			正規学部生	2名	正規学部生	2名	正規学部生	1名
			上級	1名	上級	1名	上級	1名
			中級	1名	中級	1名	中級	0名
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
正規大学院生	1名	正規大学院生	1名	正規大学院生	0名			
上級	0名	上級	0名	上級	0名			
中級	1名	中級	1名	中級	0名			
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
申込合計			26名	受験合計	23名	合格合計	12名	
第4回	1月9日(金)	12月19日(金)	特別外国人学生	22名	特別外国人学生	18名	特別外国人学生	12名
			上級	1名	上級	1名	上級	1名
			中級	15名	中級	12名	中級	7名
			初級	6名	初級	5名	初級	4名
			正規学部生	1名	正規学部生	1名	正規学部生	0名
			上級	0名	上級	0名	上級	0名
			中級	1名	中級	1名	中級	0名
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
正規大学院生	1名	正規大学院生	1名	正規大学院生	0名			
上級	0名	上級	0名	上級	0名			
中級	1名	中級	1名	中級	0名			
初級	0名	初級	0名	初級	0名			
申込合計			24名	受験合計	20名	合格合計	12名	

これまでと同様に主な申込者は漢字クラス履修学生であるが、秋学期には正規学部生、正規大学院生の申し込みがあった。ひきつづきニュースレターその他を通じて広く周知し、漢字学習を促す機会としていきたい。申込者数は、春秋通じて、昨年度秋学期並みで、合格率は秋学期よりも春学期のほうが高かった。

5. 留学生による日本語スピーチコンテスト実施報告

2025年度は、12月6日に「第14回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト—セントポールライオンズクラブ杯」を対面で開催した。当日は、初級から上級まで18名の学生が参加した。内訳は初級の部10名、中級の部4名、上級の部4名である。

実施の詳細は、日本語教育センターホームページ

(<https://cjle.rikkyo.ac.jp/contest/14th.default.html>) を参照されたい。

スピーチコンテストの成果物として、『第14回 立教大学留学生による日本語スピーチコンテスト—東京セントポールライオンズクラブ杯—スピーチ文集』を刊行した。

6. 日本語教育センターシンポジウム実施報告

2025年7月19日に「正規学部留学生受け入れの新時代4—『新たな』正規学部留学生のキャリア支援と日本語—」というテーマで実施した。高い英語運用力を生かして、日本で活躍する卒業留学生（異文化コミュニケーション学部卒）を招き、彼女らが本学でどのように学び、どのようなキャリア形成を行ってきたのか、日本語学習のニーズはどのようなものかを学ぶとともに、本学の新しい取り組みである

「RIKKYO STUDY PROJECT (RSP)」によって入学し、英語トラック (PEACE プログラム) で学ぶ外国人留学生のためのキャリア支援と日本語について議論する機会を設けた。

登壇者は松井秀征氏 (国際化推進機構長、法学部教授)、中村拓海氏 (株式会社ソーシャライズ代表)、田岡絵理子氏 (法学部教授)、アリサ・タン・シャウニン氏 (本学卒業生)、アレクサンドラ・チェン・ウェイミン氏 (本学卒業生) であった。本企画は、国際化推進機構、法学部、異文化コミュニケーション学部、GLAP が共催したほか、「同時ウィスパリング」形式で異文化コミュニケーション学部の学生団体 RiCoLaS の協力を得た。

シンポジウムの詳細は、日本語教育センターホームページ

(<https://cjle.rikkyo.ac.jp/symposium/default.aspx>) を参照されたい。

また、当日の成果は冊子体『シリーズ 新しい日本語教育を考える 15』として刊行(オンライン)した。

https://rikkyo.repo.nii.ac.jp/search?page=1&size=100&sort=custom_sort&search_type=2&q=1764571209123

7. 日本語教育センターニューズレター発行報告

例年通り「日本語教育センターニューズレター」を4回発行した。今年度は、留学生による日本語の学習方法の紹介や、日本語相談室、全学共通カリキュラム言語自由科目（日本語）などについて情報を発信した。

詳細は、日本語教育センターホームページ

(<https://cile.rikkyo.ac.jp/newsletter/default.aspx>) を参照されたい。

8. 短期日本語プログラム報告

2025年度短期日本語プログラムは、2024年度第5回国際化推進会議（2024年10月3日）において決定した、「2025年度以降の短期プログラムの実施運営」を踏まえ、開催回数、実施期間、実施場所、定員、コースデザイン等について従来よりも大きく変更した実施計画を策定し、これに基づき実施した。内容は大幅に変更となったが、夏期、冬期ともにプログラムは円滑に実施され、参加者の満足度も高いものであった。

<参考>前年度からの変更点

	2024年度	2025年度
開催回数	年3回（夏期、秋期、冬期）	年2回（夏期、冬期）
実施期間	夏期：2週間 秋期・冬期：3週間	夏期・冬期：2週間
実施場所	夏期：池袋キャンパス 秋期・冬期：新座キャンパス	夏期・冬期：池袋キャンパス
定員	夏期：20名 秋期・冬期：各40名	夏期・冬期：各30名
コースデザイン	夏期：日本語科目2単位 (学生団体の協力による 日本文化体験講座を含む) 秋期・冬期：日本語科目2単位、社会 文化講義・フィールドトリップ2単位	夏期・冬期：日本語科目2単位 (学生団体の協力による 日本文化体験講座を含む)

(出典：2026年2月24日 国際化推進機構運営会議資料)

【春学期】

1 実施概要

1) プログラム期間

2025年7月22日(火)～8月1日(金)

チェックイン：2025年7月21日(月)、チェックアウト8月2日(土)

2) 実施場所、宿舎

池袋キャンパス

SUPER HOTEL 池袋西口天然温泉

3) コースデザイン

単位数：2単位(2,800分)

*単位数内訳：日本語科目2単位(2,800分) 50分×56回

4) 開講レベル及びクラス数

2レベル2クラス(入門 Beginner、初中級 Pre-intermediate)

5) 日本文化ワークショップ(実施順)

① 和楽器(協力：合唱団アヒル会<和楽器サークル>)

② 書道(協力：書道研究会)

2 結果

1) 参加学生：19名*

*応募者：37名、採用者：31名、不採用者：6名、辞退・未入金：12名(うち免除枠採用後の辞退者：1名)

	大学間協定校 (GLAP協定校を含む)	学部間協定
授業料免除枠 (7名)	ウォーリック大学(1)、リバプール大学 (5)	国民大学校(異)(1)
一般枠 (12名)	ギリシャアメリカン大学(2)、ニューサ ウスウェールズ大学(2)、華東師範大学 (1)、香港中文大学(1)、漢陽大学校 ERICAキャンパス(1)、マサリック大学 (1)、ユトレヒト大学(1)、サウザンプ トン大学(1)、ノーザンアリゾナ大学 (1)、ランドルフメーコン大学(1)	

*ノーザンアリゾナ大学は学部間協定もあり

2) 学内の協力

学生団体	合唱団アヒル会、書道研究会	
学 生	住み込みアルバイト 【計7名】	社会学部 (3)、観光学部 (2)、経営学部 (2)
	イベントサポーター (キャンパスツアーガイド) 【計10名】	文学部 (1)、経済学部 (1)、社会学部 (2)、法学部 (1)、 コミュニティ福祉学部 (2)、異文化コミュニケーション学部 (3)
	日本語授業ボランティア 【計21名】	文学部 (8)、経済学部 (3)、理学部 (1)、社会学部 (1)、 法学部 (1)、観光学部 (1)、コミュニティ福祉学部 (1)、 現代心理学部 (1)、異文化コミュニケーション学部 (4)
事務・運営補助	教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、総務部、 保健室、メディアセンター	

3 成果

(1) 協定校とのインバランス解消

(2) 本学のプレゼンスの強化

(3) 本学学生との国際交流の促進

a. 住み込みアルバイトの企画協力により、初日（7月22日）にウェルカムイベントを実施（短プロ生19名、立教生6名が参加）。

b. 国際センターの協力により、グローバルラウンジと連携して以下のイベントを実施。参加者数は以下の通り。

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	参加者数合計
Japanese Traditional Card Games (7月23日)	5	8	13
Japanese Café (7月28日)	1	9	10
参加延べ人数合計	6	17	23

4 今後の課題

- ・ 協定校とのさらなる連携強化、授業料免除枠の有効活用
- ・ 採用後の辞退者・無断キャンセル者への対応検討
- ・ 本学学生ボランティア登録者の無断欠席等への対策

5 授業

日本語クラス1（入門）

授業担当者：任、川野、山本、高嶋
履修者数：10名
使用教材：独自教材

日本語クラス2（初中級）

授業担当者：小森、長谷川、小松、野尻、
履修者数：9名
使用教材：独自教材

2025年度夏の短期プログラムは、19名が受講した。日本語クラスは入門と初中級の2クラス体制で、9日間行われた。入門クラスは日本語学習歴のない学生を対象とし、独自教材を用いて、ひらがなの導入と練習および短期プログラム期間中に受講生が遭遇しそうな場面で使える日常会話の指導を行った。会話のトピックとしては、「自己紹介」「店やレストランでの注文」「友だちに予定を聞く」「週末したことについて説明する」「日本で感じたことや考えたことを伝える」などを取り上げた。初中級クラスは日本語が既習の学生を対象に、短期プログラム期間中に遭遇しうる場面を設定して、初級後半で学習する文型を盛り込み、導入と練習を行った。各課のトピックは「自己紹介」「私の大学や町の紹介」「旅行中のトラブル」「誘う・断る」「食文化」などを取り上げた。

教材を用いた日本語学習の他、学生ボランティアを招いてのゲストセッションも複数回実施し、会話練習やスピーチ練習等の活動をサポートしてもらった。立教大学の正規生たちとの交流の場ともなり、受講者も楽しんで活動に参加する様子が見られた。

日本語クラスのほか、2回の文化体験プログラムも実施した。立教大学の学生団体の協力を得て、書道と和楽器演奏の活動を行ったが、いずれも受講者から多くの肯定的なコメントが寄せられた。日本文化を体験し、新たな学びを得ただけでなく、学生団体の学生たちとの交流の時間となり、よい思い出となったようである。最終発表でも、これらの文化体験を題材に発表する学生が複数見られた。

最終発表では、自己紹介を行うとともに「プログラムでの経験」をテーマとした。その結果、日本で訪れた場所や出会った人、印象的だった食べ物、また日本での気づきなどについて、授業で学んだ表現を積極的に用いて伝えようとする姿勢が多く見られた。

今回受講した学生たちは一様に意欲が高く、授業活動に熱心に取り組む学生たちであったが、日本の夏の暑さにより体調を崩す学生も複数出てしまった。毎日長時間日本語クラスや活動が続いていく中で、いかに体調管理をさせていくのが今後の課題となる。また、初中級のクラスでは、「日本語が既習の学生」を対象としたことから、学生間の日本語レベルの差が大きく、急遽教材の内容を変更したり、クラス活動での工夫が必要となった。今後も、様々な背景、学習経験を持つ学生たちに対応していけるよう、柔軟に教材やシラバスを準備し、学生たちによりよい学びの場を提供できるよう、心がけていきたい。

【秋学期】(冬期プログラム)

1 実施概要

1) プログラム期間

2026年1月20日(火)～1月30日(金)

チェックイン：2026年1月19日(月)、チェックアウト1月31日(土)

2) 実施場所、宿舎

池袋キャンパス

SUPER HOTEL 池袋西口天然温泉

3) コースデザイン

単位数：2単位(2,800分)

*単位数内訳：日本語科目2単位(2,800分)50分×56回

4) 開講レベル及びクラス数

2レベル2クラス(入門 Beginner、初級 Elementary)

5) 日本文化ワークショップ(実施順)

① 和太鼓(協力：田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト～絆の会～)

② 茶道(協力：茶道部)

2 結果

1) 参加学生：26名*

*応募者：41名、採用者：35名、不採用者：6名、辞退・未入金：9名

	大学間協定校 (GLAP協定校を含む)	学部間協定
授業料免除枠 (11名)	マードック大学(7)	フランクフルト大学(文)(1)、シドニー大学(異)(1)、エディスコーワン大学(経営)(1)、クイーンズランド工科大学(経営)(1)
一般枠 (15名)	ニューサウスウェールズ大学(9)、RMITメルボルン校(2)、ユトレヒト大学(1)、ライデン大学(1)	エディスコーワン大学(1)、東フィンランド大学(1)

2) 学内の協力

学生団体	田中孝記念立教大学コミュニティ福祉学部和太鼓プロジェクト ～絆の会～、茶道部	
学 生	住み込みアルバイト	経済学部 (2)、観光学部 (1)、コミュニティ福祉学部 (1)、 現代心理学部 (1)、スポーツウェルネス学部 (2) 【計 7 名】
	イベントサポーター (キャンパスツアーガイド)	経済学部 (2)、理学部 (1)、社会学部 (2)、法学部 (1)、 観光 (1)、コミュニティ福祉学部 (1)、経営学部 (1)、 現代心理学部 (1)、異文化コミュニケーション学部 (2) 【計 12 名】
	日本語授業ボランティア	文学部 (4)、経済学部 (3)、社会学部 (4)、観光学部 (3)、 コミュニティ福祉学部 (1)、現代心理学部 (3)、異文化コミュニ ケーション学部 (1)、スポーツウェルネス学部 (1)、 文学研究科 (1) 【計 21 名】
事務・運営補助	教務事務センター、国際センター、財務部、人事部、総務部、 図書館、保健室、メディアセンター	

3 成果

(1) 協定校とのインバランス解消

(2) 本学のプレゼンスの強化

(3) 本学学生との国際交流の促進

a. 住み込みアルバイトの企画協力により、初日(1月20日)にウェルカムイベントを実施(短プロ生 26 名、住み込みアルバイトの立教生 4 名が参加)。

b. 国際センターの協力により、グローバルラウンジと連携して以下のイベントを計画・実施。

イベント名称／実施日	短プロ生 参加者数	立教生 参加者数	参加者数合計
Japanese New Year's Game Fest (1月23日)	13	8	21
Rikkyo Tennis Club Event (1月24日)	短プロ生の参加がなかったため中止		
Japanese Traditional Card Games (1月27日)	6	8	14
参加延べ人数合計	19	16	35

4 今後の課題

・協定校とのさらなる連携強化、授業料免除枠の有効活用

・採用後の辞退者・無断キャンセル者を見込んだ採用の仕組みの検討・任意プログラムのスケジュールや実施方法の検討

5 授業

日本語クラス1（入門）

授業担当者：任、小林、武田、小森、末松

履修者数：15名

使用教材：独自教材

日本語クラス2（初級）

授業担当者：小松、武田、丸山、任、高嶋、長谷川、山本

履修者数：11名

使用教材：独自教材

2025年度冬の短期プログラムは26名が受講した。日本語クラスは入門と初級の2クラス体制で、9日間行われた。入門クラスは日本語学習歴のない、あるいは短い学生を対象とし、独教材を用いて、ひらがなの導入と練習および短期プログラム期間中に遭遇しそうな場面で使える日常会話の指導を行った。会話のトピックとしては、「自己紹介」「店やレストランでの注文」「友だちに予定を聞く」「週末したことについて説明する」「日本で感じたことや考えたことを伝える」などを取り上げた。初級クラスは日本語が既習の学生を対象としたが、その学習歴は半年から2年以上という学生まで、幅広かったため、学生の日本語レベルに合わせて活動行う等、工夫した。教材の内容は入門と同様に、プログラム期間中に遭遇しそうな場面を想定し、表現の導入と練習を行ったが、具体的なトピックは「自己紹介」「外食」「週末の予定」「休みのあと」「困りごと」などを扱った。

教材を用いた日本語学習の他、学生ボランティアを招いてのゲストセッションも複数回実施し、会話練習やスピーチ練習等の活動をサポートしてもらった。立教大学の正規生たちとの交流の場ともなり、受講者も楽しんで活動に参加する様子が見られた。

日本語クラスのほか、2回の文化体験プログラムも実施した。立教大学の学生団体の協力を得て、和太鼓演奏と茶道の活動を行ったが、いずれの活動においても実際に受講生が演奏や茶道を体験することができ、非常に多くの肯定的なコメントが寄せられた。日本文化を体験し、新たな学びを得ただけでなく、学生団体の学生たちとの交流の時間となり、よい思い出となったようである。

最終発表では、入門クラスは自己紹介を行うとともに「プログラムでの経験」をテーマとし、初級クラスでは授業で習った文型を用いて出身地について日本と比べながら紹介する、という内容で実施した。2週目以降はスクリプトとスライド作成の時間を設け、適宜教員が指導しながら準備を進めた。

今回受講した学生たちは一様に意欲が高く、授業活動に熱心に取り組む学生たちであったが、体調を崩す学生が数名見られ、長期にわたって欠席する学生も出てしまった。短期で集中してのコースであり、また、コース外でも観光や旅行を楽しむ学生もおり、疲れが出やすい。体調管理を徹底させ、学生の状況についてつぶさに把握していけるよう、今後も対応が必要となるだろう。また、今後も、様々な背景、学習経験を持つ学生たちが受講することが予想されるため、それぞれに対応していけるよう、柔軟に教材やシラバスを準備し、学生たちによりよい学びの場を提供できるよう、心がけていきたい。

9. センター員活動報告

日本語教育センターセンター員 教育研究業績一覧

池田伸子（研究休暇）

研究論文

1. 「多文化共生を包摂的に捉える姿勢の形成—大学生の授業前後の記述比較を通じた考察—」、『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年、19–40頁

研究助成

1. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を實踐できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063）

丸山千歌

図書

1. 『初・中級日本語教科書 日本語が広げる世界』（近藤安月子との共著）東京大学出版会
2. 『新界標日本語 教師用指導書』第4冊（編集委員として参加）復旦大学出版会

研究論文

1. 「多声モデル生成法としての複線径路等至性アプローチのための試論（3）」（小澤伊久美との共同執筆）『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年、1–17頁
2. 「大学の国際化と日本語教育—これまでと今後の展望」『現代日本語教育ハンドブック』日本語教育学会、2025年、332–339頁

研究発表

1. 「日本語教育プログラム運営における評価学的知見の活用—日本語教育プログラムにおける評価実践と理論の接続—」カナダ日本語教育振興会 2025年年度大会（小澤伊久美との共同発表）、2025年8月19日、於ブリティッシュコロンビア大学（口頭発表）https://www.cajle.ca/wp-content/uploads/2025/10/13.CAJLEProceedings_MaruyamaChikaJP_98-106.pdf<https://s.id/icjsle2024>
2. “Applying Triple Gegenstand Theory to TEM: A Case Study of a Former Exchange Student’s First Encounter with Japan”（小澤伊久美との共同発表）、『The 7th Transnational Meeting on TEA program』、2025年10月26日、於立命館大学 OIC キャンパス
3. 「話題提供：日本語学習者の人生の径路に表れる日本との接触—日本に住み、働きつづける日本留学経験者 E の場合—」『公開パネルディスカッション 留学生のキャリアを質的に探る新たな可能性—キャリアの径路と社会的文脈—』、2025年12月21日、於立教大学
4. 「学習者・日本語教員のための「日本語が広げる世界」、九州日本語プロフィシエンシー研究会（KJP）、

2026年2月28日、於 VILLENT 博多（招待講演）

5. 「危機の中で日本とつながり続ける力:日本大震災を経験した元留学生の心理的変容」(小澤伊久美との共同発表)、『the 2026 AATJ Annual Spring Conference、2026年3月12日、於 The Vancouver Convention Centre in Vancouver.

その他

1. 「群馬県教育委員会 令和7年度第2回中部地区社会教育関係職員等研修講座 やさしい日本語と地域づくり」、2025年12月19日、於前橋合同庁舎（招待講演）

研究助成

1. 2020.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「日本とつながって生きる」選択から見える日本語教育の新時代」（研究代表者）（課題番号：20K00707）
2. 2021.4～至現在 科学研究費助成金（基盤研究（C））「大学日本語教育質保証を担う評価人材育成：発展的評価を实践できる日本語教師への研修」（研究分担者）（課題番号：21K0063）

小林友美

図書

1. 『新界標日本語 教師用指導書』第4冊（編集委員として参加）復旦大学出版社

研究論文

1. 「母語場面と接触場面の初対面交流会話における参加者の調整行動—対人関係構築に向けた同学部所属の大学生同士の会話を対象に—」『ことば』第46号、現代日本語研究会、2025年、145-162頁

報告

1. 「学生アドバイザーの研修の応用可能性—日本語学習支援者の研修を見据えて—」（任ジェヒ、小松満帆との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年、159—174頁

研究発表

1. 「接触場面の初対面交流会話における日本語母語話者の参加調整ストラテジー」、現代日本語研究会 2025年研究集会、オンライン、2025年7月6日

小松満帆

報告

1. 「日本語教育人材を考える—フランス高等教育機関の非専門家・非母語話者教師に着目して—」（西村遥香との共同執筆）『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年、133—147頁
2. 「学生アドバイザーの研修の応用可能性—日本語学習支援者の研修を見据えて—」（任ジェヒ、小林友美との共同執筆）『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年 159—174頁

研究発表

1. 「初級学習者を対象としたアニメ『で』学ぶ社会・文化コースの実践—学習者へのインタビュー結果から見るアニメの活用意義—」ポスター発表、ヨーロッパ日本語教師会第 28 回シンポジウム、於キール大学、2025 年 8 月 29 日

その他

1. 「日本語学習支援者に対する研修のあり方—留学生のための日本語相談室「学生アドバイザー枠」の応用可能性を考える—」（任ジェヒとの共同発表）、『小出記念日本語教育学会 2025 年度ワークショップ』、於立教大学、2026 年 2 月 21 日

任ジェヒ

著書

1. 「上級学習者の聴解困難点」野田尚史（編）『日本語学習者の聴解困難点と読解技術』、ココ出版、2026 年（予定）

研究論文

1. 「待遇コミュニケーション」の観点を取り入れた実践のあり方—日本語の多様性を考える上級日本語クラスでの教室活動を例に—、『待遇コミュニケーション研究』第 22 巻、待遇コミュニケーション学会、2025 年、151—177 頁

報告

1. 「学生アドバイザーの研修の応用可能性—日本語学習支援者の研修を見据えて—」（小林友美、小松満帆との共同執筆）、『日本語・日本語教育』第 9 号、立教大学日本語教育センター、2026 年、159-174 頁

研究発表

1. 「待遇コミュニケーション教育の理論」（アドゥアヨム・アヘゴ希佳子、徳間晴美、蒲谷宏との共同発表）、『待遇コミュニケーション学会 2025 年秋季大会（第 43 回）』、早稲田大学、2025 年 10 月 18 日
2. 「日本語学習者の聴解の実態と聴解教育への応用」（野田尚史、中尾有岐、奥野由紀子との共同発表）、『2025 年度日本語教育学会秋季大会』、富山国際会議場、2025 年 11 月 22 日

その他

1. 「日本語学習支援者に対する研修のあり方—留学生のための日本語相談室「学生アドバイザー枠」の応用可能性を考える—」（小松満帆との共同発表）、『小出記念日本語教育学会 2025 年度ワークショップ』、立教大学、2026 年 2 月 21 日

研究助成

1. 2022.4～至現在 科学研究費助成金(基盤研究(B))「聴解コーパスの構築による日本語学習者の聴解困難点と推測技術の実証的研究」(研究協力者)(課題番号:22H00669)

保坂明香

報告

1. 「日本語教育における教育的対応—学習者支援のために日本語教員ができること—」(武田知子、澁川晶との共同執筆)『日本語教育』第 191 号、日本語教育学会、2025 年、65—78 頁

研究発表

1. 「日本語の授業における学習者支援」(武田知子、澁川晶との共同発表)、『英国日本語教育学会セミナー』、2025 年 5 月 18 日 (オンラインによる招待講演)

その他

1. ウェブサイト「学習に困難がある日本語学習者への学習支援」(武田知子、澁川晶との共同作成)
<https://www.nu-cd.jp/nihongo.shien/> 科学研究費・基盤研究(C)20K00703「認知特性により学習に困難を示す日本語学習者への支援体制構築に向けた基礎的研究」の助成を受け作成

泉大輔

研究論文

1. 「日本語の語構成における逸脱—「文の包摂」を対象に—」『日本語用論学会第 27 回大会発表論文集』、日本語用論学会、2025 年 7 月、12—19 頁
2. 「「文の包摂」研究における「逸脱性」の課題と展望—堀江薫 (2025)「書評 泉大輔『現代日本語の逸脱的な造語法「文の包摂」の研究』をめぐって—」『日本語・日本語教育』第 9 号、立教大学日本語教育センター、2025 年、41—55 頁

研究発表

1. 「人物を表す「文の包摂」の形式的・意味的な特徴—「かまってちゃん」「相方どうかしてるぜ芸人」「やだやだ星人」—」、日本語学会 2025 年度春季大会、2025 年 5 月 11 日
2. 「Noun Modification by Fictive Utterances and Ordinary Clauses: A Cross-Linguistic Study of English and Japanese」、19th International Pragmatics Conference、2025 年 6 月 26 日、細谷諒太との共同発表
3. 「文の包摂」の対照研究に向けた予備調査—日本語・英語・韓国語を比べよう！キャンペーン—、日本言語学会第 170 回大会、2025 年 6 月 28 日、細谷諒太との共同発表
4. 「物を表す「文の包摂」—「がんばったねシール」「無事ですタオル」「くらわんか碗」—」、日本語文法学会ポスターフォーラム、2025 年 7 月 6 日
5. 「「文の包摂」の音韻的な特徴の予備調査—連濁とアクセントに着目して—」、言語資源ワークショップ 2025、2025 年 8 月 28 日
6. 「名詞“feeling”を主要部とする英語の「文の包摂」—日本語との比較を通して—」(ワークショップ: 引用表現の周辺から見る言語使用のダイナミズム)、日本認知言語学会第 26 回全国大会、2025 年 8 月 30 日、細谷諒太との共同発表
7. 「バラエティ番組『水曜日のダウンタウン』の企画名における「文の包摂」—ボックスティッシュ向けられたら特に必要じゃなくてもとりあえず 1 枚取っちゃおう説—」、日本語用論学会第 28 回大会、2025

年 11 月 29 日

8. 「バカリズムのコントにおける「文の包摂」－「やったね合格」「ほれ見たことか結果」「だってさ屁理屈」－、第 50 回社会言語科学学会研究大会、2026 年 3 月 7 日

その他

1. 講演会

「逸脱的な造語」、静岡理工科大学、2025 年 6 月 11 日

2. 講演会

「逸脱的な造語法「文の包摂」とは?」、明治大学商学部、2025 年 11 月 6 日

3. 受賞

2025 年度日本語学会春季大会発表賞

研究助成

1. 2022.4～至現在 国語研究所共同研究プロジェクト「多世代会話コーパスに基づく話し言葉の総合的研究」(研究代表者：小磯花絵)
2. 2025.4～至現在 科学研究費助成金(若手研究)、「会話における逸脱的な造語法「文の包摂」の研究」(研究代表者)(課題番号：25K16308)

鹿目葉子

研究論文

1. 「Bridging the Gap: Language Learning as a Path to Intercultural Competence 異文化間能力育成への道としての外国語教育」『長野大学紀要』、(Yuko Kitamura との共同執筆)、第 47 巻第 2 号(通巻第 165 号)、11–18 頁
2. 「『下町ロケットで学ぶ! 12 の社会人基礎力』における批判的思考育成の可能性」『日本語・日本語教育』第 9 号、立教大学日本語教育センター、2026 年、57–73 頁
3. 「タイにおける批判的思考育成に向けた読解教材の役割」、*Japanese Studies Journal*、(査読あり) 修正稿提出済

研究発表

1. 「“誰かがリーダー”じゃない、“みんながリーダー” –Stray Kids に学ぶシェアド・リーダーシップ教育の授業実践–」(大橋真由美、榎原実香との共同発表)、第 2 回タイ国日本語教育国際シンポジウム、2026 年 3 月 14 日発表予定
2. 「Stray Kids の発話に基づく態度・姿勢フレームワークの構築と読解授業への応用–主体性・批判的思考を促す読解タスクに向けて–」(大橋真由美、榎原実香との共同発表)、第 6 回日本語教育アクティブラーニング研究会、2026 年 3 月 30 日発表予定

※予稿集掲載『日本語教育アクティブラーニング研究会 2025 年度 第 6 回研究大会』

研究助成金

1. 長野大学研究助成金

研究期間：令和7年5月1日～令和8年3月31日

研究課題名：「バングラデッシュにおけるグローバル日本語人材育成のための基礎的調査研究」

清水慶子

報告

- 「活動型授業における学習者ウェルビーイング—安心できる学習環境形成に関する文献調査報告—」『日本語・日本語教育』第9号、立教大学日本語教育センター、2026年、149-158頁

10. 2025年度FD記録

1. FD委員会の開催日

第1回	7月	18日	第2回	9月	9日
第3回	2月	20日	第4回	3月	3日

2. 2025年度の課題の達成状況

課題1：PEACE日本語プログラム

昨年度に引き続き、タスクベース型のプログラムの状況（PEACE2, 3）について検討するとともに、J4以上の日本語力を持つ学生の日本語履修について検討した。

① タスクベース型のプログラムの状況（PEACE2, 3）

第1回では、具体的には、PEACE2では、・学生自身が自分にとって必要な語彙を蓄積していく「私のことばリスト」に加え、「トピックごとの基本語彙」を30語・40語提示し、漢字クイズと語彙クイズに取り入れる取り組みを行ったこと、4技能とプロジェクトワークの双方を達成・両立させるために、作文の活動日をほかの日に移したことが報告された。PEACE3でも「わたしのことばリスト」に加え、「トピックごとの基本語彙」（およびクイズ）の導入、ミニプロジェクト（本学の便利情報誌作成）が報告され、その他の工夫の可能性について意見交換が行われた。

第3回では、PEACE1~3すべてのレベルでのタスクベース型の取り組みについて報告があり、意見交換を行った。2028年度、PEACE日本語は現在の5コマの実施から4コマへと変更される予定である。今後、PEACE日本語のコース内容を検討する際は、この変更を念頭に置いて進めていくことも確認された。

② J4以上の学生の状況

第1回で扱い、各レベルの科目担当者が報告した。具体的には日本語への学習意欲、動機の差が非常に

大きいこと、PEACE 制度の入試広報において J4 以上の日本語レベルの学生にどのような期待があるか伝わっているかが気になること、学習動機の高い学生については、他の正規生のよいロールモデルになっていることなどが報告された。学生の多様性をうまく引き出す取り組みを続けていくとともに、J4 以上の学生の必修科目としての日本語の履修方法について、ひきつづき検討していくこととした。

以上にもとづき、第 2、4 回の担当者連絡会での各クラスの打ち合わせも行われた。

課題 2：NEXUS 日本語プログラム

今年度は特に、履修者数が増えた場合に対応可能な「専門の日本語」の授業運営、漢字圏の学生に対する授業運営をテーマとし、第 3 回で扱った今年度の NEXUS 生は 7 名であったが、プレゼンテーションについては、google スライドで発表スライドを教員と学生全員が共有する仕組みを利用することで、個別のフィードバックを含め進行がスムーズであったこと、発表準備時間が短縮されたことが報告された。専門図書の内容理解 (I クラス) については、基本的にはチュートリアルを学部別で行い、必要に応じて個別対応を行う工夫をしたこと、チューターとの活動記録を報告させる仕組みを取り入れたことが報告された。漢字圏/非漢字圏の対応についても具体的な報告がなされ、次年度につなげる話し合いが行われた。チューターの学習支援活動については、適切な手続きを経たうえで、日本語教育センターHP 等にも活用することについて話し合った。今後の課題としては、チューターの運営管理の方法や教材とする動画の変更などがあることを確認した。

以上にもとづき、次年度第 2 回の担当者連絡会での各クラスの打ち合わせに生かしていく。

課題 3：日本語相談室

今年度は生成 AI の普及により日本語相談室の稼働率が低下していることを背景に、稼働率に応じた展開の仕方についての検討をテーマとし、第 3 回で扱った。年間を通じ、前年度との比較では、「卒業・修士・博士論文(研究計画書、中間発表を含む)」に関する相談がさらに少なくなる中、「学習方法指導(練習、日本語能力試験対策指導も含む)」や「レポート(授業、ゼミ等)」に関する相談が増加したことが報告された。学習方法指導に関する相談が増加した背景には、予習・復習の過程で生じた疑問を解消し、授業理解を確実なものにしようとする学習者の主体的な姿勢がうかがえる。実際の相談内容からも、継続的な自律学習を支援する場として相談室が機能している様子が確認された。また、レポート相談については、同一学生による複数回の利用や、学期を通じた継続的な利用が目立ち、課題遂行のプロセスの中に相談室の利用が組み込まれている状況が見られた。

また、奨学金関連の相談も減少しており、相談内容の中心が学習支援へと移行している傾向が確認された。

今後は、このような利用ニーズの変化を踏まえ、学習支援機能のさらなる充実を図ることや、相談室の認知度向上に向けた取り組みを強化していくことが課題になることを確認した。なお、日本語相談室の利用率低下への対応は、昨年度にひきつづき、実務委員会、日本語教育センター運営会議で検討、総長室へ

の相談を経て、次年度からは教育講師の担当コマ数を2コマとすることを、春学期中に決定している。

課題4：「総合日本語 4-6」「漢字」クラスの運営

第3回で扱った。「総合日本語 4-6」についてはテーマの見直し、授業・課題設計、学習支援についての改善と、学生の声を取り入れた報告がなされた。特にレベル差に応じた学習支援の具体的な工夫について活発な意見交換が行われた。2025年度はTAをつけない授業運営を行ったが、この点については大きな問題がなかったことを確認した。「漢字」については、漢字検定で扱うすべてのレベル、分野を教材として扱うことから、教材準備等にかかる教員への負担を軽減することが課題となっていたところ、教科書、ワークシート、クイズのオンライン化に着手したという報告があった。全体として、オンライン化により教材準備の時間が短縮するという成果が確認できた。今後は、授業内活動の充実および漢字圏の学生の取り組みやすさを考慮し、教材管理の方法を検討していくこと、学生に対し運用方法や意図を十分に説明することが課題となることも確認された。

同じ教員が複数年度同一の科目を担当することで改善につなげることができた好事例あることも確認した。

以上から、2026年度の課題と計画は以下の通りとしたい。

(1) 授業内容および方法の改善に関する課題

①2028年度のカリキュラム改編に向けた PEACE 日本語プログラムの検討

②NEXUS 日本語プログラム

履修者数が増えた場合に対応可能な「専門の日本語」の授業運営

漢字圏の学生に対する授業運営

③ 日本語相談室

④ 日本語科目の成績評価の検討

(2) 上記以外の課題

⑤日本語プレイスメントテスト体制の検討

2025年度 日本語教育センター運営体制

運営会議

センター長：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：韓 志昊	(観光学部教授)
運営委員：井川 充雄	(全学共通カリキュラム運営センターコア会議から、社会学部教授)
運営委員：渡名喜 庸哲	(国際センターから、文学部教授)
運営委員：小澤 康裕	(経済学部教授)

実務委員会

センター長：丸山 千歌	(異文化コミュニケーション学部教授)
副センター長：韓 志昊	(観光学部教授)
センター員：小澤 康裕	(経済学部教授)
センター員：池田 伸子	(異文化コミュニケーション学部教授)
センター員：小林 友美	(特任准教授)
センター員：任 ジェヒ	(特任准教授)
センター員：小松 満帆	(特任准教授)
センター員：鹿目 葉子	(教育講師)
センター員：泉 大輔	(教育講師)
センター員：保坂 明香	(教育講師)
センター員：清水 慶子	(教育講師)
事務局：澤村 亜生津	
事務局：佐野 美奈子	
事務局：小菅 奈那	
事務局：鶴見 佳積	
事務局：入澤 香織	
事務局：玉井 奈津子	

兼任講師

藤田 恵	長谷川 孝子	黄 慧	井上 玲子	小森 由里
森井 あずさ	森山 仁美	長島 明子	斉藤 紀子	沢野 美由紀
嶋原 耕一	末松 史	高嶋 幸太	武田 聡子	瀧澤 あゆみ
栃木 亜寿香	富倉 教子	富岡 洋輔	和田 晃子	山口 紀子
山本 由美子	山内 薫	袁 シュ		

2025年度 日本語教育センター会議開催記録

月	日	
4	11	第1回実務委員会
	16	第1回運営委員会
5	16	第2回実務委員会
	21	第2回運営委員会
6	13	第3回実務委員会
	18	第3回運営委員会
7	18	第4回実務委員会
	23	第4回運営委員会
9	26	第5回実務委員会
10	1	第5回運営委員会
	24	第6回実務委員会
12	29	第6回運営委員会
	5	第7回実務委員会
1	10	第7回運営委員会
	23	第8回実務委員会
2	20	第9回実務委員会
	25	第8回運営委員会

実務委員会：センター長、副センター長、センター員（日本語担当専任教員、日本語担当教育講師、センター長指名教員）、事務局運営委員会：センター長、副センター長、全学共通カリキュラム運営センターコア会議からの選出委員、国際センター長・副センター長からの選出委員、センター員（センター長指名）日本語担当専任教員（陪席）、事務局（陪席）

2025 年度日本語教育センター活動報告
CJLE Program & Activity Reports (2025)

2026 年 3 月発行

編集兼発行者 日本語教育センター
発行責任者 丸山千歌
発行所 立教大学日本語教育センター
〒171-8501 東京都豊島区西池袋 3-34-1
Tel: 03-3985-4202